

転生美女世紀末伝説

大岡 ひじき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

北斗の拳での、妄想短編集。

北斗の世界に転生した美しい女性達が、未来を変えたり変えなかったり。

※タグのボーイズラブは保険です。

目次

哀離（一応これが本編）

哀離くタイトル詐欺という悪徳く

2

真実哉く原作美女の弟に転生しちやい

ました、つて甘栗むいちやいましたみた

く言うなく 17

愁く転生したら種モミのジーサン以上に

モブだった件

前編 40

後編 54

真く多分、始まらない物語

前編 73

後編

うぬの名はく或る女官の拳王様観察記

（愛ある脳内ツツコミ）

1 110

2 124

3 133

4 149

5 165

6 179

7 193

8 208

9 223

10 237

86

379	真・そして私の覇業への道	2
366	真・そして私の覇業への道	1
	その時、彼女たちは	
	幕間	15+(プラス)
		17
		16
		15
		14
		13
		12
		11
		352
		333
		318
		305
		290
		281
		268
		257

404	愉舵・いつか迎える最高の晚餐	2
394	愉舵・いつか迎える最高の晚餐	1
386	真・そして私の覇業への道	3

哀離（一応これが本編）

哀離くタイトル詐欺という悪徳く

「フツ…確かに美しい。」

この俺にふさわしい美しさだ！」

その男の顔を見た瞬間わたしは：『オレ』は、思い出した。

かつて生きてきた世界と、当時の自分のことを。

そして今いるこの世界が、その人生で子供の頃に読んでいた、漫画の世界だったという事に、それと同時に気がついた。

いや待て。だが何故こいつがここにいる。

『オレ』の記憶が確かなら、『わたし』の前に現れるのは、この男ではない筈だ。

☆☆☆

漫画『北斗の拳』は、戦争によって荒廃した暴力が支配する世界で、一子相伝の暗殺拳・北斗神拳の継承者であるケンシロウが、関わる人々を救っていく物語である。

まあ後半以降からはほぼ身内の戦いとなっていくがそれはさておき。

暴力が支配する世界が舞台であるこの物語で、力無き者は当然のように蹂躪される。

女たちの存在など言わずもがな。

平和な世界ならば幸福をもたらすであろう美貌も、この世界では不幸しか呼ばない。美しい女は捕らえられ穢され、獣のような男たちの所有物とされる。

時には物品の代わりに売り買いが行われて、所有する男が入れ替わるものの、その扱いは変わらない。

所有者の気分次第で命を落とすことさえ珍しくないのだ。

そんなこの物語に、ユダという敵キャラが登場する。

南斗六星、南斗紅鶴拳の使い手。

裏切りと知略を司る妖星を宿命に持ち、南斗六星拳を崩壊に導く男。

そして、主人公ケンシロウとの友情を育みながらそれ故にその宿敵ラオウに命の期限を切られた同じ南斗六星のレイの、最後の敵となる男。

そのレイが最後に愛した女性であるマミヤの、心と身体に消えない傷を与える男。

この時代の女にとっては忌まわしい『美』に執着するナルシストである彼だが、心から美しいと感じたこの男女の前に敗北を喫し、『自分より強く美しい』と認めたレイの胸でその命を終える。

…といったこれらは、物語の通りに進めば、恐らくは未来に起こりうる事態である。

先述したマミヤという女性は、男勝りな女戦士という役柄として登場する。

その彼女はレイやケンシロウと出会う以前、やはりこの時代の美女の宿命として、男の所有物として一度捕らえられており、その経験が彼女を戦いの道へと進ませるのだが、その彼女を捕らえた男こそがユダだった。

その過去が彼女を死の運命へと導き、その運命からはレイの献身と愛により免れる事となる。

∴そして、今『わたし』の前に現れた男こそが、そのユダなわけなのだが。

つまり、ユダが捕らえにくる女性は、物語の通りならば『マミヤ』でなければならぬ。

間違っても

『アイリ』じゃない。

☆☆☆

一応、アイリという女性についても説明しておこう。

物語での彼女は、この時代の美女の不幸を体現する存在である。

結婚を間近に控えた幸せの絶頂の時期に、アイリはそこから叩き落される。

攫われ、穢され、売り飛ばされて、転々と所有者が変わる中で、抗えない運命に翻弄

される事に疲れ果て絶望した彼女は、目に薬を浴びて世界から己が光と心を閉ざす。

だがずっと彼女を探していた兄がとある野盗一味の恨みを買った事で、彼に対する人質として探し出され、その結果として兄のもとに戻ると同時に、兄と行動していた主人公ケンシロウの手で、その目にも光を取り戻す流れなのだが、その彼女の兄というのが、先述したレイなのである。

そして彼女を攫った男というのが、実は主人公ケンシロウの兄の一人、ジャギだ。

レイとアイリの両親はその時に殺されていたが、物語では婚約者の行方については語られない。

恐らくはやはりジャギに殺されたか、そうでなければ己の命を惜しんで婚約者であるアイリを見捨てて逃げたのだろうが、どちらにしろ、彼女を守る事はできなかつたという事だ。

だがしかしこれはあくまで『北斗の拳』という漫画の中で描かれている『アイリ』だ。今ここで前世の記憶が蘇って混乱している『アイリ』はまだ14歳、婚約者どころかまだ彼氏すらいない。

更に漫画のアイリは無抵抗で従順、運命に流されて生きる無力な女性（それでも途中から戦うことを知る）だった筈だが、今の『わたし』の趣味は鍛錬、特技は乗馬。

バイクや車の運転もお手の物だ。

まだ幼い時分に、7歳離れた兄に護身術を教えてもらってからすつかり身体を動かす事が好きになって、教えたのは自分のくせに兄が『おまえのおてんばにも困ったものだな』と苦笑いするようになったのはいつからだったか。

多分今、村でわたしに勝てる男は、もう兄くらいしかないだろうという程度には、わたしは強くなったと思っている。

超絶美少女(自称)であるにもかかわらず喪女街道をひたすら突き進んでいる理由は、今の今まで思い出しもしなかったが、前世が格闘漫画好きの(享年)42歳児だった事が性格と行動に影響した結果なのだろう。

けどそれでも、それは村の中だけの話。

兄を含め、達人レベルの技を持つ男たちに敵わないことは、充分に理解できているわけ。

少なくとも今ここでわたしに顎クイしている、真つ赤な髪の下派手な化粧をした男に、わたし程度の腕で勝てるはずがない。

てゆうーかなんで『アイリ』なんだよ！

漫画の世界に転生って、普通はチート満載の強キャラになるのが常識だろ！

この後男達の慰みものとなって、一度視力を失って、そこから救い出された後、たった一人の兄を失う？

そんな人生が待つてるとか酷い！

せつかく前世ならハアハアペロペロな美少女に生まれてきたのに、それ故に幸せにならないとか酷すぎる！

美しさの代償なんて言葉で納得できるのは、ブスと前世の『オレ』並のキモオタだけだよドチクシヨウ!!

…ぜえはあぜえはあ。

いやとりあえず落ち着け『わたし』。

「…待つて！」

抵抗はしませんから両親に手は出さないで!!」

とりあえず、娘を離せとこちらに詰め寄ってくる両親を手で制すると同時に、両親に向かつて伸ばそうとした彼の手を、しがみつくようにして抑えて訴える。

漫画と状況が違うとはいえ、これはマミヤの場合を参考にして抑えて訴えよう。

抵抗したが最後、背中から開きにされて人生終了だ。

そんな終わりを現世の両親に迎えさせたくない。

「…いいだろう」

一見清楚で大人しそうな美少女が、自分の目を真っ直ぐに見返してそう告げた事にいくら驚いたのだろう、ユダはあっさりと腕を下げた。

これでいい。

この男は美しい女を集めて侍らせるのを好むが、どれほど美しくとも人形のように従順な女に心を動かされる事は実はない。

そんな女でいては、肌を傷ひとつついた瞬間に捨てられ、部下達に下げ渡された挙句、死ぬまで犯されるのがオチだ。

彼が真に美しいと思いい心を動かされるのは『強く美しい』者。

芯に強いものを秘めたマミヤ然り、最後の生命の灯火を光り輝かせて彼と戦い勝利したレイ然り。

レイに対してはその嫉妬や憎しみは、己自身消化しきれない恋慕に似た感情の、明らかな裏返しだったではないか。

「…ありがとうございます。」

どうか質問をお許しください。

あなた様は、先ごろ南斗紅鶴拳を正式に継承なされた、ユダ様でいらつしやいますね？

とりあえず両親には家の中で控えているよう指示して、わたしはその男と向き合つた。

客として扱うなら家の中に招いて茶くらい出すべきなのだろうが、この訪問はそんな

穏やかなものではない。

下手に出てはつけ上がらせるだけだ。

それにもう少ししたら兄が帰ってくる。

ならば、兄がわたし達を見つけやすい外にいた方が何かと都合がいいだろう。

わたしが原作通りの弱つちい、怯えるだけしか出来ない女であったならば、そのまま連れ去られているのだろうが、そうでないと判ればこの男は、わたしの話くらいは聞くはずだ。

「フツ、知っていたか。その通りだ」

原作登場時に比べると確実に若い綺麗な顔が、わたしに向かってニヤリと不敵に笑う。

幼い頃から超イケメンの兄がそばにいたわたしにとっては、見惚れるほどの代物ではないが。

「ではわたしが、同じく南斗水鳥拳を継承した、レイの妹であるということは御存知でしたか？」

そのレイの名を出した瞬間、その頬に緊張が走ったのをわたしは見逃さなかった。

だがユダはそれを隠そうとしてか、先ほどよりも口角を上げて、形だけの笑みを深くする。

「勿論知っている、アイリ。」

だからこそ、おまえを手に入れようとここに来たのだ」

わたしが原作通りの『アイリ』であったなら、掌中の珠の如く大事に守られていただろう『アイリ』の存在を、ユダが知る事はなかったろう。

だがアクティブに動き回っていた今のわたしは、兄の修業仲間や友人には大概顔を知られている。

わたしの事は、何度も兄を訪ねて行った南斗の修業場で見かけていたのだろう。

多分、修業中のレイの技に見惚れた己を恥じ、レイに憎しみを抱いた出来事の、今は直後あたり。

妹のわたしを奪い取る事は、彼にとってはその意趣返しという意図に違いない。だが。

「まあ……」

そんな情熱的な告白を受けたのは初めてですわ。

不束者ですが、喜んでお受け致します。

では慣例通り、交際期間を1年、婚約期間を1年設けた形にして、結婚式はわたしが16歳となる2年後という事でよろしいでしょうか？」

その程度の浅い考えなど遠くのお空に飛ばす勢いで、わたしは爆弾を投下した。

恥ずかしげに頬に手を当てるフリをして軽く揉み、白い肌に薄つすらと血の気を帯びさせる。

そうして少しだけ困ったように微笑めば、そこにいるのは突然のプロポーズに戸惑いながらも、嬉しげに頬を染める可憐な美少女の姿だ。

「え……結婚？ いやちよつと待て、それは」

違う、と言おうとするユダの言葉を遮り、今度は悲しげに目を潤ませてその顔を見上げる。

「…違いますの？」

まさか14歳の小娘を愛人に据えようとか、そんな鬼畜な事を仰るおつもりではないのでしょうか？

そんな事をすれば世間からロリコンの謗りを受けて、社会的に人生終了のお知らせですわよ？

それにそんな事は、絶対に兄が許しません。

兄の前でそんな事一言でも仰ったら、その瞬間にあなた、兄の手で三枚おろしにされましてよ？」

ユダがマミヤを連れ去ったのは彼女が二十歳となったその日だった筈。

つまり、ユダは決してロリコンではない。

そんな言いがかりをつけられるのは本意ではない筈だ。
それに…

「…けれど正式に婚約が成されたとなれば、その兄とて文句のあろうはずがありません。
むしろ兄として友として、あなた様を遇する筈。

なりたくありません？

レイの『義弟』に？」

ユダがレイに憎しみを抱くのは、叶わぬ相手に心を奪われてしまったが故。

だがその想う相手に、形は違っても大切なものとして認識される事が叶う。

身を焦がすほど激しい恋を胸に秘めた者が、その誘惑に、はたして抗し切れるだろう

か？

「アイリー！俺と結婚してくれ!!」

わたしの悪魔の囁きを耳にしたユダは、わたしの手を取ると、それを己が胸に引き寄せ、
せて、言った。

「はい、ユダ様!!」

こうして婚約は成された。

目の前に現れた男と、思い出した前世の知識。

そこから導き出される、己の運命。

それらを考え合わせた結果、わたしは短い時間の中で決断した。

この機を逃せば、わたしは原作通りジャギに攫われ、兄はわたしを探す中、修羅の世に身を投じる。

そうして巡り合ったケンシロウとの友情が、ひいてはその死を運命付ける事になる。つまりわたしを探す事態にならなければ、兄が命を落とす事はないのではないか。

何年後かは知らないが、その時婚約している筈の男は、ジャギの手からわたしを守れなかった。

そもそも見も知らぬそんな弱い男に操を立てる気などない。

この男なら、きつとわたしを守れる。

ならば、男の所有物として生きる結果が同じだとしても、この男の方が306倍マシだ。

だからその手を取った。

この世界では、美しい女はそれだけで不幸を宿命づけられる。

だがそんなのは間違っている。

せつかく超絶美少女として生まれ変わったのだ。

わたしは、絶対に幸せになってやる。

☆☆☆

さすがは裏切りの星と呼ばれる妖星の宿命を持つ男だった。

レイに義弟として可愛がられる為に、ユダはきつとわたしを最低限でも大事にしてくれるだろうというわたしの目論見は、意外な形で裏切られた。

「アイリ…意志の強さを表すように光り輝くおまえの瞳は、ダイヤモンドより美しい宝石だ。」

いや、おまえの存在こそが至宝だ。

空に輝く太陽だ。

ああ、アイリ、俺の女神。

その瞳に俺を映してくれ」

「やめれ気色悪い！」

「ああ…その冷たい、軽蔑しきつた視線がたまらない。

もっと睨んでくれ。そして罵ってくれ。

いや、いつそその足で俺を踏んでくれ」

あの性格だし、隠れMなのはわかった。

それにユダに捨てられたら、一気に転落人生なのもわかってたから、彼がわたしに飽きないよう、その辺を軽くつついた態度で、気をひくようにしていたのは確かだ。

だが、どうやらわたしはやりすぎたらしい。

ジャギの村への襲撃も無事回避され、結婚式を挙げる頃には、ユダはレイへの淡い想いなどどこへともなく消しとばして、わたしに夢中になっていた。

そしてもはや隠す事もなくなった堂々としたドMとして、今もわたしの足元から、期待を込めた眼差しで見上げている。

「なんだ、またやつてるのかユダ。

アイリは優しい子だ。あまり困らせるなよ」

「ああ、アイリは優しい。この世の天使だ。

アイリが罵るのも踏むのも、俺に対してだけだ。

その榮譽を与えられる事を、俺は誇りに思う」

「助けて兄さん!!」

わたしを、主に社会的な死から!!」

わたし達のそんな様子を見て困ったような、それでいて優しい笑みをそのイケメン顔に浮かべるレイは、先日婚約が決まったばかりだ。

商人の護衛を頼まれて同行した先の村で、一目惚れをして数ヶ月かけてようやく口説き落としたという、わたしの義理の姉になる女性の名前は、マミヤというらしい。

…今のわたしは、多分

この世界で一番幸せな美女だろう。

眞実哉、原作美女の弟に転生しちやいました、つて甘栗むいちやいましたみたく言うな

ある日突然気がついた。

あ、これ北斗の拳じゃん、と。

つかヤバイ。まじでヤバすぎる。

漫画『北斗の拳』には、主人公ケンシロウと旅を共にするバットという少年がいる。

そのバットの育ての親である老婆が野盗に殺され、彼同様その老婆に育てられていた身寄りのない子供達の、面倒を見てくれる先を探す必要がある、老婆を殺した野盗一味をケンシロウが壊滅させている間に、それを申し出ていた豊かな村があった。

だがその村は豊かである事で野盗たちに狙われており、その野盗たちを退治する事が、子供たちを引き取る条件だった。

ケンシロウが村に入った時、かつて失った恋人と瓜二つの女性が登場する。

彼女の名はマミヤ。

この村は亡き彼女の両親が作り上げた村で、彼女は村のリーダーとして、戦う術を身につけていた。

さらにそこにレイという男が加わり、最初は村を狙う野盗に送り込まれた彼が紆余曲折の末ケンシロウについて、彼ら3人は野盗との、そして更にその先へと続く戦いに踏み込んで、巻き込まれていくのである。

まあ、それはいざ未来に起こる出来事なわけで。

物語の通りに進むならば、村は野盗たちに蹂躪される事なく、この先も存在し続けるのだが、そこに至る道筋に犠牲者が出なかつたわけではなく。

なにかヤバイって、ケンシロウたちが野盗と本格的にことを構えるきっかけになる、その犠牲者が俺だって事だ。

俺の名前は、コウ。

この村の創始者夫婦の息子にして、村のリーダーであるマミヤの弟だ。

☆☆☆

さつき思い出した前世の記憶では、少なくとも俺は50歳までは生きていた筈だ。

なんで死んだかまでは思い出せないが、今の自分には関係ない事だから気にしないことにしておく。

それよりも未来の話だ。

現在、俺は10歳。

両親は健在で、9歳年上の姉は、この村だけじゃなく近隣の村からも縁談がひっきり

なしに持って来られるほど、評判の美女。

俺の記憶が確かで、この世界が北斗の拳で、俺の姉があの話の中のママヤで、弟の俺が同じくコウだとするなら、うちの姉は20歳の誕生日にユダに連れ去られ、止めようとした両親がその時彼に殺される。

ママヤは数日後、ポロポロに負傷した姿で村へ戻ってくるが、それ以降は女としての幸せを諦め、女戦士としての道を歩き始める。

そして俺はその後、レイの裏切りにより仲間を失った牙一族に、報復としてとっ捕まわった斬られて殺されるってわけだ。

年齢について明記はされていなかったが、死んだ時のコウは少年として描かれていたから、恐らくは13〜15歳の頃の話になるだろう。

ならばその頃ママヤは22〜24歳くらいとなっているから、拉致イベントを考えても計算は合う。

くは、最長でもあと5年の命とかwww

いや、草生やしてる場合じゃない。

「どうしたの、コウ？」

畑にまく種モミを握りしめたまま固まってる俺に、姉さんが声をかけてきた。

その声を聞いた瞬間、わけがわからなくなつて、気がついたら涙がポロポロこぼれて

いた。

姉さんは驚いた顔をしたものの、次には頭を撫でてくれた。

「…姉さんっ」

いろんなことが怖くなって、今日の前にいる姉さんにしがみつくと、もう我慢できずに大声で泣いた。

姉さんはおっぱいが大きかった。

・
・
・

俺はモブキャラだ。

多分物語を変える力なんてない。

きつと俺が死ぬのは避けられないだろう。

だけど姉さんは…マミヤにだけは、幸せになってほしい。

マミヤは優しく、強く、美しい。

そして何より

おっぱいが大きい

繰り返しそう。

おっぱいが大きい

大事なことからもう一度言おう。

おっばい大きい

その姉さんが幸せになれないなら、それはこの世界が間違ってる。

だっておっばいはこの世の絶対正義だから。

俺が死んでも、この魂は姉さんに残そう。

そしてこの身は、姉さんの幸せの為に捨てよう。

…なんかラオウと戦う前のトキのセリフみたくなってるけど。

パクリとか言うな。

……………それはそれとして、姉さんの幸せとは何だろう。

そう思って聞いてみたら、マミヤはにっこり笑ってこう答えた。

「そうね…お父さんやお母さん、そしてコウがそばにいてくれて、笑っていてくれるのが

一番幸せよ」

うん、それが一番ハードル高えわよ姉さん。

…

つまりだ。

マミヤが女としての幸せを諦めるのは、ユダに攫われて心と体に、消えない傷を負わ

されて以降。

ケンシロウと出会い、ほんの少しだけ女としての感情を取り戻しはするものの、自身

に真つ直ぐ向けられるレイの無償の愛情には、どこか恐れのようなものを感じていた筈だ。

まあ、童貞としてその気持ちもわからなくはない：ってやかましいわ前世はともかく今世はまだ10歳だし当たり前だわ言わせんな。

それはさておき決して返ってこないだろう一方通行の思慕、いわゆる片思いって、開き直れば相手の気持ちを考えずに済む分、責任なくて気楽なんだよ。

それに慣れると、自分に向けられる強い愛情を自身の中で受け止めきれなくなるし、自分にはそんな資格がないと思ってる事もあつて、マミヤはあんな反応になつてたんだと思う。

だからまずは、ユダに攫われる事だけはなんとしても阻止しよう。

あの出来事による心の傷さえなければ、マミヤはもう少し恋愛に前向きになれるだろうし、そうなれば俺や両親が死んでしまつていても、その時に寄り添う相手がいれば、心の傷もいつかは癒えて、最終的には幸せになれる。

その為には、二十歳の誕生日を迎えるその前に、マミヤを守る強い男と娶せるのが、一番の選択ではないかと思うのだ。

ひよつとしたらそれで、両親も殺されずに済むかもしれないし。

俺が戦う力をも身につけるのもアリだとは思うが、ユダが現れるその日まであと1年も

ないことを考えれば、あまり現実的ではない。

だが、『戦う力を身につける為に、師事する先生が必要だ』という理由をつければ、強い男をマミヤと出会わせる事はとても自然な形になる。

よし、まずは師匠探しをしよう。

『じゃあ、姉さんを守りたいから強くなる』

と言ったら、マミヤは一瞬ぼかんとしたあと、

『かつ可愛い~~~~っ!!!』

と叫んで抱きついてきた。

とりあえずおっぱいで窒息して死んでもいいと思ったのは一生俺だけの秘密にしておこうと思う。

次の日、旅の行商人を通じて『強い人を紹介してほしい』という内容のことを、近隣や少し遠くの村まで広めてもらうことにした。

「身を守る術を学ぶ事は、今の世では必要だと思うけれど、強くても怪しい人を村に引き入れるのは嫌だわ」

とマミヤは少し表情を曇らせていたが、これも姉さんを幸せにする為なんだ。

それに人選はしっかり行うつもりだから安心して。

そう思っていた後日。

行商人が護衛として連れてきた、その男を見て愕然とした。

え…待って？

確かにこれ以上の男とか居ないけど、この人の登場って今じゃなくない？

「おまえがコウか。話は聞いている。

この村を、家族を守る為に、戦う力をつけたいそうだな。

立派な志だ。おれでよければ力になるう」

そう言つて微笑んだ、無駄にツヤツヤの長い黒髪を靡かせた細マッチョの男は、義の星の宿命を持つ男、南斗水鳥拳のレイだった。

…うわイケメンオーラ半端ねえ。

……つて呆けてる場合じゃない！

時期は確実におかしいけど、レイがこの村に入ってくる目的つて、確か野盗集団を引き入れる為とかじゃなかった!?

て事は、俺の死亡フラグ前倒し!?

ああああ!!そりゃ短い人生と諦めて死ぬ覚悟はできてたけど、それ今じゃない
いいいい!!

「…すまん。怖がらせてしまったようだな」

どうやら内心の動揺が滲み出て、涙目になっていたらしい。

けど、そう言つて俺の顔を覗き込むその表情には、本当にすまなそうな色しか見えなかった。

騙されてるかもしれないけど、どう見ても原作登場時のいかにも悪人なレイの顔じゃない。

むしろケンシロウとの友情を育んでいた時の顔に近いが、それよりも表情は柔らかい気がする。

時間軸的なことを考えると、レイの妹のアイリがジャギに攫われるより前なのではないだろうか。

だとすれば、心配する事はないかもしれない。

「…ごめんなさい、そういうんじゃないやなかつたんですけど。」

あなたみたいな強そうな人を見たのが初めてだったから」

とりあえず滲んだ目頭を拭いながら、もっともらしい事を割と適当に言つたのだが、
「…思つたよりも見込みがありそうだな。」

その年齢で、相手の強さを見極めるだけでも、なかなかのものだと思つぞ」
と何故か変な方向に誤解されてしまった。

「ごめん、これ単なる原作知識で、ある意味ズルだから。と、

「ちよつと！」

私の弟を泣かせるなんてどういうつもり!?」

俺を背中から抱きしめながらママヤがレイを睨みつけた。

後頭部に当たる柔らかい感触が気持ちいいです姉さん。

「あ、違うんだ姉さん。なんでもないから」

そう言つて見上げたママヤの表情には、納得のいかないという表情が浮かんでいたけれど。

：ママヤをじつと見つめるレイの表情はそれどころの騒ぎじゃなかった。

引き締まった頬に血の色が浮かび、目も僅かに潤んでいるように見える。

あ、これ完全に、一目で恋に落ちましたな。

そうだろうそうだろう。

ママヤは美女だ。そして巨乳だ。

そして、レイにとっては運命の女性だ。

「俺、この人がいい。」

この人ならきつと：俺のこと、強くしてくれる」

まだレイを睨んでいるママヤを見上げて、そう告げる。

惚れた女には命懸けの献身を捧げる男だ。

この様子ならレイは、ママヤを大事に守ってくれる。

「おれの名はレイ……よろしく頼む」

そう言ったレイは、一応顔こそこちらへ向けていたが、目はしつかりマミヤの方を向いていた。

・
・
・

俺の稽古は体力づくりから入った。

レイはずっと滞在できたわけではなく、短くて3日、長くて一週間ほどの村に滞在しては、用の済んだ行商人たちの護衛をして自分の村へ帰っていくのだが、その間に実力に見合った鍛錬方法を提案して、『次に会う時には、これができているように』と小さく宿題を出していく。

レイの指導は適切な上丁寧で、俺でも入っていきやすかった。

「7つ下の妹がいて、これが結構おてんばでな。

子供の頃、せがまれて護身術を教えていた。

こうしていると、その頃のことを思い出すな」

などと、少し嬉しげに語るレイは、やはりその目に濁りなど見えない。

てゆーかアイリ、子供の頃はおてんばだったのか。意外。

それはそれとして俺の鍛錬の合間に、レイは結構どストレートにマミヤにアプローチするのだが、どうもマミヤはレイに冷たい。

これまで数多の求婚を蹴ってきた経緯があり、両親などは早く結婚して安心させてほしいとか密かに言ったりするし、その両親の目からも、レイは合格物件であるようなので、早くまとまっけてほしいところなのだ。

「やあ、ママミヤ。」

今日のそのドレス、よく似合っている。

やはり君には淡い色も似合うな。

白のドレスだけは、おれの花嫁となるその日まで取っておいて欲しいところだが」

「な、何を調子のいいことを言っているのよ！

というか、あなたの為に着たわけではないわ！

勘違いしないでちょうだい!!」

……なんだただのツンデレか。

☆☆☆

そうして、レイが俺の指導を始めてから半年ほど経ったある日のこと。

「…そういうえばこの村は、養蚕も盛んだと言っていたな。

今の時期でも製品があるならば、是非見ていきたいところだ」

「いいですよ。案内しますから、これ終わったら一緒に行きましょう！

…姉へのプレゼントですか？」

ちよつと揶揄うくらいは、弟の立場として許されるだろう。

だが、俺の言葉に少しは動揺するかと思つたレイは、ありがとうと小さく言つた後、なんだか嬉しそうに微笑んだ。

「…いや。妹にな。」

もうすぐ結婚するので、最高の花嫁のケープをプレゼントしたいと思つている。

この村でなら見つけられそうだ。

あのおてんばでは、見初めてくれる者など居ないと思つていたが、蓋を開けてみれば最高の相手を捕まえてくれた。

…まあ、性格に難がないとは言えないが、その手綱をしっかりと握っているあたり、あれで相性はいいのだろう。

2年の婚約期間は長すぎると言いながらも、手を出さずに守つてくれているようだな。

あの男になれば、妹を安心して任せられる」

………ああつ！そうだった!!

レイが、野盗と手を組む前にマミヤに惚れさせればフラグ折れると思つてたけどそれじゃ足りない！

確かレイの妹のアイリつて、結婚式の前に村を襲つてきたジャギに、両親を殺されて

自分は攫われ、その出来事がレイを修羅の道へと進ませるのだ。

いかにマミヤに惚れていようと、大事な妹が賊に攫われて、その後はこの村でマミヤと幸せに暮らしてくれる筈もない！

絶対、その行方を探す旅に出でしまって、マミヤを守る男がまたいなくなる！

「け…結婚式を挙げるのは、いつですか？」

「ん？」

アイリの16の誕生日だから、二週間後だ。

済まないが、おれは来週にはここを発たなければならぬし、それから2ヶ月はこちらへ来る事ができないと思うから、たつぷり課題を用意しておくぞ？」

「いやいやいや！

そういう事なら今すぐ行きましょう！

そして一刻も早く持って帰りましょう！！」

アイリさんが攫われる事になるタイミングはよく覚えていないが、なんか花嫁のケープとかめっちゃフラグな気がする！！

だって、原作のレイが確かそんなもの持って歩いてたハズ！

賊が村を襲撃するのがレイ不在の間なわけで、すぐ戻っても間に合うかはわからないけど、少なくともレイが考えるタイミングで戻ったら絶対に間に合わない事だけは確か

だ！

「コウ、どうしたの!？」

なにかこの男に無茶な課題でも出された!？」

「あー姉さんちようどいいところへ!!」

レイさんの妹さんが二週間後に結婚するんで、この村で花嫁のケープを調達したいんだって！

一緒に行って選んであげてくれないかな？」

間に合う可能性は半々だ。

間に合わなくてもせめてマミヤとの絆を強めておくべきだと思い、俺はこの件をマミヤに丸投げする。

大人2人がえって顔をして俺を見つめ、しばし固まった。

…先に復活したのはマミヤだった。

「…二週間後ですって!？」

あなた確か昨日、この村を発つのは一週間後と言っていたじゃないの。

あちらの村まで、行商の馬車だと途中の寄り道を考えたら、一週間はかかるのでしよう？

そんなギリギリに持って帰って、ドレスとデザインが合わなかったらどうする気なの

!?

刺繍とか刺し直すのも日数がかかるのに、妹さんの一生に一度の大切な日を、不本意な衣装で迎えさせたなら、あなた一生恨まれるわよ!!

本当、男の人ってこういう事に無頓着なのね!

いいわ、私が一緒に最高のものを選んであげる!

そして調達しただけで私に私のバイクで、あなたの村まで送ってあげるわ!!」

まさかの女性視点からのダメ出しである。

そのまま手を掴まれ、村の絹の工房へ引つ張っていかれたレイの目が、ちよつと涙目に見えたのは気付かなかつた事にしよう。俺は固く心に誓った。

・
・
・

「正直、大きく手直しする必要はなかったみたい。

若い花嫁さんだから、もっと華やかなドレスなのではないかと思っていいたら、結構シンプルでデザインだったの。

けどケープのデザインに感銘を受けたお針子さんが、襟元の刺繍を少し、似たようなイメージで刺し直すんですって。

あれに、私とレイが選んだケープをマリアヴェールにして被れば、とても神聖なイメージになるわ。

また、レイの妹さんが、すごく綺麗な子だったのよ。

旦那さんになる人には会えなかつたけど、彼は幸せ者ね。

結婚式まで滞在して祝っていつてくれと引きとめられて、ちよつと心は動いたんだけど、滞在中のお世話をかけるのも何だし、何より結婚式に参列できるような服を持ってきていないからと断つて、断腸の思いで帰つてきたわ！」

2日後、自分のバイクで村に戻つてきたマミヤがうつとりと語つた話を聞く限り、レイの帰還はどうやら間に合つたらしい。

まあ、その結婚式が開かれる事になるかは判らないが、アイリさんが攫われるフラグは折れたと、安心していいんじゃないやなからうか。

☆☆☆

そしてとうとう運命の日、マミヤの20歳の誕生日がやってきた。

その日、恐れていた赤い髪の男が、遂にこの村を訪れた……レイに伴われて。

いやいやいや、お前何してくれちゃつてんの!?

せつかく破壊フラグ折れたと思つてたのに、これもう運命の修正力には逆らえないつてやつ!?

思わず涙目になつた俺に気づかず、レイがイケメン顔を微笑ませて言う。

「マミヤ、コウ、紹介しよう。」

妹のアイリと、その夫のユダだ」

……………はい？

見れば、そのド派手な赤い髪の男の蔭に、隠れるように側に立つ、サラサラストレートの金髪が眩しい、綺麗な女の子が微笑んでいる。

…多分だが姉さんより胸は小さい。

つか、え？アイリの夫がユダ？

なにこの珍妙なカップリング??

俺が混乱して固まってる、アイリがパツと笑顔を輝かせた。

俺の隣に立つ姉さんに向かって駆けてきて、その胸に飛び込む。

「ママイヤさん、お久しぶりです！

お誕生日おめでとうございます!!」

美女と美少女が抱き合う光景とか、もう眩しくて目が潰れそうだ。

誰だバルスとか唱えたの。

なんかアイリさんが『うわ超柔らけえ』とか眩いた気がしたがきつと気のせいだ。

その横に、違う意味で目が潰れそうな派手男が、やはりママイヤに声をかける。

「貴方がママイヤか。

レイやアイリから話は聞いていたが、確かに美し…………ぐっ!!

ア、アイリ、なんでいきなり俺の手の甲を抓るんだ？」

ギギギ、と音が鳴るような動きでユダが見下ろす先に、上目遣いで睨む彼の新妻が、押し殺したような低い声で言う。

「…レイの奥さんに一目惚れでもしたわけ？」

それを聞いてママヤが『奥さんだなんて、まだ、そんな』とか言つて頬を赤らめたが、レイのプロポーズを受ける事にしたと、俺と両親が夕食の席に聞かされたのはまさに昨日の話だ。

しかし…アイリのその言葉は、ちよつと無視できない。

実際そうであれば、ユダはママヤを奪い取ろうとして、結局は悲劇が起きるのではな
いか。

だが、次に起きたのは、こらえきれず吹き出したような、ユダの笑い声だった。

「…ククツ。そんなわけがないだろう。」

さすがにレイが選んだ女性だと思つていただけだぞ？

フツ……なんだ、ヤキモチか？

俺は、こんなにアイリに夢中だというのに。

まあ、アイリはそんなところも可愛いがな。

ところで……」

「…なに?」

「俺は、抓られるよりも踏まれる方が好」

「滅ベド変態!!!」

「ほおすとおうっ!!」

次の瞬間、アイリのローキックを脛に受けたユダはその場に崩折れたが、その表情にはありありと歓喜が表れていた。

…なんだこの2人の関係性。

後で話を聞いたところ、結婚式は無事に執り行われたらしいが、その前に野盗の襲撃はやはりあったそうだ。

それも、結婚式の前日の話だそうで、それが予期せず行われたものであれば、結婚式どころの騒ぎではなかったのだが、実はアイリとの婚約期間中、ユダがそのあたり一帯のチンピラを掌握しており、『悪そうなやつは大体友達』状態になっていて、新参の野盗集団である『仮面の男』の一味は、現れた時から目をつけられていたらしい。

その動向を逐一報告されて、自分でも頭目の『仮面の男』に接触してみたところ、よりによって婚約者の村に襲撃をかけようと計画している事を知り、酒で酔わせて聞き出した襲撃時には、レイと2人準備万端で待ち伏せしていたとの事だ。

「な、なんだテメエ、裏切りやがったのかよ!」

「裏切りではない、これは知略だ！そして愛だ!!」

そう言つて『仮面の男』を背中から開きにする光景は壮絶なものであったという。

「俺のアイリに手を出そうとしたのだから、当然の報いだ。」

…だがあの男、ここに来る以前、南斗孤鷲拳のシンに接触していたという情報が入っている。

「彼奴は北斗に最も近い男、もう少し調べる必要があるな」

「うわあ、ユダさんメツチャ有能。」

「そしてアイリさんすげえ愛されてるし。」

…

「ねえ、コウ君?」

「はい?」

「…あなたもこの村も、勿論ママヤさんも、きつとレイが守ってくれる。」

「…けど念の為当分は、村の外に一人出ないようにしてくださいね。」

「そう…村の外の、掃除が済むまでね」

レイの妹のアイリさんが、そんな謎めいた言葉をかけてきてから数日後、村の周辺を根城にしていた野盗集団が、やはりレイとユダによって壊滅させられた。

…完全にみじん切りにされてたんで分かりづらかったが、例の俺の死亡フラグ、牙一

族で間違いない扱い。

それからすぐにマミヤとレイは結婚式を挙げ、2人の愛のセレモニーを見届けた後、ユダとアイリさんは自分の村へと帰っていった。

姉さんは、きつと幸せになるだろう。

俺もいつか、このひと達のような幸せをつかめるのだろうか。

とりあえず、嫁さんになる人は巨乳美人がいい。

☆☆☆

…これは後日、義兄レイと、その義弟であるユダから聞いた話だ。

これからの乱世に向けて南斗の立ち位置を考えようと、南斗六星拳を招集した『南斗サミット』が行われた。

但し、『最後の将』は事情により欠席、南斗孤鷲拳のシンも、北斗とのトラブルで身を隠しており連絡がつかず欠席で、六星のうちの四星のみで行われたそうだが。

議題は勿論、覇権か和平か。

この時勢に覇権をと主張する、南斗鳳凰拳サウザーに対して、和平派の南斗白鷺拳のシウは、

「私たちの子が平穏に暮らし、その平和は父たちが作り上げたものだ、誇れる世界を作っていききたい」

と語り、新婚のレイは勿論同意したそうだと。

途中、ユダがどうやら流されかけ、フラフラ覇権派につきそうになったものの、「オイタをしてアイリに叱られたいのだろうが、そうなったらアイリは、叱る前におまえを捨てるぞ」

とレイに言われて、改めて和平派につくと宣言したらしい。

アイリさんすげえ。

こうして、和平派が多数を占めた南斗サミットは、サウザーの『リア充滅べ』の声とともに閉会したという。

新たな時代が幕を開けようとしていた。

愁く転生したら種モミのジーサン以上にモブだった件 前編

物心ついた時には、自分が異世界に転生したと気がついてた。

けど、前世の多分2世紀は前くらい、中国っぽい雰囲気の世界なんだとしか認識していなかった。

その人と会うまでは。

あたしの祖父は、あたしが暮らすこの村を作った人だが、その祖父が生きていた頃から、孫のあたしが割と持て余されてる事は知っていた。

あたしは、母が野盗に攫われ、取り戻した時に身籠っていた子供だったからだ。

その時恋人を野盗に殺された母は、連れ戻した時には気が触れており、あたしをその恋人との間の子だと思ひ込んだままあたしを産み、数年前に、人目に触れぬよう閉じ込められていた地下の部屋から逃げ出して、崖から落ちて死んだ。

その頃既に病に冒されていた祖父はそこで自身の死期を悟り、いずれはひとり遺されるあたしの身を案じて、自分の親友だった男の息子に村長を任せる代わりに、あたしの事を頼むと言って亡くなったらしい。

あたしは村長となつた彼の息子の婚約者となり、日々すくすくと成長していった。

4つ年上の婚約者とは兄妹のように育つた為、恋愛感情みたいなものは持ちようがなかつたけど、それだけにお互い気負うことのない、いい関係を築けていたと思う。

：村の創設者の孫で次期村長の嫁（予定）であるあたしが、村の名産として化粧品作りを提案して、それが軌道に乗るまでは。

化粧品と言つても、植物の蔓から抽出して作つた化粧水や整髪料、或いはやはり植物の種の胚をすり潰してオイルで練つた白粉とかいった、おままごとのような拙い商品ではあつたが、物のない辺鄙な田舎のこと、そんな物でも近隣の町や村の女性たちの、心の琴線には触れたのだ。

それは元々、あたしの母のように野盗の被害に遭い、命は助かつたものの婚姻の機会を奪われた女性たちが、自ら活計を立てる手段として提案したものだつた。

だが評判になつたそれは生産量と作り手を徐々に増やしていき、村の女性たちの殆どがそれに携わるようになってくると、村が豊かになると同時に、女性たちの発言力が大きくなつた。

となると、それを面白く思わない年配男性たちから、あたしは密かに疎まれるようになったわけで、その空気は次第に婚約者父子の、あたしへの感情も変えていった。

元々持て余された子供だつたあたしは、結局最初の立ち位置に戻つたわけだ。

もつとも、それはあくまで男性視点での立ち位置であり、職と収入と立場を得た女性たちにとつては、あたしは英雄だった。

「すまない、ミサキ。

おまえが悪いわけじゃないのはわかってる。

だけどおまえとの婚約、解消させてほしい」

そのあたしが特に親身になって仕事を回していた子持ち女性に手をつけて孕ませたという、兄とも思っていた婚約者である彼にそう言われて、祖父と暮らしていた家にあたしが戻ってから3日も経たない頃に、養父であり義父となるはずだった村長に連れられて来た男性は、年の頃は30代前半、光を失った両目の、獣の爪にでも引き裂かれたように残る傷が、未だ生々しい状態だった。

「この長老の家はワシが管理していたし、キミは引き続きうちに住むだろうし、住む者がないと傷むと思って、彼に貸すつもりでいたんだ。

まさかタイキの奴が勝手に婚約解消などと言い出すと思わなかったから。

なあ、ミサキ。頼む。

キミの住むところはこちらで手配するから、もう少しうちに居て、ワシの顔を立ててここはまだワシに貸しといってくれんか」

そう言って、義父になる筈だったその人が、まだ16の小娘であるあたしに両手を合

わせる。

こないだまでは、長老との約束がなかったらとつくに放り出してるのか、村のオツサン達の前で、これ見よがしに言つてたくせに。

というかこのことかそことか最近急激に育つてきたあたしを、変な目で見始めてるの知つてましたからね。

息子の嫁になる娘だからと自重してただろうけど、その枷が取つ払われたらどうなるかわかつたもんじやないと思つたからこそ、さつさとあの家を出たわけですから、戻れつて言われても困ります。

「いやいや、婚約関係でなくなつたなら、あたしがそちらのお宅に厄介になる理由もないでしょう。」

今までお世話になりました。

こちらのかたの事は、新村長であるあたしが責任持つてお預かりいたしますので、どうぞご心配なく」

「はっ。」

「いや、だつてあたしを最終的に自分の娘にする約束で、祖父に村長を任されたんですよね?」

その約束が反故になつたんですから、本来なら継ぐ筈だつたあたしに返してもらうの

が道理ですよね？

大丈夫、今のあたしなら充分やっていけますから。

女性たちが村の収益を担うようになって肩身が狭くなった頭の固いオッサン達はおき、今や村の稼ぎ頭である女性たちは、ほぼ全員あたしの味方です。

彼女たちの協力があれば、立派にこの村を治めていきます。

それに、母屋に住んではいなくても畑は使ってたし、家畜小屋だったところを改装して作業場にしてたの知ってますよね？

職場を奪えばまた、女性を家に閉じ込めて威張り散らせる生活が戻ってくると、オッサン連中に唆されたんでしょう？

けどそこで生産されてるあれらが村の名産として利益を上げてる以上、その利益を損なう背任行為と認定されてもおかしくなかつたんですよ？

その場合、巻き込まれたこのかたにだつて迷惑がかかるどころだつたじゃありませんか。

そうなる前にあたしがここに住み始めていて本当に良かった。

タイキには是非、婚約を破棄してくれてありがとうとお伝えください。

ええ勿論、今まで育てていただいた恩もありますから、あなた方父子をこの村から追い出すような真似はしませんよ。

あなた方のあの家で、今まで通り暮らしていただいていた結構です。

もつとも収益は村長のあたしのところを集められて、皆さんの働きに応じて然るべく分配しますから、今までのように搾取して甘い汁を吸う事はできなくなりますが、父子ふたり、質素に暮らしていけば生活できますよね？

あ、もうすぐ4人、いや5人になるんですけどつけ。

お疲れ様でした、前村長殿」

一方的に言つて、なにやら喚き始めた養父だったオツサンを無理矢理外に追い出す。

少し欲を出してしまいあたしから婚約者を奪つた形になった、あたしの代わりに嫁入りすることになる彼女には申し訳ないが、彼女を仲間外れにしないでやって欲しいと他の働き手たちに既に手を回してあるから、これまで通りあたしの下で仕事はしてくれらるだろうし、その収入があればオツサンはともかく、夫婦と子供ふたりなら、暮らしに困ることは無いと思う。

そんなあたしたちのやり取りを聞いていた、その場に取り残されたそのひとは、申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

「わたしが来たせいで、なんだかともない事になつてしまつたようだね……」

「いいえ。こちらの方こそお見苦しいところを……いえ、あの、もと村長を頼つていらしたのでしょうか、こんな事になつていて、本当に申し訳ありません」

目の見えない人に『お見苦しい』はなकारうと思ひ、慌てて訂正する。

しかし、彼は特に氣にした様子もなく、ゆつくりと首を横に振つた。

「いや、わたしが頼つたのは彼ではなく、こちらの村を作つた長老殿なのだ。

…よもや亡くなつてゐると思ひもよらず。

その家が住む者もなく荒れそうだと聞かされて、ならば住まわせて欲しいと甘えたのがいけなかつた。

どうかわたしの事は氣になさらず。

このように光を失つた身ではあるが、これはこれで、自分の身の回りのことは一通り行なえるゆえ、滞在先などは自分で探しましょう」

穏やかに話す落ち着いた声に、大人の男性としての思慮深さを感じさせ、あたしはこのひとに好感を抱いた。

それに、真つ先に目につくその顔の傷ですっかりわかりにくくなつてゐるが、よく見れば鼻筋の通つた、ちよつとそこいらでは見ないようなスツキリしたイケメン顔ではないか。

服装も清潔感のある趣味のいいものを身につけていて、少なくともこの村よりはるかに開けた街で生活していた人であつただらうし、なぜこんな傷を負うことになつたかはさておき、それ以前はきつと女性にもてていたに違いない。

だからというわけでは勿論ないし、直感でしかなかったが、あたしはこの男の人を、信用のおける人物と判断した。

「いいえ。

祖父を頼つて来てくださったのなら、あなたはあたしの客人です。

どうぞごゆるりと滞在なさってください。

この母屋は女一人では広いと、ちょうど思つていたところです」

だがあたしの言葉に、彼は再び首を横に振る。

「…それは、外間的に良くはないでしょう。

うら若き女性が、村の外から来た男を家に引き入れたと、良くない噂でも立てられては…」

おやまあ、なんとという紳士。

先程まで村長だったあのオツサンに、爪の垢でも煎じて飲ませたくなる。

もつともその男らしい大きな手の指先の、平たい爪は綺麗に短く切りそろえられており、恐らく垢など一欠片も残つてないだろうが。

「さっきのもと村長の息子に、婚約破棄されたばかりの女ですよ。

今更落ちる名譽も何もありません」

自分を心配してくれるその紳士に、見えていないと知りつつも胸を張ってみせる。

見えていない筈なのに、彼は空気だけは感じ取ったものか、フツと唇に笑みを浮かべて、言った。

「…その男は、馬鹿だな。」

この世に二つと無い宝を労せずに入れられたのに、それを自ら捨てるとは」

「……は？！」

「わたしにはわかる。」

あなたは、身も心も美しい人だ。

これから村を背負って立つあなたの姿は、さながらドラクロワの絵の女神の如くなの
だろうな。

この目にそれを映せないのが、残念だ。

ならばせめて、それを守る騎士としての榮譽を、賜わらせていただけどうか」

そう言うと、大人の男性である彼が小娘のあたしの前に跪き、あたしの手を取って指
先に口づける。

えええっ!?

この世界でも前世でも、素面でこんなことをするような男性と接したことなかった
あたしは、その慣れない賛辞と行為に、一瞬で顔面に血がのぼった。

「い、いいいいいや、あたしなんぞただの、そこらへんの村娘ですから。」

ああええと、じ、自己紹介が遅れましたが、長老の孫娘で今日から村長を務めさせていただきます、ミサキと申します。

よよ、よろしくお願いしましゅ」

うああ囁んだ。メツチャ囁んだ。

動揺して滑舌が怪しくなったあたしの挨拶に、だがその人はますます優しい笑みを返してくる。

「わたしは……」

「おやまあ！誰かと思ったたらシユウ君じゃないの！」

と、そこに場違いに明るい声が響いてきて、あたしだけでなくその人もそちらへ顔を向ける。

そこに居たのはエルマさんという、現在化粧品製造のスタッフを取りまとめられている人だ。

他のスタッフの夫たちが嫌な顔をするという相談を受けるたびに、

『そうやって威張ろうとするアンタの旦那だって、よその綺麗なお姉さんには進んで尻に敷かれにいくんだよ？』

私ら嫁が綺麗になれば、旦那方はヘコヘコして擦り寄って来るに決まってるさ！

ここはその、綺麗になる為のものを作る場所だよ！

胸張っていなさいな!』

と励ましてくれたりする。

(ちなみに製造に携わるスタツフは化粧品使い放題。最近は年齢がいつていても肌のきれいな女性が増えて、近隣からは美人が多い村だと評判になつているとか)

今回あたしが婚約破棄された事にも一番心を痛めてくれ、例のあたしから婚約者を奪つた彼女を叱り飛ばしてくれたわけだが、その彼女がこの先村八分にならないようにと、一番気を配つてくれるのもこの人だ。

「エルマどの。永らく無沙汰を致しております」

「おやおや。すっかり男前が上がつちまつたみたいだけど、そういう堅つ苦しいところは変わらないんだね、シユウ君は」

気軽な調子で笑うエルマさんの介入に、少し落ち着いたアタマが情報を整理する。

…そうか、このハンサムでジエントルマンなスカーフフェイスはシユウという名前なのね。

祖父の知り合いだったというし、エルマさんのこの反応からすると、かつてこの村に住んでいたか、少なくとも滞在していた事のある人なのかもしれない。

「エルマさんは、このかたを、ご存知なの?」

「ご存知もなにも、この人はアンタのお母さんを連れ戻してくれた人だよ」

言われてその人を振り返ると、彼はなにかを言おうと口を開いた。

だがその声は、発するより前にエルマさんに遮られる。

「ねえシユウ君。

アンタはあの頃、ユキトが殺されてミハルが攫われた事に、後悔しかないって言うってたけど、あの時ミハルの胎にいた子がこんなに大きくなつて、今じゃこの村を支えてるんだ。

運命つてのは不思議なもんだよねえ」

…ミハルというのはあたしの母の名だ。

話の流れからすると、ユキトというのは、その時母の恋人だったという人の名前なんだろう。

あたしが生まれたのが16年前で、野盗に攫われた母が連れ戻された時には既にあつしを身籠つていた。

この人のおおよその年齢を考えると、当時はまだあたしと同じくらいか、下手すりやそれより下の少年だった筈だ。

エルマさんの言葉に、シユウと呼ばれた人が、感慨深げに息をついたのがわかった。

と、唐突にエルマさんがあたしの肩を掴み、シユウ様の方へと向き合わせる。

「ねえミサキちゃん。

シユウ君は頭もいいし、なんとかかっていう拳法の達人でとっても強いのに、それを鼻にかける事もない、昔から本当にいい子なんだよ！

アンタとは歳は離れてるけど、タイキ坊なんかよりよっぽどいい男だと思うよ？

この村に滞在してる間に、モノにしちまう事をお勧めするね！」

「なっ！エルマどの、それは冗談にしてはたちが悪い！」

「おや、私は割と本気で言ってるんだけど？」

エルマさんとシユウ様があたしを挟んで言い合いを始めたが、あたしはそれどころじゃなかった。

今、耳に入ってきたワードにより、突然閃いた記憶が、水門を開いたように溢れてきたからだ。

何とか……拳法………南斗、聖拳。

攫われる子供たち。

聖帝の名の下に築かれる南斗十字陵。

愛を否定し葬ろうとする帝王。

その前に立ち塞がる盲目のレジスタンス。

光を閉ざした両目三条の傷跡は、いずれ世を救う少年の未来を守った証。

仁の宿命を星に持つ男、南斗白鷺拳のシユウ。

記憶にある漫画で見たその姿が、目の前にいる人と重なる。

蘇った記憶に、あたしはようやく理解した。

ここ、北斗の拳の世界だったんだ…と。

しかも恐らくは、核戦争前の。

つまりあたしは、その中の名もなきモブだ。

「…ミサキどの。」

先程は自己紹介が途中で止まってしまったが、わたしの名はシユウ。

かつてこの村で暮らしており、君の母上とも顔見知りだった。

親戚のおじさんか何かだと思って、必要なことがあればなんでも申し付けてくれてい

い。

しばらく厄介をかけるが、よろしくお願い致します。

「……………ミサキどの?」

…ねえ、あたし泣いていいですか。

この世界のモブって、普通に死ぬやつやん。

言ったら、汚物消毒されて死ぬやつやん。

そして、あたしの意識はブラックアウトした。

後編

：抱き上げた身体は、思ったより骨格も肉付きもしつかりしていた。

彼女の母親という人が小柄で華奢な少女だったせいか、耳にした声がかつて知っていたその人の声とよく似た声質だったことで、無意識に同じイメージを抱いていたから、少しだけ驚いた。

それでもわたしの腕に重すぎるといふこともなく、エルマどのに言われるままその誘導に従い、彼女の寝室らしい部屋へと運ぶ。

寝台の上にその身体を横えてすぐに、着替えさせるからとその部屋を追い出され、わたしは閉じられた扉の前で待つことにした。

そうだな、見えていないとはいえ、男の前で若い娘の肌を晒すなど出来るはずもない。それにしても、いきなり倒れるとはどうしたことだろう。

どこか身体が悪いのではないだろうか。

だが、しばらく待つて出てきたエルマどのにそういつた内容のことを訊ねると、彼女はそれを否定した。

「私も医者様じゃないから確かな事は言えないけど、この子は健康優良児だよ。」

けどここのところ色々あったから、いい加減疲れてたんだろうねえ。精神的にも、身体もさ。

しつかりしているようだけど、この子だつて本来はまだまだ、親の庇護の下にあつてもいい年頃なんだ。

時には甘えたい事だつてあるだろうにねえ。

…じゃあ、あとは頼んだよシユウ君。

日中は作業場に居るから、なんかあつたら呼んでちようだい」

…そうか。

生まれ故に幼い頃は持て余されていたようだし、最近婚約破棄をされたと言つていたし、どうやら今はこの村の女性のリーダー格という事のようにだし、更にこれから女の細い肩に村ひとつ背負つて立つつというのだ。

気苦労もさぞ多かろう。

傷が癒え、北斗が持ち込んだあの件のほとぼりが冷めるまでの間、滞在させてもらうと思つていたかつて暮らしていた村。

いつまで居ることになるかはわからないが、ここでこの少女と関わりあつたのも何かの縁なのだろう。

常に誰かに頼られながら、自身は頼るものを持たぬこの少女の、せめて心の支えにな

ろうと、わたしは密かに決意した。

かつて、救えなかった女性ひとの忘れ形見である彼女の。

☆☆☆

目が覚めたあたしは、とりあえず地下室を改装することにした。

今は倉庫として使っているが、かつては気の触れたあたしの母を祖父が閉じ込めていた部屋だ。

これだけ聞くとうちの祖父が相当人でなしのようだが、母が生まれたばかりの赤ん坊のあたしを抱いて離さず、それでいて授乳もオムツ替えもせずについて、このままでは赤ん坊が死んでしまうと判断して無理矢理引き離れたところ、次には泣いているあたしを見つけては連れ出して何度も殺しかけたので、やむなく閉じ込めることにしたのだとか。

死んだ時には、河の水音や崖に吹く風の音を、赤ちゃんの声と思い込んで行ったのではないかと言われていた。

母が生きている間、祖父はあたしをここに近づけないようにしていたので、あたしは母の顔をほとんど覚えていない。

遺体が発見された時の状態が酷かったとのことで、死に顔すら見せられず茶毘に付された。

それはそれとしてあたしはここを、災害時の避難場所にしようと考えていた：平たく言えば、核シェルターを作ろうと。

都会から離れた山のふもとにあるこの村は、出来た当初は電気の供給が安定しなかった為、頼りにならない電気冷蔵庫よりも、冬場に山から切り出した氷を貯蔵しておける地下室をもつ家が多かった。

今ほどの家も倉庫として使っているだろうが、そういった家の地下室を全部、核シェルターにしてしまおうという計画だ。

モブであるあたしに、核戦争を止める事はできない。

物語の通りに事が運ぶならば、この地上は間違いなく一度、核の影響下に晒される。

生き残った人類は秩序も法もない、暴力が支配する世界の中で生きる事となる。

救世主が現れるのは未来であり、今を生きるあたしたちにはその恩恵はもたらされない。

あたしたちは、あたしたちで生き抜くしかないのだ。

幸い、新村長としての最初の仕事として、そういった災害時の備えを提案したところ、村人からはあつさり受け入れられ、村の収益からその費用を賄うこととなった。

相変わらず男性たちは、小娘になにができるかと最初は馬鹿にした様子だったが、しばらく経つとその風当たりは徐々に緩まってきた。

あたしの家に滞在するシユウ様が、男性たちとの折衝を引き受けてくれた事が大きかったのだ。

「彼女を小娘と侮りたい気持ちもわからなくはないが、それではここにいる大人の男の中に1人でも、ミサキの半分もの功績を挙げられる者がいるかね？」

若さというのは可能性だ。

それに対して我々年長者がすべき事は、駆けつけて道を踏み外す前にその道を整備する事であつて、道を閉ざす事ではない。

むしろあなた方の奥さんが、何故あなた方よりもミサキを支持するのか、一度考えてみた方がいい。

理解したものを受け入れられれば、あなた方の奥さんは、再びあなた方を、尽くすに相応しい価値のある存在と、認めてくれるかもしれない」

そう先制パンチを食らわした後で、一人一人と男同士で話をして、彼らの中のコンプレックスを本人達に理解させて、その心を解きほぐしていった。

結局人間てのは単純なもので、好きになつてもらえば、大抵のことは許してくれるものなのだ。

シユウ様がその人徳を發揮して村のみんな一通りの心を掌握したほぼ1年あまりで、村長としてのあたしの足場もしっかりと固まつていて、化粧品作りもますます村の発展

に貢献する中、一時は深まっていた男性と女性の間の溝が、いつのまにかなくなっていた。

「一番側にいる人と、言いたいこと言い合いながら手が繋げる幸せなんて、私たちの世代には、考えてみりゃ誰も教えてくれなかつたんだよねえ。」

親たちは、女は男に従って生きるのが当たり前だとしか教えてくれなかつたし、誰もがそれを疑問に思わずに生きてきた。

あんた達が仲良く幸せそうにしてるの見て、そういえば自分にもそうなれる筈の相手があったと、改めて思った奴らが、私ら夫婦以外にもたくさんいるのさ。

このままあと10年の後には、今の倍には子供の数も増えてるだろねえ。

……まずはあんた達が先だろうけど」

などとエルマさんが言う通り、夫婦仲が改善された家庭がかなりあつたらしい。

あんた達という意味は、なにげに気付いてはいるが、あまり考えないことにした。

ところで一緒に生活してみると、ある程度の介助は必要だと思っていたシユウ様は、本当は見えてるんじゃないのつてくらい、自分の身のまわりの事やそれ以上、最初に自分で言っていた以上に何でもできるひとだった。

一通りの仕事が長引いて帰宅が遅くなった時、あたしの好きなものばかりのおいしいごはんを用意して待ってくれていた時は、思わずテーブルの前に立ち尽くしたものだ。

他にも、化粧品材料となる植物の畑の維持管理を引き受けてくれたり、それまでは手が回らないからと諦めていた家畜を入れてその世話もしてくれたり、気がつけばあたしの生活に、なくてはならない存在になっていた。

シウウ様はもはや物語の登場人物ではなく、あたしの大切な家族だった。

：あたしの母がシウウ様の初恋の人だと聞かされた時には、なにか言いようなない感情で胸が騒ついたのを確かに感じた。

勿論最初は本人の口から聞いたわけではなく、当時を知る大人が口を滑らせた事を知った（その人は直後にエルマさんから脳天にチョップを食らっていた）のだが、どうしても気になって本人に聞いてみたら、意外にあっさり白状した。

「修業をしている間に、伝える機会を失い、気付けば彼女は他の男と恋をしていた。時間というのは時として残酷なものだ。

いつか必ずと思つたものを、手にできると思つた頃にはもう、届かなくなつていたりもする。

わたしが村から離れている間に、君のお母さんが攫われて、その恋人が殺された時、わたしはその残酷さを身にしみて感じたよ」

：けど、母がシウウ様を選んでいたら、あたしは生まれてこれなかった。

あたしは、祖父にそっくりと言われたことはあるが、母に似ているとは一度も言われ

た事がないので、きつと似ていないのだと思う。

そもそも母は小柄で華奢な人だったと聞いているが、あたしは女にしては骨太で背も高い方だ。

少しでも似たところがあれば、こんなモヤモヤした気持ちにならずに済むのだろうか。

わからないけど、胸が、痛い。

☆☆☆

その日、シユウ様は隣村へ商品を届けに出かけていて、あたしは珍しく大した仕事もなく作業場の掃除をしていた時に、もと婚約者のタイキが訪ねてきた。

彼の父親は今や軽蔑していたが、兄妹とも思っていた彼のことは別に嫌いではなかったから、特に考えることなく家に上げたが、確かに今考えると軽率だったと思う。

「フウカが子供ふたりとも置いて出ていった」

フウカというのは、あたしの代わりに彼と結婚した女性の名だ。

確かに今日はこちらにも来ていなかったが、出ていったって何？

「次期村長じゃない俺には用がないんだとき。」

結婚すれば楽できると思つたのに、当てが外れたとか言いやがった。

子供を抱えて一生懸命生きてる、健気な女だと思つたのに、本当、騙された」

とかなんとかグググ言ってるけど。

「…一番可哀想なのは子供じゃない。」

アンタももう父親なんだから、一人でもしっかり育てないと」

「上は俺の子じゃねえよ！」

…今となつちや下だつて、本当に俺の子かどうかなんてわかつたもんじゃない」

「絶対そうじゃないって言い切れない事はしたわけでしょ？」

子供に罪はないってのが、この村の方針だよ。

あたしだつてそう育てられたし、そこはアンタ達父子に感謝してるよ」

正確には祖父の考えだ。

祖父がそう思っていてくれなければ、あたしはここまで大きくなれなかつたし、仮に生きてこられても、年頃になったあたりで村の男たちの共有物になっていたろう。

祖父が自身が亡き後のあたしの事を考えてくれたからこそ、あたしは今ここにこうしている。

だから、自分が長として立つた以上、そこは貫いていくつもりだ。

このタイキだつて思春期の頃は、妹同然のあたしに小さな悪戯程度の事はしてくれたものだが、彼の存在があたしを守ってくれたから、もと村長に手を出されることもなかったし。

あたしが言うのを聞き、タイキはひとつため息をつくとき、あたしの目を見つめて言った。

「なあ、ミサキ。

もう一度、俺とやり直さないか？」

…なんだろう。今、宇宙語が聞こえた気がする。

「はあ？」

「村長の仕事は続けてくれて構わない。

この家は、あのオツサンに譲ればいいだろ。

俺と結婚して、2人で子供育てよう。

大丈夫、おまえは立派な母親になれるさ」

宇宙語はまだ続いている。

翻訳して、どう好意的に解釈しようとしても、その方が都合がいいからお前に押し付けたいとは聞こえない。

メダマドコーみたい感じになったあたしが、思わず口にした言葉がこれだった。

「……アタマ、大丈夫？」

そんな風に言われると思ってなかったというように、タイキが眉を顰める。

「なんでそうなるかな。俺は本気だけど？」

「うん、本気で言ったのが判ったから大丈夫か聞いた。

そう言われてあたしが戻ると、本気で思ってる？

だとすると、随分馬鹿にされてると思うんだけど？」

妹のような存在のあたしに対して甘えが多少あるにしても、これはひどい。

多分同じ状況に立たされた女のうち、10人中10人はそう思ってくれる筈。

なのにタイキは、心底信じられないという顔であたしを見つめた。

「…俺のこと、もう好きじゃないのか？」

ああ、つまりそういうことか。

確かに、その人の事が好きであれば大抵のことは許してもらえる。

けど、信用を裏切るという行為は、その『大抵のこと』の範囲を大きく逸脱するものだ。

それに。

「正直な話、タイキを好きだったことなんて無いよ。

一緒に育って、兄さんみたいには思ってたけどね」

そもそも、前提が間違っているのだ。

あたしは、恋を知る前にタイキと婚約させられた。

だから、漫然とこの人と結婚するのだと思っただけで、本人を好きだと思っただけで、

とはない。

「タイキだつて、あたしを好きになれなかったから、フウカさんに惹かれたんでしょう？
お互いに、今更だと思わない？」

少なくとも今のタイキはあたしと違い、人を好きになることを知っている。

ならば、好きでもない人と結婚して、妥協の人生を送るような真似はさせたくない。

その程度の情ならあたしにだってあるのだ。

「…そんなに俺より、あのオツサンがいいのかよ」

…けどタイキは、あたしを恨めしげに睨むと、押し殺したような低い声でそう言った。

「……へ？」

「一緒に暮らしてた頃には、しなかった顔を最近するよな。

初めて見た時、ハツとした。

あんないい顔で笑う女だったのだった。

そして、そのいい笑顔の一番近くにいるのは、いつもあいつだ。

おまえが俺の前であの顔で笑っていてくれたなら、俺はあんな女に惑わされたりしな
かった！

なんでアイツなんだ？

なんで俺じゃないんだよ!!」

タイキはそう言うと、あたしの上腕を掴んだ。

爪が肉に食い込んで痛い。

「ちよ……やめてよ、タイキ！離して!!」

「…おまえは俺のものだった筈だ。」

今なら、まだ取り返せるよな…!？」

…そう言つて胸に引き寄せられた瞬間、

「うっ……!!」

「えっ、ええっ!!? ……ぎゃあああああつ!!」

なにかものすごい吐き気を覚えて、次の瞬間あたしは嘔吐した。

………この場面、キラキラエフェクトのモザイク処理でお送りしております。

胸元をあたしの吐瀉ぶ…キラキラエフェクトまみれにされたタイキが、呆然とその場

に座り込む。

ああうんそうなるよねー。

襲おうとした相手がいきなり嘔吐したら、余程の特殊性癖の持ち主でもない限り、それ以上なにかしようとか思わないよねー。

うええ、気持ち悪い。

「……なにをしているんだ」

と、どこか呆れたような声が聞こえた方に目を向けると、シユウ様が居間の入口に立っていた。

・
・
・

「まずは、浴室で洗つてくるといいい。

わたしの服を貸すから、今日はそれを着て家に帰りましたまえ。

君の服はこちらで洗濯して、後日わたしが家まで届けよう。

：ミサキ、大丈夫か？」

多分何となく状況を察したであろうシユウ様は、さりげなくあたしとタイキを引き離すと、そう言つてあたしの肩を抱く。

その手の温かさに、あたしは安堵した。

ここにいればもう大丈夫。

「ここはわたしが片付けるから、君も着替えてきなさい。

身体を冷やしては差し障りがある。

無理をしてはいけないよ、大切な身体なのだからね」

「え？」

いつもより近い距離から、シユウ様が優しげに囁く声に、思わずあたしはどきりとした。

だが、その言い回しはまるで…。

「後で、さっぱりとした飲み物でもつくってあげよう。

酸味の効いた果汁を使った果実水がいいかな」

そうシユウ様が囁くのを聞いたタイキが、その場に立ち尽くして震えているのがわかる。

「……ま、まさか」

タイキのようやく絞り出したような声に、シユウ様は今気づきましたというように、振り返りながら答えた。

「…ん？君は、まだそこにいたのか？」

「し、失礼しました〜〜！」

キラキラエフェクトをつけたまま、タイキがその場から走り去る。

見えていない筈のその情けない姿に、シユウ様の口角がちよつと悪そうに上がったのがわかった。

「……シユウ様。

あのひと、メツチャ誤解したと思うんですけど」

「やれやれ。

別にわたしは、ひとつも嘘は言っていないのだがね」

「嘘は言つてなくとも誘導はしましたよね？」

「…それより、彼が浴室を使わないならば、君が使つてくるといい。」

その間に、ここはわたしが片付けておくから」

キラキラエフェクトは大体タイキが引き受けてくれて、うちの床はほとんど汚れてはいなかった。

だから甘えることにして、頷いてシユウ様から身体を離れた瞬間…何故か膝から力が抜けて、あたしはその場にへたり込んだ。

「ミサキ!？」

「……安心したら、なんか、腰が抜けました」

…実に不本意ながら、あたしは入浴と着替えを、シユウ様に手伝わせることとなった。シユウ様はエルマさんか他の誰か女性を呼んでこようと言つたのだが、どうしてこの状況に陥つたかを外のひとに知られられなくなかつた。

「タイキの事は…好きでもなんでもなかつたけど、あの人の妻になると思つていたら、いざれそうなるものだと思つてたんです。」

…けど、実際に手を触れられたら、気持ち悪いと思つてしまった。

この手じゃないと、思つてしまったんです」

直接肌に触れないよう注意して、優しくタオルで身体を洗つてくれるシユウ様に、ぼ

つぼつとそう溢す。

「…あたしに初めて触れるひとは、シユウ様じゃなきや嫌だと…思ってしまったんです」
そして気がつけばとても自然に、その言葉が口から出ていた。

「…ミサキ。

わたしは、君にそんな風に思ってもらえるような男ではない」
シユウ様の手が止まり、苦しげな声が、背中越しに耳に届く。

「…わたしはね、ミサキ。

本当はとても、心の狭い男なんだ。

独占欲が強く、束縛が激しい。

あの男が君に触れたと判った時には、彼を殺してやりたいとすら思った。

この手が君に触れてしまえば…わたしは、君を離せなくなる」

呟く言葉に熱を感じて、胸の奥が歓喜に満ち溢れた。

同時に、胸のモヤモヤが晴れた気がした。

あたしは、この人に求められたかと思っていた。

この人を愛してしまっていた。

「…それ、なんて天国ですか」

そう呟いた瞬間、背中から回された腕に、強く抱きしめられた。

頬を引き寄せられ、唇に待ち望んでいたそれが降ってきて……その後の記憶は割と臚いだ。

シユウ様が誘導したタイキの誤解が本当になったのは、それから間もなくの話だった。

☆☆☆

……丈夫だった彼女は、子を産んでからはよく寝込むようになり、シバと名付けた息子が歩き始めた頃に、あの核戦争が勃発した。

そして迎えた運命の日。

彼女の提案で設置したシエルターで、村人の殆どがあの一瞬間を生き残ったが、作物は育たなくなり、豊かな時代が終わりを告げた。

地上は暴力が支配する世界となり、拳王の進軍が始まった頃、彼女は、時折咳き込んで血を吐くようになった。

共に過ごせる時間が、徐々に終わりに近づいている事は、もはや明らかだった。

「いつか、あなた達を残して逝く事になるとわかっていたから、それはもういいの。

あなたと出会って、恋をして結ばれて、可愛い子供にも恵まれた。

これ以上ないくらいに、あたしは幸せだったわ。

もつと、もつとと望んでしまうくらい……終わるのが悲しいと思うくらい、幸せだった

…

意識のある彼女と最後に過ごした夜、抱きしめた腕の中で囁く言葉に、盲いてもなお枯れぬ涙が、その細い肩に落ちるのをわたしは止められなかった。

「ただ、ひとつだけ。

どうしても、言っておきたいことがあるの。

どうしてもあたしの中で、納得のいかないことが。

お願い。シバが、自分の意志で戦えるようになったら、必ず伝えてちょうだい。

…ダイナマイトは、火をつけたら、投げて使うものだ」と

…最後の言葉は、意識が混濁していたのだと信じた。

そう言い残した後、眠るように意識を失って3日後。

わたしの愛した彼女は、永遠の安息の世界へと旅立った。

幸せそうに、微笑みながら。

真く多分、始まらない物語

前編

読者目線で見ていた時には、確かに何でかなーと思っていた。

己の敵にすら慈愛のまなごしを注ぎ、それが故に誰からも愛される女性であるユリアが、恋人のケンシロウとその瞬間までは友人関係であった筈のシンの告白に、『そう思われていると知っただけで死にたくなる』とまで言い放つほどに、彼を嫌っていた理由。

「…ねえ、シンちゃん」

「シンちゃん呼ぶな……なんだ」

「いつも言ってる事だけど、好きな女の子に嫌がらせで気をひこうとするとか、今どき小学生でもやらないと思うよ」

「…うるさい！」

ただの幼馴染のくせに、おれの行動にいちいち口出しするな！」

「……………チツ……………童貞が」

「貴様今、一番言つてはならん事を言わなかったか!!?」

「気のせいです。」

あと、キミの師匠が、授業が終わったら修練場に来るようにと」

「それを早く言え!!」

足音も荒くそこから立ち去る青年の名はシン。

愛に殉じる星『殉星』の宿命を持ち、後に南斗六星拳のひとつ、南斗孤鷲拳の継承者となるこの男は……この世界に転生して、彼の幼馴染としてその身近で育った私の目から見れば、ただの初恋と童貞拗らせた痛い若者だった。

☆☆☆

「ごめんなさいユリアちゃん。

いつもいつも、うちのバカな弟分が」

「いいえ……マツリさんのせいではありませんもの」

……弟分と言ったが、正確にはシンは私よりひとつ年上だ。

しかし幼い時分から、アイツがバカやらかしては私がフォローするという関係性をずっと維持してきた為、私自身もそうだが周囲も、シンを私の弟分であると認識している。

認めていないのはシン本人くらいものだ。

しかも思春期を過ぎた頃からやけに私に逆らうようになってきて、若干手を焼いているのが現状だったりする。

そして同時期からずっと、誰がどう見ても好きで気になってるユリアちゃんに、持ち物を隠したり嫌いな生き物を投げつけたりといった童貞アプローチを続けるシンに、真つ当な苦言を呈するたびに喧嘩になるのが黄金パターン。

この反抗期はいつまで続くのやら。

そして童貞：もといシンが嫌がらせをして泣かせるたびに謝りに行くのが私というルーティンを確立した結果、同じ年だった事もあって私とユリアちゃんはとつても仲良しになった。

もつとも、とある事情からそれが始まる前から、私とユリアちゃんは既に顔見知りだったわけだけど。

フフン、どうだ。羨ましいか童貞。

こうしてちよつと手を伸ばせば、ユリアちゃんのサラサラふわふわの黒髪に触り放題なんだぜい。

：アイツのストレートの金髪も、子供の頃は癖毛の私には羨ましくてよく触ってたもんだけど、ある程度体格差が出てきてからは嫌がられるようになった。

ちよつとだけ寂しいとかは思っていない、絶対。

「ふふっ。くすぐりたいです、マツリさん」

見よ、こちらは嫌がるどころか、ちよつと恥ずかしそうに、尚且つ嬉しそうに見上げ

てくるユリアちゃんの、この清楚系美少女っぷりのなんと貴いことか。

刮目して同時に目エ潰れる童貞^{シン}。

同性の私ですら道を踏み外しそうになるほど破壊力のある微笑みに私は、心の中で歯齧みをして悔しがる弟分^{シン}に向けて薄い胸を張った……ってやかましいわ。

「ユリア」

と、唐突に彼女を呼ぼう声が聞こえ、私たちはそちらに顔を向ける。

そのひとと目が合った瞬間、パアアという幻聴が聞こえ、微笑みの段階でさえ眩しかったユリアちゃんの笑顔が満開になった。

「ケン！」

「お疲れ様です、ケンシロウくん」

私が挨拶すると、ユリアちゃんの彼氏のケンシロウくん……この世界の主人公であり後の救世主、北斗神拳伝承者……になる予定の、今はまだ素朴で優しげな青年……は、少しだけ目を瞠った。

「マツリさん……？という事はシンが、また？」

……ほらみる童貞。

既にケンシロウくんにまでパターンが覚えられてるじゃないか。

割とこの子（いや、彼も私たちよりいっこ上なんだが）、鈍感の部類に入る人種なのに。

まあ、だから比較的神経質で気の短いシンと、親友なんてやってられるんだろうけど。「ええ。今回は机の中に、虫の入った箱が。」

いかにも怪しげだったので、ユリアちゃんが開ける前に私が回収しましたが。

どうやら休前日に仕込まれたものようで、開けるまでに既に2日経過しており、意図した事ではないのですが、発見した時には若干蠱毒状態になっていたので、南斗の上層部に連絡して適切な処理を行なってもらいました。

その際アイツの師匠にも連絡が行くようにしておいたので、今頃はこつてり説教食らつてることと思います」

「…さつき、修練場で正座させられてたのはそういう事だったのか……。」

まったく、あいつはいつもいつも、一体何がしたいのやら……」

「割と何にも考えてないと思います。」

「…毎度の事ながら、御迷惑をおかけして申し訳ありません」

「マツリさんのせいではないだろう」

苦笑しつつ、さつきユリアちゃんが言ったのと全く同じことを言ってくるケンシロウくんは、物語の中の無口で無表情で無愛想な最強拳士の面影はなく、ユリアちゃんのそばで優しく笑ってる顔からは、むしろ気弱な印象すら受ける。

もつとも本人曰く、

『幼い頃に己の力に驕った結果、命を落とすところを助けてくれた人に、一生消えない傷を負わせてしまった』

事を自戒としていて、自信はあっても表に出さないようにしてるんだとか。

：方向性としては微妙に間違ってる気がするけど。

そういうところが核戦争終結後の世界になってからの、

『ケンシロウでは、ユリアを守れない』

という印象に繋がって、シンがジャギの悪魔の囁きに耳を傾ける理由になっちゃったんじゃないのかなあ。

私が言っても仕方ないから言わないけど。

正直な話今のケンシロウくんを見る限り、ユリアちゃんは彼が力をつけるまでの間は、ラオウのところにいるのが一番安全だと思う。

女に手を出す事になんの呵責も覚ええない小悪党どもが、まさかユリアちゃん欲しさに拳王に喧嘩を売るなどと、命知らずな真似はしないでろうし、ラオウはユリアちゃんが否と言っている間は、その誇りにかけて決して手を出すことはないだろうから。

ラオウはレ○プなんてしない、と原作者が言ってたそうだし。知らんけど。

あのオツサンも大概初恋拗らせてるからね。

今、トウ姐さん（海のリハクさんのお嬢さん。華やか系の美人でボン、キュツ、ボン

の超グラマー。羨ましくなんかない）がめっちゃアツクかけてると、南斗の女官の皆さんの間で専らの噂だが、まあそれは余談だ。

それはさておき、だがシン、おまえはダメだ。

何がダメってユリアちゃん本人は大嫌いのところまでいったとしても、シンが最愛のケンシロウくんの親友という事もあって、そこにある程度の情けが入る余地があるところの問題がある。

優しいユリアちゃんは、自分の為に手を血に染めていくシンに心を傷め（多分だが相手がラオウであれば、ここまでのシヨックは受けないと思う）、それが身体を損なう引金になったに違いないからだ。

ユリアちゃんには、若干だが癒しの力がある。

後のトキほどに病状が進んでしまっていたなら治しようがないだろうが、初期段階での進行ならば、その気があれば抑えられた筈だ。

そうしなかったのは、シンに連れ去られた時点で彼女が絶望しきっていたからで、さすがに少年誌で連載されていた作品故に描写はされなかったが、その時に手を出されていた事が想像に難くない事を思えば、理由は明らか。

つまり、原作でユリアちゃんを死なせたのはやはりシンだったのだと、私は思ってる。

…この世界が核の影響で一変し、暴力が支配する世界になってしまふ事は避けようが

ないにしろ、出来ればシンがユリアちゃんを奪い去る展開は阻止したいと思っ
ているのだが…現状では如何ともし難いようだ。

・
・

「ところでマツリさん、新作はまだ書かないんですか？」

「……………鋭意制作準備中です」

「うふふ、楽しみに待ってますね♪」

「……………新作？」

「女の子同士の内緒話ですよ、ケンシロウくん」

「そ……………そうなのか。済まない」

…実は前世の私は、『攻めの反対語は？』と聞かれて迷わず『受け』と答えるタイプの
人種だった。

この世界には私の求める萌えがないと諦めていた時、たまたまシンにいつも通りのパ
ターンで小言を言い、何がスイッチだったか忘れたがいつもよりキレられて暴言を吐か
れた事があり、その腹いせにアイツ受けのBL小説をこっそり書いて溜飲を下げてたら
それが癖になった。

萌えがないなら作ればいいじゃない、というよくわからない天啓が降った一瞬だっ
た。

気がつけばノート一冊丸々使って7作目まで書いたあたりで、それをうっかりユリアちゃんに見られてしまい、結構なハードコアだったので絶対にドン退きされると思ったのに、

『続きが気になるからもつと読ませて欲しい』

と強請^{ねだ}られた衝撃は今も忘れられない。

南斗六星の最後の将にしてこの世界のヒロインを、私のうっかりのせいでほんのり腐らせてしまった事は、この世界における私の最大の、しかも取り返しのつかない失敗である。

閑話休題。

☆☆☆☆

「お疲れ様、シンちゃん。

…その様子だと、本当にこつてり絞られたみたいだね」

ユリアちゃんがケンシロウくんと一緒に帰った後、私が南斗の修練場に足を運ぶと、ちようどそこから出てきたばかりのシンと目があつた。

心なしか、さつき会った時よりも寝れたように見え、顔色も若干良くない。

さすがに心配になって側まで駆け寄ると、シンは少しだけ躊躇った後、徐ろに口を開いた。

「…そんな事より。おまえは知っていたのか？」

「……………何を？」

「ユリアが……………南斗正当血統の女だという事をだ」

ああ、それか。

ひよつとして師匠の説教の中に、ユリアちゃんに懸想している事も含まれていたのだろうか。

いずれは判る事だと思っていたし、それを知ったところでシンの気持ちは変わらないだろうと思っただから、せめてもう少し夢を見せてもいいかと、黙っていたのだが。

「…なれば、それは北斗との絆を結ぶ存在。

それが故に、南斗とは結ばれ得ぬと。

おまえは、その事を知っていたのか？」

その口調に、責めるようなニュアンスが混じる。

それにほんの少しムカついて、私は彼をまっすぐ睨み返しながら言った。

「逆に聞くけど、キミはあの方とその兄弟たちを、何者だと思っていたのかな？」

ただ南斗に庇護された孤児たちだとも？」

ユリアちゃんには実兄と異母兄がおり、どちらも稀有なる拳の才の持ち主だ。

生まれたのが南斗正当血統、つまり母系の家でなければ、どちらも立派な南斗の継承

者となったのであろうというくらい。

「…本来補佐に当たるべき【白鷺】が傍を離れたことが大きいのか【鳳凰】に若干キナ臭い動きがある上に、北斗の次期継承者がまだ決定していないので、公にはできない事実だけだね。

ユリア様が今の時点でケンシロウくと恋仲であるという事自体異例中の異例なんだけど、ユリア様はご自分の未来は見えないらしいから、それがあの方の未来視の能力故なのか、本当にただ好き合っているだけなのか、本人にすら判らない。

だから、上層部でも見守るしかないってわけ。

私としては前者であって欲しいけれど。

後者であれば、ケンシロウくん以外で決定してしまえば、ユリア様にとってお辛い事になるから」

もつとも私には前世で見たこの物語の知識があるから、そうはならない事を知っている。

そもそもほんの幼子だった頃に、なんの考えもなしに口にしたその知識の断片のせいで、私は今この場所にいるのだし。

…辺境の片田舎の小さな村に生まれた私が、まだほんの幼児の頃に南斗に引き取られたのは、うっかり口にした僅かな原作知識により、私こそが『そう』だと思われたから

だ。

何代か前の先祖に正当血統に生まれた男がひとり入っていた事が、その誤解に説得力を与えてしまったらしい。

何せ『本物』のユリアちゃんは、『母親の胎内に一切の感情と言葉を置き忘れてきた』と言われるくらい、何に対しても反応を示さない、人形のような少女だったので、その力を有していると、周囲に認識されるのが遅れたのだ。

後から『本物』が現れた事で私は本来なら用済みだったけど、だからといって放り出す訳にもいかず、偶然同い年でもあった事でいざとなれば身代わりにすべく、同じ教育を受けさせられて今に至る。

『本物』と同様、その正体は上層部以外には秘匿され、トウ姐さんを筆頭とする南斗の巫女の一人という扱いになっているが、実は私はユリアちゃんの「影」なのだ。

その事実は勿論、ユリアちゃん本人には知らされていない事だが。

「……そうか。」

「…おれは、とんだ道化だったというわけだ」

シンは自嘲するようにそう言って、哀しげな表情を浮かべて笑った。

その日を境にユリアちゃんへの嫌がらせ攻撃は終了したが、シンが彼女を見る瞳の奥に、どこか仄暗いものが混じっているのを、私は懸命に見ないふりをし続けた。

やがてシンは正式に南斗孤鷲拳の継承者に決定し、【紅鶴】の取りなしにより【鳳凰】がその活動を沈静化させて、北斗の継承者の選定が大詰めを迎えた、それから数年経った、ある日。

世界は、核の炎に包まれた。

後編

…この世界は、かつて私が生きてきた日本より文化的には遅れている（今いるここは比較的都会なのでまだましだが、私の生まれた村などは、前世の一、二世紀前の中国くらいの生活レベルだったはず）が、何故か防災や避難に関する意識だけは、あちらに比べてずっと高かった。

だから小さな村でも最低ひとつは避難シェルターが設置されており、この街には調べたら東西南北合わせて12基ものシェルターがあった。

だからこそこの世界の人類は、核戦争後も生き延びる事ができたのだろう。

もつとも、全てが同じ規格で作られているわけではないらしくその規模はまちまちであり、修練場から一番近い場所にあるそれは、規模的には比較的大きいものだが学校や孤児院も近くにある為、近隣住民や施設の職員、そして子供たちが一斉にそこに集まってしまうば、すぐに一杯になる事が事前の調査で分かっていた。

恐らく物語の中で、トキがケンシロウとユリアを導いて連れてきたのはここだったに違いない。

子供、やたらとたくさんいた筈だし。

3人はシエルターへたどり着いたものの、どう詰めても2人までしか入れないと言われてしまう。

そこから他に移動する時間的余裕もなく、トキは突き飛ばすようにして2人を中に入ると、自身は外からシエルターの扉を閉め、死の灰をその身に受ける事となるのだ。

なので、世界情勢がキナ臭い事になり始めた頃から、私とユリアちゃんは災害時の避難経路について何度もシミュレーションをしており、その必要が生じた場合には西地区側にあるそこではなく、幾らか遠いが収容人数が更に多い北地区側のシエルターで落ち合おうと、事前に話し合いがなされていた。

時々ケンシロウくんもそれに混じって聞いていたから、2人が実際のその時に忘れていなければ、たとえトキさんと一緒に避難してきたとしても、トキさん1人が弾き出される事態にはならない筈だった。

街にアラートが鳴り響き、人々が家族や恋人の手を取って、避難シエルターを目指して走る。

打ち合わせておいた北地区の方角に向かって走り出そうとした私は、程なく誰かに肩を掴んで止められた。

「お、こー」

…振り返ると、私より頭一つ半も高い視点から、金髪のイケメンが見下ろしている。

「シンちゃん!？」

「…この非常時においてすら、まともに名前も呼べんのか貴様は。」

まあいい、どこへ行くつもりだ」

ここ数年でコイツは随分身長が伸びたが、私はそういう体質なのか成長しても小柄で痩せつぼちのままほとんど変わらなかつた。

ちなみに清楚可憐な美少女だったユリアちゃんは安定の聖女系美女になり、身長もスタイルも追い越されてしまっている。

【影】として、体格差があまり出ないように同じものを食べさせられていた筈なのに、どうしてこんなに差がつくんだ。

まあ、そんな事は今はいい。

「…いや避難するに決まってるでしょ!!」

立ち止まってる暇なんかないから!

アンタも早く……」

「そっちは北側だ!

貴様の短い足で全速力で向かっても間に合うわけがなからう!おれと一緒に来い!!」

「失礼過ぎるわ!……って、えっ!？」

シンは私を荷物のように抱え上げると、そのまま何事もなく走り出した……西側へ。

ちよつと待て、まずい。

トキさんがユリアちゃん達と一緒にならいいが、そうでなく一人だった場合、やはりこつちに向かっている可能性が高い。

そうなると私たちが行けば、どうしたって一人あぶれる計算になり、あのひとの性格上、私たちを中に入れてやはり自分が出て行く事になりかねないのだ。

「ちよつと待って！そつちは駄目！」

「舌を噛みたくなければ黙っているろ!!」

説得を試みたもののシンの足は止まらず。

私たちは西地区のシエルターに無事避難を終えた。

…トキさんは来なかったようで、それだけは安心したが、ひと一人抱えて全力疾走しゼーゼーと息を乱したシンに、

「なんであんなに北側に固執した」

と鋭い目つきで問い詰められる事になった。

仕方なくユリアちゃんとの約束だったのだと正直に説明したら、

「…貴様が心配せずとも、ユリアはケンシロウを守るだろう」

と、少し苦しい表情で言われた。

そりゃそうだろうけど。

その後、『肩を貸せ』と私に凭れて目を閉じたシンが少し震えていたのを、私だけが知っていた。

……2週間後によくやくシエルターから出ることができ、その間食べる時も眠る時も何故か私を傍から離さなかったシンが止める手を振り切つて、北側のシエルターを目指した私は、大切な友人達と再会できたのと同時に、物語の強制力をひしひしと感じる事になる。

あれほど綿密に打ち合わせをした私が、いつまで待ってもあちらのシエルターに現れない事を心配したユリアちゃんのかわりに、トキさんが私を探しにシエルターを出て、死の灰を浴びてしまったのだという。

「気に病むことはない。これも運命だったのだ。

あなたが無事で本当に良かった」

そう言つて粗末な寝台の上で咳き込みながら言うトキさんの、こんな時にも変わらぬ穏やかな優しい微笑みに、私は涙を禁じ得なかった。

そうして、南斗の上層部と北斗の師父様の間で、満場一致で内定していたトキさんが伝承者決定レースから姿を消し、残り3人の候補者の中から、ほぼ消去法でケンシロウくんが、北斗神拳伝承者として正式に決定した。

予定調和の如くこうなった事を思えば、やはりここはケンシロウくんを主人公とする

世界という事なのかもしれない。

彼が伝承者にならないければ、物語が始まらないのだから。

その直後、北斗の師父様が病で急死されたとの報が伝えられ（実際にはラオウが手を下したと私は知っているが、それを誰かに伝える手段も、必要も私にはない）、ケンシロウさんとユリアちゃんは婚姻を正式に結ぶ為、ユリアちゃんの故郷の街へと旅立つ事になった。

その事を私に伝えに来た2人の表情には、そこに至るまでの経緯を思わせる翳は確かにあつたものの、それでもようやく結ばれる喜びもちゃんと現れていた。

「あなた達の幸せを守る為に、たくさんの想いが動いています。」

どこに行つても、それを忘れないで。

そしてケンシロウくん。

何があつても、ユリアちゃんを守り抜いてください」

「判っている。この命に代えても」

「命には代えないでください！」

あなたが生きてくれないければ、ユリアちゃんは幸せにはなれません!!」

「……マツリさんには敵わない」

そんな会話があつて、別れを済ませたその夜。

一度寢床に入ったものの、眠れずに外の空気を吸いに出ると、修練場の屋上に、2人の人影が佇んでいるのが見えた。

1人は、長い髪を風に靡かせた若い男。

もう1人は、仮面を被った男。

間違いない。

ケンシロウくんの3人の兄の1人、ジャギだ。

そうだ、こいつの存在があつたんだつた。

…末弟と侮っていたケンシロウに伝承者の座を奪われて、それを返上してこいと暴力をもつて脅したところ、返り討ちにあつた事でその憎しみを深めたジャギは、ケンシロウの恋人であるユリアに懸想するシンを唆して、そのユリアを奪わせる。

今はまさしくそのシンなのだろう。

このままいけば明日の朝早く旅立つ予定の2人の前にシンが現れ、ケンシロウくんに瀕死の重傷を負わせた挙句、ユリアちゃんを攫つて逃げる展開が待っている。

けど、ユリアちゃんの最終的な幸せの為に、たとえひと時ラオウには奪われても、シンにだけは渡すわけにいかない。

私はユリアちゃんを守る為に生きてきた。

その最後の仕事として、この略奪劇は、なんと少しでも阻止しなければ。

とはいえトキさんの例がある。

物語の強制力が、どこまで及ぶのかは判らない。

私が動いたところで無駄なのかもしれないが、気付いたからには動かねばならない。
…考えがまとまるまでの間、どれだけ呆けていたものか、気がつけば屋上の人影は居なくなっており、既に塔から出てきていたシンの背中が遠ざかるうとしている。

——止めなきや。

そう思つてその背に駆け寄り、声をかけ……ようとしたところで、後ろから伸びてきた誰かの手に、私は捕らえられ、口を塞がれた。

「よう、マツリ。

夜の散歩とは、なかなか洒落てるな。

ここで会えたのも何かの縁だ。

せつかくだから、おれに付き合えよ」

くぐもつた声は腹の立つ事に、前を歩くシンには届かない音量で、私の耳元に囁かれる。

故にその背中には止まる事なく遠ざかり、角を曲がつて見えなくなつた。

駄目、行かないで……こぼれ出ようとした言葉が、口を塞いだ手の中に消える。

「……よし、行つたな」

そう言つて背後の人物が、ようやく私の口を覆う手を離す。

自由になつた顔だけ上げて背後の男を見上げれば、不気味な仮面の下でぎよろりと動く目と、視線が絡んだ。

「…ジャギさんね。なんのつもりなの？」

「声で判つたか？」

…シンは、ケンシロウからユリアを奪いに行つたぞ？おまえを捨ててな。

ユリアに懸想してるのは知つてたが、ちよつと焚きつけただけで、こうも容易く動いてくれるとは」

仮面の下で、ジャギは擲揄うように喉の奥で笑う。

自分の策がハマつた事に、ご満悦なのだろう。

そんな、自分の手を汚さずにケンシロウくんへの意趣を返そうとする彼のやり口に、私は、嫌悪を覚えずにはいられなかつた。

…しかも、その手段にシンを使うなんて。

「アンタがけしかけたんでしよう、卑怯者！」

絶対にそんな事させないから!!」

「健気だねえ…そういう女も嫌いじゃねえ。

どうだ、シンのことは忘れて、おれの女になるつてのは？」

大人しくいうこと聞いてりや、ちよつとくらいなら贅沢させてやるぜ？」

言いながら、ジャギの手が私の薄い胸を弄ぐる。

その動きだけで吐き気がするくらい気持ち悪い。

「お断りです！」

どうせ大人しくいうこと聞いてたつて、いいだけ弄んで飽きたら売っ払う胆はらでしょう！！

その手から逃れようと身をよじらせながら、私はジャギの仮面の下の目を睨みつけた。

だが私のそんな小さな抵抗を、ジャギは鼻で笑う。

「女は、少しくらい馬鹿の方が幸せになれるもんだぜ？」

……まあ、しかし残念だ。

黙つて頷いてさえいれば、おれに飽きられるまでの間は、いい思いをさせてやったのにな」

「え？」

……次の瞬間、ジャギは声を張り上げて叫んだ。

「……この女は、お前らにくれてやる！」

言葉と同時に、突き飛ばされた私の身体が地面に転がる。

そして。

「ヒヤッハ——ッ!!!」

どこに隠れていたものか、唐突に数人の男が現れて、倒れた私を取り囲んだ。「せいぜいせいぜいつらに可愛がってもらうんだな。

あばよ、マツリ」

言いながら背を向け、めんどくさそうに手を振りながら、ジャギはシンが去つたのと反対側の方へと歩いていった。

数人の男達に押さえつけられ、身体を弄ぐられながら、バイクのエグゾーストが遠ざかっていくのを、漠然と耳にとらえていた。

…今、私はこの世界に自分を落とすとした何かの存在を、初めて恨んでいた。

…こんな思いをするくらいなら、生まれて来なければ良かった。

…会わなければ良かった。

…好きに、ならなければ、良かったのに。

この期に及んで、ようやく理解した。

ユリアちゃんの幸せの為、なんてとんだ詭弁だ。

確かにシンの狂愛は誰一人として幸せにしない。

それを望んだシン本人ですら。

だから阻止したかった。

けど、それだけじゃなかった。

私が、嫌だった。我慢できなかったのだ。

…シンが、ユリアちゃんを選ぶことが。

だって、私が一番近くにいた。

私が一番、彼を理解していた。

私が一番、彼のことを好きだったのだから。

一番卑怯なのは、私。

だとすれば、これは罰なのだろうか。

自分勝手な恋心だけで、物語を変えようとした、その罪の。

押さえつけられた手脚の痛みと、屈辱に涙が滲む。

そして私は無意識に、脳裏に浮かんだその男の名を呼んでいた。

「……………シン……………ッ……………!!!」

刹那。

「ぐぐぐ……………?!」

私にのしかかろうとしていた男の胸元から、4本の突起が突き出ていた。

一瞬の間があつて、そこから赤い血が吹き出し、私の服と顔を汚す。

その突起が引つ込んだかと思うと、男の身体が傾いで倒れ、その背後に、ここにいる筈のない男が右手を血に塗れさせて、鬼のような形相で立っていた。

「てつ、てめえ!?!」

私を押さえつけていた男が、何が起きたのか信じられないといった様子でそれに対峙し……

……そこから、地獄が展開された。

呆然としたまま、次に我に返った時には、自分の身体の周辺に血だまりと肉塊が散乱しており、目の前に立つ、返り血に身を染めた金色の長髪の男が、私を見下ろしながら、酷薄な笑みを浮かべていた。

「酷い顔だぞ。」

「こんなもんしか無いが、せめて顔を拭け」

「ぱさり、と胸元に何か落とされ、それが薄手のマフラーかストールのようなものだ

と気付く。

これで顔を拭けと言われて躊躇っていると、シンの手がそれを私の手から奪って、やや乱暴に顔を拭いた。

「まったく、世話の焼けることだ」

「……顔が汚れたのは誰のせいだと」

「……そうだな。だが、間に合っただろう？」

言われて、自分の身体を見下ろす。

押さえつけられていた手脚に若干の擦り傷と、服の胸元にやや乱れがあるものの、それ以上の被害はないようだ。

それでも思い出すと身が震え、涙が溢れそうになる。

それをぐつと堪えて目の前の男を見上げ、一言、口にした。

「……助けてくれて、ありがとう」

「なんだ、言えるんじゃないか。」

おまえの辞書に『ありがとう』と『ごめんなさい』は無いんだと思っていたぞ」

「どんな暴君よそれは」

……いつも通りのノリに安心した次の瞬間頭を掴まれ、顔が無理矢理、硬いものに押し付けられた。

それがシンの胸板だという事に、一瞬遅れて気がつく。
なんだこれ、どういう状況。

「……シンちゃん？あの…服、汚れるよ？」

顔は拭われたものの、髪や服にはまだ奴らの血が付いている筈だ。
だがそう訴えても、シンの腕は緩まなかった。

「このまま黙って聞け。」

…おれは、確かにユリアが好きだった。

ジャギに言われるまでもなく、ケンシロウがユリアを守れないのならば、おれが奪つてやろうと、本当につきさつきまで思っていた。

…だが、おまえが奪われると思った時、それに耐えられないと思うおれも、確かにいた。

……マツリ。

恐らくおれは長く、おまえと共に居すぎたのだ。

今更離れる事が、想像できなくなるほどに。

そしてそれは、おまえも同様なんじゃないか？」

そう言つてシンはようやく、胸から私を離れた。

と言つても、その手は私の両肩に置かれ、青い瞳は真っ直ぐに私を見据えている。

「シン……ちゃん……それは」

「おれは、おまえの事も好きなのだと思う。」

ユリアの事は『欲しい』と思うが、おまえの事は『必要』だと思う。

おまえが居なければ、きつとおれは駄目になる」

……それはちよつとだけ私も思う。だけど。

「……勝手な事を言っているのは判っている。」

だが、おれの我儘なんぞ、おまえにとつてはいつもの事だろう？

これからも、おれの側にいろ、マツリ。

おまえの事は、おれが守つてやる」

……心臓が、震えた。

初めて見る熱のこもつた瞳と、じわじわと詰められる互いの距離。だけど。

「……卑怯者」

「なに!？」

その目を睨みつけながら私が放つた言葉に、シンの形のいい眉が寄せられる。

「今、私が怖いめにあつてたのは知ってるよね？」

吊り橋効果つて知ってる？

怖いめにあつて助けられた直後に、その相手にそんな事言われて、冷静な判断が下せ

るわけないじゃん。

惚れてなくても、惚れたと勘違いしちゃう状況じゃん…そんなの、卑怯だよ…！」
それは本気にして縋り付いて、全てを受け入れたくなるくらい魅力的な言葉。

けど、私はユリアちゃんの身代わりだ。

誰にとつても、きつと彼にとつても。

そう思うと、胸が潰れそうなほど苦しくなるのを、確かに感じた。

だから、この気持ちは偽りだ。

きつと吊り橋効果なのだ。

…そう思えなければ、彼がそれに気がついた瞬間に私は壊れてしまう。

自分が一番卑怯なのは判っていて、八つ当たりのように言い放った言葉を、だが、シンは鼻で笑った。

「構わん。

勘違いしてるうちに、本当に惚れさせてやる」

グダグダな私の気持ちなどお構いなしにシンはそう言って、私の頬に手を触れる。

幼い頃は繋いだ事もある筈の、その手の大きさに、今更驚く。

そして、ある程度大きくなってからは許されなかった近い距離に、心臓が先ほどよりもうるさく跳ねた。

「…とはいえ、その必要もないかな。

おまえは元々、おれに惚れている筈だ」

「何を根拠に!!?」

だが続いた言葉にムカついて、またその青い目を睨みつける。

シンは今度はそれに動じる事なく、かつて見た事もなくらい優しく、私に微笑んでみせた。

「…名を、呼んだらう?」

一番、助けが必要な時に…他の誰でもなく、おれの名を」

…かあつ、と頬に血が集まるのを感じた。

確かにあの状況下なら、助けてくれるなら誰でも良かった筈だ。

けど、あの瞬間の私の脳裏には、シンの顔しか浮かばなかった。

そして、本当にシンが助けに来てくれたと判った時、その瞬間に死んでもいいとすら思ったのだ。

動揺のあまり動きの止まった私は、シンの次の行動を止められなかった。

シンの指先が私の前髪を払い、額に温かい感触が落ちてきて…それが彼の唇であると、理解した時に既にそれは離れていた。

気がつけば私の身体は、シンの細く見える腕に、軽々と抱き上げられていた。

「マツリ、おれを愛していると云ってみろ」

「むり」

反射的にそう答えるも、シンの余裕の表情は揺らがない。

「…おれはこう見えて、惚れた相手には尽くすタイプだぞ?」

「いや謝れ。これまでの行動をすべて振り返った上で、ユリアちゃんに土下座して謝れ」

「あれはあいつがあまりにも、おれに関心がなかったからだ。」

途中から泣かれて罵倒されるのも快感になってきたし、今思えばおまえに後から、心底呆れたような顔で小言を言われるのも割と…」

「へんたああい!!止まれえええ!!」

…半泣きになって叫ぶ私に、^{!!シ}変態は喉の奥でくつくつ笑った。

そうだった、今更だよ!

よく考えたらコイツ、嫌がられれば嫌がられるほどその方向に固執する上、はては好きな女の精巧な人形作つちやう程度には変態だった——っ!!

「…冗談だ、馬鹿」

…笑いながら、じたばた抵抗する手足をやんわり拘束され、さつき額に落ちていた温もりに唇を塞がれた時…私はこの若き荒鷲の爪に、完全に捕らえられたことを悟った。

その捕獲はあまりに甘美で、全て貪り尽くされるまで、私はその甘さに溺れきった。

「…考えたんだけど」

自室の狭い寝台の上でシンの胸板に頬を埋め、その体温を全身に直接感じながら、私は言葉を発する。

その私の癖のある髪の毛を、くるくると絡ませ、弄んでいたシンの指の動きが止まった。

「……………うん？」

「今から、私の名前はユリア」

「…何を言っている？」

あまりに唐突に言われたせいで、意味がわからなかったのだろう。

シンは明らかに怪訝な顔をして、私を抱く腕に力を込めた。

…心配しなくとも、どこにも行きません。

「いい？キミはジャギの目論見通り、ケンシロウくんからユリア様を奪って逃げたの。

そして、ユリア様を欲しているのはキミだけじゃない。

その中で、最も恐ろしいひとが誰か、キミもわかっている筈」

私が言うのと、シンはごくりと喉を鳴らし、その名を躊躇いつつ口にした。

「……………ヲオウ」

「正解。

ユリア様を守る為ならば五車星も動くから、ケンシロウくん自身の力と五車星がいれば、野生のヒヤツハーくらいからならば、十分にユリア様を守れる。

けれどラオウが動けば、今の彼らの力では絶対に勝てない」

：少し前までの私なら、いつそユリアちゃんはラオウに捕らえられた方がその身が安全だと思っていた。

今でもそれは変わらないが：それでも今の私にできる、最低限の抵抗はすべきだと思う。

ケンシロウがラオウと対等に戦える力をつけるまで、彼らには潜伏してもらわなければならぬ。

それまでできる限り長く、ラオウの目をこちらに引きつけておきたいのだ。

今度こそ本当に、ユリアちゃんの幸せの為に。

「野生のヒヤツハーの意味は判らんが……つまり、おまえがユリアの影武者になろうというのか!？」

「……私は、元々ユリア様の影だから。

ユリア様を守りきれなければ、自分をそこから解放できない気がして。

これは、私が、真の私を取り戻すための戦い。

それが終わったら、本当の私自身で、あなたの胸に飛び込むつもりだから、シン。

今は「ユリア」を連れて、どこまでも逃げて。

一生どこへでも、ついていくから」

私がそう言つて、シンの青い瞳を見つめると、彼は心底『しようのないやつだ』とでも言いたげな、けど明らかに愛おしげな目を私に向けて、言つた。

「……………勿論だ。【ユリア】」

☆☆☆

数年後。

シンと私が作り上げたサザンクロスという街で、攻め込んできた拳王軍の前に、私とシンは立ちはだかつた。

私をユリアと呼ぶシンに、怪訝な表情を隠さずに、ラオウが予想した通りの質問をする。

「ユリアはどこにいる」と。

私は自分を抱きしめるシンに『任せて』と触れるだけの口づけをしてから、馬上のラオウを見上げて、彼にだけ聞こえるトーンで言つた。

「…御覧の通り、私はユリア様ではありません。」

ユリア様は、シンに連れられての旅の途中で、病を得て儂くなられました。シンはその事実を受け入れられず、私をユリア様と思い込んでいるのです。

……夢は、いつの日にか醒めましょう。

けれど出来るだけ長く、彼のそばで、夢を見続けさせてあげたいのです。

どうかこのままお引きになり、私と彼が共に静かに暮らすことを、お許しただけな
いでしょうか？」

と。

……ユリアちゃんが亡くなったと聞いて、さすがのラオウもショックを受けたらしい。

だからこそ、涙まで浮かべた私のその嘘八百でも、恐怖の世紀末霸王に届いたのだと
思う。

「……ユリアでなくば、奪う意味もない。

おれの覇業の邪魔にならぬならば、勝手にするがよい」

……そう言つて、自軍を率いて去つていく拳王の背を見送つた時、急に膝の力が抜け、シ
ンに支えられて顔を見合わせると、途端に渴いた笑いがこみ上げた。

私の【影】としての仕事はここで終わった。

これからはシンのそばで、本当の私として生きていく。

……救世主は、多分現れない。

故に未来がどうなるかは、誰にもわからない。
けど、愛する人の隣で生きていける私は、今はこれ以上なく幸せだ。

うぬの名はく或る女官の拳王様観察記（愛ある脳内ツツ

コミ）

1

…よくあるネタですがわたくし、異世界転生していたらしいのです。

ええ、『北斗の拳』という漫画の世界ですわ。

わたくしの前世だった男子高校生が生きていた時には、既に30年も前の作品だったのですが、友達に薦められて読んだ最初の1巻で厨二心ハクがいい感じに刺激されて、初めてのバイト代を使って文庫版で全巻揃えましたの。ええ、Amazonで。

と申しましても、最後までは読み終えられなかつたのですけど…。

転生、という言葉でおわかりの通り、その世界のわたくしは若くして死んだのです。

寝坊して、慌てて走って登校していたら、信号無視のトラックに撥ねられて衝撃と共に宙を舞い、次に硬いアスファルトに頭部を打ちつけられた瞬間は、思い出すと寒気がいたします。

あ、ちなみに前世が男性だったからといって、その記憶が蘇っていきなり男性の意識

に塗り変わる、なんて事はありませんわ。当然でしょう？

確かに前世の記憶は戻りましたが、この肉体で生まれた時から女として20年以上生きてきて、今のわたくしにはこの人生こそが現実。

現世の肉体で体験していない記憶なんて、眠っている間にみる夢のようなものですよ。

ああ、失礼。お話を戻しましょうか。

わたくし、元々は辺境にある大きな街の、割と裕福な商家の出身でしたの。

その頃のわたくしときたら、お恥ずかしい話ですが甘やかされた一人娘で、まるで自分がこの世で一番美しい女であるとばかりに調子に乗っておりました。

…ええまあ、お察しですわね。

あの核の炎が世界を包み込んだあの日、わたくしの世界も一変しました。

暴力が支配し、力無き者を蹂躪する、それまでの常識が一切通用しない世界。

お金なんて『ケツを拭く紙にもならねえ』ただの四角い紙束となり、ちよつと見てくれのいいだけの甘やかされた小娘など、こうなればなんの役にも立ちません。

それでもわたくしにとって運が良かった事は、ある程度の資源があつたわたくしの住む街が早々に拳王軍の支配下となった事で、有象無象のヒヤツハー集団……もとい無頼の者たちに蹂躪されずに済んだ事と、忠誠を示すための沢山の貢物と共に、その地区で

一番美人だったわたくしが、拳王様に献上された事です。

……ええ、地区一番の美人とか言われても、わたくしなんぞ町内会主催のミスコンレベルだったということをそこで早々に思い知らされ、その時点でまだわずかに残っていた鼻っ柱が、ぼつきり折られたどころか完全に倒壊いたしましたとも。

わたくしより先にここに来て、既に拳王様や幹部の方々のお世話係の任をいただいていた女官さん全員、わたくしの目から見れば『天使、いや女神か！ここは天上界か！』つてくらの美人さん揃いでしたからね。

聞けばわたくし同様、制圧した街から献上された、その街で評判の美女達だったようですが、都会の女性たちは辺境育ちのわたくしなんかよりも、ずっと垢抜けておりましたわ。

案の定、担当を振り分けた兵士さんが、わたくしをひと目見た途端、ちよつとがっかりしたような顔で、居城の管理というか要するに下働きの、掃除やらなんやら雑務を担当する部署に、わたくしを案内してくださいました……ちよつと！

配属部署はともかく『街一番の美人と聞いてたけど、辺境の街の女のレベルなんてこんなもんか』とか呟いたの聞こえてましてよ!!

むしろ権力で集められた美女に目が慣れすぎではありませんこと!?

……思い出すと今もムカツ腹が立ってきませんがそれはさておき滅べ。

与えられた仕事を日々こなして、かつてはツヤツヤだった爪や、ささくれのひとつすら無かった手指が、見る影もなく荒れてきた頃、他の下働きの子たちと一緒に兵士さんの服を繕っていたわたくしは、見るともなしに見た作業部屋の窓から、遠目に見えた拳王様の騎馬姿に、忘れていた前世を思い出したのです。

そして、その瞬間まで嘆いていた自身の境遇に、危うく感謝しそうになりました。

——ちよ！本物のラオウじゃん!!

：そう。厨^{ハイト}二心の持ち主だった前世のわたくしは、『北斗の拳』の中でも『ラオウ』が大好きだったのです。

その日から騎馬で居城を出て行く、かの御方の姿を、遠くから見送るのがわたくしの、毎日の習慣となりました。

そんなことをしているわたくしに同僚のマユが、

「え？ちよつとりア!？」

アンタまさか拳王様に懸想してるの!?!恐くない?」

と心配そうに声をかけてきましたが、わたくしの感情はそういうものではありません。

推しというのは、見ているだけで日々の活力となります。

彼女にはその後『推し』という概念をすっかり叩き込んでおきまして、今マユは拳王軍の幹部のひとりであるバルガ將軍に夢中です。

いや趣味渋すぎるでしょう。

ちなみに『いや待って無理無理貴い心臓痛い好きすぎて死ぬ』ってタイプ。

☆☆☆

そんなわたくしに転機が訪れたのは、ここで働き始めて1年も経った、2週に一度だけ許されたお洗濯の日のことでした。

何せこの世界、水はとても貴重です。

拳王の居城には大きな井戸があり、一軍の喉を潤し煮炊きができる程度には豊かなのですが、それでも水をぎぶぎぶ使い捨てる洗濯という行為は、確実に贅沢の範囲なのです。

ぶつちやけ水飲まなきや生きられないけど、服くらい汚れてても死にませんし。

ですがやはり、洗って干したものを身につけるのは気持ちがよく、この日ばかりは下働きだけではなく兵士さんたちも、手の空いている方は手伝いに来てくださいます。

拳王軍も、地方に散らばる末端の組織などはいわゆる三下の集まりヒヤッハーですが、直属の正規兵は規律がしっかりしている為、わたくし達下働きの娘たちに悪さを仕掛けるような方はいらっしやいませんの。

むしろ皆さんとても御親切ですわ。

…どちらかというとな官さん達が……ええ、御自分に自信のある方々が多いせいかな、

あわよくば拳王様の御寵愛を賜ろうと考える数人が互いに牽制し合っており、そこに他の女官さんが取り巻きで着くみたいになつて、派閥みたいなものが出来上がりつつありますので、正直あの辺は、あまり空気がよろしくありません。

まあ、拳王様は見た目も性格も恐ろしい方ですが、ほぼこの時代最強と言つて良い御方です。

その方選ばれた女は、望むもの全てを手にできるでしょう。

：今その席が空いているのは、ただお一人の為だけなのでしようけれど、それを知るのは拳王様御本人のみですし。

まあ、また話が逸れてしまいましたわ。

ええと、そうそう。お洗濯の日の事ですわね。

あの日は朝からわたくし達下働きは、沢山の汚れた服を相手に大わらわでした。

とにかく量が多いので、洗ひ水はすぐに真つ黒になつてしまい、何回かに一度交代で、洗ひ桶の水を取り替える為、井戸の水を汲みにいきます。

それがわたくしの番になり、両手に水桶を2つぶら下げて戻つたわたくしにマユが声をかけてきました。

「ねえリア。アヤ見なかつた？」

結構前に水汲みに行つた筈なんだけど、まだ戻つてこないのよ。」

アヤというのは最近下働きに入ってきた子で、なんでも既に親は亡く、2人の弟と共に聖帝軍の末端兵士に捕まりそうになっていたところを、たまたま通りかかったリユウが將軍に助けられて連れてこられたそうで、その弟達は少し離れたところで、女官さん達の制服を踏み洗っているようです。

：なんか『このやろう』『化粧オバケ』『くそババア』とか聞こえるのは気のせいでしょうか。

ひよつとしたら持ち主の女官さんに、意地悪でも言われたのかもしれませんが。

子供は正直ですから気をつけた方がいいです。

「だから、ひとつでいいって言ったのに。」

あの子細くてちっこいし、この仕事まだ慣れてないから、大丈夫と自分では言ったけど、やっぱり水桶ふたつは辛かったのかも。

ここはあたしがやつとくからリア、あんたもう一回行って、運ぶの手伝ってあげてくれない？」

そう頼まれて井戸のところまで戻ると、黒い巨大な生き物の姿が、わたくしの目に入ってきました。

それはまさしく拳王様の愛馬・黒王号です。

よく見ればそのそばに、拳王様御自身もいらっしやるではありませんか。

まあまあ、相変わらざるの丈夫ますらお振りですこと。

今日もわたくしの推しが貴いですわ。

「小娘が！貴様、何ということをしてくれるのだ!!」

「も、申し訳ごいません……!!」

そしてそのそばには怒鳴り声を上げる小男がおり、その足元の濡れた地面に、じかに跪く少女がどうやらアヤのようです。

小男は厩番のコウケツという男でしょう。

幹部の方々には媚を売るくせに下働きの者にはやけに尊大なので、同僚や先輩のお姉さん方（下は20代後半、上は50代半ばまで）の間では、女官さん達以上に嫌われておりますわ。

…それにしてもこれはどういう状況なのでしょう。

水桶が転がっているところを見ると、濡れた地面は汲んだ水桶を、転んだか何かでひっくり返してしまっただけでしょうが、とにもかくにもそのままにしておかず、わたくしはアヤの側まで寄ると、その肩に手を置きました。

アヤは一瞬、ビクツと肩を震わせました。

「リアさん……!」

ですが、触れた手がわたくしのものだという事がわかると、アヤは泣きながら、わた

くしにしがみついできました。

「わたし、拳王様の足元で躓いて転んでしまつて、おみ足に泥水を……!!」
「まずは落ち着きなさい。」

貴人の御前で、所作を乱すものではありませんわ」

濡れた地面に座り込んでいた為、アヤの服も手足も泥だらけですし、それにしがみつかれたわたくしまで、同じことになつてしまつています。

今日がお洗濯の日で良かったです。

もつともそうでなければ、そもそもこんな事にはなつていないのでしようけれど。

「……拳王様。」

この度は大変な御無礼を致しまして、申し訳ございません。

本来ならばこの場にて御沙汰を待つところではございますが、このようにお見苦しい姿でお言葉をいただくのも不敬と存じます。

後ほど改めて、侍従長と共に伺い致しますので、ひとたびこの者を下げる事をお許しく下さい」

「……不要。この程度、すぐに乾く。」

このラオウ、女子供の些細な不手際などに、いちいち立てるほどの小さな腹など持ち合わせぬわ。去ね」

…初めて自分にかげられた推しのお言葉は、意識すれば『貴様等アリが靴に嘯み付いたところで気にもならん』というものでした。

「寛大なる御言葉、感謝いたします。御前失礼を」

それでも、『気にしない』という言質が取れた事を幸い、わたくしは早々にこの場を辞すべく、アヤを立ち上げらせます。

「リアさあん！ぐすつ、えぐうつ…」

「落ち着きなさいと言っているでしょう。」

戻って着替えをしたら、お洗濯の続きですわよ。

まだまだたくさん残っているのですからね」

彼女を引っ張って水桶を拾い、ついでにちらりと拳王様を盗み見ると、何やら驚いた様なお顔で、こちらを見つめております…え？

「ああつ、ラオウ様！お靴が汚れております!!」

と、その時コウケツが、さも今気がついたとも言うように、拳王様に駆け寄りました。

その足元に縋り付くようにして、泥のはねたブーツを、手にした布で拭きます。拳王様は特に止めるでもなく、されるがままコウケツを見下ろしておりました。

「このような端女にお靴を汚され、さぞご不快だった事でしょう。」

さあ、きれいになりました！

私は馬係のコウケツと申します、拳王様」

ひとの失敗を踏み台にして拳王様に自分を売り込もうとするこの男は、見た目よりも野心家であるようです。

けど、魂胆があまりにも見え透いていますわ。

「……何故、おれに媚を売る。

おれの歓心を買って、出世でもしたいのか!？」

そして、はたから見てもバレバレな魂胆が、拳王本人に気付かれないはずもなく。

御機嫌取りをしようとしたその行動は、却って拳王様の怒りを買う結果になったようです。

「媚など男には不要！

このラオウに必要なものは戦士だ!!」

拳王様はコウケツの顎を無造作に掴む（大きさの対比的に、つまむと言った方が近いかもしれません）と、そのまま掴み上げて、苛立ったように言いました。

「下衆なドブネズミめ!!二度とおれの前に顔を見せるな!!」

次の瞬間、手を離されたコウケツは、一度べしつと地面に叩きつけられました。さほどのダメージもなかったようで、情けない悲鳴をあげて、素早くその場から逃げ出し

ていきました。

……うん。何という理不尽。

怒りのスイツチが判り辛すぎますわ。

コウケツは拳王軍での出世を望んでいたようですが、わたくしだったら絶対に御免です。

こんなひとの側に仕えていたら命がいくつあつても足りません。

機嫌を損ねる事に最大注意を払つてるうちに多分過労死フラグ立ちます。

推しは遠くから愛でるもの。うん名言ですわね！

「待て女……名をなんと言つた？」

若干現実逃避をしながら、見なかつた事にしてその場を去ろうとする背に、何故か声がかけられました。

幻聴と思いたかつたのですが、ギギギ、と音がしそうなぎこちない動きで振り返ると、拳王様は間違いなくこちらを向いております。

女……この場合、ここにはそれに相当する者が2人おりますが、拳王様が仰つているのは、さて、どつちでしょう。

ふと隣を見れば、アヤが今にも泣きそうな顔で、生まれたての仔馬かつてくらい震えております。

「……あとから来た方だ」

わたくしの心の声に応じたかのようなタイミングで、拳王様が付け加えました。
こうなると、問われて答えないわけには参りません。

「……………リアと申します、拳王様」

「リア……………か。うぬは今日より、おれの専属だ。」

おれの身の回りの事を賄うが良い。」

「……………はっ。」

理解不能な言語を聞いたような気がして、わたくしは間拔けな声を発する事しかできませんでした。

「さっきのドブネズミほどあからさまではないが、おれに媚びようとする女どもには、い
い加減うんざりしていたところだ。」

うぬはおれを前にして、へりくだ遜りはしても、媚を売ろうとはしなかった。

何より、おれを恐れもせず、堂々とした態度でこの場を収めようとした。

これほど胆はぢの据わった女の方が、おれの側仕えには都合がよからう」

いや今、都合いいとか言わなかったかこのオッサン!!

……………失礼いたしました。

……………けど多分というか絶対に、今言った理由なんて後付けでしょう。

拳王様が最初に気になったのは、恐らくわたくしのこの名前ですわ。

拳王様にとっては、意中の女性の名前の一字抜きですものね。

アタマントコちよつと足りない：ってやかましいわ。

あら、またまた失礼いたしましたホホホ。

そんなわけで拳王様の独断により、その日よりわたくしは下働きから、いきなり拳王様付きの女官に格上げになったのでした。

2

この拳王軍の居城に於いて女官という仕事は、拳王様や幹部たちの衣食の世話をする為の存在です。

着替えや食事の配膳、ぶつちやけ毒味係なんて仕事もあるわけですが、それらの業務は基本交代制で、割とランダムな組み合わせの2人ひと組で回すシステムを採用しているようです。原則では。

ですが。

わたくしは、かの御方のお世話を今、ひとりですべて任せております。

『今日からこのリアをおれの専属として側仕えに置く。』

他の女官は一切おれに近付けるな。鬱陶しい』

という謎の命令によって、です。

そんな拳王様の突然な気紛れで、下働きから専属の女官となったわたくしですが、慣れてしまえば拳王様のお世話自体は、それほど大変ではございませんでした。

拳王様のわたくしへの起用に、女除け以上の意味があったわけではなく、なので普段の着替えなどは持っていけば御自分でなさいますし、入浴もバスタブとお湯の用意さえ整

えておけば後は下がらせてくださいますので。

…この点は安心いたしました。

身体を洗えなどと言われたら、刺激の強さに卒倒する自信がございませんもの。

漫画でのシンの登場時、入浴後の身体を半裸の美女たちに、抱きつかれるようにして拭かれている場面があり、女官とはそういうことまでしななければいけないのかと、内心ヒヤヒヤしておりましたし。

そういうのが必要ならば他にもっと適任の人材がわんさかおりましてよ？

ええもう、前世の男子高校生だった頃であれば、匂いだけで勃起したくらいスタイル抜群の美女が、ここにはたくさんおりますのでね。

あと女官の制服として支給されている服は、何故か肩やデコルテなど露出度が高い上に布地も薄いのです。

わたくしには割と標準的なサイズ感ですが、他の女官さん達が着て、どの部分とは申し上げませんが薄布を暴力的なまでに押し上げている光景は、さぞかし男性の目を楽しませているものと思えますわ。滅べ。

それでも拳王様はそもそも初恋拗らせた一途な方ですから、心の奥に棲まわせるただおひとりへの想いを大切にされていらっしやるのでしよう。

以前から薄物を纏った美女がアピールしてきても、プライベートな部分には踏み込ま

せなかつたわけで、専属としてスカウトしたわたくしに対しても、特に距離感は変わらないというわけですわ。

なので、拳王様のお側での仕事は、先ほど申し上げた通り大変ではないのです。

……ただ、わたくし的には非常に心臓によろしくないのですけれど。

推しは遠くから愛でるもの。

過剰摂取は、身体には良くないのです。

状況によっては、生命の危険すらありますのよ。

ほら、よく言いますでしょう？

『仰げば尊死』って。

・
・
・

「またうぬはろくでもない事でも考えているようだな」

と、低く押し殺した声に、どこか面白そうな響きをもつて、隣から声がかけられます。

反射的にその声の方向を見遣ると、出撃前の武装を整える為、兵士の皆さんが介助す

るに身体を任せて椅子に座っている、拳王様と目が合いました。

……ちなみにわたくしはと申しますと、この拳王様の傍に立つて、武装が全て整った後、

最後に頭を飾る兜を、隣ですつと持たされております……ええ、これがメツチャ重たいん

ですけどね！

「…本当に、肝の太い女よ。」

並の女であれば、そのようにおれを見返す事などできはすまい。

…まあ、斯様な女でなくば、あの鬱陶しい女官スズメどもを、3日で掌握するなど叶わぬか。うぬを側に置いたのは、暇さえあればすり寄って来ようとするあやつらを寄せぬ事のみで、他に何も期待してはおらなんだが、なかなかどうして、思わぬ拾い物であつたわ」

「……恐縮にございます」

いつも通りの悪そうな顔で、何故かニヤリと微笑みながらそう声をかけてくる拳王様に、わたくしは慌ててこうべを垂れます。

…けど、掌握したとか些か人間が悪いですわ。

それこそ最初はこの大抜擢とも呼べる人事に対して、不満たらたらのおっぱいの森…もとい女官さん達に取り囲まれて脅しをかけられたりもしましたけれど、誠心誠意のお話し合いの結果、皆さんが仲良くなれただけでございます。

その内容が休憩時間を使つての、3日にわたる『推し』と『萌え』の概念の説明会であつたとしても。

『…本当は私、拳王様よりもリユウガ様の方が好みなんです』

その説明会の後、割と中心人物的な一人の女官さんが、頬を赤らめてそう口にして、それから皆さんが次々に『実は…』『私も…』と、修学旅行の夜の大告白大会みたいなノリ

になり。

互いの『推し』を語る事により、皆さま今までよりも打ち解けてお話ができるようになったようで、それまで対立しあつてギスギスしていた空気が嘘のように、今では女官同士、仲良く仕事ができいておりますわ。

ちなみに女官さん達の一番人気はリユウガ様で、二番手はソウガ様のようです。

尚、こちらには渋好みのお嬢さんはいらつしやらなかつたようで、バルガ様やザク様のお名前は上がりませんでした。

とにかく職場の雰囲気は和やかなのはいいことですわ。

職場環境の改善にわたくしが一役買えたのだとしたら、光栄なことと存じます。

…けど、昨日の休憩時間に女官詰所に戻つたら一部の方々が『ザクソウ』?とか『リユウバル』?とかの暗号を使って、顔を赤らめながら話をしていて、声をかけたら何やら慌てたように話をやめて、取り繕うような笑顔で対応されたので、まだどこか距離を置かれている気はいたしますが。

…などと考えているうちに拳王様の武装が整つたようで、視界の端に黒王号が引かれてくる姿が見え、拳王様が立ち上がりました。

黒王号に向かつて歩を進める拳王様に従つて、重たい兜を手にしたまま、わたくしも数歩後ろをついていきます。

…こうして見ると確かに背はお高いのですが、物語ではとんでもない巨人として描かれていた筈の拳王様の身長は、わたくしの見る限り恐らく2メートル強くらいです。

多分ですがすぐ大きく見える時は、闘気の質量が可視する状態にまでなっており、それにより実際よりも身体が大きく見える的な、オーラジャヤアント大豪院○鬼現象でも起きていますのでしよう。

数歩で黒王号の傍に立った拳王様は、その倍の歩数をかけて傍まで寄ったわたくしの方に手を伸ばされ、わたくしの手から兜を受け取ってくださいました。

…この無駄とも言える一連の流れは、わたくしにはさっぱり理解できませんが、わたくしが一応は『拳王様を選んだ女』であるが故に、必要な流れなのだそうです。

そもそもこの世界の男尊女卑著しい感覚によれば、力ある男にとつては、女性も財産のひとつらしく、女性の存在は力を誇示する手段になり得るものであるようです。

確かに物語では主人公ケンシロウの最初の強敵ともであったシンや、短い時間でケンシロウと友情を育んだレイの最後の強敵ともとなったユダも、心の奥に思う相手を棲まわせているにもかかわらず、自分の居城で複数の女性を侍らせていましたものね。

また、軍をより強大にしていく中で、状況によつては武勲を立てた兵などに、女たちは下賜される可能性もあるわけで。

現時点で『拳王様のお手付き』という認識を与えて、全軍にわたくしの顔を買ってお

くことで、下賜の必要が生じた時に、まだ『お手付き』のままであればわたくしは選ばれないし、既に手放された状況であれば、『お手付き』だったという過去がわたくしに付加価値を与えて、より高価な褒賞とする事ができるといわけです。

……とんだ風評被害ですけどね！

手はついとらんわ失礼な!!

ああ、よりにもよってこの世界で、何故わたくしは女などに生まれてきてしまったのでしょうか。

……いえ止みましょう。言っても仕方がありません。

それにこの世界でもし男に生まれていたら、違う意味で今よりもっと、惨めな気持ちになるに決まっていますわ。

強くなければ純愛すら貰えないこんな世の中じゃ。

強い男の庇護下に、早い段階で入ることができたわたくしは幸運なのです。

(そんな中で、聖帝軍の子供狩りの噂を聞いて、聖帝サウザーはどうやらお稚児趣味らしいと、こちらの兵士が軽口を叩いているのを聞いたことがあります。いや、実際には子供たちは労働力として集めているだけで、サウザーの趣味嗜好の話ではないのですけれども。ここで本人が耳にすることは絶対にないにしろ、心臓に悪いんでやめてもらっていいですか)

…ようやく重たいものが手から離れ、空っぽになった手に何故か空虚さを覚えつつ、拳王様を見上げたわたくしの口から、次には考えるよりも先に、言葉がこぼれ出ておりました。

「…御武運を」

…それを聞いた拳王様は、少しだけ目を睥きました。

それから口角を笑みの形に吊り上げ、馬鹿にしたようにフンと鼻を鳴らします。

「…なにに祈るつもりだ。

おれは神に戦いを挑んでおる身。

祈りなど捧げようがどこにも届きはせぬわ」

その微笑みがどこか優しげに映ったわたくしの目は、相当この状況に毒されていたに違いありません。

「だが、リア。うぬの望みはおれが叶えてやろう。

武運は神ではなくこのラオウに祈るがいい」

更にはありえない幻聴まで聞こえてまいりました。

驚いてわたくしが顔を上げると、纏ったマントがぼさりと広がり、拳王様の姿が一瞬、それに覆い隠されました。

次の瞬間には黒王号に跨っていた拳王様が出撃の合図を出すと、拳王軍の兵士たちが

関の声で応え、わたくしは戦いに出ていく男たちの後ろ姿を、見えなくなるまで見送っております。

……その日。

戦闘員の大半が辺境の制圧に向かった拳王軍の居城は野盗集団の襲撃を受け、待機組の兵士と非戦闘員が協力して、一応は撃退したものの、生き残って撤退したならず者たちに数名の女たちが拐われました。

……今、わたくしは。

周囲からすすり泣きの声が聞こえる中、トラックの荷台に乗せられています。

はい、拐われちゃいました。てへ。

・ ・ ・ ・ ・

『てへ』じゃねええ——ッ!!!

なんだこの絶体絶命の危機!!

「さすが拳王軍。いい女を揃えてやがったな」

「ああ。もつと連れてきたかったが、さすがにこれくらいが限界か。

奴らここ近年で、無駄に規模だけは大きくなってきたからな。

根こそぎ奪ったらさすがに睨まれる」

「なあに、他から拐ってきた分も併せて、これだけ居りやあ充分だろ。

GORANの連中なら、纏めていい値で買ってくれるだろうぜ。

特に拳王の城から奪ってきた女たちなら、一人でも最低、食料2カ月分にはなるさ」

どうやら一時休憩となるらしく車の揺れが止まって、外から聞こえるならず者達の会話を耳をすませますと、何やら不穏なやりとりが聞こえてまいりました。

ゴランというと、原作序盤の時点で主人公のケンシロウに倒された、もと軍隊のカルト暴力集団ではなかったでしょうか。

彼らが壊滅していないということは、今は時系列的には序盤か、或いは原作開始前の可能性もあります。

そして、どうやらわたくし達はそこに売られる運命のようです。

救いは期待できそうにないでしょう。

残っていた兵士の皆さんが必死に戦ってくださいましたお陰で皆の被害は最小限。

彼らの言う通り、女数人奪われた程度、拳王様にとつては痛くも痒くもないでしょうから。はは。

……とにもかくにも、美女だろうが子供だろうがならず者だろうが、生きている以上睡眠と飲食、更には排泄の必要が生じます。

ここで休憩を決めたならず者達は、わたくし達にも僅かな食料と水を与えました。

そして屈辱のトイレタイム（と言ってもそれに相当する施設があるわけではないので、ぶつちやけ野に放つしかありませんが）はと申しますと、2人ひと組順番で檻から出されて、片手同士を結びあわされ、監視の目から互いの身体を隠して、なんとかそれを行なっているわけです。

「……絶対に見えないから、早く済ませてくれ」

……わたくしと手首を繋がれた、年の頃13、4歳ほどの少年は、そう言って精一杯、首をあさつての方に向けています。

彼は一人で旅をしていて、たまたまたどり着いた街で、若い女と間違われて拐われたそうです。

子供らしいふつくらとした頬をした可愛らしい顔な上に、癖の強い長めの黒髪はつや

やかで、まだ出来上がらない細身の身体つきの彼は、確かに黙っていれば女性に見えるということもありません。

男たちもよく見もせず、他の女の子たちと一緒に捕まえて、まとめて檻に放り込んだのでしょね。

それに、先に捕まっていた女性の一人が気がついて、男の子だとバレるとその場で殺されるからと、咄嗟に自分が身につけていたシヨールを被せてくれたのだそうです。

その方はうちの居城を襲撃する前に立ち寄った町で、物持ちの男に是非にと請われて買われたそうで、わたくしどもが捕まった時には既に、この車には乗っていないかつたそうです。

「いえ、あなたはここでお逃げなさい。

わたくしが、必ず見張りを食い止めますわ」

言つて、見張りの目からは少年の身体で隠される角度で、手首を繋がれている紐を解ほどこうと試みます。

「なに!？」

「…大きな声を出さないで。

このまま目的地に着いてしまったらもう、あなたが男性である事を隠し通す事は不可能でしょう。

そのシヨールの方が仰つていた通り、露見すれば殺されるだけです」

ひよつとしたらそういう嗜好の男に宛てがわれれば、命を奪われる事なく済むかも知れませんが、どちらにしろろくな事にはなりません。

まあそれは言わなくてもいい事でしょう。

わたくし一人のしかも片手ではなかなか結び目が解ほどけず、彼にも紐の端を摘んでもらいながら話を続けると、少年は困つたように首を横に振りました。

「で、でもそんな事したら…あんたが」

「あの男たちは、わたくし達を商品として見ています。

あなた一人を逃がす手伝いをしたところで、女であるわたくしはきつと殺されはしません」

多分、見せしめとして相当酷い目にはあわされるでしょうが…それも口には出さないことにいたします。

「…まあ心配であれば落ち延びた先で、わたくしの無事を神にでも祈つていてくださいませ」

そんな本心を隠して、少し冗談めかして笑つてみせましたが、わたくしのその言葉に、少年は唐突に怒りの感情に顔を歪めました。

「神など…祈りなどなんの救いにもならぬ！」

ましてオレは神に復讐する為に生きているのだ」

…すぐく厨二臭い台詞はさておき、密談の最中に声を荒げるのやめてもらっていいでしょうか。

とりあえず、これがわたくしでなければ少年のこの豹変に、ビクツとくらいはしたかもしれませんが、わたくしは半日前まで、もつと恐ろしい人を間近でお世話していたのです。

子供の癩癩程度にビビる細かい神経は持ち合わせておりません。

「…まあ、奇遇ですこと。」

わたくしの主人も似たような事を仰いましてよ」

「えっ?」

「自分は神に戦いを挑む身ゆえ、祈りは神には届かないのですって。」

戦いに向かう前に武運を祈る言葉を口にしたら、神ではなくおれに祈れと笑っていらつしやいましたわ」

最後に別れた時に見た、こちらを馬鹿にしたような凄味のある笑みが思い出され、胸がつくと痛みました。

…この後わたくしは他の女性達への見せしめの為、恐らくはGORANに売られる前に、あの男たちの慰みものにされるのでしよう。

工口同人みたいに。工口同人みたいに。

今ならば、拳王様に迫っていた女官さん達の気持ち判る気がします。

彼女らも、どうせ愛もなく奪われるのであれば、己が知りうる最も強い男に……と願った筈です。

極限状態における、それは女という生き物の本能ですもの。

女が自由に生きられないこの世界、今となつては叶わぬ望みですが、せめて最初だけはこれと決めた男に抱かれておきたかつたものですわ。

そう。もしも、わたくしが選べるのならば……。

覚えず艶めいた溜め息が、状況を無視して出かかった時、

「……なんか、凄い人だな。あんたの旦那さん」

「はい?」

と、なんか変な事を言い出した少年の大きな目が、わたくしをまじまじと見つめていてる事に気がつきました。

わたくしは今、拳王様の話をしていたつもりでしたが、旦那さんって誰のことでしょう。

ですがそうこうしているうちになんとか結び目が緩み、わたくしと彼の両手が離れま

「さあ、お行きなさい！」

「……必ず助けに戻る」

「不要です。」

それよりも、神に挑むならばまずは生きる事ですわ。

強くおなりなさい、若き天そらへの叛逆者」

あのひとのように……と、心で呟いた言葉は無視しましょう。

「おお、い、随分時間がかかつてるなあ？」

出ねえんなら手伝ってやろうかあ？」

そこに下卑た声を上げながら、見張りの男が近寄ってきたところで、少年の背中を押したと同時に、

「きゃああああ——ツ!!!」

わたくしは悲鳴を上げながら、その男の腕の中に倒れ込みました。

男は腕の中のわたくしと、駆け出す少年の背中を交互に見て、一瞬固まったようです。この機を逃す手はありませんわ。

「なっ!? お、おい、待てっ!!」

「いやあゝ! 離して、離してくださいませっ!!」

「誰かあ! 誰か助けてえゝゝっ!!!」

殊更に大声で叫びつつ、男の腕をしつかりと捕まえて、巻きつけるように己が身体に回します。

この状態で悲鳴を上げながら身動みじろげば、傍目からは男がわたくしを、無理矢理抱き込んでいるように見える筈です。

「何してる!」

てめえ、売りモンに手エ出しやがったのか!?

そして案の定、わたくしの悲鳴を聞いて駆けつけてきた男の仲間は、彼に疑いの目を向けました。

「え? ええ??」

い、いや違う! それよりひとり逃げ…」

「この人がつ、この人がわたくしをつ!!」

「やっぱり手エ出そうとして紐解ほどきやがったな?」

「違——うつ!! てゆるか離せえ!!」

……うん、なかなかほどこよいカオスになっております。

ここで情報が錯綜しているうちは、彼に追手はかからないでしょう。

わたくしの行動は後になって、彼らが冷静になった時に怪しいと気がつくでしょうが、それは今考えなくても良いことです。

…ここまでは、わたくしが想定した通りでした。

予想から外れてきていたのは、どのタイミングからだったのでしょうか。

大地が割れるような地響き。

近づいてくる蹄の音。

夜の闇を切り裂いて現れ、一瞬にして男十数人を踏み潰す黒い巨体。

漆黒の悪魔の背にありて、其を駆るのは……！

「……我が砦の周辺で小煩く飛び回る蠅どもが。

蠅なら蠅らしく、喰らい残しの屍肉にでもたかつておれば良いものを、この拳王を、随分と見縊ってくれたものよな」

……どうやらわたくしは、推しが恋しすぎて幻覚まで見えるようになったようです。

我ながら妄想激しすぎますわね。

その推しの幻は巨大な馬の背から微動だにせず、ギロリと生き残ったならず者たちを見据えます。

「はわわ……け、拳王!!？」

「バツ、バカな！」

いい歳の男たちが、恐怖もあらわに身を震わせ……あら？おかしいですわね。

何故この者たちにまで、わたくしが見ているのと同じ幻覚が見えているのでしょうか？
「……おい！拳王は女に執着してないから、女数人盗まれたくらいでわざわざ動かねえつて、てめえ言つてたじゃねえか!!」

そしてひとりが幻の後ろに向かつて声をかけ、そこに居た顔に傷のある禿頭とくとうの、額にピンデイみたいな石の飾りを何故か3つもつけるといふ意味不明のオシヤレをした巨漢が狼狽し始めました。

「なっ！ばっ、馬鹿!!」

「……フン。おれの不在時に砦を襲撃するなど、やけに間の良いことと思えば、手引きした者が居たとはい。

いずれはこの首をと狙っていたのであろうが、まさに虫ケラ並の浅知恵よな」
「くっ……!!」

「これほど大きな毒虫が入り込んでおつた事、気づかずにいた事は業腹だが、その事は後で考えよう。

よりにもよつてこの拳王の女を奪つたがうぬらの運の尽きよ!

今まさに天へと昇らんとする龍を蛟と見誤つたが愚、その血と命で贖うが良いわ!!」
……なにを言っているのかさっぱりわかりませんが。

とりあえずこの幻は、どうやら拳王軍内部にいた裏切り者と対峙しているようです。そして、離れたところでは既に解放された、わたくしと一緒に捕まっていた女官さん達が『キヤー！拳王様ステキ——ッ!!』などと黄色い声を上げており、引率してるザク様そつくりの幻がちよつと困ってるぽいです。

ええと、つまり、今わたくしが目に行っている雄々しい姿は、わたくしにだけ見えている幻とかではなく…？

「くくっ……ぬうおお——っ!!」

と、どうやら開き直ったらしい裏切り者が、手にしていた鎌なのか槍なのか薙刀なのかよくわからない武器を振りかぶったかと思うと、拳王様と黒王に向かって突進してきました。

どうやら体格だけでなく、そこそ腕に覚えもある相手だったようです。が。

「うぬの軟弱な技でこの拳王が倒せると思ったか!!」

我が手を触れるまでもなく打ち砕いてくれるわ!!

北斗剛掌波!!!」

……次の瞬間、拳王様が軽く掌を突き出しただけで、15歳以下のお子様には見せられない光景が展開されました。

「……たぶりゃあっ!!」

無造作に繰り出されたように見えるそれは圧倒的な『闘気』。

それが奇妙な断末魔をあげる男の巨体を捉えたかと思えば、次には内側から砕けるように、バラバラの肉塊と化したのです。

…不意に、何か温かいものがわたくしに、背中から抱きついてきました。仲良くしてくれていた女官さんでしょうか。

それにしては感触が固い気がします。

「……す、凄え!!」

……ん？女性にしてはやや掠れた声と口調に違和感を覚え、肩越しに振り返った間近にあった顔は、先ほど別れたばかりの紅顔の美少年の、呆然とした顔でした。

……っ！

この光景は15禁暴力描写だと（あくまで心の中で）言っているでしょう、子供は見えてはいけません！

とうか逃げてなかったんですか!!?

なんで戻ってきてるんですか!!

「……あんたの事がどうしても気になったんだ。

けど、戻って良かった。

ひよっとして、あの人……!!」

わたくしの視線の意味を察したのか、少年は最初は言い訳のように、それから徐々に熱い想いを乗せて言葉を発しました。これは。

「…はい。あの方こそこの乱世を統べるお方。」

わたくしの主人あるじでもある拳王ことラオウ様ですわ!」

「まさしく…まさしくあれこそが、神を超えた男の姿だ…!!」

相変わらず発言が厨二臭いですが、どうやら少年は拳王様のその強さに度肝を抜かれているようです。

そうでしょうそうですね。

あれこそまさに男が惚れる丈夫ますらわぶり。

子供には刺激の強いシーンだった筈ですが、心に傷を負っていないようで何よりですわ。

と、少年がわたくしの身体から手を離れたかと思うと、何故か真っ直ぐその足で、拳王様のもとに駆け寄りました。

「待ってください!」

その…オレは、あの女性ひとに助けられた者です!」

そこを兵士たちに取り囲まれ、跳きながら少年は、わたくしを指差します。

拳王様の視線が一瞬こちらを向き、それから再び、少年の方へと戻りました。

「お……お願いです!!オレにその拳を!!」

どうか、その拳を教えてください!!」

叫ぶ彼を一瞥し、拳王様は手の動きだけで兵士たちを下がらせます。

「……何故!?!」

「ハ……ハイ!」

妹を奪った、神に……仇を討ちたいのです!!」

……あら?!

どうやら彼の『神に復讐する』発言はただの厨二病ではなく、なんらかの事情がありそうですわね。

その真剣な瞳に何か感じるものがあつたのか、拳王様はひとつ息をついて頷きました。

「名を、なんと申す」

「オレはバランといいます!」

「……良かろう、バラン。共を許す。

ただし我が拳は一子相伝。教える事はできぬ。盗め!!」

拳王様はそう言うのと黒王の頭をこちらに向けて、歩を進ませます。

元氣にお返事をした『バラン』を再び兵が取り囲みましたが、それは拳王軍として、若

き兵を迎え入れる動きでした。

：バランと名乗った少年は、この瞬間に拳王様に心酔したのでしよう。ということは、拳王様推しのわたくしとは同士なのですわ！

これから先、拳王様への想いを熱く語れる相手ができると思うと、なんだかワクワクして参ります。

そんな期待を胸に、生ぬるい視線を少年に向けておりましたら、わたくしの太ももの倍の太さもあろう黒王の前足が、わたくしのすぐ横で止まりました。

次にはズンと音を立てて、その背にあつた長い脚が地面へ降り立ちます。

「リア」

頭上から名を呼ばれ、反射的に見上げると、兜の下の表情が、半日前に見たのと同じように、どこか楽しそうに微笑んでいるのがわかりました。

「面白いやつを捕まえてきたな。御苦労だった」

：別に、わたくしがスカウトしたわけではございませんが。

それでも直々にお言葉をかけられて、わたくしは黒王の足元で礼をとります。

「…勿体ないお言葉にございませす」

…その礼の形から再び顔を上げた瞬間、背中をまるで丸太に叩かれたかのような感覚を覚えた後、気付けば拳王様の腕に抱きかかえられておりました。

「げいふおっー！」

…ああこの体勢！思い出しましたわ！！

確か子供に折り鶴折ってあげてたユリアをいきなり腕に抱きしめて『ケンシロウを捨てる』とか言った時のやつ！こんな感じだったんですね！

正直、一瞬息止まりましたし！

これ抱擁じゃありません、鯖折りですわ鯖折り！！

あれ下手したらユリアさん潰されてもおおかしくありませんでしたわよ！

愛を知らない男は、女を優しく抱きしめることも知らないようですわね！！

「……褒美にこの拳王の見ている世界を、ひと時共に見せてやろう。」

黒王の背から見る世界をな」

そして動けずにいるわたくしを軽々と片手で抱えたまま、拳王様は再び黒王の背に戻ったのです。

落ちないように拳王様の身体にしがみつく事しかできなかつたわたくしに、景色を堪能する余裕などある筈もなく。

…それでも、触れ合った場所から伝わってくる熱い体温と男の匂いが、この世で一番安全な場所がここである事を、否応なく伝えてくるのを感じておりました。

あれから半年。

あの日、わたくしを含め拐われた女官たちと balan、ついでにあのならず者たちが他からかき集めてきた女性たちも連れて、居城に戻って参りました。

女性たちはひとまず下働きに回され、そこで適性を見てから女官を選定するようです。

というのも、これまで割と容姿だけで選定していた女官が、わたくしが拳王様の専属として抜擢された後に『ある程度実務能力のある人材持ってきた方が俺らの仕事、楽じゃね?』という事に幹部の皆様が気付いたことで、選定基準の見直しがかねてより検討されていたそうなのです。

わたくし自身は大した仕事をしているわけではないので、何かの折にそう言ったところ、

「リア殿が女官達を仕切ってくれるおかげで、彼女らの間でのトラブルや足の引つ張り合いもなくなり、こちらに余計な仕事が回ってくる事がなくなりましたからな。

我ら男にとって、それがどれほど有難い事であるか、まだ貴女にはお判りいただけな

いらしい」

と、マユが見たら気絶しそうなイケオジ顔で仰ったバルガ將軍の言葉に、他の皆様がうんうんと頷いていたあたり、なんかものすごい過大評価されてる気がいたします。

仕切つてなんかおりませんわよ？

相変わらず女官さん達は、内緒話にわたくしを混ぜてはくさいませんし。

…そういうば最近聞くようになった『ラオバラ』ってなんのことかしら？

皆さん、聞いても教えてくさいませんし、深く追求しようとしたら『特殊な掛け算のお話よ』ってよくわからない言葉で誤魔化されましたもの。

特殊な掛け算って何ですの!?!知りたいですわ!!

というか仲間に入れて!?!さみしい!!

…それはさておき、一応はその功績を買われたのか、単に面倒を押し付けられたのかは判りませんが、

「うぬが拾ってきたのだ、責任もって世話をせよ」

と拳王様の命令を受けて、従兵士として所属する形となったバランスの面倒をみる事になり、またこれまで通り拳王様御自身のお世話にも追われて、わたくしは以前より忙しい日々を送っております。

いや拾つてねえわ!?!むしろ逃がしたのにアイツが懐いてきただけだわ!!…と、失礼

いたしました。

balan は拳王様に側付きを許されておりますので、この際だからと彼には拳王様の世話をしつかりと仕込む事にいたしましたの。

戦士ではないわたくしは戦場には付いてゆけませんので、代わりを balan が務めてくれれば、拳王様は戦地においても、城にいる時と同様とまではいかずとも、そこそこ快適にお過ごしになれるかと思ひまして。

ええ、決して腹いせではございませんとも。

そんな balan は、勿論当初の目的も忘れてはならず、日々拳王様のお側で、北斗神拳の研究も続けているそうです。

ちなみに彼、食べるものが変わったせいかわそれとも単に成長期だったのか、この半年でみるみる成長してきまして。

出会ったときにはわたくしとそう変わらなかつた身長が、あつという間に追い越されてしまいましたわ。

細身だった体格も鍛錬により筋肉がついて、少しずつですが逞しくなつてきていますし、可愛いだけだった顔立ちにも最近はどこか精悍さが出てきたので、今はもう女の子と間違えられる事はないかと思ひます。

言つてゐることはまだ時々厨二臭いのですがね。

それはそれとして、一緒にいる時間が多い中で気がついたのが、 balan はどうも女に夢見すぎというか、女は皆等しくか弱く純粋で、守らなければならぬ存在だと思いついてるフシがあるという事でした。

過去に妹さんを亡くしているそうで、特に自分より年下の女の子には、妹さんを思い出してつい絆され、世話を焼きたくなるようなのです。

こういう事は、ちよつとズルい子にはすぐに見抜かれて、いいように利用されてしまう心配があります。

実際、わたくしと一緒に手伝いに行つたこの前の洗濯の日には、気がつけば順番に行く筈の水汲みをひとり何往復もさせられていて、さすがに注意いたしましたもの。

…そろそろ弟のように思えてきてる子が将来女で躓くとか、あまり想像したい事態ではありませんから。

…まあ、そんな折でしたわ。

サザンクロスという新しい町の噂が、拳王軍にもたらされたのは。

☆☆☆

サザンクロスとは、K I N G と名乗る男が作り上げた町で、彼が率いるその組織もまた同じ名で呼ばれております。

その正体は誰も知らず、得体の知れない拳法を使う事で恐れられていて、その力を

もって最近急激に広まったその名は、前世であれば検索急上昇ワード1位といったところでしょうか。

何せ近隣を根城に暴れ回る多数の集団を、アタマを潰しては己が傘下に吸収して力をつけてきて、最近是我が拳王軍の末端との小競り合いの報告が、幾度となく上がつくとあつては、この世に覇権を目指す拳王軍としては、ちよつと放つてはおけない事態なわけで。

今は小物と言つていい規模でも、この調子で拡大を続けていけば、いずれは拳王様の前に大きな障害として立ちはだかるやもしれません。

…と、ここまですがこの世界に生を受け、紆余曲折の末に拳王様専属女官となった『リア』としての知識なわけですが。

「…どうか、今しばらく軍を離れる許可を」

リュウガ將軍がそう仰つて拳王様の前に、跪いてこうべを垂れたのは、そのサザンク羅斯の情報が最初に入ってきた二週間後の事でした。

「……何ゆえに?」

まあ常識的には、休暇申請に理由は必要ないのですが、それでも拳王様が問うてしまったのは、そのリュウガ將軍の目に、どこか思いつめた光が見えたからでしょう。

もつともこの方、伏せ気味の長いまつ毛のせいで、少し俯くだけで割と悲壮感出る顔

だちなんですけど、それにしたって今日のは出し過ぎですから。

拳王様が思わず心配になってしまうのも、決しておかしくはありません。

「それは……私的な事情につき御容赦を」

ですが、少しだけ悩んだ様子を見せながら、リュウガ様はゆつくりと首を横に振りま
す。

……ここからは『リア』ではなく前世の知識ですが、リュウガ様には妹さんがいらつしや
います。

その方こそがこの世界のヒロイン、南斗最後の将にして主人公ケンシロウの恋人であ
るユリア様です。

かのひとの守護星は南斗慈母星。

それは南斗と北斗の絆を結ぶ宿命を持ち、その宿命に導かれるようにケンシロウと惹
かれあつた彼女は、本来ならそのままケンシロウと結ばれ、その愛と優しさと、そして
伴侶となるケンシロウの強さともって、この荒廃した世界を平和に導く筈だったので
しょう。

ですから、南斗が乱れたと同時に北斗の星までが割れた時、彼女の運命も動かずには
いませんでした。

ジャギの甘言に乗せられたシンが、ケンシロウからユリアを奪って逃げ、その彼女の

心を掴もうとあさつての方向に向かったシンの努力？の結果が、先述したサザンクロス
の町です。

そう、K I N Gの正体こそまさにそのシンであり、サザンクロスはユリアの為に作ら
れた町なのです。

：つかぶつちやけ、高価なだけで好みに合わないプレゼントって、普通に迷惑なだけ
ですわよね。

完成した町を見下ろす塔の上でボンボンの童貞アプローチの如くドヤ顔をするシン
の傍で、ユリアはその贈り物を喜ぶどころかドン引きしてその目に涙を溜め、この町が
作られた過程で流された血と、これからも流されるであろう新たなそれに絶望して、そ
こから身を投げ：ケンシロウがシンと対決した時には、ユリアはこの世の人ではありま
せんでした。

：いえ、実は生きてるんですけど。

まあ、今はその話はよいのですわ。

とにかく最近になってやけに耳にするようになった、サザンクロスとK I N Gの名。

そんな折の、このリュウガ様の嘆願。

まったくの無関係であるとは思えません。

恐らくリュウガ様は独自にK I N Gの正体を探り、それが妹を拐った男である事を突

き止めたのではないでしょうか。

「…サザンクロスへ、行かれるのですか？」

ならば兄の心情として、己の意志を無視して奪われたであろう妹を救けにいかうと考えるのは、決して不自然な事ではないように思います。

そう感じて口にしたわたくしの言葉に、跪いたまま視線を上げたりユウガ様は、ひとをそれだけで射殺せるんじゃないかってくらい鋭く冷たい目を、明らかにわたくしに向けました。

ひいい、恐いです。何かまずかったですでしょうか。

瞬間、その視線の圧力から守ろうとするようにバランスがわたくしの前に進み出て、2人が一瞬睨み合います。おいばかやめろ。

「ほう……？」

と、その視線のやりとりでわたくしの言う事が正解であると察したらしい拳王様が、それ以上に凶悪な顔でリュウガ様をぎろりと睨みました。

その瞬間、リュウガ様の視線の圧力がふっと消え、それまで詰めていた息が、バランスの口から漏れたのがわかります。

彼も本当は怖かったのでしょうね。

わたくしをそれでも守ろうとしてくれたバランスの気持ちが嬉しくて、手を伸ばして頭

をポンポンしたら、『子供扱いするな』とちよつと嫌がられました。解せぬ。
「リュウガよ。

サザンクロス
奴等を叩くのであれば、拳王軍として動くになんの差し障りもないはず。

今一度問う。何ゆえ、うぬが単独で動く必要がある？」

多分ですが、拳王様はリュウガ様の、心からの忠誠を信じてはおりません。

それは彼の頂く天狼星の運命ゆえ、その孤高の星が自身の前に膝を折った事、むしろ不自然であると感じているようにすら思えます。

実際、『リュウガ』は『ラオウ』に仕えていても、その心は『ラオウ』と『ケンシロウ』どちらが乱世に必要な大木であるかを、その狼の目で見定める役どころなわけで。

ぶつちやけ妹と恋仲でありながら易々と他の男に奪われた『ケンシロウ』よりも『ラオウ』寄りなのは仕方ないでしょうが、それでも乱世において北斗を戦いへ誘う宿命いざなを抱く男としては、ある程度公平な視点で見る必要があるのです。

また、南斗と北斗を結ぶ絆として生まれた妹の選んだ男が『ケンシロウ』であった事も、それがただの恋なのかそれとも運命なのか、わからないまでも考慮に入れないわけにはいかなかったのだと思います。

…そこまで考えて、はたと気付きました。

単独でサザンクロスを攻めたいリュウガ様の意図に。

拳王軍としてユリア様を奪還してしまえば、確かに確実にユリア様は取り戻せますが、そうなるも必然的に、ユリア様の身柄は拳王様のものとなります。

だって『ラオウ』もまた、『ユリア』を欲しているのですから。

ですがそれではユリア様に、シンのもとにいる時と状況は変わらないわけで、兄であるリュウガ様は、ただでさえ辛い思いを味わった筈の妹を、更に追い詰めるような真似はしたくなかったのでしょう。

彼が求める時代を導く巨木。

『ラオウ』がそうであると見極めたならば、妹を与える事もやぶさかではないのですが、まだ見極めのつかない今は、密かに己ひとりのもとに『ユリア』を保護しておきたかったのだと、わたくしは今、この期に及んで気がついてしまいました。

本当にごめんなさい。

ですが、実際ここで拳王軍を動かそうが動かすまいが、この時点で拳王軍が、ユリア様の身柄を確保する事はできないのです。

物語の通りであるならば、拳王軍がサザンクロスに攻め入った時には、ユリア様はドヤ顔のシンを尻目に絶望の涙を流しながら、高い塔の上から身を投げたところを、彼女を守る五車星に助けられており、一足違いで連れ出されて死んだ事にされているのですから。

…結局、拳王様に再度問い詰められて事情をゲロつたりユウガ様は、改めてサザンク
ロスの攻略を拳王様に命じられるとともに、『ユリア』の名を聞いて歓喜する拳王様も、
その行軍に同行することになりました。

………なんだか胸の奥にモヤモヤする感覚をおぼえたのは、気にしない事にいたしま
すわ。

…数日後、なんの成果もなく戻ってきたリユウガ様の部隊と拳王様は、いつもは滾ら
んばかりの闘気オーラを纏った身体に、お葬式のような空気を漂わせておりました。

同行していたバランによれば、K I N Gと名乗る男は確かに女性を侍らせてはいたも
の、肝心の『ユリア様』は既に亡くなっていたとのこと。

物語は、確かに進行しているようですね。

今頃はユリア様は密かに南斗の都へ匿われ、そこから時代の流れを、ただ静かに見つ
めているのでしょう。

…なんだかホツといたしました。

ええ、その、万が一物語の通りにならず、ユリア様の身柄が拳王様に渡ってしまった
らと考えると、何だか判りませんが胸の奥が締め付けられるように痛くなるので。

☆☆☆

「……………リアか。今は、おれに構うな」

多分、めつちやテンション上げて奪いに行つた意中の女性の死を聞かされ、喜んだ分落ち込みが激しいのであろう拳王様にそう言われて、わたくしは着替えとお湯の支度だけをして、そのまま退がる事にいたしました。

「…かしこまりました」

出来れば着替えをさせて脱いだものは回収したいのですが、洗濯の日までもうしばらくありますし、それは明日でもいいでしょう。

今回の件はさすがの拳王様でも、落ち込みたくなる事態なのでしょうし、今はそつとしておいて差し上げますわ。

「……………うぬは、本当におれに構わぬのだな」

ですが、一礼して退がろうといたしましたところ、その拳王様から、思わぬ声がかかりました。

振り返ると兜すら脱がないまま、その下から恨めしそうな目がこちらを見つめております。

「……………そういう御命令でしたので」

拳王様は割と余計な真似は嫌う方ですもの。

わたくしとしては、ベストな選択をしたつもりでしたが、何かお気に召さなかったよ

うです。

仕方なく御命令を待つ事にして、再びお側に控えましたが、拳王様は数瞬の沈黙の後、吐き捨てるように仰いました。

「……………もういい。下がるが良い」

「はい。失礼いたします」

「待てい！ほんとに下がる気か!!」

ええええ……………

……ええと。

あくまで心の中だけでキレてもいいでしょうか。

めんどくせえ！拳王様めんどくせえわ!!

彼女か！おまえは察してちゃんな彼女か!!

『わたしのことが好きならわかる筈』的なやつか！

いい歳したオッサンがやっても可愛くねえわ!!

……………ぜえはあぜえはあ。

と、とりあえず落ち着きましょう。

いくら心の中だけの叫びとはいえ、推しに対する言葉ではありませんでしたわ。

「……………矮小な身のわたくしには、拳王様がなにを求めていらつしやるのか、測りかねま

す。

わたくしにさせたい事がおありなのでしたら、いつもどおりご命じくださればそのようにいたしますわ」

そういうえば前世の何かで、会話の中に男は解決策を求め、女は共感と肯定を求めるというものがありましたわね。

女が単に聞いて欲しいだけの事を、男は無意識に相談と受け止めてしまい、『これはそうじゃない』『こうした方がいい』などと意見を述べてしまうし、男が解決策を求めて相談しても、女からは的確な答えが返ってこないというすれ違いは、いつだって起こりうる事なのですわ。

ならばここはお互いの為に、というかわたくし自身の為にも、問題をはっきりさせておく必要があります。

「……………ならば、今宵は伽を命じる」

「はえっ!?!」

そして、拳王様がようやく口にした言葉は、わたくしにとつては意外すぎるものでした。

驚きの声が、まるで北斗神拳を受けて倒れる雑魚ヒヤッハーの悲鳴のように口からこぼれます。

言葉の意味が徐々に理解できると比例して、わたくしの顔に血がのぼっていくの

が、自身でよくわかりました。

その……つまり、そういう事ですわよね？

「命じればそのようにするのであろう？」

たつた今、自分でそう言ったではないか」

拳王様は言いながらわたくしの肩を、その大きな手で掴んで引き寄せました。

・
・
・

…次の日、わたくしは全ての業務を、バランスに任せてお休みをいただきました。

夜はほぼ一睡もできなかつたばかりか寝台の上に座らされ、拳王様の頭を一晚中乗せられていた脚が痺れて立てず、腰にも痛みが出て、とても仕事にならなかつたのですもの。

……膝枕だけだったのかと？とんでもない!!

あれは膝枕などではなく石抱き石抱きとは、江戸時代に行われた拷問のひとつ。笞打に屈しない未決囚に施された拷問。牢問と呼ばれて、正規の拷問の前段階として行われた。まず囚人は後手に緊縛される。囚衣の裾をはだけて脚部を露出させ、十露盤（そろばん）板と呼ばれる三角形の木を並べた台の上に正座させ、背後の柱にしっかりと括り付ける。この時わずかに後ろにのけぞるように縛り付ける。石が胸部を圧迫しないようにするためである。三角の木材の鋭角の稜線が体重で脛に食い込んで苦痛を与える仕

組みとなっている。さらにその太ももの上に石を載せる。石の重みで脛の部分に三角木材の稜線がさらに食い込み、非常な苦痛を味わわせることになる。

『憂萎奇弊泥阿』よりですわ、石抱き!!

あれから何度目かの石抱きの拷問膝枕の夜を経て、ようやく拳王様の頭の重みからの圧の逃し方を覚えてきた頃、2人きりの寝台の上（という言葉の響きほど色気のある状況ではございませんが）でわたくしは、拳王様から衝撃の告白をされました。

「…一部の限られた者しか知らぬ事だが、おれには子がひとり居る」

……ええっ!? 拳王様にまさかの隠し子!!?

そんな設定があつたのですか!?

もしかして前世で読みきれなかつた分で、そんなお話があつたのでしょうか。

ラオウ関連のエピソードは全部読んだと思つておりましたのに!

どちらにしろ、拳王様はユリア様一筋と思つていたので、何だかショックですわ。

「男児だ。名を、リュウという。」

ちようど、うぬを女官に引き上げる直前くらいに生まれておるから、もう半年ほどになる。

生まれてすぐに手を回して、母親には死産したと思わせて確保し、信用できる者に預けて密かに育てさせておる。

万が一にもおれの弱味として敵対する者の手に渡るようでは、おれの霸道に障りが出るゆえな」

「母親を騙して子供を取り上げたって事ですの!？」

「仕方あるまい。」

昔から知っておるが、本人はともかく血統的に、少し面倒な背景のある女だ。

一度だけ気紛れに誘いに乗ってやったが、この状況下にておれの血を預けておけば、後々それを利用されかねん。

幸い、女は身籠った事を、己のただ一人の身内である父親にすら隠し、一人で産み育てようとしておったから、秘密裏に子を確保することができたがな。

もともと潜入させておいた手の者に話を聞けば、女は待ち望んだ子を死産したと聞いて意識を失った後は、おれの子を身籠った事すら記憶から消してしまつたらしい」

しかも話を詳しく聞けば、思つてたよりずっと酷い話でした。

というかその女性、思い当たる人物が一人いるのですが（名前忘れたけど）、そうだとすればそのリュウ様の存在、ユリア様に比べれば背景は弱いものの、既に北斗と南斗がひとつになつたその結晶の筈です。

：覇道の障害となり得ると認識しつつも、拳王様が彼を殺さず保護したのは、恐らくはそれ故なのでしょう。

もう10年も早く生まれてきていたならば、彼こそがきつとこの世界の救世主になり得たかもしれない存在なのですから。

彼女もそのつもりでいたからこそ、それを失った絶望から、心を守る為にその存在自体を、なかつたことにしてしまつたのでしようね。

「おれの身に何ごとかあつた時には、」

「いやです」

わたくしの思案をよそに、何やら縁起でもないことを仰ろうとした拳王様のお言葉を制して、わたくしは即答いたしました。

「せめて最後まで聞いてから断れ!!」

拳王様は苛立つたように文句を仰いましたが……なんだか感情的には少しモヤるんですもの。

あと、言つてる事と態度が全然違ふ自覚はありましたか？

膝の上から睨まれて多少声を荒げられても、全然怖くありませんからね？

つか、子供か……失礼いたしました。

☆☆☆

「……リアさん。オレの話、聞いてるか？」

「勿論聞いていますよ。」

けどバラン、あなたも戻ったばかりで疲れているでしょう。

「明日も早いのですからそろそろお部屋に戻りなさいな」

拳王軍が遠征から戻った夜は、わたくしが拳王様の湯殿や着替えの支度を整えている間、馬たちの世話を終えたバラン（厩番は例のあの時に拳王様が追い出してしまいましたが、しばらくは交代制になっていた筈ですが、いつの間にか彼の仕事になったようです）は、いつもわたくしのもとにやってきては、戦場での拳王様の様子を細かく報告してくれます。

それは、制圧した村の奇妙な習慣に怒りを露わにした話であつたり、制圧しようとした村の長が、自分の片足を切り落としてまで戦いを避けた、その覚悟を買ってただ通り過ぎたという話であつたり、赤い髪の派手な男が訪ねてきて少し話をして送り出した後、ずっと不機嫌な顔をしていたとか、そんなこまごまとした事です。

あの方の方は、多分わたくしも知っている人物かと思えます。

多分ですが拳王様は賢しく策を弄してかかる者がお嫌いなので、役に立つとは思つていても、感情的には受け入れていないのですわ。

逆に、ある種の覚悟をもって真剣に向かつてくる相手には、無意識に敬意を払つてしまうところがおありのようです。

幸いにもわたくしとバランは、そう思われて傍に置かれておりますわね。

「…今夜も拳王様のお召しなのか」

「恐らくはそうなりますわ。」

わたくしの膝が余程お気に召したもののか、最近は遠征から戻った日は、必ずお呼びがかかりますから」

「……もつと疲れさせておくんだった…」

「?何か仰いまして?」

「……いや」

「ほら、ここはいいからあなたはもう休みなさい。」

しつかり食べてしつかり眠って、もつともつと大きくならなくては」

「子供扱いするなといったも言ってるだろう。」

オレはもう17だぞ。あんたと5歳しか違わない」

「そうでしたわねえ…」

初めて会った時は華奢で女の子のようだったバランスを、わたくしは13、4歳くらいだと漠然と思っておりましたが、適度な運動と栄養の摂取により急激に背が伸び始めた彼が、わたくしの見たてよりも年上だと知ったのは割と最近の事です。

なので頭では判っていても、それまでの認識と行動を、急に変える事は難しいのですわ。

「けれど、あなたから見ての5歳上って、結構な年齢差でしょうに」

「今はな。けど、40歳と45歳なら、もうそれほど差じゃないだろう?」

「そんなに長く、わたくしと居るつもりですよ!」

彼のことはなんとなく弟のように思えてきてはいても、わたくし達はほんとの姉弟ではないのですから、人生のどこかの時点でお別れする事になる筈です。

というかほんとの姉弟だって、そんなに長く一緒には居ないでしょう。

こんな小姑がずっと近くにいたら、将来彼の奥さんになる人が可哀想ですし、わたくしだって嫌ですわ。

「あなたが将来、拳王様に飽きられた時に、オレが空いてる状態で近くに居なきゃ困るだろう?」

「なんの話をしていますの?」

「拳王様に捨てられたら、オレが貰ってやるって言ってるんだ」

「余計なお世話ですわよ!!」

まったく、こんな生意気な口をきくようになったのは誰の影響なのでしょう。探し出してやるべきか、一瞬本気で悩みましたわ。

そんな軽口を叩いていたと思ったら、バランの表情が唐突に引き締まりました。

「……最近、妹の顔が思い出せないんだ」

………？

なんでしよう、急に話が飛んだ気がしますが。

ちなみにバランの妹さんの話も、割と最近になってから詳しく聞かされました。

幼いながらも信心深かった彼女は、病に伏しながらも『神が許さないから』と、バランが他人を傷つけてまで手に入れてきた薬を飲むことを拒み、ただひたすら神に祈り続けた末に、その幼い命を召されたのだと。

「正確には、病に苦しんでいた時や死んだ時の顔……オレが神への憎しみを新たにし続ける縁よすがだったそれらが思い出せず……思い出すのは元氣だった頃、今日はこのような善行を積んだとか、祈ることで心が澄みきったと言って、嬉しそうに微笑んでいた顔だけだ。

そしてそれらは、あんたが拳王様の事を話している時と、同じ顔だったと気がついた。だから、判ったんだ。

妹にとつての神とは、あんたにとつての拳王様と、同じ存在だったんだと」

……まあ、推しは確かにわたくし達にとつて、神のようなものですからね。

「……妹を奪った神への憎しみが、オレの中から消えたわけではない。

けど、もしかしたら神がユウカを……妹を奪ったのではなく、ユウカがオレよりも、神を選んだということなのかもしれぬと、最近ではそんなふうに……思えてならない」

堪えていたものを吐き出すようにそう言う彼の、ウェーブのかかった長い髪を、ほぼ無意識に指で梳くと、 balan はそのわたくしの手を止めるように掴み、何故か指を絡めてきます。

「…ひとつ、答えてくれないか。」

その、もしもの話として聞いてほしいのだが。

オレが…オレが拳王様より強くなれたとして、その上であなたに求愛したら、あなたはそれを受けてくれるか？」

「はへっ!!？」

「だから、もしもの話だ…どうなんだ!？」

そうですか。もしもの話ですね。

ものすごい真剣な顔で言うからびっくりしました。

うん、ちょっとだけドキドキしましたよ。けど…、

「…無理でしょうね」

「やはりそうだろう。そういうことだ。」

…オレは今まで、オレが神よりも強ければ、ユウカはオレの言うことをきいてあの薬を飲み、命を存なからえた筈だと、ずっと思ってきた。

けど、例え神以上の強さを手に入れても、ユウカはそれでも神を選んだかもしれない。

……あんたが、それでも拳王様を選ぶように。

つまり、今オレがやっていることは、全くの無意味だということだ」

… balan は、神を憎むと同時に、自分自身を責め続けてもいたのでしょうか。

その思いを、強くなるという目標に変えて、これまで努力してきた筈です。

それが無意味に思えた時、彼の心は絶望に染まってしまっているのではないのでしょうか。

……けれど、そんなことにはさせません。だつて。

「…無意味ではない、と思いますわよ?」

「え?」

「あなたが忘れている事がひとつあります。

…ひとの心は、力のみに従うものではないという事です。

この時代を生きていると、つい忘れてしまう事かもしれません」

「……っ!」

たとえばどんなところから発した思いであれ、balan がこれまで必死に努力してきた事を、否定していい筈がありません。

それがbalan 本人であろうとも、そんな事はわたくしが許しませんわ。

「ひとの心を動かすのは、やはりひとの心。

それは恐怖であったり、憎しみであったり、悲しみであったり……愛であったり。

あなたは力のみを求めて、ここにたどり着いたかもしれません。

けど、これからはもつとひとの心に目を向けて、生きていけばいいのではないかしら。あなたは、こんなにも若いのですもの。

回り道をする時間は、まだまだたくさんありますわよ」

そう言つて、目をまん丸く睨んでいるバランの頬を、両掌で包みます。

男の子なのに、やはり若いから肌の感触がぶりぶりですわ。

……まあ、今はそれはいいのです。

嫉妬なんかしてません。ええ、全然。

「それに、神なんてものは実際のところ、己の中にある良心とか道徳といったものを、わかりやすく擬人化した存在に過ぎませんのよ？

祈れば願いを叶えてくれるような都合のいい存在などではなく。

神にすぎるといふことは、己の中にそれがある事を再認識して、安らぎを得る事。

それだつて結局はひとの心じゃありませんの」

「ひとの……心」

まあ、この考え方は前世日本人、信仰が生活に密着していない、世界で見れば特殊な思考の民族であつた故のものではあるのでしょうか。

「…先ほどの問いの答えですけれど。」

あなたの強さが拳王様を超えただけであれば、わたくしはあなたを選びはしないでしょう。

けれど、あなたの心がわたくしの心を動かす事ができたなら、その時は違う答えを出す可能性もあります。

…バランス。『いい男』に、おなりなさい。

必ず、なれる筈ですわ。あなたは、優しい子だもの」

泣きそうに潤んだ目を見つめて微笑んでやれば、バランスは微かに唇を動かして、なにかを言いかけてました。

けれどそれは言葉にはならず、吐息としてわたくし達の間の空間に溶け、わたくしはバランスの両頬から、そつと掌を離します。と、

「愛と優しさだけでは、この時代を生き抜く事はできぬ」

背後から聞こえた地を這うような低い声に、わたくしとバランスがハツとして振り返ると、そこには圧倒的な質量の、この世で最も完璧な肉体が立っておりまして。

「拳王様……！」

確かにここは拳王様のお部屋なので、居ること自体は不思議ではないのですが、遠征後の幹部ミーティングが終わっていた事に、わたくし達は話し込んでいて気がついていませんでした。

拳王様は一体いつから、わたくし達の話聞いていたのでしょうか。

「だが、うぬがそれでも生き延びる事ができたなら……その上で、まだ心が変わらなかつたならば、その時はこの拳王に、命懸けで戦いを挑むがよい。

……よいか、殺すつもりで来ねば、おれからはなにも奪えぬぞ」

拳王様は真つ直ぐにバランを見据えており、バランもまた、拳王様を真つ直ぐ見返しております。

いつも思いますが、この子の胆力は半端ないです。

そうして、見つめ合うこと暫し。

バランは口元に笑みを浮かべると、『はい』と一言だけ答え、一礼してその場を後にしました。

どういう事かと拳王様を見上げて視線で問えば、拳王様もまた、似たような笑みを浮かべております。

「女には判らぬ、男同士の話だ。

それより、今宵もまたうぬに伽を命じる。

おれが湯を使った頃に合わせて、またここに戻って来い」

……はい『いつものやつ』入りました——！

☆☆☆

…バランは翌日、新たな修業の旅に出ると言つて拳王軍を離れました。

…それから数ヶ月後、旅のヒヤツハーが居城に届けてきたわたくし宛の手紙には、差出人のところ『バラン』の署名があり…そこに書かれていた内容に、わたくしは肝をつぶすことになります。

旅の途中でたどり着いた村に、北斗神拳に似た医術を使う男がいた事。

彼の人柄に惚れ込んで、弟子入りを志願した事。

師となった男は病に侵されており、今日明日ということではないものの、限られた命をひとを助ける為に生きている事を知り、いつか彼の意志を継ぐと共に、その最期を看取る決心をした事。

あと、その師が留守にしている時に村を襲撃してきた賊を倒し、更になんか知らないけど師が帰ってきたふりをして村に入ってきた怪しい男を、とりあえず秘密裏に始末したら、どうも拳王軍の関係者だった。ぼいのでちよつとまずい気がして、わたくしから拳王様にとりなして欲しいとの事。

……つて！

それ多分、拳王様の実弟とそれ装った偽物!!

てゆーか、原作主人公がそのうち倒す筈の敵キャラを、なんであなたがサクッと始末しちやってるの!?

「…それは、恐らくはアミバという男であろう。

一時期確かにおれのもとで北斗神拳を学んでおり、拳を盗む才にはバランより余程長けておったが、ひとつのことに集中するのがとにかく不得手な男であった。

拳も上っ面だけ修めたところで、飽きたとみえて勝手にどこぞへと行きおったわ。

返事をするならば、すでに拳王軍とは縁のない男だから、気にするなと伝えておくがよい」

とりあえずトキ様の存在だけは伏せた上で、バランの手紙にあつた頼み事を打ち明けたところ、バランがトラブった相手の特徴を聞くや、拳王様は心底どうでもいいとでも言うように、そう吐き捨てておしまいになられました。

原作でトキが、『アミバは拳王の部下で、命令通りに動いていた』的な説明をしていた筈ですが、どうやらそれ、トキ様の勘違いだったようですわね。

少なくとも拳王様的には、既に自分の手を離れた者という認識でしかないみたいですし、アミバ的には昔年の逆恨みを晴らそうと近づいただけなのでしょう。

「…それにしても、バランめ。」

よりもよって、そうきたか。

ヤツが神を憎んだのは、病の妹を救って欲しいと願った祈りが届かず、その命を奪われたがゆえ。

神が為しえなかった奇跡を、それに成り代わって行なう事こそ、ヤツが選んだ神への復讐という事なのだな。

まあ良い。おれの覇道の邪魔にならぬのであれば、せいぜい好きに生きるが良いわ」
……あれ？なんか、バランの現状と拳王様の認識に、微妙な齟齬が生じている気がいたしますが？

というか、北斗神拳を医術として使うことを最初に考えたのはトキ様ですけど？

そういえば原作の展開では、ラオウはケンシロウとトキが再会するのを阻止する為に、トキの身柄をカサンドラの牢獄に送っており、そのトキの代わりに奇跡の村に送り込まれたのがアミバだと思っていたのですが、バランからの手紙にある情報だけで判断する限りだと、もう奇跡の村にアミバが現れたタイミングであるにもかかわらず、トキ様は拳王軍に捕らえられているわけではなさそうです。

一体どういう事なのでしょう？

まあでも、原作には登場しないトリアさんは思っています。バランがトキ様に弟子入りしたという時点で、物語が変化しているという事なのかもしれないかもしれませんけれども。バラ

ンがリアさんへの手紙を託した旅のヒヤツハーは、一応は拳王軍の末端に所属する兵士です。

彼らは各地を放浪しながら、様々な情報を拾つては、拳王軍にそれを報告しています。今回たまたまその地にいた彼らは、本来の物語の流れならば、その時点で奇跡の村の噂を聞いて、ラオウが探しているトキの存在をそこに確認していた筈でした。

ですがこの時空においては、病を治す奇跡を起こすと評判の村に、最近までラオウのもとで修業していたバランがいました。

バランは北斗神拳の下地は理解しており、完璧とまではいかずとも、この時点である程度の身体の不調は治すことができるようになっていきますので、バランの存在がカムフラージュとなつて、旅のヒヤツハーはこの奇跡の村を、バランがつくつたのだと勘違いしたのです。

バラン自身に拳王軍に敵対する意志はなく、それ故に制圧の必要もない、むしろ拳王配下の村として機能していると判断された結果、本当に偶然ですがトキの存在を、拳王軍の目から隠す結果に。

また情報を流す可能性があつたアミバを、そんなつもりもなくその前にサクツと始末した件も、その一助となつております。

リアさんに自覚はありませんが、彼女がバランと関わり合わなければ起きなかつた事

態なので、間違いなく彼女の存在が引き起こしたバタフライエフェクトでした。

まあでも、わたくしは本来、居城の外のことは何もわからないただの女官。

余計な事は言わない方がいいのでしようね。

☆☆☆

気がつけば拳王軍で働くようになってから既に2年、拳王様の傍に仕え始めてから1年ほどの時が経ちました。

その間、例のならず者たちに拐われた時を除けば、ほとんど拳王軍の居城の敷地から外に出ることのなかったわたくしは今、リュウガ様の馬に同乗させていただいた状態で、夜の闇の中を駆けております。

「疲れてはおらぬか、リア殿」

「……ええ、大丈夫ですわ」

わたくしは乗馬の経験がありませんので、ただリュウガ様に支えられて乗せていただいているだけなのです。

けど、一応は揺れに合わせて体のバランスを取ったりもしておりますので、正直そろそろお尻が痛いのですが……さすがに場所が場所だけにそこは少し言いにくいのですわ。

「こんな茶番に付き合わせる事になって、本当に申し訳なく思っている」

「茶番などと。リュウガ様がすぐに行動してくださいさなければ、女のわたくし共は今頃、無事ではいられませんでしたもの」

その2日前にいつも通り軍を率いて、小規模ながら水も人々の生活も豊かだと聞き及んだ辺境の村に攻め入った拳王様が、そこであろうことか強敵と相討ちして、重傷をおわれたとの報せが、居城に届いたのは今朝の事でした。

…ええ、つまりは原作通りの展開なわけですね。

わたくしは詳細を聞かされてはおりませんが、あの拳王様に重傷をおわせられる相手となれば、原作主人公ケンシロウ以外には居ないでしょう。

いつもならば、ザク様が代わりに兵たちの指揮をとり、情報統制などの事後処理にかかったのでしょうか。

ですが今回はたまたま、彼がカサンドラへ出向いており不在で、ほかの幹部の方々もそれぞれ、他の支配地域の視察、または対抗勢力の支配地を偵察に行っていた為、その時拳王様が伴っていたのは、地元ヒヤッハーを中心とした末端兵士達の一軍のみでした。

豊かであるとはいえ小さな村ひとつ、落とすのはわけないと判断しての事だったのでしよう。

実際、ケンシロウとの戦いが起きなければ問題はなかった筈なのです。

その末端兵士たちですが、拳王様が目の前で傷つき倒れたのを見た瞬間、それまでの統率を失い、散り散りに逃走してしまいました。

更に厄介な事に奴らは、『拳王倒れる』の情報を各地に流してくれやがりました。

その何が問題かと申しますと…拳王軍は、基本的には恐怖支配により成り立っております。

その情報が各地に流れる事で、恐怖の対象である拳王様という巨大な重石が取り除かれ、支配地域の統制がままならなくなる可能性が出てきたという事です。

端的に言うなら、地域の地元ヒヤツハーが羽目を外して、暴走する事態が考えられるわけですわ。

皆さん誤解してらっしゃるようですが、本来なら弱者が当たり前にすり潰されるこの時代において、強大な力によって支配されている拳王軍所属の町や村は、恐怖という名の秩序に守られているのですよ。

そうでなければ小さな村ならば、僅かな水や食料の為だけに皆殺しにされる事だつて、有り得ない事ではないのですもの。

そんなわけでリユウガ様は今、その火消しに奔走しているのです。

具体的には拳王配下の地域を巡って、一旦はその町や村を、彼の支配下に置き直すというやり方で。

そうしておけば、拳王様が戻った際、彼が改めて恭順する形をとれば、元通りの形に戻り得るので。

そして、その支配を最初に受けた態ぶたいとなったのが、わたくし達が暮らしておりました居城でした。

この場合、兵士たちの逃亡や暴動が起きないうちに策略が練られ、留守を任されていたソウガ様がリュウガ様と戦い敗れた形をとって、現在はその配下となったソウガ様直属の軍が目を光らせております。

なので女官や下働きの女たちが、恐怖から解き放たれた兵士たちの、不当な暴力に晒される心配は当面ありません。

その状況で、何故わたくしだけがリュウガ様に同行しているのかといいますと、わたくしに関しては『他の者には任せられない』からだそうですわ。

リュウガ様のこの火消し行動は、あくまで自軍の内部崩壊を防ぐためのもので、敵対勢力に対してはその限りではありません。

これまでは正面からこちらとぶつかる事を避けてきたUD軍や、権力の象徴を建築するの忙しい聖帝軍などが、わたくしの存在に目をつける可能性もあるのだと。

『拳王様がこのまま退くとは、奴等も考えてはいまい。』

ならば弱っている今のうちにと、何らかの手を打ってこぬとも限らない。

そして、対外的に貴女は拳王様の寵姫だ。

唯一の弱味であると判断され、狙われる可能性も考えなければならぬ。

だが、ソウガはそれが判っていても、貴女の為には動くまい。

むしろその可能性に気がつければ危険の芽を摘むべく、後に拳王様に肅清される覚悟をもつてでも、自ら貴女を手にかけてよう。

その点に於いて、わたしは誰も信用してはおらぬ』

実際にはわたくしが死のうが捕まろうがどうなるうが、拳王様が心を痛める事はないでしょうけど、自分のものを奪われる事にプライドを刺激されて動く可能性は確かにありますからね。

何せ『自分の女を取り戻す為に自ら動いた』前科が、あの方には確かにございますので。

…というか、わたくし密かに生命の危機に直面していたのですわね。

救っていただきありがとうございます、リュウガ様。

「この世には支配という名の巨木が必要なのだ」

途中の荒野で野営となり、簡単に腹ごしらえをした焚き火の前で、夜空を見上げながらリュウガ様が呟いたのは、原作に於いて何度も口にした言葉です。

たとえ恐怖支配であったとしても無法状態のままよりは、統治された状態に置けば、

その地域の安全はある程度保障されるわけで。

決して暴力を正当化するわけではないのですけれども、前世のわたくしが序盤しか読めなかった、バットとリンが大きくなくなってからのお話では、せつかく取り戻した平和な時代は数年で去り、再び暴力の時代に突入したという描写がございました。

あれは、暴力の時代を愛によって打ち砕いた筈の救世主が、本来ならばそれを引き継ぐ形で統治せねばならなかった世界のその責任を放り出して、病に侵された命短い恋人と、さっさと荒野へ逃げたからなのですわ。

揺るがぬ巨木は、必要なのです。

人が、心を殺さずに生きていくためにも。

愛を感じるのも、恐怖を感じるのも人の心。

けれど願わくば恐怖により根付いた平和の中にも、一輪でもいい、愛の花が咲きますように。

恐らくは神ではないものにわたくしが祈ったその時、

「その枝に咲く大輪の花に、貴女はなれるのか、それとも……」

まるでわたくしの心を読んだようなりユウガ様の呟きに、わたくしはハツとしてその人を見つめます。

その伏せ気味の長い睫毛に覆われた瞳は閉じられて、わたくしを見てはおりませんで

した。

☆☆☆

リュウガ様がわたくしの体力に一応は考慮してください、一昼夜かけて連れてこられたのは、重傷を負った拳王様を静養させている砦でした。

砦と言つても、小さな村くらいの広さの場所に、兵が滞在する為の小屋や厩なども設置されており（入りきらなかつたらしい黒王はその外にいました。わたくしが着いたときはお食事中だったようです）、恐らくは地元ヒヤツハーに蹂躪され逃げたか殺されたかして、人の居なくなつた村の跡地を利用しているものと思われま

す。リュウガ様はそこにわたくしを置いて去り、この後また支配地域の視察（という名の襲撃）に行くのだそうです。

ここにリュウガ様直属の数人の兵が待機しており、わたくしを迎え入れてくださいました。

「こちらに、拳王様がいらつしやいます。

出血が酷く、まだお目覚めにはなられません」

簡単な食事と水を出されて人心地ついたところで、そう言われて通された、粗末ながらもしつかりとした寝台のある部屋には、全身に巻かれた包帯が痛々しい拳王様が、見たこともないほど青ざめた顔色で、目を閉じて横たわつていらつしやいました。

胸元が微かに上下していることで、生きていると確認できましたが、それ以外はまるで死んでるみたいです。

ほら、手だつてこんなに冷た……てゆーか！

「冷え切っているではありませんの！

毛布か何かございませんの!!?

出血が多かったのでしょうか？

このままでは体温が下がつて、最悪死んでしまいますわよ!!」

なんで手当ては完璧なのに、むき出しの状態で置いておくかな！

わたくしの言葉に兵士の方が、慌てて数枚の毛布を持つてきてくださいましたが……まさかとは思いますが、この大きな身体に止血や手当てを施すのに手間取つて、それが全部済んだら達成感みたいのが出て、そのあとのケアを忘れたとかではないでしょうね。

核戦争より前のこの世界は、前世よりも文化的には遅れておりましたが、防災に関する意識は前世よりも高かったので、わたくしも救命救急の講習などは、3ヶ月に一度くらいは授業で受けておりました。

……ええと、こういう場合、手足といった末端から急激に温めると、心臓に負担がかかり最悪ショック死の危険があると聞いた気がします。

なので、湯たんぽ的なものの使用は却下です。

意識があれば温かい飲み物をゆっくりと服^のませ、内側からじんわり体温を上げていくのが望ましいのですが、意識がない場合はそうはいきませんわね。

無理矢理飲ませたら窒息してしまいますもの。

まあ、拳王様は元々は丈夫で血の気の多い方ですし、大きな生き物はそう簡単には死なないというのはわたくし^の持論ですが、これ以上冷えなければ大丈夫な気がいたします。

「……うむ。ならばあとはリア殿が添い寝して温めてくだされば大丈夫でしょうな。

今宵はこのまま、ごゆっくりお休みください。

我々はこのことで失礼いたします」

「はい!?!」

「何かありましたら遠慮なく、外の兵士に声をおかけください。では」

……と安心していたら、その場で一番位が高そうな兵士の方がそう言つて、一礼して退出していきます。

それに倣つて他の方々も部屋を出ていって、部屋には相変わらず寝台に身を横たえる拳王様と、わたくしだけが残されました。

……待つて!これ決定事項なんですの!?

ひよつとしてわたくし、この為に連れてこられたんですの!!?
…とはいえ。

多分この砦に、わたくし一人の為に用意できる部屋はないでしょうし、その必要があるとも思われていないでしょう。

リュウガ様が余裕をもって駆けてくださったとはいえ、旅慣れていないわたくしには、ここまでの移動はやはり辛い行程で、そう気がついた途端、今になってドツと疲れが出てきております。

わたくしの眠る場所が拳王様のお隣しか用意されていないのであれば、そこで寝るより他にありません。

そう、わたくしはとても眠いのです。パトラッシュ。

意を決して、着の身着のまま出てきた女官服の、腰紐だけを外して、わたくしは拳王様の毛布に潜り込みます。

「……おやすみなさい、拳王様……」

まだひんやりとした拳王様の身体に、少しでも体温が伝わるように身を寄せると、睡魔の導きに従い、わたくしはそのまま眠りに落ちました。

…その翌朝、

「男の寝台に自分から潜り込んでおいて、何事もなく済むとは思ってはおるまい?」

と目を覚ました拳王様に起こされて、『傷に障る』と必死に説得するも虚しく美味しくただかれてしまうことになるのですが、その時のわたくしにそれを知る術はありません。

…あれのどこら辺が瀕死の怪我人だったんですの!!?
わたくしの方が死ぬかと思いましたがわよ!!

…わたくしが『自分から抱かれにきた』というのがどうやら誤解だったと気がついた拳王様は、その後は特に手を出しては来られません。

「本気で嫌がる女に手を出したところで勃たぬわ」

との事です。

わたくしの必死の抵抗が無かったことにされている事実には、思わず半目で抗議したら、

「駄目だとは確かに言っていたようだが、嫌だとは一言も言わなかったではないか」

としれつと言われましたわ。えええ……。

…まあ、考えてみれば問題はないのですよ。

この時代、女の運命は割と悲惨です。

強い男のもとで庇護されなければ、明日の命とて知れないのです。

なれば、気紛れでも想う殿方にお情けをいただいで、初めてを捧げられた事は、とても幸運なことなのですわ。

…本当に死ぬかと思いましたがね！

…そう割り切れるつもりでいたのは、前世が男だった記憶が残っていたからかもしれない。ません。

初めてを想う方に捧げられた、その思い出があればそれでいい…：そう思っていたのに。

『身体だけの、割り切った関係』『セ〇レ』なんてのは男の幻想なのだと、今ならばわかります。

そもそも女は、強引に奪われる場合は別として、原則的には僅かにでも想いを抱かない相手とは、そういう事態には至らないものなのだ。

情を交わせば、その僅かにでも抱いた想いが強くなってしまう生き物だなどは、この時までわたくしは知りませんでした。

いざそうなつてしまえば、それ以上を求めてしまう気持ちや止められないのです。愛し愛されたい、ともに生きてゆきたいと、大それたことを願ってしまうのです。

拳王様のお心には、未だにユリア様がいらっしやいます。

現時点でユリア様は亡くなったものと思ひ、今はお忘れになろうとしていらっしやいます。…それはその生存を知り、長年の想いが再燃します。

…それはそれでもいいのです。

そんな一途なところも、あの方の魅力でございませう。

そして多分ですが、ユリア様を手に入れられた暁には、わたくしはそのお世話も任される事となりましょう。

それくらいあの方に信頼されているという自負はございます。

ですから少なくとも、わたくしが用済みとして拳王様から離される事はない筈です。

『女』として可愛がられるだけでは飽きられるのですから、お側には居られるのであれば、それでいいのです。

問題は……

拳王様はいずれは、ケンシロウとの戦いの末に、その命を天へと還すのです。

そうなった時に、こんなにも拳王様でいっぱいになってしまったわたくしは、その後どうなるのでしょうか。

…その時になってみなければ、わかりません。

けれど、無力なわたくしに、それを止める術がないことくらいは、嫌でもわかりますわ。

……いつそ、共に逝けたなら良いのに。

ああ、そうですわ。

死ぬかと思ったあの瞬間に死んでおけば良かったのですわね。はは。

そんなモヤモヤを抱えながら、わたくしは未だ砦に滞在して、拳王様のお世話をして
おります。

大きな傷はさすがにまだ残っているのですが、動くのに支障がない程度には快復しつ
つあります。

最近は何慣らしにと、3日に一度は黒王と遠駆けをなさっております。

先日はわたくしも連れていってください、八割がた完成しているという聖帝十字陵
を、遠くからですが見てきました。

未完成ながらもその荘厳にして威圧的な巨大建造物を目にし、拳王様は『必ずまた戻
る』との決意を新たにされたようでございます。

兵士の方々が仰るには、メデイスンシティーへ送った使者が戻らず、頼んだ薬がまだ
届かないとの事でしたが、とりあえず在庫は充分ございますし、このまま順調にいけば、
それを使い切らぬうちに拳王様は完全快復されるのではないでしょうか。

…というか確かあの町を任せていた犬好きヒヤツハーは、あの戦いの次の日か遅くと
もその次の日にはケンシロウとレイに始末されていたリアさんは知らない事ですが、実
はとある事情により、この時空でこのエピソードは起きていません。つまりこの町の住
人は、この時点ではまだ狗法眼ガルフに虐げられている状況であり、送った拳王軍の使

者も彼の一味に殺されています。筈なので、ひよつとしたらそのせいで町が混乱しているのかもしれないね。

リュウガ様は恐らくあちらにも立ち寄られるでしょうから、それもすぐに治安を取り戻す事でしょうけど。

やはりリュウガ様お一人では手が足りないのですわね。

ちなみにそのリュウガ様と戦った時の傷がもとでソウガ様が亡くなられたそうで(?!)先日妹のレイナ様が悲痛な面持ちで、かの方が最後に残されたというお手紙を届けにいらつしやいました。

わたくしは席を外すよう言われたので部屋の外に出ておりましたが、普段クールビューティーのイメージを崩さない女剣士の感情的な声が『許せない』『リュウガに復讐する』と叫んでいるのが、部屋の外まで漏れ聞こえてきました。

それに答える拳王様の言葉までは聞き取れませんでした。多分何やら宥めていたのでしょうか。

ひよつとしたらレイナ様は、あれがお芝居であると聞かされていなかったのでしょうか。

けど、実際にソウガ様は亡くなられているわけですし、どういう事なのでしょう？

……ともあれ数十分後、泣き腫らした顔で出てきたレイナ様に、冷たい水で濡らした

サラシを差し出したところ、一瞬だけ驚いた顔をされたものの、次には少し寂しそうにですが笑ってくださいました。

「……ラオウの事、頼んだわ」

そう言つて馬を駆り砦を去っていくレイナ様を見送りながら、ああこの方、拳王様とはお名前を呼び捨てにできる関係だったんだなど、割とどうでもいい事を考えていました。

「……ソウガは病に侵されておつたのだ。

だからリュウガの策にも乗つたのであろう。

奴は病よりも、戦いの中に斃れることを望み、その通りに逝きおつた」

その夜、砦の建物の屋上でそう言つた拳王様の、代わりに泣くような星が一筋、見上げた夜空に流れました。

☆☆☆

「……そばゆい。息を吹きかけるな」

「そちらではない、もつと下、その反対側だ。」

同じ箇所ばかり擦つてどうする」

「もつと丁寧に扱え。」

「……ここは身体の中でも、鍛えることのできぬ繊細な場所だ」

「…そう。そうだ、上手いぞ。それで良い。

フツツ、やればできるではないか。

うむ。ようやく心地良くなってきたわ」

「……け、拳王、様？」

「……………ん？」

…この砦にやってきてから数週間。

ザク様が拳王様に御目通りを求め通されたのは、わたくしが拳王様の耳掃除をしているタイミングでした。

…いえその、実はその前、居城とは比べ物にならない簡素な内容の夕食を済ませた後で、この砦に備蓄してあるワインを一本持って来るよう、拳王様が兵士のひとりに命じたのです。

ですが、まだ怪我が治りきっていないのだからと、わたくしが却下しておりまして。

少し機嫌を損ねた拳王様（子供か!!）に仕方なく、この砦に滞在してからはまだ行なっていないかった膝枕を申し出たら、どうせならばと命じられたもので。

「ザク様。お久しぶりにございます」

入ってきた瞬間、明らかに見てはいけな_{みひら}いものを見たような顔をしていたザク様に、

ここは狼狽えたら負けだと判断して先に御挨拶いたしますと、ザク様は目を瞠_{みひら}いてわた

くしを凝視しました。

「……リア殿か!?」無事だったのですな!

リュウガ將軍に拐われたと聞いておりましたが」

…そういうえばザク様は、リュウガ様とソウガ様が居城にて戦われた際、カサンドラ方面に出向いており、あの場にいらっしやいませんでした。

おふたりのこの度の計略について、レイナ様同様聞かされていなかったのでしょうか。

というか、ならばリュウガ様に早々にネタバラシされて連れ出されたわたくしの立場って一体…?」

まあそんなこんなで説明が面倒だなと少し考えていたら、拳王様に『力を抜け、固いと文句を言われました。

どうやら無意識に身体に力が入ったようです。

「…おれが居らぬ間を繋がんが為の、リュウガとソウガが仕組んだひと芝居に巻き込まれたそうだ。

おれが居らねば危うい立場の女ゆえな、それも仕方あるまい。

それよりザクよ、どうした。なにかあったのか」

わたくしの膝から、わたくしに代わって答える拳王様のちよつとめんどくさそうな問いに、ザク様は跪きながら、何かはわからないけど確実に何かを諦めたような目をして

答えました。

「は……ケンシロウが、サウザーに戦いを…」

「なに!!」

さつきまでの気怠げな態度は何処へやら、一瞬にして緊張感を纏った拳王様が身体を起こし、わたくしはその勢いで床に背中をぶつけます。痛い。

「なにを寝転がっておる。」

リア、すぐにおれの外出そとでの支度をせい!

クツ、馬鹿め!

まだ早い! やつではサウザーには勝てぬ!!」

…寝転がったわけではなく、それまで膝に乗ってた誰かさんの頭の重みが、急になくなった反動なんですけどね!

どういう状況なのかまったくわからないまま、命じられるままに簡単な身支度を整えて、ザク様と黒王と拳王様を送り出したわたくしは、薬や替えの包帯の用意をしておくことにしました。

まだ拳王様のお身体は完治されてはいないのです。

あの様子では何かあつて、傷が開くことにならないとも限りませんから。

無茶をされなければいいのですが。

……ですが、わたくしがそれらを使い手当てを施したのは、数時間のちに戻られた拳王様御本人ではありませんでした。

「さすがだな。用意がいいではないか。

ならばこの男の手当てはリア、うぬに任せる。

……こやつにはこの拳王の為、サウザーの身体の謎を解いてもらわねばならん！」

そう言われてわたくしの前に横たえられた血塗れの男性こそは、北斗神拳正規伝承者にしてこの世界の主人公、ケンシロウだったのです。

そういえば確かに、一度サウザーに挑んで敗れたケンシロウが、ラオウに助けられるシーンがありましたわ。

つまり、今がその場面なのでしょう。

てゆーか拳王様、自分で調べる気ゼロなんですのね。

ちなみに聖帝サウザーにケンシロウが敗れたのは、臓器や秘孔の位置が全て左右逆だったから、みたいな理由だった筈です。

シユウがケンシロウに『南斗聖拳ではサウザーを倒せない』的なことを言ってた記憶があるのですが、こういう特異体質っぽい敵の場合、むしろ北斗神拳よりも南斗聖拳の方が相性いいんじゃないかと思つた事も覚えております。

……それにしても。

止血の為の秘孔は押してあるとの事でしたので、纏わりついていてるだけの布切れと化したシャツは切つて捨て、血と泥にまみれた身体を綺麗に清拭して、兵士の方々にも手伝つていただいて然るべき処置を施しながら、しみじみ思います。

こうして見るとケンシロウ、イケメンですわね。

しかも、普段拳王様を見慣れているわたくしからすると、非常に目に優しい気がします。

拳王様基準を捨てて見れば、普通に背も高く手脚も長いし。

いえ、わたくしの好みは勿論拳王様なのですが。

…あ、結構まつげ長い。

「ユリア……」

ん？

このイケメン主人公、今、何か眩きましたわね？

と思つていたら突然、ガシツと手を掴まれ、

「えっ!? ……きや」

いきなり腕を引かれ、バランスを崩したわたくしの身体は、唐突に身を起こしたケンシロウの腕に、一瞬にして抱きこまれました。

「ユリア…来て、くれたのだな…い」

…あ、これ完全に寝ぼけてますわね。

まさかあの冷徹無表情DS主人公が、実は寝起きが悪いタイプだったとは知りませんでした。

そして、

ガコオツ
!!!!!!

…次の瞬間、なにやら衝撃と共にケンシロウの身体が足元に沈み、その側に、デカい拳を握りしめた拳王様が立っております。

あの…わたくしの見間違いでなければ今、拳王様、ケンシロウの脳天にげんこつ落しませんでした？

「……………もたもたするな。」

こやつが眠っておる間に、さっさと済ませてしまえ」

「いやいや今明らかに、拳による実力行使で眠らせましたわよね!?

むしろ眠ってるではなく、気絶してますわよね!?

「この拳王の女に手を出そうとしたのだ。」

この程度ならば、逆に温情が過ぎるというものであろうが」
「今の感じからすると寝ぼけただけでしよう!？」

「というか、今ので治療すべき箇所、いっこ増えましたからね!」
「問題ない。いいからさっさと済ませろというのに。」

「終わったらまた、元のところに捨ててくる。」

「…念のため言っておくが、おれの時のような保温は必要ない」
「いやそこは必要あるわ!」

「放り出すつもりならば毛布か、せめて新しいシャツの1枚なりとも着せて差し上げて下さい!!」

「てゆーか、助けたいのか殺したいのかどっちなんですかの!!?」

「フ…その質問に敢えて答えるなら、両方やもしれぬな……!」

「ちよつとかつこよさげに答えてますけど誤魔化されませんかからね!？」

「よくばるんじやありません、どっちかひとつにしなさい!!」

「リ、リア殿。毛布とシャツを持って参りましたので、もうそのくらいで」

「気がついたら妙な言い合いになっているわたくしと拳王様の会話に、焦ったように割って入ってきたザク様の手を借りて、新しいシャツを着せた(サイズは少し大きかったのですが逆に着せやすかったです)ケンシロウを冷えないように毛布で包んだ頃に

は、東から朝陽が昇りかけておりました。

…よく考えたら、初めて顔を合わせた頃からは考えられないくらいわたくし、拳王様に言いたい放題言ってますわよね。

ザク様は、これ以上わたくしが拳王様のお怒りに触れないように、気を遣ってくださいだったのでしよう。

顔は厳ついですが優しい方なのですわ。

もつともその拳王様はといえば、ザク様がちよつと慌ててたっぽいのに気がつくど、「構わぬ。何を言い出すか判らないところも、おれがこやつを気に入っておる理由のひとつよ」

とか笑って仰っていましたけど。

・
・
・

「…あの男はケンシロウといい、先の戦いで拳王様に、リア殿も目にされたでしょう、あの傷を負わせた男です。

拳王様にとっては、かつて拳を争った相手であり、義弟おとうとであり、いずれは倒すべき宿敵でもあるのです。

ですが、拳王様自身決して口には出されませんが、共に育ち拳を学ぶ過程で、兄としての感情を、全く抱かなかったわけではないのでしよう。

彼奴に対しては、様々なものの混じり合った、複雑な思いを抱いておる筈です。

今回はケンシロウに、サウザーの謎を解かせる為とは仰いましたが、なればこそ聖帝ごときに殺させるわけにはいかないというのも、偽らざる本音でありましょうな」

先の宣言通り、手当てが終わったケンシロウを乗せて黒王を駆る拳王様に、今度は同行せず砦に残されたザク様が、そう説明してくださるのを、わたくしはどこか遠くに聞いておりました。

拳王様は、この先に待ち受ける御自分の運命にある程度気付いて、それに精一杯抗おうとしていらつしやるのかも……ふと心を掠めたそんな思いに、その時のわたくしは、深く、とらわれていたのです。

それからまる一日経った朝。

聖帝軍が動き出したとの情報が砦に入ってきました。

「どうやら聖帝十字陵が完成間近で、サウザーはそれを機にレジスタンスを一掃するつもりようです。」

「…あれが完成してしまえば、奴らの士気が最高潮に高まるであろうが、今は仕方がない。」

「おれの身体も、完全に癒えるにはもう少しかかろうし、ケンシロウも今は動けぬであろう。」

「奴らを叩くのは、後でもいい」

「拳王様がそう仰った為、十字陵付近は凄惨な戦いになっているのでしようが、砦の周辺は静かなものです。」

「わたくしと拳王様が砦の物見台の上で、見えもしないその方向を何となく眺めていた時、息を切らせて階段を駆け上ってきたザク様が、拳王様の前に跪きました。」

「ケンシロウが、再び聖帝のもとに向かいました!!」

どうやらレジスタンスの拠点を見張らせていた兵から伝令があったらしく、一瞬にして緊張を纏わせた拳王様が、座っていた椅子から立ち上がります。

「バカめ……なぜ死に急ぐ、ケンシロウ。」

まだサウザーの体の謎を解いてはおるまい」

確かこの時ケンシロウは、シユウの拠点に回収された後で一度目を覚まし、その後また薬で眠らされて地下水路から逃がされていた筈です。

その後サウザーとの戦いにシユウが敗れ、その魂の叫びによって目を覚ました流れの筈ですので、今はシユウが深傷を負った状態で聖帝十字陵を登るといふ、ストーリー中屈指の号泣シーンが展開されている最中なのでしょう。

となるとこの後、拳王様はケンシロウとサウザーの戦いを見届けるべく、聖帝十字陵へと向かうのでしょうか……

「だが……二度は助けぬ!!」

…一度は立ち上がったものの、わたくしの視線に気がついた拳王様は、何故か元どおり椅子に戻っておしまいになられました。あれえ？

「…なにをボーツと見ておるのだ。」

暇ならおれの膝にでも座るか、飲み物でも持つてくるが良い」

「かしこまりました」

今何かサラツと変なこと言われた気がしますが、これは飲み物の所望であると解釈して、わたくしは一礼してその場を下がります。

…いやだつて怪我人の膝の上に座るなんてできる筈がないでしょうに。

拳王様の冗談は判りづらくて困りますわ。

…しかも、なんで舌打ちしたんですの今。

☆☆☆

「リアさん！」

敷地内の井戸から水を汲み上げているわたくしの背中に聞き覚えのある声がかかり、振り返ろうとした刹那、背中から固いものに抱きつかれました。

「久しぶりだな、元氣だったか？」

その声が聞こえる位置に、無理くり顔を振り向かせると、そろそろ懐かしい顔が微笑んでいるのが目に入ります。

別れた時点で既に大きくなっていったのに、あの時より更に顔の位置が高いようです。

「…ええ、おかげさまで。」

あなたも元氣そうで何よりですわ、バラン」

「良かった。」

ちゃんとオレの顔を覚えていてくれたようだな」

「忘れるわけがないでしょう？」

拳王軍を離れた今も、あなたの事は、わたくしの弟のようなものだと思っていてよ。

：けど、最後に見た時よりも、随分と遅くなりましたのね」

背丈だけでなくその顔も、部品の形も配置も変わらないのに、女の子のようだった可愛らしさが、男らしい精悍さに、確実に変わってきています。

「弟、ね……まあ、いいけど。で、どうだ？」

オレも少しはあなたの言う『いい男』になれたか？」

「それは、もう少し大人にならないとなんとも」

軽口に軽口で返しながら、思春期男子の成長速度に驚異を感じると同時に、やはり男の子は大きくなると可愛くなくなるのだと、その瞬間のわたくしは、割と失礼な事を考えておりました。と、

「バランス。感動の再会も結構だが、目的を忘れてもらっては困るぞ」

「先生」

わたくし達の更に後ろから、落ち着いた大人の声が聞こえてきて、バランスがそれに答えます。

わたくしも振り返ろうとしましたが、背中から抱きついたままのバランスが邪魔で見えません。

わたくしのそんな様子に気がついたものか、落ち着いた声はフツツと小さく笑い声を発しました。

「そういうところはまだまだ子供だな、バラン」

「えっ!？」

「まあ、子供だから許される距離というものもある。

どちらを選ぶかはおまえ次第だが、彼女に一人前の男として認められたいと思うのであれば、まずは一旦子供の距離を、卒業しなければいけないのではないかな」

「うっ……わ、わかりました……!」

その声に促され、バランがようやくわたくしから手を離します。

ようやく振り返ると、そこには思った通りのひとが、優しげな微笑みを浮かべて立っていました。

「はじめまして、リアさん。

わたしの名は、トキ。……弟子が、失礼を」

それは間違いなく、北斗四兄弟の次兄にして、拳王様の血の繋がった弟であるトキその人でした。

けど穏やかにそう言いながら、わたくしに頭を下げるその男性は、頭には白いものが混じっているものの髭は綺麗にあたらられていて、スツキリしたお顔は不思議とわたくし

が知っている姿よりも若く見えます。6話でも説明した通り、本来の流れであれば途中でトキに成り代わるアミバを別人と見破ってバランが始末してしまつた事と、奇跡の村の存在がやはりバランによつてカムフラージュされた事で、この時空のトキはカサンドラに投獄されてません。

ラオウも最初はそのつもりでトキの行方を搜索させていたものの、あまりにも見つからないので途中で諦めました。

更にトキ不在時に起きる筈だつた奇跡の村の悲劇も、お留守番のバランがいた為に回避されており、それによる深い絶望も味わつてません。

そんなわけでこの時空のトキの病は、進行はしているものの原作よりやや遅いのです。

「リアさん。

この人が手紙にも書いた、オレの師匠だ」

「貴女の事は、バランからよく聞かされている。

なんでも、拳王の信頼の篤い女性かたであるとか。

…なれば、お会いして早々に不躰で申し訳ないが、どうかラオウ…拳王に、トキが会いに来たとお伝え願いたい」

トキ様がそう言つて頭を下げるのに、わたくしは一瞬狼狽えました。

この方は拳王様に、一応は敵対する立場である筈です。

バランも今は拳王軍を離れておりますし、女官の立場としては、まずは本人よりもザク様か、最低でも兵士の方におうかがいを立てるべきなのですが、そうしてしまつと2人の身の安全が危ぶまれることになります。

「それは…」

「その必要はない」

ですが、逡巡するわたくしの言葉を遮つて、拳王様本人が姿を現します。

…飲み物を持ってくると言つて少し時間がかつたのは認めますが、井戸から冷たいお水を汲んでくるまで、おとなしく待つていられなかつたのでしようか。

いえ、この場合は助かりましたけれども。

「バランよ、久しいな。」

うぬが、トキと共にいるとは思わなんだぞ。

…それにしても、よくここがわかつたな。

この砦はまだ、バランに教えていかなかつた筈だが」

「フツ…死期が近づくと何故か勤が冴えてな」

睨みつける拳王様の肌を刺すような視線を、受け流すようにトキ様がふわりと微笑みます。

「実の弟であるからかもしれないませんが、この方の心臓はどうなっているのでしょうか。拳王様、御無沙汰しております」

そしてもう一人、心臓に確実に毛が生えているのだろうか、拳王軍で習った礼を拳王様に向けて取り、何やら妙な間が、二人の間に流れたのがわかりました。

ですが、次の瞬間にはまたトキ様の穏やかな声が、その妙な間に割って入ります。

「リアさん。わたしは、ラオウと話がある。」

話し相手にバランスを残して置くゆえ、暫し席を外していただけるだろうか」

そして、柔らかな物言いと態度でありつつ割と強引に話を進めるトキ様の言葉に、わたくしは思わず拳王様に視線を向けました。

「……ついてこい、トキ。話の中で聞く。」

リア。うぬはバランスと共にここで待つが良い」

「かしこまりました」

判断を拳王様に丸投げする形でわたくしは一礼して、砦の中に入っていく二人の背中を見送ります。

そう、わたくしは拳王様の女官ですもの。

主を飛び越してお客様の要望を聞くわけにはいきませんわ。

と、そのままトキ様を伴い建物の扉をくぐっていくかに見えた拳王様が、一度こちら

を振り返りました。

「…ケンシロウの時にも思った事だが、うぬは無防備過ぎる。

他の男などに、その身を易々と触れさせるでないわ。

ましてや、下心のある相手に対してはな」

「はい？」

ケンシロウさんに抱きつかれた時、あの方は寝ぼけていただけで、別に下心はなかったと思いますけど!?

わたくしが混乱して、心の中だけで激しくツツコミを入れてる間に、拳王様は、今度はバランへと向き直ります。

「バランよ。

判っているとは思いますが、リアそれはまだおれの女だ。

おれに挑んで勝つまでは、適切な距離は保て」

「承知致しております」

物理的な力さえ持つと錯覚するくらい強い視線で、拳王様はバランを睨みつけてそう仰いましたが…：…当のバランはやはりそれを、師匠と同様に涼風のように受け流して一礼しました。

いやなんなんだこの師弟。

「というか拳王様、『適切な距離』とか仰るあたり、先ほどまでの会話を聞いていらつしやったのですわね。」

「けど、バランスの下心って…?」

「彼は、子供と言われて凹む程度にはまだ子供ですし、それこそ誤解ではないかと思ひますわよ?」

「…拳王様の出陣の準備、しておいた方がいいぞ。」

「オレも手伝う。」

「黒王の支度の方が時間がかかるだろうしな」

「2人の姿が今度こそ砦の中に消えたと同時に、バランスが服の袖を捲りながら、わたくしの背に声をかけました。」

「え?」

「トキ先生はそのつもりで、拳王様に会いに来たんだ。」

「2人はこれから、聖帝十字陵へ向かう。」

「どうやらうちの師匠は、聖帝の不死身の肉体の秘密を御存知らしい」

「……思い出しましたわ!」

「ラオウが聖帝十字陵へ赴くのは、トキがそれを知っていたからなのでした!!」

「ケンシロウを倒したと思ったサウザーに、『おまえの体の謎はトキが知っておるわ』」

と、自慢にもならないことをドヤ顔で言ったシーン、ネットで割とつまれてた記憶が確かにあります！

……バランが言った通り、トキ様に促された拳王様は、わたくしに支度を命じられました。

そして、バランがしつかりと鞍を付けて連れてきた黒王の背に、まだ治りきらぬ傷を武装の下に隠したお身体を、そのようなことは微塵も感じさせぬほどの覇気で包んで、堂々と駆けていかれたのでございます。

ちなみにトキ様とバランは、ここまで車でやってきたそうで、バランが運転して聖帝十字陵へ向かうようです。

ええ、わたくしは勿論お留守番ですわ。

・
・
・

……数時間後、なんだか納得いかない表情で戻ってきた拳王様は、兵士の方々を集めると『うぬらは遅くとも3日のちにはここを出立し、居城に戻れ』と命令されました。

拳王様御本人は、ザク様をはじめとする側近数名を連れて翌日に発ち、道々数件の用事を片付けながら向かうとの事です。

なんでも聖帝サウザーが倒された直後に、これまで互いに不干渉という約束を交わしていたUD軍が現れ、『これより我らは南斗軍の傘下に入る』という宣言をかましたそう

で、その辺の対策を早急にとらねばならないのですが……はて？

物語では、ケンシロウとサウザーが戦った時には、既にユダはレイに倒され、彼の組織もそれと共に壊滅していたと思うのですが？

ていうかそもそも南斗軍って何!!?

……ともあれ、この砦は進軍の為に中継地点としてまだ使う予定ですが、あくまでも廃村というカムフラージュが必要との事で、最低限の物資しか残さずあとは撤収するそうです。

という事は、少なくとも明日ー日は撤収準備に忙殺されるものと覚悟して、とりあえず明日発つという拳王様の衣類や装備、その他身の周りのお世話をするのに必要な一式を纏めておきましょう。

わたくしは他の兵士さん達との同行となりましようが、それらをザク様に託しておけば、拳王様が道中、不都合を感じる事態にならずに済む筈ですから。

……と思ひ末端兵士の皆さんと作業をしておりましたら、突然現れた拳王様に、部屋へ強制連行されました。

「あの、わたくしは拳王様の明日の出立の準備を……」

「それは兵士どもに任せておけば良い。

うぬにはうぬの仕事があろう」

そう言われて、寝台に座らされて：ひよつとして、膝いつものやつ枕所望という事でしょうか。
 「拳王様は明日はお早いのですし、そのままお休みになられた方が：」

あれをやると大体夜更かしになってしまうので、さすがに今夜は止めた方がよいのでは。

そう思いやんわりと断ろうとすると、何故か拳王様の腕の中に引き寄せられます。

「うぬも同じだ。いいから横になれ。」

…このところ、うぬの身体が傍にあるのが普通になって、離れると何やら落ち着かぬ」

「は？」

そして気がつけば、わたくしは押し倒されるように寝台の上に横たえられ、拳王様のむき出しの固い胸筋と腹筋に、身体をびったりと押し付けられておりました。

この世界では見たことがありませんが、抱き枕状態というやつです。

「しかも目を離すとすぐに男に言い寄られる上に、おのれにはその自覚もないときた。

リュウガも、他の者には任せられぬと自らこちらに連れてきたそうだが、確かにこれでは危なくて、手元から離しておけぬわ」

ええと。拳王様がなんのことを仰られているのかさっぱり判らないのはさておき：要するに。

「…明日、わたくしもお供させていただけられるのですか？」

てつきり他の兵士の方々と一緒の移動になると思っておりましてので、驚いて訊ねてしまいました。

わたくしの問いに拳王様は、何故か苦笑いのような表情を浮かべます。

「そつちか。…いや、そう言った。だからもう寝ろ。」

…もつとも今からおれに抱かれて、腰も立たぬ状態のまま黒王の背に揺られたいと言うのであれば、おれは構わぬが」

「おやすみなさいませ、拳王様」

拳王様の不穏な台詞に、まるで子供の頃母親に『早く寝ないとおばけがくるよ』と言われた時のように、わたくしはその腕の中でぎゅつと目を瞑りました。

「新血愁を突いた者は、3日のうちに死に至る筈……何故、あの男は生きていた？」

南斗軍とは……南斗最後の将とは一体……!？」

互いの吐息すらかかる距離で、拳王様がそう呟いた事など、既に眠りに落ちていたわたくしには、知る由もありませんでした。

……ここに来ていきなり台頭してきた南斗軍とは、『南斗最後の将』と呼ばれる者が率いる軍で、どうやらK I N Gを吸収して（!?）それまでサザンクロスと呼ばれていた街を『南斗の都』と改名し、そこを拠点として活動している新勢力だそうです。

そこに更にUD軍が傘下に加わり、聖帝軍が瓦解した今、この拳王軍に対抗しうる最大勢力と言えるでしょう。

……………ええと。

ユダの軍がまだ機能している点も気にはなりますが、『南斗の将』って、つまりあの方ですわよね？

わたくしと名前は似ておりますが、わたくしのようなモブとは違う、正真正銘この世界のヒロイン、ユリア様。

五車の星を従え、北斗と結ぶ事で世に平和をもたらず宿命を持って生まれた、慈愛の女神。

その慈母の魂は、愛を知らぬ霸王の心に愛と涙を刻み、けれどその肉体を病に冒された彼女は、真の平和を見る事なく、その短い一生を、愛する人の腕に抱かれて終える。

…タイミング的には、その存在がクローズアップされるのはもう少しあとではないかという気がしますし、それ以前に細かい部分が、わたくしの知っているお話とは違ってきております。

これは一体どういう事なのでしょう？

…というような事を考えつつの旅程は、わたくしが砦に連れられてきた時よりもゆつたりとしたものでした。

「こやつは、おれの傍に侍っておる状態が一番安全だ」

はじめのうちはそう言う拳王様と一緒に、黒王の背に乗せられて移動しておりましたが、途中でわたくしが振動に酔ってしまった為、ザク様が拳王様を説得して、今は車に乗せられているからです。

朝食べたものをもどしてしまい、ぐったりしたわたくしを、何故かザク様が甲斐甲斐しくお世話してくださいます。

「落ち着かれましたら水をどうぞ、リア殿。」

ああ、そのまま。無理をなされませぬよう。

今が一番大事にせねばならぬ時ですからな。

周りが男ばかりで心許ないでしょうが、居城に着けば直ちに女官たちを付かせますゆえ、今しばらくは御勘弁を。

何かございましたなら、どうぞ私にお申し付け下さい。

私の妻も最初の子を宿してすぐの頃は、吐いては寝込むを繰り返しておりました。

私ならばその時の経験がある分、少しはお心に添えましょう」

…なんか変なこと言われている気がいたしますが、今は追求する元氣もございません。

日中は移動、夜は野営という行程で進んできたふた晩め、ザク様付きの兵士の方が設営してくださったテントの中で（だいぶ調子が戻っていたのでなにかお手伝いしようと思し出たところ必死に止められました。人手も少ないのに何故なのでしょう）与えられた食事をとって就寝の支度をしておりましたところ、昨日車に乗せられて以来顔を合わせていかなかった拳王様が入っていらっしやいました。

…わたくし一人入れるにはこのテントだけ随分広いとは思っておりましたがそういうことでしたか。

それはさておき拳王様は、よく見れば着ているものに、血のような染みがついております。

わたくしが怪訝な顔をした事に気がついたのでしょうか、拳王様は口元にどこか渴いた笑みを浮かべながら、言い訳のように言葉を続けました。

「案ずるな、返り血よ。傷は癒えた。

それをはかれる相手のところに行ってきただけだ」

「つまり、少し離れております間に、どこぞで一戦交えてこられたわけですね……」
……てゆーか、ええ。

今その『傷は癒えた』のフリーズで思い出しましたわ。

そう、確かサウザーが斃れた直後くらい Тайミング で、先代の北斗神拳の継承者で、北斗四兄弟の師父でもあるリュウケン様に何かしらの縁のある方を、倒しに行くエピソードがあつた気がします。

多分今がその直後ということなのでしょう。

だとすれば次はトキ様との、宿命の兄弟対決が行われる頃かしら。

それは拳王様にとっては弟との、更にバランにとつても師との永遠の別れの時が、近づいているという事に他なりません。

「うぬには、兄弟姉妹はおるのか？」

「えっ？」

そんな事を考えていたら、まるで心を読まれたようなタイミングで、拳王様にそんな事を問われました。

唐突な問いこのタイミングでのラオウのこの質問は、コウリュウさんを倒した後、彼の2人の息子に対して言った言葉（『兄弟ならば違う道を歩むがよい』ってやつ）に、自分自身が打ちのめされていたからです。に間抜けな声が出てしまいました、すぐに気

を取り直して答えます。

「…故郷の街に、年子の弟がひとり。

正確にはその下に妹がいたようですが、生まれた直後の赤子の頃に、同時期に子を亡くしたという母方の遠縁に養子に出され、わたくしも弟も、妹とは会った事もございませんわ」

…これ、実はわたくしが居城に召し上げられる前日、母がこっそり教えてくれた話なのですが。

その妹というのは、わたくし達姉弟がまだ幼く手のかかる頃に、父が商会の女性従業員に手を出して生ませた子でして。

そもそもその関係自体が合意ではなかったそうで、本人は誰にも相談できぬまま月齢だけが過ぎてしまい、墮ろせなくなった頃に母が気がついて問い詰めたのだそうで、最初は激怒していた母も、事情を知るにつけ彼女に同情するしかなくなったらしいですわ。

結局、出産後すぐに彼女を父から逃がして、生まれた子供は一旦引き取り、片田舎の村にある母の遠縁の家に養子に出したのですが、聞いたところによればほんの幼児の頃になにやら予言めいたことを口にするようになって、そこからまた別なところに引き取られたそうで、今どこにいるかはわからないそうです。

…まあ、そんなことはどうでも良いですわね。

「……妹、か」

わたくしの話を聞いて、思いのほかしみじみと、拳王様がそう呟きます。

「…おれの末の妹も、別れた頃は赤子であった。

兄と共に居る故、生命の心配はなかるうが、おれの事は存在すら知らぬであろう」

「え!?!」

「ん?」

ちよつと待って。今何か、衝撃的な事実がサラツと告げられた気がいたしますが？

「拳王様に、お兄様と妹さまがいらつしやつたのですか?」

「何をそんなに驚く?」

うぬの家族と状況は似たようなものよ。

おれと弟が養子に出され、長兄と赤子の妹が故郷に残つた。それだけの話だ。

…ああ、言っておらなんだが、先日バランスが連れて訪ねてきたあのトキが、おれの実

弟だ。

あやつも、上の兄や妹の存在は、臆げにしか覚えておるまい」

それだけの話って!

というか、『ラオウ』って完全に長男だと思つてたんですけど実は次男だったんですの

ね!!

…というか、ここまで来ると疑いようもなく、わたくしが読めなかった『北斗の拳』の、残りのストーリーのどこかに書かれていたお話なのでしょう。

ぐぬぬ、今更どうしようもないことですが、最後まで読めなかったことが悔やまれま
すわ。

それに…そうであるならば、今こうして懐かしく思い返したであろうお兄さんと妹さ
んとは、再会することなく拳王様は天に還られるという事になります。

物語の展開上仕方ないとはいえ、登場人物全員が身内の縁が薄いとか、なんだかど
も切なくなりますわ…。

「…それで、子ができたというのは本当か？」

「はい?」

…と、またもや身内の縁とか考えていたタイミングで問われ、一瞬わたくしは機能停
止いたしました。

拳王様はわたくしの心でも読んでおられるのでしょうか…? ってそうじゃなくて!

待つて今なにかとんでもない事言われてません!?

「……………いやいや違いますわよ!

一体、誰がそんなことを!」

本当か、という訊きかたをしてきたということは、どなたかから聞かされたということでしょう。

そう判断できる程度には冷静さを取り戻して、なんとか再起動を果たして頭をぶんぶん横に振り：ちよつとくらくららいつつ爆弾を投げ落としてきた実行犯を見上げますと、その顔はなんだか困ったように微笑んでおります。

「……ザクめ、早とちりしおつて。

確かにおかしいとは思ったのだ。

おれがうぬに手を出したのはあの日の一度のみであるし、それで孕んだにしても、兆候が出るには早すぎるであろう」

ああ、そういうことでしたか！

黒王の振動で酔ったわたくしを、ザク様が過剰なほど心配してお世話してくださいますしたのは、わたくしが拳王様のお子を身籠っていると思ひ込んだからでしたのね！

確かに居城でわたくしは事実上、拳王様のお手付きとして扱われてはおりましたし、石抱k：膝枕を所望された翌朝、拳王様のお部屋を出たところでザク様と顔を合わせた事も、何度か、確かにございましたが……拳王様が実際にはわたくしに手をつけられていなかったこと、確かりユウガ様はご存知でしたから、幹部の皆様は全員知ってらっしゃると思っておりますわ。

なんですの、拳王様のザク様への扱い、最近ちよつと雑過ぎませんこと!?

てゆーか、今思えばあれも、わたくしが拳王様のお部屋を出たのと同じタイミングでザク様がいらつしやっていたのではなく、わたくしのお召しがあった次の朝だけは、間違つても寝台で肌を晒しているわたくしを目にする事のないよう、衣服を整えて出てくるまで、扉の外で待つてらつしやつたという事なのでは？

……つて、そうと判つたらメツチャ気まずいわ!

次ザク様に、どんな顔して会つたらいいか判らんわ!!

…コホン。失礼いたしました。

「そもそもおれが手をつけた時、うぬは確かに生娘であつたからな」

「……っ!!」

わたくしが恥ずかしさに悶絶しておりますと、拳王様が更にわたくしの羞恥心を煽るような事を言い始めます。

居た堪れなくなり、反射的にその場から逃げ出そうとするわたくしを、拳王様の腕が捉えました。

「ビィン」へ行く。

おれの傍以外に、うぬの居場所などあるまい」

抵抗など意味をなさず、あつさりわたくしを閉じ込めた両腕は、そのまま押し潰さ

んばかりに、わたくしの身体を締めつけてきます。

「このラオウの横におるなら、その心の裡で誰を愛そうが、どんなに汚れようが構わぬ。だが、おれから逃げることだけは許さん。

……逃げるならば、殺す。

それだけは、肝に銘じておくが良い」

…思いのほか余裕なく耳に囁かれたそれは、確か物語では、ユリア様への想いを語つた際に、言つた内容の言葉ではなかつたでしょうか。

かつては紙の上で『見て』、今は自身の耳で聞いたその言葉に、天を握る男の抱えた孤独が、ある意味、集約されている気がしました。

愛を知らない男は、優しく抱きしめることも知らない。

恐怖で支配するか殺すしか、心が求める温かいなにかを、繋ぎ止める手段を知らないのです。

…そして、その言葉が恐らく、真にわたくしに向けられたものではない事も、その瞬間に理解してしまいました。

…だから。

それ以上聞きたくなくて、気付けば思わずわたくしは、自身を抱きすくめる拳王様の腕の下から手を伸ばすと、その大きな手に自身のそれを重ねます。

「わたくしは、貴方様から離れません。

……むしろ、いざれわたくしを捨てるのは貴方様の方ですわ」

…次の瞬間、自身の口から出てきた言葉に、わたくし自身、内心で驚いてしまいました。

たとえば死が分かつ運命であるとしても、わたくしはその瞬間まで、この方のお側に仕える事になるでしょう。

そもそもわたくしは拳王様への貢物としてお側に上がった身。

仰る通り、行き場所など他にないのです。

けれど、拳王様の御心はユリア様のもの。

今はまだ『南斗最後の将』の正体が判明しておらず、かの方が亡くなられたと思つて
いるから、その面影をお忘れになろうとわたくしに縋っているに過ぎず、先の未来でこ
本人が登場された際には、諦めるために抑えつけていた恋心が、一気に蘇ってしまうの
は目に見えております。

…考えておりましたら、鼻の奥が痛くなってきました。

泣きません。判つていたことですもの。

わたくしはできた女官なのです。

わたくしの言葉を聞いた拳王様は、少し考えるようにそのまま固まっております

が、やがて締めつける腕の圧を緩めると、わたくしの身体を裏返して自分に向けさせました。

「…何ゆえ、おれに捨てられると？」

「…拳王様は、わたくしを見てはおられませんから。」

わたくしの名を呼びながら、心は遠く、他のどなたかを見ていらつしやる。

…わたくしはただの女官ゆえ、己の分は弁えております。

拳王様がわたくしを要らぬと仰った暁には、潔く身を引く覚悟は…」

…全てを言い切る前に、後頭部を掴まれるように引き寄せられたかと思うと、熱い唇が、噛みつくようにわたくしのそれを塞ぎます。

引き抜かれんばかりに舌を絡められ、ようやく唇が離されたのは、呼吸困難で意識を奪われる寸前でした。

「どつして……」

拳王様の腕のなかから、わたくしはなんとかその顔を見上げて、問いかけます。

少し咎めるような口調になってしまった事は、わたくしの今の心境的には、仕方ない事と思いますわ。

わたくしの問いかけに、拳王様はその場に腰を下ろし、わたくしを膝の上に、横抱きに座らせる形で抱えました。

「煽ったのはうぬであろう」

「わたくし、煽ってなどおりません」

「あれで煽られぬ男がおるなら、お目にかかりたいほどだがな。

自覚がないのがまた始末に負えぬ。

うぬが何を憂いておるか、おれには判らぬが……もう泣くな」

……なにを言っているのでしょうか、この方は。

ですが、我慢した筈の涙が、気がつけばわたくしの頬を濡らしており、反射的に拭おうとした手が、拳王様の大きな手に阻まれたかと思うと、分厚い胸に頬を引き寄せられました。

「……うぬが嫌なら、これ以上触れはせぬ。

……が、こうあってもうぬが決して、おれを拒まぬと思っているのは、ただのおれの願望か」

腕に再び閉じ込められて、熱い吐息と共に囁かれた言葉に、わたくしは首を横に振り
ます。

「……嫌ではございませんが、怖い、です」

「怖い……今更？」

「……貴方様をこれ以上、好きになってしまふことが。」

貴方様の愛を、望んでしまう自分が。

その御心の渴いた愛の器を、わたくしが満たしたいと思ってしまう、浅はかなこの心が、何よりも」

「……もう黙れ」

自分で聞いたくせにと反論する暇も与えられず、わたくしの身体の上に、大きな身体が覆い被さつてきました。

腰紐がしゆるりと音を立てて解かれ、袖のない女官服の肩を落とされて、とりたてて小さくはないもののたいして大きくない胸が露わになります……つてやかましいわ。

……わたくしは、そこからは一切抵抗しませんでした。

ただひたすらにこの肌を求めてくる、その熱い腕に身を任せただけです。

☆☆☆

………次の日。

「背比べの跡か……」

……ええ、もうこの状況、これから何が起こるか、わたくしには判っておりません。

判っております、が……

なんでわたくし今、この場面に居りますの？

明らかに場違いではありませんこと!?

「拳王様……この場所は」

共に迎えた朝も早く、珍しくわたくしより先に目覚めた拳王様に外出そとでの支度を急かさ
れ、身支度を整えたその背を見送ろうとしたら、まるで拉致されるように黒王に乗せら
れて、なんだかわからぬまま連れてこられたこの場所を、わたくしは思い出しました。

一応確認の為に訊ねましたが、そこは確かラオウとの決着をつける覚悟を決めたトキ
が、ケンシロウ（と、バットとリン）を連れてきた場所の筈ですわ。

先程通り過ぎたところから見えた、なにか壊れた石造りの寺院のような建物の前に墓
碑が4本、些か詰めすぎではないかと思うくらいの間隔で並んでいたのが、原作でトキ
が両親と自分と兄の墓だと説明したものでしょう。

いまわたくし達がいるのは、そこを見下ろせる崖沿の道を登った先です。

切り立った岩壁に、子供が背比べの為に刻んだらしい傷がうつすらと見えており、黒
王の背から降りた拳王様は、そこに指先を当てながら、見たことがないような切なげな
表情を浮かべておりました。

わたくしの問いに、拳王様は視線を上げ、ゆつくりとそれをわたくしに移しながら答

えます。

「……ここはおれと弟が、故郷への思いを葬った地よ。

あちらに墓碑が建ててあるが、実際にはここにあった、それらしい折れた石柱を並べて埋めただけで、その下に誰の亡骸も埋まってはおらぬ。

おれ達が海を渡り、この地に連れられて来た時、おれはともかく弟はまだ幼く、ここに来た意味も理解できてはおらなんだ。

ゆえに師父リニウケンに、故郷から共に連れてきた赤子ケンシロウを託し、我らも養子として引き取られた後、泣き暮らしていたあやつの為に、故郷を懐かしむ代わりに、ここを我らの新たな故郷とする事を、おれがやつに言い聞かせたのだ。

そして兄弟ふたり、いずれはこの地に眠るのだと誓い合つた。

幼心を守る為とはいえ……今思えば、戯言よな。

或いはやつは本当にここを、己が育つた地と思ひ込んでおるやもしれぬ」

自嘲するように呟いたその言葉は、かつてのわたくしが読んで知っていた話とは、些か異なるものでした。

……けど同時に納得もいたしましたわ。

原作のトキはこの場所を、自分たち兄弟が両親とともに暮らしていた場所だと言っていましたが、こうして見る限りこの地には、あの壊れた寺院以外の建物も、生活の基盤

となるものも、本当に何もありません。

所々にある洞窟は、雨露をしのぐ事はできるかもしれませんが、煮炊きのできるかまども水を汲む井戸もなく、すぐそばに切り立った崖のあるこんな場所で、まともな夫婦が子供2人、育てていけたとは思えません。

ここはあくまでも幼い兄弟の、いわば秘密基地のような場所であつたのでしよう。

たとえ偽りでもその思い出は、幼い2人を守ってくれた、大切な心の砦だつた筈。

けれど今からここで拳王様は、大切に守つて来たその思い出を、血の色に塗り替えねばならないのです。

「来るか、トキ……!!」

あの日リュウケンに教えを乞い、北斗神拳の道に踏み込んだのが、この宿命の始まりなのだ!!」

…兄弟として生まれた互いの体に流れる、その同じ血で。

……それはともかく、なんでわたくし、ここに連れてこられたのでしょうか？

☆☆☆

「リアさん？」

「まあ、バラン？」

「やはりここに足が向いたか、トキ！」

「フ…父と母が、わたしたち兄弟を引き合わせてくれたらしい」

「…と言っているということは、互いに示し合わせてここで落ち合ったわけではないらしいな」

「トキ先生は、こういう勘はやけに鋭いのだ。」

けど、拳王様がリアさんを連れてきているとは、オレも思わなかった」

「わたくしも、ケンシロウ様はいらっしゃるかと思っておりますけれど、まさかあなたまで来ているとは思いませんでしたわ、バランス」

「何故だ？師が命懸けで挑むという戦い、弟子として側で見届けねば話になるまい？」

「まあ…そうでしょうけど」

「このほかに、あなたと戦う場所はない」

「早いものだ、あれから何年になるか…」

「ところで、わたくし達個人の関係性とはかく、立ち位置的には互いに敵対する陣営に属していることは、あなた、理解しているのかしら？」

「流れるにそうなたただけだろうか？」

オレは今でも、拳王様の事も師と思っているし、リアさんに認められる事も諦めてはいないのだから」

「まったく…仕方ありませんわね」

「フ…お互い、大きくなったものだ。

覚えているか、あの時のことを」

「よくー！」

「では改めまして、御挨拶させていただきます。

わたくし、拳王様付きの女官を務めさせていただいております、リアと申します。

どうやらトキ様だけではなくケンシロウ様にも、わたくしの弟分であったバランが、お世話になっておりますようで」

「ああ…おれはケンだ。その……」

「………つてうぬら少し黙っておれ！調子が狂う!!」

…ようやく顔を合わせた兄弟を、取り囲むように見守るメンバーは、わたくしは勿論ですがあちら側も、原作とは些か違っておりました。

トキ様がケンシロウを連れて来てらっしゃるのは変わりませんが、その側にいるのはバットとリンではなく、何故かバラン。

言われてみればバランはトキ様の弟子なので、別段不自然なことではありませんが、そのバランは最初明らかに、『なんで居るんだお前』みたいな目でわたくしを見ておりました。

それはわたくしも聞きたいことですが今はいいでしょう。

「まあ良い。バランスよ。」

万が一、おれがトキに敗れたならば、こやつはうぬが連れていくが良い。

その為に連れてきたのだからな」

と、まるでそんなわたくしの心を読み取ったかのようなタイミングで拳王様が言葉を発しました。

説明を求める前に答えてくださるなんて、昨晚のことといいなんだか最近わたくし達、心を通じ合っておりませぬね……じゃなくて！

「なに勝手に話を進めてらっしやいますの!？」

あるし主人が何やら勝手な事をほざきやがりましたのについつつこむと、バランスの横にいたケンシロウが、なんか知らないけどビクツとしました。

なんなのよ。

「始めるか!!」

「って完全無視ですの!？」

けど、そんなわたくしのつっこみに答えず、拳王様はトキ様と向き合うと、身につけていたマントを脱ぎ捨てて……それをわたくし、つい反射的に拾ってしまいましたわ。

けどよく考えたら、それは拳王様の身体を足元まで覆うほどの量の布、言ったら布団一式抱えているようなもので。

持つているうち段々と重く感じてきて、拾い上げた事をわたくし、段々後悔し始めております。

だからといって放り出すわけにもいかず途方に暮れておりましたら、 balan がそれをわたくしの手から取って、黒王の背にかけてくれました。

さすがに、頼りになる弟分ですわ。ふう。

…だからなんですその呆れたような目は。と、

「……あなたの声を、覚えている」

わたくしとなんとなく睨み合ってしまった balan の、その頭の上を越えるように声がかかり、2人同時にその方向を向けば、ケンシロウの目は明らかに、わたくしをとらえております。

「サウザーのもとから救い出され、満身創痍だったおれを手当てしてくれたのは、あなただろうか？」

「ありがとう…お陰で、こうして生きている」

その言葉は、淡々と紡がれてはおりましたが、声にはどこか感情がこもっております。

表情もほとんど動いてはいないのに不思議と冷たさは感じない、むしろ温かみすら覚えるという、これが主人公の魅力というものでしょうか。

「…いえ。拳王様の御命令でしたので」

「そのラオウに言い返していた、先ほどの声を聞いて思い出したのだ。」

夢うつつの中で聞いた女性の声が、必死におれを庇ってくれていた事を。

…済まない。あの時は色々…：…混乱していた」

あら？もしかしてこの方、わたくしに抱きついて拳王様にげんこつ落とされた、あの時のことを覚えていらつしやるのでしょうか？

あの時はすっかり意識が混濁しているものと思ひ込んでおりましたのに。

…少し気まずそうにわたくしに頭を下げるその男は、声のトーンこそ落ち着いたものでありつつも、雰囲気はわたくしが読んだ物語の彼よりもどこか柔らかく、表情にも感情が見えています。

…言い方は悪いですが、どこか甘さすら感じるほどに。

それでいて、慈しみと強い意志、そして哀しみを湛えた瞳は、まさしくこの世界の救世主たらんとするもので。

そこは物語上変わってはいけない部分なので、少しホツといたしましたけれども。

…あと、ケンシロウって3行以上喋らないイメージを勝手に抱いておりましたが、意外とそうでもありませんのね。

「お互いの立場として、この言葉が適切かはわかりませんが…その後、お元気そうで何よ

りですわ」

「そうだな……では、伝えるべきことは伝えた。」

この先は互いの立ち位置で、この戦いを見届けるとしよう」

ケンシロウはそう言つて、少しだけ哀しげに微笑むと、次に視線をバランの方に向けて、表情を引き締めました。

「…バランよ。この戦いを止めることはできぬ。」

ふたりの血の間に、誰も入ることは。

師の戦いとその生き様、死に様、おまえ自身の目に、しかと焼きつけるのだ」

そう言つて、バランの両肩に手を置いて視線を合わせます。

「…わかっている、ケン」

ケンシロウの言葉に頷くバランの目には、うつすらと涙が浮かんでおります。

さもあらん。

彼にとつては、そこで戦っているのは、2人とも師なのですね。

立ち位置は変わってしまったて、結果としてわたくし達は敵対する立場となつてしまつておりますが、先ほど彼自身がそう言った通り、彼にとつての拳王様の存在は、出会つた頃と変わらない。

そしてわたくしにとつて、今もバランは弟のようなものです。

…そんな顔を見ると、やはり胸が痛みますわ。

☆☆☆

「ええい黙って聞いておれば！」

おれはユリアのフルートを舐めた事など断じてないわ！

風評被害にもほどがある!!」

「フツ、そうだったな。」

フルートではなくリコーダーだった。

こんな重要な事を間違っってしまったて申し訳ない」

「しておらんと言っておるであらうが!!」

…一体なんでこんなことになっているのでしょうか。

いえ、最初のうちは原作通り、互いの拳の応酬がありましたのよ？

ただ…ええと。

「そうそう、いつだったか、ユリアの机に虫の入った箱を入れたものの、それが休前日だった為に、発見された時には箱の中が蠱毒状態になったあの時には…」

「それはおれではなくシンの話だ!!」

「そうだったか？何せ死期が近い故、記憶も定かではなくてな」

「明らかに故意に記憶をすり替えておるだろうが！」

今ここにいるトキ様が、わたくしの知るお話に比べて若干元氣、といたしますか。

そのせいなのかなんなのか、原作にはなかった煽りスキルみたいのを、なんでか身につけていらつしやいましたですね……

「大体兄に向かつてその態度はなんだお兄ちゃん悲しい!!」

それはさておき相変わらず優しい拳よ!

このラオウを超えんとするなら、なぜ剛の拳を選ばなかった!!」

「激流を制するは清水せいすいですけど……?

はい、ここテストに出ます!

ラオウくん居眠りしてちやダメですよおう?」

「貴様ああ〜!!!」

……てな感じの、主にトキ様のキャラ崩壊が甚だしいことになってまして。

加えてうちの拳王様がまた、煽り耐性低い方でいらつしやるものですから、拳の応酬の合間に繰り広げられる舌戦が、次第に泥沼化してきまして。

「幼き日には兄ちゃん兄ちゃんとちよこまかつて歩くうぬの、おねしよのシーツまで洗ってやったというのに!」

「そんな昔のこと忘れまして、てゆうか、幼児がおねしよするのは割と普通の事なんで恥ずかしくも何ともありません」

「くあwせdrftgyふじーP」

……ああもう、見るに耐えませんが。

本来なら白熱と感動と悲哀に満ちた名シーンが、どうしてこんな悲惨なことになってしまったのでしょうか。

というかトキ様、こないだお会いした時は原作通り穏やか（でも押しは強め）な雰囲気でしたのに、一体貴方に何が起きたんですの!?

なんだか居た堪れなくなつてふと隣を見ると、バランやケンシロウもちよつと困つたような表情になつており、更に、目があつたバランに小さく首を横に振られました。

…事態の收拾をこいつらに期待することはできそうにないですね。

そして。

「いい加減になさいませ——ッ!!!」

我慢できなくなつたわたくしは、考える間もなく叫んでおりましたわ。

男どもが静観を決めた生死をかけた戦いに、水を差す馬鹿女がいるとは思わなかつたであろう兄弟が、目を睨いてこちらを向いたまま固まつておりますが、もう知つたこつちやございません。

頭に血がのぼつたわたくしは、そんな2人に臆する事なくつかつか歩み寄ると、間に入つて両腕を広げ、彼らの間合いを無理矢理広げました。

「リア……!?!」

「そこまでですわ! 拳王様、帰りますわよ!

これ以上は時間の無駄ですわ!!」

「い、いやしかし、これは我らが兄弟の宿命の…」

「こ・れ・の! どころが宿命の対決ですよ!?!」

どこからどう見ても、大人げない兄弟喧嘩じゃありませんの!!」

ビシツと指差してそう言つてやると、拳王様はちよつと喉の奥で唸るような声を発しました。

多分自分でもちよつと、そう思つてはいたのでしよう。

上手く軌道修正ができなかっただけで。

ええ、途中ちよいちよい流れを元に戻そうと頑張つてらつしやつた事には、わたくしも気づいてはおりましたのよ。

けどその度にトキ様に煽られて逆上してまた流れを明後日の方に持つていかれてる。

舌戦に持ち込まれては、脳筋の拳王様がトキ様に、勝てる道理がございません。

「トキ様は勿論ですが、拳王様もいちいち反応しすぎですわ!」

こんな修羅場を見届けさせる為にわたくしをここに連れてきたんですの!?!

せつかくの屈指の名シーンが台無し!

二次創作うすいほんだったにしても酷すぎる！

誰であろうと、わたくしの最愛の拳王様を、穢すことはこのわたくしが許しません！
やりなおしを要求する——!!」

「待てリアー！一旦落ち着け!!」

割と何を言っておるのかわからん!!」

言ってるうちに感情が昂ってきたわたくしは、拳王様の胸板を拳でぽかぽか連打いたしました。

女の細腕などでダメーヅがあるとも思えませんが、拳王様は困ったようにその拳を、身体ごと腕に抱え込み、わたくしの動きを封じます。

「うむ…申し訳ない、リアさん。

確かに大人げなく、少し悪ノリをしすぎたようだ。

ここに来る前に、知り合いから受けたアドバイスをもとにして、先に精神的な揺さぶりをかけるつもりだったのだが、途中からちよつと楽しくなってきた。今は反省している」

「誰ですのそんな無責任なアドバイスをした方は?!

責任者出ていらっしやい!!」

そしてそんな状況の中、やはり困ったような顔でトキ様が、若干気まずそうに声をか

けてきましたが、そんな言葉でこのやり切れない気持ち収まるわけもなく。

気づけば涙まで出てきたのは、感情の昂りによるものか、それとも拳王様の腕の中に抱え込まれて、若干の呼吸困難を起こしているせいなのか、自分でもわからなくなってきました。

と、視界に影が差したかと思うと、真正面に何故かケンシロウが立っております。

その伸ばされた指先が何故か、わたくしの顔に触れ……

そこから先の記憶は、ございません。

☆☆☆

「む……」

「リアさん!!」

「経絡秘孔のひとつ、定神を押しした。

目が覚めた時には落ち着いているだろう」

「うむ、助かったぞケンシロウ。

…ラオウよ、ここはお互い一旦退くこととしよう」

「そうするしかあるまいな。興が削がれたわ」

「……………フ、フフッ」

「……?」

「……ラオウ、気づいていたか?」

我らは、いわゆる兄弟喧嘩というものを、一度もしたことがなかった事を。今、この時が初めてだ」

「……!!?」

「この齡になつて大人げなく、恥ずかしい話だが……フツ、悪くはないものだ。そう思わぬか?」

「……うむ。だが、次はない」

「そうだな。」

再びまみえた時こそ、我らが宿命の幕を下ろす時」

「……それまで、身体を労えよ、トキ……!」

「………にいさん」

「ケンシロウ。バラン。」

拳王恐怖の伝説は今より始まる。

この命、奪いたくば、いつでも来るが良い!」

・・・

「バラン?」

「師よ。改めて今より、教えを乞います。

あなたの全て、オレに受け継がせてください。

知や力、そしてただひとりの兄を超えんとする、その心も、全て」

「……何故？」

「拳王様は、己が斃れた後は、オレにリアさんを託すと言った。

だがきつとこのままでは、拳王様が斃れた時、リアさんは……リアは、必ずその後を追う。

妹が、オレより神を選んで、その命を召された時のように。

リアを死なせぬ為に、オレが拳王様を……ラオウを超えねばならぬのです。

失礼ながらあなたには残されていない時間が、オレにはある」

「フ……判った。

ケンシロウ。 balan。

わたしの魂はおまえたちに残そう。

そしてラオウとの戦いに捨ててつもりであった命もまた、おまえたちの未来への灯火として燃やそう」

「に……い……さん」

「……先生」

☆☆☆

さて。

気がついた時、わたくしは拳王様の胸に凭れた状態で、黒王の背に揺られておりました。

泥沼と化した宿命の対決はあのまま強制終了となり、トキ様とは念の為、再会を約束はしたものの、生きて再びみえる事は恐らくないだろうと、呟いたその言葉が、やけに寂しげに耳に響いて、わたくしの胸にいつまでも残っております。

・
・
・

「お帰り、お待ちしておりました」

結局、わたくしと拳王様は黒王で居城へと向かい、その途中で立ち寄った村で、リュウガ様と合流いたしました。

どうも直前まで地元ヒヤツハーの暴走があつたらしく、大柄な男性のあちこち挟られたような遺体が散乱する割と死屍累々の有様なんです。

そんな中で、なんでか柵の中でひとかたまりになった女性達が、場にそぐわないキラキラした目でリュウガ様を見ておりますがそれはさておき。

「変わったことは」

「あなた様の伝説を汚すであろう杖を払っておきました」

「うむ、(一)苦勞」

…変なのですわ。

確か物語ではこれ、拳王様が居城に戻られたタイミングで為される会話だった筈です。

居城を占拠していたリユウガ様が玉座から腰を上げ、戻ってきた拳王様にそれを返すという、一連の流れで。

篡奪者然としていた彼が、拳王様の足元に跪くというシチュエーションは変わりませんが、どうして居城ではなくこの村なのでしょう。端的にはリアさんがいたからです。ここ、地元ヒヤツハーが女の子を目隠して追いかけて戯れて、あろうことかラオウに抱きついて張り手からの首ちよんばされたあの村なのですが、原作と違いラオウがリアさんを連れていた事で、彼らがここにたどり着いたタイミング、実は原作より遅かったりします。その間にこのヒヤツハーの所業がリユウガの耳に届き、肅正に出向いたタイミングでの合流になりました。

「リユウガ…褒美はなにを望む」

…けど、ここでこの会話が為されたという事は、リユウガ様とトキ様が、この後命を落とされる事になるわけですね。

元々リユウガ様はラオウとケンシロウ、どちらが乱世を支える巨木となるか、見極め

ることを目的として、拳王様に仕えているわけで、物語では戦いを通じてケンシロウにその可能性を見出し、未来を彼に託してトキと共に天に還るというストーリーでした。

……正直、そこに至るまでの展開、ケンシロウの怒りを引き出す為に行なった殺戮とか、必要だったのかなと思わなくもなかったわけですが。

ええ、何しろ漫画としてこの物語を読んでいた時のわたくしは高校生男子。

細かな洞察など思い至るわけもございませんでしたもの。

それはさておきこの先に待つ悲劇、わかっている、わたくしには止める事などできません。

拳王様のこの問いに、リュウガ様は迷わず、ケンシロウとの戦いを…

「許されるのであれば…リア殿をこのわたしに」

願い出る筈ですが今なんつったこの兄ちゃん？

「…それで、わたくしはリュウガ様に下賜されるということでしょうか」

「おれはうぬを手放さぬと、何度言えばわかる。」

奴がああ言ったのは恐らく、別の要求を通すための駆け引きといったところであろう。

だが、その目的がわからぬ。

……その狼の目でなにを見ておる？」

一旦は居城に戻らせたリュウガ様の騎馬の背を眺めながら、拳王様が誰にともなく眩きます。

それはわたくしも思うことですが。

だって、拳王様の近くに居ないとわたくしが危険だと判断して、わたくしを『拐った』^{てい}状態で居城から連れ出し、拳王様のもとに連れてきて下さったのは、他ならぬこのリュウガ様なのですから。

☆☆☆

「まだ手向かうやつあいるか？」

「いっついえいえ、どうぞぞ!!」

「おりこうだ!!」

へっへへ、もちきれねえぜ!

おい、残りは後をつけてこい」

突然現れた1人の男が、村から女性たちを拐ってきた野盗の、リーダーの巨漢を奇妙な技で倒したあと、戸惑って立ち尽くす女性のうち3人ほどを、まとめて軽々と抱えてスタスタ歩きながら、残りの女性たちに声をかけるのに、わたくしも半ば惰性で従います。

後ろで生き残りの野盗たちが『とんでもねえ悪党だあいつ』とか言つて半泣きになつてますが、別に同情はいたしません。

つかこの場面、既視感があるというか、多分わたくし知つておりますわ。

というか、どうして今わたくしがこんな状況に混じっているかというところ……

・
・
・

拳王様と共に居城に戻ったあと、再びわたくしの女官としての生活が戻つて……きまんでした。

戻つてみれば女官部屋のわたくしのスペースからは私物や衣類が引き払われており、わたくしは移動させられていた荷物と共に一室に押し込められた上に、何故か護衛まで

付けられたのです。

前回わたくしがリュウガ様に拐われた事についての事情は、全軍に周知が為されたのですが、その後リュウガ様がわたくしを所望した事で、今度は本当に拐われる可能性を考慮しての事なのだそうです。

いやいやいや！

最初にGORANに連れていかれそうになりバランと出会ったあの時と、前回のリュウガ様の篡奪劇の時と、わたくし既に2回も拐われておりますのよ。

いくら何でも人生で3度も拐われませんわよ！

……………と、そんなふうに考えていた時期がわたくしにもありました。

「すまぬが、ラオウという男を見極めるに、今は貴女が邪魔なのだ。

後日必ず迎えを超越すゆえ、待っていて欲しい」

そう言つて拳王様が付けた護衛を一瞬でのして、今度こそ本当にわたくしを拉致したリュウガ様は、拳王様療養月間の間に暴走ヒヤツハーを撲滅して平定した小さな村のひとつに、わたくしを預けて去りました。

……つてあのイケメン、拳王様を呼び捨てにしやがりましたわね。

確かに彼は心の底から拳王様に従っていたわけではなかったのでしょうか。

てゆーか、わたくしは邪魔でどういふ事なのでしょう。

よくわからないまま預けられたその村で数日を過ごし、なぜかやたらと子供の多いその村で、子供たちの遊び相手や若いお母さんたちのお手伝いをする事にも慣れてきた頃、リュウガ様が戦いで命を落としたという噂が流れてきました。

つまりはトキ様も…と、あの日のちよつとはじけたトキ様の姿を思い出してしんみりしてしまいましたが、このことがこの村に与えた影響は、その程度では済まなかったのです。

多分リュウガ様の守りがなくなつて、警護の手薄になつた村が野盗の襲撃にあい、命が惜しければ若い女を差し出せという要求を仕方なく呑んで、村の若い母親たちとともに、わたくしも拐われたのです…ええ。

そうして先ほどのお話に戻るのですわ。

わたくしたちを今度は野盗から奪つた男の名は、ジユウザ。

南斗最後の将を守護する五車星の『雲』の宿命を持つ男で、この世界のヒロインであるユリアの、腹違いの兄でもある。

つまり、先日亡くなられたりリュウガ様とも兄弟であるわけですけれど、この方の登場がリュウガ様が亡くなられた後だったこともあり、その辺の絡みは原作には出てこな

かった筈です。

「全員、子持ちだとおく〜?!」

「はい、ですからどうしても村に…お願いです、村に帰してください」

連れてこられた廃村の一番大きな家の中で、女性たちが一番最初にした事は、ジユウザ様に夫や子供たちのいる村に帰してほしいと懇願する事でした。

どうやらここまでのそう長くもない道行きで、ジユウザ様は少なくとも先ほどの野盗たちに比べたら、遥かに話がわかると判断されたのでしよう。

なにしろ彼女たちの子は小さく、まだまだ手がかかるのですから。

母は強し、ですわね。

…ふと、母から聞いただけの、妹の母親というひとの話思い出します。

愛してもいないわたくしの父の子を生まされたその女性は、生んだばかりの妹を躊躇いなくわたくしの母に託して、父の手の届かない自身の故郷へと帰ったといえます。

前世では少年、今世でも子を産んだ事のないわたくしに、母親の気持ちはわかりません。

けれど、曲がりなりにも自分が産んだ子を手放す事に、本当に躊躇はなかったのか。

それとも望まぬ関係を結ばされた憎い男の子供など、そもそも愛する事はできなかつ

たのか。

いま目の前の彼女たちの必死な姿に、なんとはなしにそんな事を思っていましたら、ふと我に返ったあたりでジユウザ様は、あんぐりと口を開けて、しばらくそのまま固まっております。

が、やがて硬直が解けたように深く息をつくくと、とてもわかりやすく脱力なさいましたわ。

「は——……いい、もういい、行け。」

それ持って、どこへでも勝手に行きやがれ!!」

ジユウザ様はそう言うと、取り囲んでいた若いお母さんそれぞれの手に、先ほどの野盗から奪ってきた食料を持たせます。

お母さん達は戸惑ったように顔を見合わせ、やがて口々に「ありがとうございます」と頭を下げて、出口に向かおうとしますが、わたくしはそれを制しました。

ジユウザ様は先ほど座っていた椅子に再び腰掛けて「何やってんだおれ……」とか小さく呟いて頭垂れておりましたが、わたくしが歩み寄るとその足音に気がついて、めんどくさそうに顔を上げました。

「まだグズグズしてんのか、さつきと」

「そういうことではありませんわ!」

「はあ？」

何を言われているのかわからないとばかりにわたくしを睨みつけたジウザ様ですが、この程度の眼力など、わたくし怖くもなんともございませぬ。

案の定、全く怯まずに睨み返してきたわたくしに、ジウザ様の瞳が一瞬揺れたのを確認して、わたくしは息をひとつ吸って、大切なことを告げました。

「ここからわたくし達全員に、歩いて村まで帰れと仰いますの？」

このご時世、女たちだけで固まって移動しては、結局先ほどのようなならず者たちに、あっさり捕まってしまいますわ。

移動手段と、できれば護衛。

彼女たちが訴える『村に帰して』というのは、そういう事も含めての訴えですよ！」「待てコラ。なんでオレがそこまで…：食料だって恵んでやったろうが！」

「元はといえばこれだって彼女たちの村から、野盗たちが奪ってきたものです！」「彼女たちに返すのはむしろ道理ですわ!!」

あなた様として、先ほどまでわたくし共を囲う気満々でしたでしょう！

手放すならアフターフォローくらいきちんとしていただかなくては困ります！

それが男の甲斐性というものでしてよ!!」

ふんす、と鼻息荒く言い放つてやると、ジウザ様は何やら驚いたように目を瞠いて、

しばらくわたくしを見つめていらつしやいました。

それから息をひとつ吐いて椅子から立ち上がると、何故かわたくしの髪をひとつさ、指ですくい上げながら問いかけてきます。

「どうも他の女どもとは雰囲気が違うと思つたら、村の女じゃねえつて事か。

テメエ……名前は？」

「……リアと申します。

とある方に、しばらく待つようと村に預けられておりましたところ、彼女たちと共に略奪に遭いました」

「リア？」

「……ふうん、中途半端な名前だな」

「余計なお世話ですわよー」

それ多分アタマのどこちよつと足りないつてことですわよね！

この方は腹違いの妹であるユリアをそれと知らずに愛してしまい、苦しんだ末に今の無頼の道に走つた経緯を持つ方ですから。

けど、それとわたくしの名前は関係ございませんわよ！

あと勝手にひとの髪の毛くるくるするのやめてもらつていいですか!!

「そんな事よりも、彼女たちを村まで送つていただけますの!?! いただけませんの!?!」

好きでもない男にこのように触れられる事が我慢ならず、弄ばれていた髪の毛の先を奪い返しながらそう言い放つと、

「ギャンギャンうるせえ！」

よりにもよって、その声でおれに説教すんな!!」

バンツ!!

耳元で何か打った音と、背中に若干の衝撃を感じたと同時に、気づけばわたくしは壁に背をつけた状態で、ジユウザ様の両手に囲い込まれておりました。

…所謂、壁ドンという体勢ですわね。

わたくしとジユウザ様のやりとりを、ハラハラしながら見ていた村の女性たちから、息を呑むような小さな悲鳴が上がりました。

「リア…っていったな。」

女だてらにいい度胸だ。

ひよつとしたら、おれに殺されるかも知れねえってのによ」

先ほどよりも近い距離からわたくしを見下ろし、ジユウザ様は悪そうな微笑みを浮かべます。

「か弱い女相手にそのような所業に出るほど、下衆な方ではないとお見受けしましたが、わたくしの見込み違いでしたかしら」

その笑みを見上げながら、精一杯の虚勢を張るわたくしは、『あー雲のジウウザ、近くで見ると色気凄〜い』と、若干現実逃避気味な事を考えておりました。

：少なくとも、わたくしがまったく怯んでいないことだけは理解したのでしよう。

ジウウザ様は諦めたように壁から手を離すと軽く肩をすくめて、大袈裟に息をつきました。

「どこまでも口の減らん女だ。…いいぜ。

この女たちはおれが村まで送っていつてやる。

だが、リア。テメエは残れ。それが条件だ」

「はい?」

何やら不穏な言葉が聞こえ、反射的に問い返すと、そのわたくしの顎を、無骨な手が掴みます。

危うく舌を噛むところでした。

ちよつとだけ恨みがましい視線を向けると、どうも何かのスイッチが入ったらしいジウウザ様が、ほぼ息がかかるほどの距離に顔を近づけてきました。

「このおれにあんなクチきいて、ただで助けてやると思ってたのかよ?」

リア、テメエは今からおれの女だ。

声だけは好みだがそれ以外、この生意気な口もその目つきも何もかも、全部おれ好み

に躑けてや……」

「そのような真似は、この私がさせぬ」

と、その瞬間、やけに聞き覚えのある声が、その場の空気の色を、一瞬にして塗り替えます。

そちらに顔を向けようにも顎を掴まれたままのわたくしの代わりに、その声に反応してそちらに顔を向けたジユウザ様が、息を呑んだように、そのひとの名を呼びました。

「……………リユウガ？」

テメエ、なんでここに…？」

は……………リユウガ様？

亡くなられたのではなかったんですの!?

1 2

「久しぶりだな、ジユウザ」

ツカツカと聞こえてくるブーツの足音が近づいて、わたくしの顎を掴むジユウザ様の手が引き剥がされます。

わたくしの顔が自由になると同時に、わたくしとジユウザ様との間に踏み込んで体を割り込ませたその方は、次の瞬間わたくしの前に、片膝ひかたについて首くびを垂れました。

「リア殿、約束通り、お迎えに参上まゐ 仕つかまつ った。

これより先、貴女に一切の身の危険がない事、改めてこの身にかけて誓う」

そう言ってわたくしの手を取り、騎士の誓いよろしく指先を額に押し当てたその姿は、なんとというか、実に様になっていらつしやいます。

出入り口に固まってこちらを見守ってらした女性たちから、感極まった溜息が漏れま
した。

ううむ、イケメン無双というやつかしら。

と、その後ろから兵士が数人現れて何やら声をかけると、女性たちは笑顔になって、彼らについて外に出て行きましたか………んん？

「心配無用。

村で状況を確認した後、車を数台用意させてこちらに向かわせたので、御婦人方にはそれに乗って村まで帰っていたたく手筈になっている。

私の部下たちが護衛として同行するゆえ、御安心召されよ」

「良かった……ありがとうございませす、リュウガ様」

先ほどまでずつと心配していた状況が一瞬にして改善されて、わたくしは目の前に頭に下げます。

「なんの。単に、約束を守っただけの話。

むしろこのような事態となったのは私の責だ。

…戦死の報は、思惑あつて故意にそう流したものであつたが、よもやそれが貴女の身を、危険に晒すことになるとは。

私の読みが甘かつた為に、貴女に怖い思いをさせてしまい、誠に申し訳ない」

そう言うのと彼……リュウガ様は、跪いていたその場から、足取りも確かに立ち上がりました。

…どうやら幽霊ではなさそうですわ。

「…待て待て待て！

テメエ、半分とはいえ血の繋がつた、数年ぶりに顔合わせた弟に対する挨拶を、久し

ぶりだなの一言でサラツと流すんじやねえよ！」

と、ここで先ほどまで確かにこの場の主役だった筈の、今は空気にされてしまったジユウザ様が、わたくし達の会話に割り込む形でツツコミを入れて来られました。

それに対し、リユウガ様は氷点下のまなざしで彼を睨むと、憎々しげに言葉を返します。

「…貴様がこの方に、先ほど以上の無体を働いていたならば、もはや二度と兄弟などとは呼ばせぬところであつたわ。

むしろこの兄自らの手で引導を渡し、その首と共にこの方をラオウのもとに返す以外、奴の怒りを鎮めることはかなうまい。

さすれば、我が将が目指す平和への道が、今よりさらに遠のく事となろう。

それでは困るのだ」

……ん？

リユウガ様がまた拳王様を呼び捨てにした事も気になります、それよりももつと気になることが。

「将……いつまでラオウの奴の下にいる気なんだと思つてたが、テメエ、ひよつとして鞍替えしたか？」

と、わたくししの気になっていた一言に、代わりにジユウザ様が食いついてくださいま

した。

「誰の配下にもならねえのが、天狼の宿命ってやつじゃなかったのかよ。」

狼が聞いて呆れるぜ。

すっかり飼いい犬に成り下がりがあって」

「なんとも言うがいい。

貴様こそ、いつまでそうして無頼を気取っているつもりだ」

「……おれの勝手だろ」

「そうはいかぬ。

五車の星はそれぞれ動き出している。

ならば『雲』もまた動くべきであろう。

……まあ、今はまだ良い。

まずはこの方を、在るべき場所へと返さねばならぬ」

言いたいことは言ったとばかりに、リュウガ様はこちらに向き直ります。

エスコートのように手を差し伸べる彼に、わたくしはふと、気になった事を問いかけ

ました。

「リュウガ様。お怪我などはございませんの？」

……先ほど、戦死の報は故意に流されたと仰ってましたが、その噂がまことしやかに伝

わる程度には、危険な状況だったのではありませんか？」

確かリユウガは、ケンシロウと戦う為に、彼の怒りを引き出すべく、一般の村人たちの大量虐殺を行なった上で、トキに瀕死の重傷を負わせましたが、それらを行なう前に陰腹を割っていた筈なのです。

…今のリユウガ様は返り血も浴びてはおらず…まあ服は着替えればいいとしても、先ほどの立ち上がる様子から見ても、陰腹を割っている感じではなさそうでした。

それは良かったと思うと同時に、なぜそうなったかという疑問も生じます。

明らかに、物語からは離れた展開ですもの。

リユウガ様はわたくしの問いに、少しばかりの自嘲を含ませた笑みを浮かべて答えてくださいました。

「…そのままでは取り返しの付かぬ選択をしていたところを、あるお方に助けられた。身も、そしていつしか凍てついていた心までも。」

ラオウの寵姫である貴女にそのお方の名は言えぬが、今の私の命はその方に捧げてい

る。
ゆえにラオウから離れることを決意したが、その為には私は死んだことにするのが、一番血を流さずに済む方法だった。

そのせいで貴女には迷惑をかけてしまったが…」

あ、お話が最初の地点に戻ってきてしまいましたわね。

ともあれ、状況は少しだけわかったような気がいたします。

先ほど『将』という単語を出されたことからして、リユウガ様が新たに与する事となつたのは、南斗軍なのでしょう。

何故かはわかりませんが、この時空においての南斗の将は、恐らく『天狼』が動く前に、何らかの形で彼と接触したのだと思われます。

『南斗の将』であるユリアは、彼にとつては実の妹。

彼女が生きていると明かし説得すれば、或いは兄の、そして『天狼』の心も、動かすことができたのかもしれませんが。

実際、原作の『雲』はそれで動きましたし。

「…なあ、おれの耳が変になつたか？」

今、そいつがラオウの女つて聞こえた気がするんだが？」

「何をもって変とするかの貴様の基準は知らぬが、そう聞こえたならその通りだ。

リア殿はあのラオウが、我が妹以外に唯一、心を傾けた稀なる女性」

「…冗談だろ？ アイツがユリアにゾツコンだった事なんて、あの当時近くにいたやつなら全員知つてることじゃねえか。

それこそ、奇跡でも起きねえ限り…」

「その奇跡が起きたのだ。」

確かにうちの妹からこちらへと考えると、実に不可解なことではあるが」

「さりげに失礼ですわよね！」

わたくしが考えに浸っている間に、なにやら勝手な事をほざいていた兄弟に、思わず声を荒げます。

ヒロインであるユリアに、わたくし如き逆立ちしたって敵わない事くらい知っておりますわよ！

けど本人の前でそれ言います!?

「…さすがに、おれはそこまで言つてねえぞ。」

確かにタイプは全然違うが、この気の強さは言われてみれば、あのヤローにはむしろ似合いかもしれないねえ。

今のアイツの立場で、死んだ女をいつまでもグジグジ思つてる訳にもいかんだろうしな」

わたくしが不機嫌になったのを見て、ちよつと気まずそうにジュウザ様がフオー入ってきますが…それを聞いてちよつとだけ、勝手に落胆するわたくしがありました。

拳王様は、ユリア様をお忘れになったわけではありませんもの。

というか、それはあなた様だって同じですわよね？

…というか、先ほど『ユリア』の名を出した時のジユウザ様の言い方、それほど苦しいニュアンスを含んでいなかった気がするのですが、わたくしが見落としたただけなのでしょうか？

「……けど……は——。」

よく見りやそこいらじゃ見ねえいい女が、うまいこと手に入ったと思っただがなあ

けど、なんだかチラチラわたくしを見て、ちよつと残念そうにするジユウザ様が意外で、ついツツコミを入れてしまいます。

「あなたが気に入ったのはわたくしの声だけだと、先ほどおうかがいしましたが？」
「あ？」

…ああ、それな。細かいこと気にすんな。

ちよつと……その、似てんだよ」

と、わたくしが入れたツツコミに対し、ジユウザ様は思いのほか動揺されたようでした。

なんだか視線が揺れていますし、答える言葉もどこか頼りなげです。

…わたくしと声の似ている方が、ジユウザ様の知り合いにいらつしやるといふ事でしょうか。

……ユリアではないと思います。

多分ですけど、なんとなく。

「……………どなたに？」

「それは……いいだろそんな事あどうだつて！」

おいリュウガ！ さっさと連れてけ！！

コイツがラオウの女つてんなら、これ以上ここに置いとけば、おれがラオウに殺されるじゃねえかよ！」

……どうやらこの話題はジユウザ様の地雷のようですわね。

誤魔化すように声を荒げ、殊更にわたくしから顔を背けるその背中に、一応はフォローの声をかけます。

「その点はご安心ください。

拳王様は話のわからぬ方ではございませんので。

わたくしは拐われた先から救い出され、あなた様に保護されたのですもの。

そうですわね、リュウガ様？」

ここで話をリュウガ様の方に振ったのは、先ほどジユウザ様が動揺を見せたあたりで、なんとなく話に加わりたそうなそぶりを見せていたからでした。

わたくしから水を向けられたリュウガ様は、心得たとばかりに頷くと、ジユウザ様に

歩み寄り、その肩に手をかけました。

「うむ。ではリア殿を保護してくれた事には私から礼を言おう。

世話になった、ジユウザ」

「礼なんざ要らねえよ、クソ兄……!?!」

……ジユウザ様の言葉が途中で止まったのは、一瞬にして繰り出されたリュウガ様の当身が、綺麗に決まったからでした。

なにか起きたかわからぬまま意識を刈り取られたジユウザ様の身体を、リュウガ様の一見細く見える腕が支えます。

驚いて思わず『ヒュッ』みたいな、息というか声が出てしまったわたくしに、リュウガ様が振り返って薄く笑いました。

「よいタイミングを与えてくれて感謝する、リア殿。

……悪いな、ジユウザ。

おまえを連れて戻ることも含め、全て我が将の指示なのだ。

『あの方』は、まるで未来が見えているかの如く動く。

おまえも……『あの方』にお会いすれば、必ずその心は動くであろう。

その時こそ、我ら兄弟が共に戦う時。

決して来ないと思っていた未来が、すぐそこに見える。

これも……悪くはないものぞ。弟よ」

崩れ落ちたジユウザ様を抱えながらの、先ほどまでは欠片も見せなかつたリュウガ様の優しい表情に、『身内との縁が薄い』この世界の法則が少しづつ崩れているような、そんな不思議な感覚を、わたくしは覚えていたのです。

☆☆☆

結局のところ。

『ラオウ』と『ケンシロウ』。

どちらの北斗が巨木に相応しいのか決めかねていたリュウガ様は、当初はケンシロウに戦いを挑むことを考えていたそうです。

つまりは、原作通りの展開ですわね。

その計画を練りつつ、暴走ヒヤツパー狩りを行っていた時に、リュウガ様曰くの『あなたがお方』が接触してきたそうで。

それまでは己が命を、如何に役立てる方向に捨てるかに向けられていた意識を、180度転換させられるほどの何かを、その出会いによって叩き込まれたというリュウガ様は、『死ぬ覚悟をしていた私に、この身を擲なげつよりずっと、厳しいが実りのある道を、私に示してくださいったあの方こそが、この世界の巨木となり得ると『天狼』は確信した』と、わたくしを送る道中で、熱っぽく語ってくださいました。

わたくしを拐ったのは『時間稼ぎ』と仰っていましたが、何に對してのものとは教えていただけませんでしたわ。

「今の私は死んだことになつてゐる故、ここから先は部下に送らせよう。

彼はあの村の村人に扮して貴女を送り届けるから、出来れば貴女を保護していたその褒美として、私が平定した時と同様の庇護をあの村に与えるよう、貴女から拳王に働きかけて欲しい」

そう仰つて途中で別れたりリュウガ様が仰つた通り、わたくしは居城に帰され、言われた通り数日滞在した村への庇護もお願いして、ようやくいつも通りの日々が戻つてまいりました。が…

故意なのか、それともうっかりなのかは存じ上げませんが。

別れる時リュウガ様はわたくしに、彼が生きてゐる事に対しての口止めはされませんでしたの。

わたくしは拳王様の女官ですので、拳王様に問われれば、差し支えないことは答えるしかないのです。

「おれのもとから離れることこそ、やつの真の目的であつたということか。

彼奴め、おれがうぬを手放さぬと踏んだ上で、賭けに出おつたな。

天狼がこの拳王より選んだ南斗六星最後の将、どうしても会いたくなつたわ!!」

色々と脇道には逸れたようですが、結局は本筋通りに物語は進むようです。

：尚、わたくしが居城から離れている間、拳王軍と五車星の軍が何度か交戦していたらしいのですが、いずれも死者が出ない、けど精神的な何かはゴリゴリ削られるような戦いが繰り返されていったそうです。

その場面を見てはいないはずなのに、なぜか妙な既視感を覚えるのは、わたくしの気のせいでしょうか。

13

「…いいぜ。この『五車星』雲のジユウザ。

この命、おめえにくれてやる！」

「命は要りません!!」

…私の為に、生きてほしいのです」

五車の星は風・雲・炎・山・海。

彼らは南斗の将に仕え、その星の輝きの為に天を舞い、地を駆けるという。

その五車星が本格的に動き出して、K I N Gを吸収しU D軍を傘下に加えた南斗軍の活動が、更に活発になってきており、拳王軍としてもそろそろ無視できないほどに、彼らの勢力が大きくなっています。

…何が起きているのか、正直わたくしにはわかりません。

ですがここ数日、何度か拳王軍と交戦している、主に風と炎の旅団は、ほぼ小競り合いくらいの衝突で共に人的被害はほほえないものの、むしろ戦いが終わったあとに、主にこちらに結構な精神的ダメージを残して去っていくという、明らかに物語にはない戦い

方をしておりました。

「おのれ……ただでさえの『風』評被害を、更に『炎』上させおつて」

……ということは、あの例の『宿命の戦い』の際に、トキ様に言われたような内容のことが、今は不特定多数に晒されているという事ですのね。

「それにしてもトキのやつめ、どうせあの世に逝くなら、兄の黒歴史など秘したまま、共に持つて逝けば良いものを、今生の最後によりにもよつて、南斗軍などに暴露しおるとは!!!」

あー……ええと、それ多分、前後の事情が違ふと思えますわ。

どうしてそんな事になつてゐるのかは判りかねますが、例の、トキ様に入れ知恵をしたという『知り合い』という人物、恐らくこの状況を作り出した黒幕？と同一人物であろうこと、ここにきてわたくし、確信しております。

そしてトキ様が、その方のアドバイスを受けられていたという時点で、彼が南斗軍と協力関係にあり、またそうなると共に来ていたケンシロウや balan も、そうであると考ええる方が自然ですもの。

故に、原作とは違い既に、ケンシロウと南斗の将も、コンタクトをとつていると考えべきですわ。

……というか、ええ。

今現在、南斗軍を指揮しているのは、絶対に南斗の将『ユリア様』ではありませんわね。

あの聖女のようなヒロインが、こんなえげつない戦い方を指揮するはずがございませぬもの。

或いはやはり『黒幕』にアドバイスを受けているのか。

誰なのかはわかりませんが、とんだ原作クラツシャー自分もそうだという自覚は、残念ながらリアさんには欠片もありません。ですわね！

許すまじですわ!!

☆☆☆

そんなある日のこと。

「黒王様が……奪われたのですか？」

「はい。」

今回初めて対峙した五車星『雲』のジユウザに。

同時に『山』の部隊の策により他の馬も、騎手を振り落とす形で逃がされ、車も大部分潰された次第。

幸い1台助かっておりましたので、拳王様におかれましては一度居城に戻ることを申し出たのですが、『己が体を預けるのは黒王号のみ』と仰り、あの場を動かれませぬ。

故に、我らがひと足先に居城へ戻り、伝令を。

リア殿。どうか拳王様の元へ、我らと共にご同行いただきたく」

「は？」

思わず素で聞き返してしまいました。

確か黒王がジユウザに奪われるという展開は、原作にあったことかと思えます。

確かにあの方は原作通りでも充分に、拳王様を煽っていたと思いますし。けど。

「…あの。わたくしが参りましたところで、事態が変わるとは思われませんか？」

「いいえ。リア殿が迎えに来られたとあらば、拳王様とて帰らぬとは言えぬ筈。

我らを助けると思って、どうか！」

…要するに、コレってアレですわよね。

この状況、部下たちに『ママが迎えに来なきや帰らない』的なやつと同じようなもの

ととらえられてますわよ拳王様!!

違いますのよ皆様!

これは拳王様の、黒王に対する信頼というか、たとえ敵の手にあつても必ず戻ってくる

るとの、信頼を示したシーンなのです!

決して我儘を言ってるわけではありませんのよ!!

というかまあ、拳王様がお帰りにならないければ、共に付き従う兵士の方々も居城に戻

れず、今宵は野営するしかなく。

此度は遠征をするつもりはなく、その為の準備などもほぼなかった筈ですので、あの凶体の拳王様はともかく、他の方々には少々お辛いのでしようね。わかりました。

「……承知いたしました。

恐らくは御期待に添えぬと思いますが、拳王様の女官としてできるだけのことはさせていただきます。

わたくしを拳王様のお側に送り届けてくださいませ」

……どちらにしろ他の方々の移動手段が奪われた以上、代わりの車や馬を連れていかねばならないでしょう。

野営の為の幾ばくかの物資もそれに積んでいけば、拳王様がどう判断したとしても、現状よりはマシな筈ですわ。

・
・
・

「……ジウウザの事は昔から知っておるが、今更奴が南斗の為に動くとは思わなかった」
結局。

黒王がジウウザ様を連れて戻られると踏んだ拳王様は、居城に戻る提案を受け入れてはくありませんでした。

むしろわたくしがお側につくことで、野営にても不自由がなくなつたと、わたくしを

連れて戻った兵士の方が褒められておりまして、なんとも複雑な表情をしておられましたわ。

簡単な食事を済ませ、いつかのような大きなテントの中で、わたくしと2人きりになると、拳王様は少し懐かしげにぼつぼつと、昔語りを始めました。

ジウウザ様と拳王様。

少年期のおふたりは、特に相性が良かったわけではないものの、漠然と友としての感情を抱いていたようで、大人になって敵味方に分かれた今、さすがの拳王様もどこか複雑な思いがあるようですわ。

「あの男にはかつて、妹とも思い世話をした女がいた」

はい、存じております……とも言えず、わたくしはいつもとは逆に、拳王様のお膝に座らされた状態で、黙ってお話を聞いております……これが固くてメツチャ座りにくいのですけどね!!

「その女とは結局、実の妹を引き取る為に引き離されたが、女は南斗の巫女の1人として、美しくも賢しく成長し……奴はいつしか、その女に惹かれた」

……ん？なんか、わたくしの知っているお話と違いますわね？というか……

「だが、奴は成長したその女にとつては兄ですらなく、女は奴の後に出会い共に成長した、幼馴染の男に心惹かれた。」

それでも女の成長を見守り続けた奴は、女が見つめ続けるのが誰であるか、否応なく思い知らされる事となった。

そして、女の想う男が、奴の妹を連れて逃げた時、女はあろうことか、それでもその男のもとに走ったのだ。

絶望した奴は、それ以来無頼に走り：五車としての拳もその魂も腐り果てた：筈だった。

あの男が心と拳を蘇らせたとあらば、おれも騎馬では勝てぬと踏んで、黒王の背から降りたのだが：」

やっぱり！

登場人物、明らかにひとり多いですわ!!

そういえばこの前、ジユウザ様の口から『ユリア』の名が出た時、苦しい恋心を抱いた女性の名を口にしたにしては、辛そうな感じではなかったと思っていたんです。

むしろ、わたくしと声が似ているというひとのことを訊ねた時の方が：とそこまで考えてハツとしましたわ。

なるほど。その方がジユウザ様の、真の想い人という事でしたのね。

：と、わたくしがほんの少しの間、考えに沈んでおりますと、気がつけば拳王様がわたくしの頭の上で、なにやらブツブツとひとりごち始めました。

「……待てよ。南斗軍は元々、KINGを吸収して台頭したと聞いたが……もしやして、
 事實は逆か？あの女が……まさか。

だがジウウザの魂を蘇らせることのできる者など、この世にただひとり……なるほど。
 あの日、殊更に無害な形なりをして、惚れた男と静かに暮らすなどと言っておきながら。

この拳王を謀たくはったばかりか、我が覇道の前に立ちはだかるとはな。

あの時、ただの無力な女と思つて見逃さず、せめて奪い取つておけば、このような事
 にはなつておらんのだということか。

フ：龍を蛟と見誤つたこの表現はラオウ編3話にも出てきます。念の為。は、どうや
 らこのおれの方であつたようだ」

…あの、いつもとは違う意味でちよつと恐いですわ。拳王様。
 そうして。

結局一昼夜、その場で足止めを食らつたあと。

遙か遠くから響く蹄の音に、その場の全員が、身体に緊張を疾らせませます。

「命いのちを捨てに戻つたか、ジウウ……!？」

主人あるじのもとに駆け戻つてきた黒王の、その背から飛び降りたその男に、かけた拳王様
 の言葉が途中で止まつたのは、呼びかけるその名が違う事に、直前で気がついたからで
 しょう。

「ケンシロウ……何故、うぬがここに」
「ラオウよ。」

暴凶星は今日ここに燃え尽きる。

天に帰る時がきたのだ!!」

ビシツと肘を曲げ、天を指差しながら拳王様を見据えるケンシロウは、かつて本で見
た通りの冷徹な暗殺者の顔でしたが……いや待って！なにこの展開!?

14

「あああ!!りゃあ!!」

「あたあ!」

「ぐはあ!!」

「ほああ!」

「ぬおおおっ!!」

拳王様とケンシロウの戦いは、実に真つ当な感じに行われました。

……正直、ケンシロウまであの感じだったらどうしようかと思っておりますので、わたくし場違いにも安心いたしましたわ。

まあ、以前お話しした時のケンシロウは常識的……という概念はこの世界にはほぼほぼ無いですが、よくいえば生真面目、悪くいえばアドリブきかなそうな印象を受けました。

彼はあの手の事は苦手なかもしれませんがね。

その辺は、一見真逆のタイプである拳王様と似ていらっしやいます。

ほんとうの兄弟ではないはずなのに、兄弟として育つと似るところも出てくるので

しようか。

ちなみにわたくしの弟は、子供の頃は双子かってくらいわたくしとよく似ておりましたが、ある程度大きくなってからは『あ、言われてみれば確かに』程度しか似たところがなくなりました。

バランの時ほどの急成長ではなくとも（あの子はずっと栄養不足だったのが、ちょうど成長期に差し掛かったタイミングで、急に栄養状態が良くなったせいだと思いますが）、やはり男の子は大きくなると可愛くなくなるし、そもそも可愛いという言葉に喜ばなくなりますから。

ちなみに子供の頃の弟は割とイタズラ好きで、わたくしがいつもそれを嗜める立場だったのですが、大きくなってからは可愛い、綺麗と言われ続けて調子こきまくっていったわたくしを、何度となく弟が嗜めるという感じに立場が逆転しておりました。

今思い出すと黒歴史ですわね。

本当にお恥ずかしい限りですわ。

…と、そんな現実逃避的なことを考えておりましたらば、数人の兵士の方々が大きな盾のようなものを手にして、わたくしのそばに駆け寄ってらっしゃいます。

「リア殿、ここは危険です！

どうぞ、我らの後ろに避難を!!」

…ああ確かに、やつらお互いの拳でいちいち吹っ飛び、その度に身体が激突した岩壁の方が砕けて、その破片が離れて見ているわたくしの方まで降ってきますものね。

ちよつと大きいものもありますので、確かに避難した方が良さそうです。

「うぬがどれほど強大になろうとも、このラオウを倒すことはできぬ！」

そう言つて繰り出す脚きやくも拳も、対峙してはいないわたくしにすらとてつもなく大きく見えるほど、拳王様の鬨気が高まってらっしゃいます。

ですがケンシロウはそれらを腕一本でいなすと、一度間合いを離して構えをとりました。

そうしてから、一般の人類としては充分に長い脚で、拳王様に向けて蹴りを放ちます。「甘いわーどああ!!」

拳王様はその脚を片手で受け止めてそれを払い、バランスを崩して地面に倒れ込んだケンシロウの、顔面に向けて巖のような拳を落としました。

次の瞬間。

拳王様の拳が、今この瞬間まで、確かにケンシロウが倒れていた地面を砕きます。

拳王様がその拳を引き抜いた時には、まるでその肉體ごとすり抜けたかのように、本来ならば砕けているはずのケンシロウの肉體が、全くの無傷のまま、拳王様の背後に立っていたのです。

「でえい!!」

背後を取られ動揺しつつも、拳王様も止まらずに、裏拳でケンシロウに攻撃をしますが、ケンシロウはまたも滑るように移動して、なんならその激しい闘気ごと受け流してしまわれました。

「()の動きは……トキ?」

激流を制するは静水。

それを体現するが如く、本来なら全てを押し流す奔流のような拳王様の闘気が、ケンシロウの身体をすり抜けていくのです。

北斗神拳の奥義には、戦った相手の技をコピーできるといふものがあつた筈です。

恐らく今はタイミング的に、既に亡くなっていらつしやるであろうトキ様と、手合わせなどして伝授されたのか……。

「ぬく!!お、おのれ……」

ですが、全てを打ち砕く剛の拳を誇る拳王様にしてみれば、威力をこのようにして受け流される事は、その誇りを傷つけられる事に他ならないのでしよう。

それも、己を凌駕するかもしれない素質を持つと認めていた実弟ではなく、悔つていた末弟に。

「北斗剛掌波!!」

それでも拳王様は、動揺しながらも次の一手を繰り出してました。

それは直撃すれば、その闘気のみで文字通りその身を砕く筈の拳。

かつてバランと出会ったあの略奪劇、それを内部から手引きしていた大男を、物言わぬ塵と化したあの技ですもの。

ですが、そこから転じて動いたケンシロウは、拳王様に向かって無造作に歩き出したかと思うとその左脇をすり抜け、次の瞬間、拳王様の左脇腹から血が飛沫しぶきました。

「おほう!!……これは……南斗水鳥拳!!」

この脇腹のダメージはさすがの拳王様にも大きかったものか、その傷を押さえて膝をつきます。

「既にやつ肉体は二度砕けているはず……」

そうして、まるで今の状況が信じられないとでも言うようにケンシロウを見つめてから、何かに気がついたように目を睥にらきました。

「無より転じて生を拾う、究極奥義・無想転生……哀しみを知る者のみがなし得るとい……うぬが哀しみを背負い、北斗千八百年の中で、最強の男になったというのか。」

だが万人が認めても、このラオウだけは認めん！」

言つて拳王様は、その目だけで30人は殺せそうな睨みを効かせて、ケンシロウを見据えながら立ち上がります。

…どうでもいいですが先ほどからずっと、この場で拳王様しか喋ってませんわね。

と、その時、立ち上がり次の攻撃の構えをとった筈の拳王様が、次の一步を踏み出せずにその場に固まりました。

…よく見れば、その膝が小刻みに震えています。

「それが恐怖というものだ、ラオウ！」

あ、ここにきてやっとケンシロウが喋りましたわ。

「認めぬ!!おれは北斗の長兄！」

おれに後退はない!!あるのは前進勝利のみ!

無想転生など微に碎いてやるわ！」

「おれにも後退はない！」

ラオウ、今こそ野望果てる時だ!!」

そうして、互いの身体から噴き出す闘気が、今にもぶつかり合うというその瞬間……

「ケ——ン!!!」

…それはまるで、天上の調べのように美しく響く声でした。

その場の全員が反射的に、その方向を振り返ると。

風に靡く、艶やかな長い黒髪。

透き通るような白い肌。

咲きたての薔薇のように赤い唇。

すらりと伸びた長い手足と、完璧なバランスの曲線を描く嫺やかな肢体。

居城に集められた美人揃いの女官達の中にすら、これほど美しいひとはいないであろう、女神のような女性が、涙を溜めて立っているではありませんか。

「な……何故来たんだ、ユリア……！」

思わずといった感じで呟いたケンシロウの言葉で、わたくしはその方の正体を知りました。

いえ、そうかもしれないと薄々は感じておりましたが、あまりにも眩しく神々しくて直視できず、確信が持てなかったのです。

いや……さすがはこの世界のヒロイン。

こんなん、もはや人外の美しさやん。

などとわたくしは呆けておりましたが……

「ふ……ふはは！……そうか、あの女！」

よくぞこの拳王を謀ったものと思っていたが、あの時の涙どころか、言葉全てが嘘八百だったか!!

ユリアを死んだ事にして、己が身代わりになる事で隠していたとは、さすがのおれも思いもよらなんだわ!

更に、南斗軍を率いてこの拳王に楯突いておるであろうあの女が、そこまでして必死に守ろうとしているユリア!

うぬこそが、本物の将まじとというわけだ!!

天はやはり、このラオウを望んでいるのだ——!!!

：よくわからない台詞を叫んで、歓喜の表情でユリアに突進していく拳王様を、誰も止める事はできませんでした。

なんとなれば先ほど戻ってきた黒王が、すぐさま拳王様のもとに駆け寄って行って、拳王様は捕らえたユリア様を抱えたまま、軽々とその背に飛び乗ると、居城に真っ直ぐ駆け行ってしまわれたのです。

わたくしを含め、その場に残された誰もが、その後ろ姿を呆然と見送るしかできませんでした。

☆☆☆

あの後。

我に返った兵士の皆さんに連れられ、居城に戻ったわたくしが、駆け寄ってきたザク様に告げられたのは、拳王様がお倒れになったという報告でした。

正確には居城にたどり着いた途端に、倒れるようにお休みになってしまわれたとの事です。

ケンシロウとの戦いで手傷を負っておりましたし、ユリア様を連れ去った時は、はたから見てもテンション上がりすぎてましたから、後からドツと来たのでしょね。

問題はまだ傷の手当てでも何もできていなかったとの事で、それはこれからなので、できればわたくしにも手伝って欲しいとのこと。

つか起きているうちは手当てをしても何かと文句を仰いますし、意識がないというのであれば却つてうるさくなくてやりやすいのではないかと思うのですが、まあ言わないでおきましょうか。

それはそれとして…実はわたくしにはこの瞬間、ひとつ思い出した事がございました。

確か、ユリアを奪って居城に戻ったラオウが、直前のケンシロウとの闘いの傷を負ったまま眠りについて、その手当てをユリアがした事で『羨ましい』的な発言をした部下が1人、犠牲になるシーンがあつたはずですよ。

この居城にはいつかの厩番の男のような、なんているかわからない人材もそこそこ在籍しておりますが、 balan が去った後に戦場での拳王様の雑用を任された、確かウサ殿という方のことを、『口数ばかり多いがろくな仕事をせぬ』と以前、拳王様がこぼしてお

りました。

：バランスはわたくしが仕込みましたから、彼に比べたら行き届かない面が目立ってしまふのは仕方のない事でしょうけども、元々弁を弄する小者がお嫌いな事もあり、拳王様は最初から、彼を良くは思っておられぬ筈。

で、今考えるとあのウサ殿、あのシーンでラオウに本気の裏げんこつ落とされた部下にそっくりだった気がいたします。

つまり、あの場にユリア様が残されていて、手持ち無沙汰で拳王様の手当をしていたなら。

更に拳王様の寝所の支度を、その側でウサ殿が整えていたなら。

ただでさえケンシロウとの闘いでその身に恐怖を刻みつられ苛立つていた寝起きの拳王様に、あのひとが余計なことを口走って神経を逆撫でする展開になる事必至なわけです。

手当てするのがユリア様でなくわたくしならば、その光景などいつものことですし、ぶつちやけウサ殿ができることであれば、わたくし一人で事足りすから、2人とも拳王様が目を覚まさぬうちに追い出しておきましょう。

ええ、これは人助けなのですわ。

単に空気が読めないだけのとりにたてて罪のないひとが、これから理不尽な暴力に晒さ

れる事がわかっていて、見殺しにするわけにはいきませんもの。

……拳王様のお部屋にわたくしが参りますと、案の定ユリア様が、拳王様の傷の手当てをされようとしていた、まさにそのタイミングのようでした。

彼女に簡単な挨拶をしたあと、ひとまずわたくしの部屋で休んでいただくようザク様にお任せし、ただニヤニヤ見ていただけのウサ殿を部屋から追い出して、わたくしはケンシロウにつけられた拳王様の傷の手当てを、ひとりで行なつたのでした。

「……リア？」

手当てがひと通り完了し、拳王様のお身体に毛布をかけようとしたところで、突然名前を呼ばれました。

「……お目覚めになられましたか、拳王様」

「これは、うぬが？」

起き上がりながら、布を貼り付けただけの脇腹に手を当てて、拳王様がわたくしに間いかけます。

一瞬、起きて大丈夫かと思いましたが、先ほど見た時、不思議なことに脇腹の、結構深いと思っていた切り傷が、もう塞がりかけていました。

いくら拳王様が化け物だとしても、前回の戦いの時に負った傷は、結構治るまでに時間がかかったのに。

「……はい。」

ほかの方々も手伝いを申し出られましたが、わたくしの一存でお断りいたしました。ユリア様が手当てしようとしていた事は、言わずにおいた方がいいでしょう。

心惹かれた女の情けは屈辱であるという、よくわからない怒りポイントがある筈ですものこの方。

「…拳王様の弱っているところなど、見ていいのはわたくしだけだと……今だけは、自惚れたかったのですわ」

ふと、自嘲的な言葉が思いがけず口から出て、そんな自分自身に驚きます。

拳王様は溜息をひとつ吐くと、怪我人とは思えない力で、わたくしを寝台の上に引き寄せました。

「…まだ、おれに捨てられると思っているのか？」

「ユリア様…かねてから想いを寄せられていた方なのでしょう？」

手に入れた今、代わりはもう要らない筈ですわね？」

「まだわかつておらぬようだな。」

おれは、うぬを代わりとして扱った事などないわ」

うそつき。口から出ようとしたその言葉を、危ういところで押し留めっていると、拳王様の頭が、いつも通りわたくしの膝に乗ってきます。

「…手放さぬと言ったであらう。」

誰が来ようが、うぬはこれまで通りおれの女だ」

呆れたことを平気で口にする拳王様に、わたくしも溜息混じりに答えました。

「……欲張りでいらつしやるのですね、拳王様は」

☆☆☆

「…拳王様、これからどうなさるおつもりですか」

「これから、か…。」

まずは、この肉体に生じた恐怖を拭い去らねば……」

「そんな事ではございませぬ！

リア殿のことを、この先どうなされるおつもりですか！」

「…リア？どうするとは、どういう事だ」

「ユリア様というあの方は、確かに美しい女性です。」

ええ、奪つてでも手に入れたくなる、そのお気持ちも、男としてよくわかります。で

すが！」

「これまであれほど献身的に、拳王様に尽くしてきたリア殿をあつさり捨ててまで、拳王様が得なければならぬお方であるとも、我らにはどうしても思えぬのです！」

「聞けば、あのユリア様の世話を、リア殿にお命じになったとか！」

それは、身も心も捧げ尽くしてくれた女性にしように対し、あまりに酷い仕打ちと思われませなんだか!」

「拳王様が要らぬのであれば私にください!」

一生かけて幸せにします!!」

「……最後何かおかしな事言ったやつがおるがそれはさておき。

リア本人だけでなくなせ貴様らまで、おれがあやつを捨てる前提で話をしておる」

「………は?え?で、ではなぜユリア様を……」

「無論、ユリアが天を握った男にふさわしい女だからだ」

「で、でも、それではリア殿は」

「うぬらの言う通りリアもまた、おれにとつては得難き女よ。

ユリアを手に入れたとて、おれはリアを手放す気はない」

「えええくく………?」

「ウツヒヨヒヨ、両手に花じゃないですか拳王様。

このウサもあやかりたいもんですな」

「貴様は黙つてろ!」

「ぶぎゃー!」

……上層部でそんな会話がなされていたなどとわたくしが知るよしもなく、けれどユリ

ア様を居城に迎え入れて以来、幹部の皆様や他の女官さん、はては一般兵士の方々の、拳王様に対する視線がやけに冷たくなつた事だけは、臙げながらわたくしにも感じ取れておりました。

あとウサ殿は、拳王様ではなく幹部の皆様からの袋叩きにあつたそうですわ。
変えられない運命つてあるものですね。

「ユリア様」

「えっ……？」

わたくしが拳王様のお部屋でひと晩過ごした翌朝。

一旦はわたくしの部屋で休んでいたユリア様は、今朝はちゃんとお迎えの支度を整えた、別のお部屋に案内されたとの事で、わたくしはザク様に連れられてそちらにお伺いしました。

わたくしがユリア様を『拳王様の大切な方』とご紹介し、最上級のおもてなしをとお願いして用意していただいたお部屋は、拳王様のお部屋にほど近い、その次に広いお部屋です。

実は先日わたくしがお部屋を移動した際、一度こちらを使うように言われたものの、一介の女官には豪華すぎると固辞したお部屋でもあります。

わたくしが伺った時には、ユリア様は広い寝台に腰掛けた状態で俯いており、声をかけると弾かれたように立ち上がりました。

「ああ、どうぞそのままおくつろぎになって。」

昨日はたてこんでおりましたもので、改めまして御挨拶に伺いました。

わたくし、拳王様付きの女官のリアと申します。

今より、ユリア様のお世話も兼任させていただくことになりましたので、どうぞよろしく願います」

ユリア様にも身の回りのお世話をする頼りになる女官をつけて差し上げるべきと、進言したのはわたくしです。

それに対し拳王様は、『うぬ以上におれが頼りに思う女官などおらぬ』と仰ってくださいましたので、恐れながらわたくしが少しの間は拳王様のお世話と兼任し、徐々に良いと思うかたを差配させていただくことにしました。

女には女同士にしかわからぬこともございます。

ましてやユリア様は捕らわれてきた身、むくつけき男ばかりの中にいて、怖いと思わぬはずありません。

ひとまず自己紹介をしながら女官としての礼をとりますと、ユリア様はどこか戸惑ったようにわたくしを見つめております。

それはそれとして生で見たユリア様の、伏せ気味の長いまつ毛に縁取られた、潤んだ黒目がちな瞳に妙な既視感を覚えたのですが、よくよく考えたらこの目、色味はまったく違います、お兄様であるリュウガ様とそっくりでした。

おふたりにあんまり似た印象はなかったのですが、やっぱり血のつながりが出てくるものですね。

「拳王様から、ユリア様にはくれぐれもご不自由のないようにと、重々仰せつかっておりますので、なんなりとお申しつけくださいませ」

彼女にしてみればここは敵地。

わたくしのこととすぐに信用はできぬでしょうが、それでも安心させるよう、できる限り穏やかに言葉をかけます。

ですが、ユリア様はわたくしを見つめたまま、何故か固まってしまわれました。

え、これは、まさか……

「……ユリア様!？」

あ、昨晩はよくお休みになれなくてまだお疲れですか？

それとも、お食事がお口に合いませんでした？

ああまさか！

よもやとは思いますが、わたくしが来る前に、他の者が何か不届きな事でも……」

「い、いいえ！いいえ違います!!」

お食事は手のかかった温かいものを美味しくいただきましたし、昨晩休ませていただいたお部屋はなんだかちよつといい匂いがして大変居心地が良く、思いの外ぐつすり

眠ってしまいましたし、今朝こちらに案内していただきました方々も、捕虜に対してとは思えないほど丁寧に扱って接してくださいました！

…ごめんなさい、不躰に見てしまつて。

あなたが、なんだかわたしのお友達に、すこし似ていたものだから」

「お友達…？」

「ええ…なんというか雰囲気と…それに、声がとても」

…どなたかに声が似てると言われたのは二度目ですわね。

確かジユウザ様の想いびとのかた（推定）だったかしら。

拳王様によれば、南斗の巫女のひとりだったとか？

だとすれば、ユリア様と交誼があつてもおかしくはないのかもしれませんが。

そういうえば先ほど声をかけた時の、ユリア様が顔を上げた一瞬、笑顔を浮かべる直前のように瞳が輝いて、それが次の瞬間に悲しげな表情に変わったのを、わたくし確かに見ておりました。

あれはわたくしの声に反応したのですわね。

とりあえず睡眠も食事も取れたようで良かったです。

今朝方から幹部の方々や兵士の皆様の、ユリア様について訊ねた時の反応が微妙だった為、何かあったのかと実は少し心配しております。

どうやらきちんともてなされていらつしやつたようで安心いたしましたわ。

それはそうと昨晚ユリア様がお休みになられたのはわたくしの部屋だった筈ですが、いい匂いがしたってなんででしょうか。

拳王様がお好みになられませんかのでわたくし、香りのものは特に使ってはおりませんのに。

「……だからでしょうか。

今、あなたに声をかけていたのだいたら、少し不安が和らいだのです。

……ユリアさん、とおっしゃるのね。

心配していただき、ありがとうございます」

そう言って少し寂しげに微笑んだユリア様が、なんだかとても健気に見えて、わたくしちよつと抱きしめたくまりました。

勿論、そんな衝動は危ういところで押しとどめました。

悔れませんか、ヒロイン。

この世界の様々な男たちの心を奪うばかりか、同性のわたくしにまで、このような感情を抱かせるなんて。

「……いいえ。

状況が状況だけに、不安になるのも仕方ありませんわ。

改めまして、主人に代わってお詫び申し上げます。

怖い思いをさせてしまい、申し訳ございません。

ですが、拳王様は恐ろしい方ではございますが、女を無理無体に手籠めにするような真似は、その誇りにかけて、決してなさいませぬわ。

その点だけは御安心くださいませ」

大事な事なので、そこは強調しておきます。

…わたくしの時は若干アレでしたけれども、『駄目だとは言っていたが嫌とは言わなかった』という事で、本能的にセーフだったらしいですから。

というか、わたくしが本気で拒否する事はそもそも想定していなかったようですし。

「わかりました。あなたを信じます。

少しの間ですが、お世話になります」

わたくしがうつかり遠い目をしていましたら、ユリア様が先ほどよりもしつかりした声で、わたくしを見つめ頷いてくださいました。

…そういえばユリア様は、昨晩はわたくしの部屋で、ぐつすり眠ったと仰っていました。

実は見た目より神経図太いのかもとひそかに思ったりもしましたが、もしかしたら、この『大きな寝台』のあるお部屋に移されたあの方が、不安が大きかったのかもしれない。

ません。

「……ところで、ユリア様は昨日、何故あの場に？」

ケンシロウ様のあの様子を見た限り、元々は来られる予定ではなかったとお見受けいたしました。

恐れながら、主人あるじの気性もお気持ちも、ユリア様はご存知でいらつしやるのでしよう？」

持つてきた着替え一式をさりげなく示しながらクローゼットに入れ、ずっと気になっていたことを訊ねます。

原作では確か2人は、南斗の居城で落ち合う約束になっていて、ラオウがやはりユリアに向かってしていると知ったケンシロウが、先にラオウと対決することを選択し、仕方なく待つてたら、海のリハクが余計なこととして、待つてるユリアの上からラオウが降つてきて……の筈でした。

今回は本来なら雲のジウザとの対決だったところに、この兄弟対決が前倒しで割り込んできたわけで。

そもそも確実に南斗軍とケンシロウは既に接触しているのだから、今更落ち合うも何もないし、だからこの状況でユリアがいるのは不自然なのですわ。

それで原作通りに、狂喜した拳王様に拐われちゃったわけで、もしかしたらこれが前

世でラノベとかで読んだ、強制力とかいうやつなのでしようか。

「…ただ待っていることができなかったのです。」

あの人、ケンがわたしに黙って、ラオウとの決着をつけに行くと、決心して出ていった時に。

ケンがまたわたしの為に、命を捨てようとしているのではないかと…そう思ったらどうしても、我慢ができませんでした」

…聞いてみれば、割と考えなしだったようです。

これだと『待ち続ける事がわたしの宿命』と仰っていた原作との行動と明らかに違いますが、女としての感情は、もしかしたらこれが正しいのかもしれないですね。

そういえばこれより後に、ユリアは死病に冒されている事が明らかになるのですが、ユリアが常に流されるまま生きていたのも、この短い命を受け入れて、己の命と幸せを諦めていたからだ、わたくし勝手に思っているのですけれど。

なんというか、今わたくしの目の前にいるユリア様からは、そういう諦めというか、悪い意味での悟った感というか、そういうものは一切感じられません。

むしろこれから生きる決意というか、運命と戦う覚悟のようなものが、瞳に現れている気がしてならないのです。

わたくし、これでも拳王軍の女なので、『死への恐怖に怯えながらも、一方で生を諦め

ている』男たちをたくさん見てきておられますのでね。

そういう感じは、なんとなくですがわかるのですわ。

…というか、物語序盤での、シンに連れ去られる前の反応を思い出すと、この嬬やかでも芯の強い、戦う目をした彼女の方が、実は本来のユリア様なのではないでしょうか。そんな事を思っていたら、ユリア様は少し俯くと、再び言葉を紡ぎはじめました。

「…わたしの、南斗の将としての宿命は、遍く愛で世の人々に平和をもたらす事。

けれど、わたしも心の中では、わたし自身が幸せになることを望んでいます。

愛するひとと共にある、ただそれだけの幸せを。

そんなわたしの、身勝手な思いを肯定してくれたのが、先ほどリアさんに似てると言った、彼女なのです。

彼女はずつとひそかに、わたしを守ってくれていました。

ずつと親友だとは思っていましたが、その一方で、彼女が守っているのは『南斗の将』なのだと、その時までには思っていたのです。

…けど、彼女はケンに言ってくれた。

『命に代えても守るなんて言うな。あなたがいなければユリアちゃんは幸せになれな

い』と

「それは…」

「彼女はわたしをただの『ユリア』として、一人の女としての幸せを、当たり前前に願ってくれたのです。」

それをわたしが掴む事を、当たり前前に肯定してくれました。

だから……わたしは諦めたくない。

ケンがいて、わたしがいる……ただそれだけの幸せを」

考えてみれば当たり前前のことです。

ユリア様とて、ひとりの女。

たとえこの世界を救う鍵のひとつとして、天の配置したパーツであつたとしても、泣いて、笑つて、時には怒つて、ひとを愛して、生きている生身の女なのです。

そもそも作中、ユリアを欲する男たちは数多いても、その幸せにまで言及した男がどれだけいたでしょうか。

シンは身勝手な愛を押しつけ、トキは傍観し、ジユウザは絶望し、ラオウはただ手に入れることだけを望んだ。

彼女の求める幸せが『ただ、愛するひとと共に在る』、それだけのことであつたのは、今もそして作中のユリアにも、一貫して変わらないことだつた筈なのに。

「そう……だから、ケンシロウ様を追いかけたのですね。」

彼にもう一度、お友達の言葉を伝える為に」

『お友達』というひとの言葉はもはや、ユリア様の生きる根幹として、彼女を支えているのでしよう。

たとえこの先の命が短くとも、ユリア様はご自分の幸せを諦めることはないのだろうと思うと、それは良い変化であるように思えました。

「そのような方にわたくしが似ているのでしたら、光栄なことですわね。」

ユリア様とは名前も似ているので、わたくし勝手に親近感を抱いておりましたものから

…多分その方が、ここ一連の原作クラツシャーなのでしようけれど、今それは考えないことにいたします。

わたくしがそう言うのと、ユリア様は俯いていた顔をあげ、ゆっくりと口角を上げました。

「まあ……ふ、ふっ」

…ああ良かった。少しですが笑っていただけましたわ。

…

…このあと、こちらの部屋に立ち寄った拳王様が、相変わらず恐ろしげな顔でユリア様に、

「おれの女官を手懐けたつもりだろうが、この女はおれとの二択となれば必ずおれを選

ぶ。

うぬに残された選択は従順か死、それだけだ。

いつまでも自由にはさせておかぬゆえ、選ぶべき答えを用意しておくのだな」

と、愛している女性にかける言葉としては最低な事を言つてのけましたので、去り際にうつつかりを装つて足を踏んでおきました。

せつかくユリア様に心を許していただいたのに、これでは台無しですわ!!

☆☆☆

「リアさんは……単なる女官ではありませんのね」

「リア殿は拳王様の、ただ一人の寵姫です。」

御本人は弁え過ぎるほど弁えられた方ゆえ、そう呼ばれる事を好まず、一介の女官でしかないと仰られておいですが、我らの知る限り拳王様は、あの方以外他のどの女性にょしょうも、これまで傍には置かれなかったのです。

拳王様の伴侶となる方をお迎える為に整えていたこの部屋も、これまで誰にも使われていなかったものの、いずれあの方のものとなる事を、この者誰もが信じていた事でしょう。

…貴女が御自分の意志でここにおられるわけでない事は存じております。

それでも貴女の今の立場を快く思う者が、ここには居らぬと思つていただいて間違い

「いざいません」

16

ユリア様に付ける女官を3人ほどに厳選し（途中ややトラブルが生じたものな
んとか穏やかに収束させて）本当はこのエピソード書いてたんですが、この話の中
に入れてしまうと非常にバランスが悪くなるため、ラオウ編完結後に幕間として入れる予
定です。何日か監督して問題ないと判断したところで、わたくしは拳王様の選任に戻さ
れました。

拳王様の事は別として、なんだかやけに懐いてくださったユリア様のお世話は、結構
楽しかったので残念なのですが、

「いつまでも女同士でイチヤツついておるでないわ。

人選が固まったならば、さっさとおれの側に戻ってこい」

と、事あるごとに言われましたので仕方ありません。

いくら意中の女性が靡かず、わたくしとばかり仲良くするからといって、そんなに妬
みかすともよいではありませんの。

…というか、出陣の際に拳王様のお世話をする方がいらつしやらなくなつたので、今
度は居城内だけではなく戦場にも同行させられております。こらウサ殿どこ行つた。

そして今。

「フドウよ！鬼神となりて我と戦え!!」

「めんどくせえなお前！いきなりなんだよ!!」

…わたくしはまた、一体何を見せられているのでしょうか。

☆☆☆

ことは、五車星『山』のフドウが大勢の子供たちと住み暮らしていると情報を得ていた村から、見張っていた兵たちが縛られた状態で、馬に乗せられて居城に戻ってきた事から始まります。

その後、調査に向かったその村からは、彼と子供たちの姿が忽然と消えており、何故か一番大きな家の扉に、

拳王の

クソバカ☆ヤロウ

とデカデカと書かれた布が貼り付けてあったとかで（しかも裏返してみたら拳王軍の旗だったそうで）、その報告を受けた拳王様がフドウの搜索を命じたわけです。

「この肉体より恐怖を拭い去り、魔王となるにはフドウ、あの男の拳と命が必要だ!!」

何か変なこと言い出したこの子。

幹部の皆さんが明らかにそんな目で拳王様を見ているますが、多分知ったこっちゃない

んでしよう。

拳王様はいい意味でも悪い意味でも空気が読めませんので、その手の細かいことはいいちいち気にしませんもの。

というか、ここのとこ毎晩わたくし、拳王様と同衾させていただいておりまして、夜中に拳王様が斃されているのに気がつき、その度に宥めておりますので（なので色っぽいことはしていないにもかかわらずちよつと最近寝不足気味です）、先の言葉も嘘ではないと思います。…本音はその一連の出来事に、相当ムカついているんだと思われま。

結局フドウは5日間の搜索の末、もとの村で1人でニワトリと戯れているところを見られ、その報告を聞いた拳王様が、なんでかわたくしだけを連れて黒王に乗って駆けつけ、先程のやりとりになったわけです……が。

「万人に慕われる善のフドウ。」

だが、うぬが如何に善人の皮をかぶろうと、その身体には鬼の血が流れておる！」

「おいおい。皮被るとか、別嬪さんの前で下品な話してんじゃねえよ」

「誰もそんな話はしとらぬわあっ!!」

下品な方向に持つていったはうぬの方であろうが!!

てゆーかうぬのキャラそんなだったか!?

「いいんだよ、どうせ今は子供ら見てねえし」

「見てなければいいというものではない！」

普段の生活態度というものは、咄嗟の時に出るのだぞ!?

親ならば子供の見ておらぬところでもキチンとせんかつ!!」

…ああ、この精神攻撃、まだ続きますのね。

フドウ様の反応が予想とあまりに違いすぎた為か、シヨツクのあまり拳王様まで、キアラ崩壊起こしていらつしやいます。

わたくしはその光景を見て、フドウ様でつかいなと思いました。おわり。

……………はっ。

いけませんわ、わたくし意識を一瞬異世界に飛ばしておりました。

しつかりしなくては。

「そもそもひとの黒歴史、先に突つついたのはお前だろ、ラオウよ。

おれが言うのもなんだがな、いい加減落ち着いた方がいいぞお。

その年齢としで未だに童貞キアラとか、さすがに見てるほうが痛い、つか辛い。

そりゃあ確かに、昔はおれだつて荒んでたが、心入れ替えたの、今のお前よりずっと若い頃だからな？」

「童貞ちゃうわ!!」

…最初の方こそ口調が荒かったフドウ様ですが、徐々に穏やかな口調に戻ってきてお

ります。

『山のフドウ』といえは北斗の拳において、北斗の次兄トキや、南斗白鷺拳『仁星』のシユウと並ぶ聖人キャラのはず。

それが一体何があつてこのようなことに。

いえ、そのトキ様があれだけのキャラ崩壊を起こしていた事を考えたら、不思議ではないのかもしれませんが、やはり違和感が半端ないので、戻つてきてくれて嬉しいです。

しかしながらフドウ様の、今度は不良少年を諭すような言葉に、怒りゲージがどんどん上がつてきた拳王様のキャラが、またちよつと怪しくなつて来ました。

「確かにきつかけつてのも大事だがなあ。

…：そうそう、そのきつかけについて、おれは割と最近まで勘違いしてたことがあつて、失礼なことしたなつて、今もそのことでちよつと落ち込んでな。

まあそんな事はどうでもいいやな。

ほら、幸いしつかりしてそんな別嬪さんも側に置いてることだし、身を固めるにやいい頃合いなんじゃないか？

…：それはさておき、マジでうちの将返してくれんか。

でない、下手すりや若い頃のおれなんぞより、もつと恐ろしい人を本気で怒らすこ

とになるし、そうなると正直おれらも恐

「いいから話を聞け——つ!!!」

どつかんという幻聴が聞こえるくらい、怒りで真っ赤になった拳王様が、フドウ様の言葉を遮ります。

「うぬがさつきから何を言っておるかわからぬが、おれはその恐怖に打ち勝つ為に来たのだ！フドウよ！

御託並べるのも大概にしておれと戦え!!」

ここでもようやく主導権を取り戻した拳王様は、そう言つて地面に手刀を振りかざしました。

瞬時に、その拳圧だけで地面に、深さ4センチほどの溝ができます。

それから、黒王の鞍の横から何かを取り出すと、それをわたくしの方に、突き出すように渡してきました。

∴それはクロスボウと呼ばれる武器。

専用の矢を装填すれば、わたくしのような素人、そして非力な女でも扱える、充分に殺傷力の高い武器です。

∴この世界では、達人級の拳士の実力を測る為の、ダメージを与えるに及ばない武器として使われることが多いですけど。

「リアよ……このラオウの身体、一歩でもここから退いたら容赦はいらぬ！」

この背に向かい撃ち放てい!!」

「ええっ!!?」

いやいやいや!

なんてことを命じてくれやがりますの、このオッサン!!

てゆるか思い出しましたわ。

コレ本来の流れなら、子供たちの命を盾にして、ラオウがフドウに勝負を挑む場面でした。

その為、拳王軍の兵士が村を取り囲んでおり、それを命じられるのも彼らなら、ラオウが撃てと命じるのも、彼ら数人がかりで引くバカでかい弓と、槍みたい以太い矢であつた筈。

今は盾にとる子供達も取り囲む兵士もおらず、側にわたくししか居ないから、当然のようにわたくしに命じるわけですのね!

…そして、わたくしは拳王様が本気で下した命令には逆らえません。

撃てと言われたなら、撃つしかないのです。

拳王様ご自身は、己が退くことなどなく、ただ覚悟の為だけのおつもりです。

ですが、その必要が生じること、わたくしはもう知っております。

「…よかろう。しばし待つていろ、ラオウ」

フドウ様は暫し考えていらつしやいましたが、頷いて家の中に一度引つ込むと、防具と見るには必要な部分がまるで覆われていない戦装束を身につけて出てこられました。

それを見て、満足そうな笑みを浮かべた拳王様は、先ほど己が引いた死線デッドラインの、向こう側へ一歩踏み出します。

そして…

戦いは、始まってしまったのです。

☆☆☆

それは、壮絶な拳の打ち合いから始まり、拳の当たる面積の広さから、最初は拳王様が有利な感じで進んでいきました。

ですが、フドウ様は鬪気の扱いに長けており、掌の触れた面に一瞬にして鬪気を流して、拳王様にもダメージを与えてきます。

2人の身体から激しく血が飛沫しぶき、互いの息が上がっていきます。

と、先にフドウ様が距離を詰めて、拳王様の身体をホールドしました。

そのまま筋肉を膨らませ、締め落とそうとしているようです。

ですが拳王様はフドウ様の秘孔を素早く突くと、その拘束を解き、なんとか間合いを離しました。

それから…何かに魅入られたように動きを止めます。

「死ねラオウ!!!」

瞬間……

「いかん、止せっ!!」

「!?!」

拳王様に向かって拳を振り落としていた筈のフドウ様が、その横をすり抜け、わたくしの前に立ちはだかりました。

わたくしが放ったクロスボウの矢が、厚い胸板の中心に突き立ちます。

「な…貴様、何を……はっ!」

なんと、まさか…こ、この拳王が、しりぞ退いていた!!」

自身の横をすり抜けた巨体を追いかけた視線が、己の足元に留まり、拳王様は驚愕の表情を浮かべました。

それから、何が起こったのかを徐々に把握して、拳王様は、立ち尽くしたままのフドウ様の背に向けて、声を張り上げます。

「何故だ…何故、おれを庇った!」

負けて敵の情けを受けてまで、命を拾おうとは思わぬわ!!」

「貴様を庇ったのではない！」

おのれは、自分が何をしたかわかっておらんのか!!」

「な……」

一度振り返つて、拳王様があげた以上の怒号を響かせるフドウ様に、拳王様が明らかに慄きました。

そして、わたくしは。

「あ……ああっ」

「ははっ、よくしよし。」

大丈夫だよく別嬪さん。

よく見ろ、この身体。大きいだろう？

おれは、この程度の矢では死なぬよ。

落ち着きなさい」

矢を放つた後のクロスボウを、ゆっくりと歩み寄ってきたフドウ様にさりげなく奪われて、優しい声をかけられ、更に指先で頭を撫でられています。

なにかはわからないけれど何か、喉の奥に詰まった感じで、息が苦しくて、その場に座り込みます。

「わた…わたくし、し、は……」

「うん、いい子だ。」

さあ、息を吸って、吐いて。

どうだね、少し落ち着いたかね？」

言われた通りに深呼吸すると、息苦しさは無くなりました。

その代わり、別の何かが進み上げてきて：

「ひっ……えっ……」

「そうだね。泣きなさい。」

頑張り屋さんなのはとても素敵だが、ちよつと我慢しすぎたね」

トドメとばかりに頭の上から、優しい声が降ってきて、ついにわたくしは決壊いたしました。

「うっ……わあああぁぁん!!!

拳王様のばかっ！極悪人！

鬼！魔王！！本命童貞——！！

何が何だかわからなくなつて、わたくしは我儘な子供のように泣き喚きました。

涙がとめどなく溢れてきて、感情の奔流が止められません。

「今なんか最後に物凄く失礼なこと言われた気がするがそれはさておき……どうということ

だ、リア……」

「どういうことも何も、貴様が命じたのだろうか？」

『愛する男を、その手で殺せ』と。

彼女は、言われた通りにそれを実行した。

それがどれほど酷いことか、愛を知らぬ貴様にはわからぬか」

「!!」

拳王様の右脚が線を越えた瞬間、わたくしは絶望しました。

けれど、わたくしの『生きていてほしい』というただの願いの為に、拳王様の誇りを穢すこともできませんでした。

ばかなひと。ばかなひと。ばかなひと。

けどほんとうにばかなのは、こんなおとこのことを、それでも好きなのわたくし。だから、せめて。

わたくしの放った矢が、拳王様の命を奪うなら。

わたくしは次の矢をフドウ様に向けて、彼に討たれようと思いました。

なのに、まさか助けられるなんて。

「愛……だと。そんなもの……」

「……ラオウよ。」

今は、その女を連れて戻るがよい。

言つたらう。おれは、この程度では死なぬと。

勝負ならば、後日いくらでも受けてやる。

……それで良からう？」

「……っ」

「その女は、貴様の『きつかけ』になり得る存在。

大切にすることが良い」

そう言つてフドウ様が去つた後。

泣き喚き続けるわたくしを胸に抱きしめて、拳王様はその場から、しばらく立ち上がらずにいました。

わたくしが力任せに、拳王様の胸を叩き続けるのも構わずに。

やがて。

「……リア」

「……はい」

ようやく落ち着いたわたくしに呼びかける拳王様の声に、少し躊躇いながら顔を上げます。

拳王様は、やはり少し躊躇った後、意を決したように問いかけてきました。「うぬは……おれを愛しているのか？」

この期に及んでなんて訊きかたをするのでしょうか、この男は。

「……………知りません」

そしてその問いに、拗ねてそんなふうに答えてしまう自分も相当ですけど。

「そうか…………」

ただ一言、そう呟いた拳王様は、わたくしをもう一度抱きしめたあとは、兵士たちが迎えに来るまでの間、もう一言も言葉を発しませんでした。

「もう……なんでラオウの挑戦を、まともに受けたりしたんですか！」

下手したら死んじゃってたかもしれないですよ!？」

「悪い悪い。そんなに怒らんでくれよ。」

アイツもあの子も必死の覚悟決めちゃってたから、なんかちよくと逃げられない雰囲気だね。

口八丁で誤魔化すのが失礼に思えてきて、おれも本気で立ち合わなきやうって。

というか……ん、あれだな。

ホラ、あの日の人違いが判っておれ、死ぬほど恥ずかしい思いをしたからさ」

「……………は？」

「二度は死なないだろうなって思ったんだよ。なんとなくだけど」
「なんですかそれ!？」

…もう。とにかく、無事に帰ってきてくださって良かったです。

傷の手当が済んだら、子供達が待ってますから、元気な顔を見せてあげてくださいね
？」

17

その夜。

初めて拳王様の伽を拒否したわたくしは、居城内のバルコニーに佇んで、空に輝く稲妻を見つめておりました。

この世界、雨など殆ど降らないというのに、雷は割と落ちるのですわ。別にそんな事はどうでも良いですけど。

わたくしにとつて、拳王様は『推し』の筈でした。ただ見つめて、その存在を崇める。

それで幸せだった筈でした。

それが。いつからこんなに欲張りになってしまったのでしょうかね。

愛を返してくださらないのは仕方ない。

あの方は、愛など知らないのですもの。

それでも……

ああもう、気持ちが悪くちやぐちやで、考えると涙が出て。

最近少々すぐれなかった胃の調子まで本格的に悪くなってきた、先ほどは食べたもの

を戻してしまいましたし、伽を断って正解だったかもしれません。

今夜すっかり眠って、体調も戻れば、いつも通りのわたくしにきつと戻れます。だから今は……こんな醜いわたくしを、拳王様に見られたくない。

コツン……

背後に足音が聞こえて、反射的に振り返ります。

「リアさん……？」

そこには、月光と見紛うばかりの美女が……ユリア様が、立っておられました。

「……ユリア様。」

「こんな夜更けにどうなされましたか？」

「なんだか眠れなくて。あなたも？」

「……まあ、顔色が良くないわ。」

「どこか、具合が悪いのではないですか？」

ユリア様はそう仰ると、わたくしの額に手を伸ばしました。

……その手が、何か薄桃色の光を纏っているように見えたのは、空で輝く稲妻のせいでしょうか。

ですが、その掌が額に触れた瞬間、少し重だるかった身体が、なんとというか、スツキリしたというか、少し楽になりましたの。

「え…今の」

「…秘密ですけどわたし、少しですが傷とか病とか、治す力があるのです。

余程の重症ともなればさすがに無理ですけれど、自身の病も初期段階のうちに、これで克服しましたし」

なんか今サラッと、すごい秘密を打ち明けられた気がいたしますけど。

つまりいまのユリア様は、死病を患ったお身体ではないということ？

それができるのであれば、何故原作ではそうしなかつたのでしょうか？

…ああ、そうでした。

これもきつと例の『お友達』の存在。

原作のユリアは、心のどこかで生に絶望していたのでしよう。

けど今、ここにいるユリア様は違いますのね。

たとえひととき愛する人と引き離されても、いつか再び出会えることを信じて、幸せを諦めなかつたのですね。

「？顔色は…戻りませんね。

原因さえわかれば、根本治療も…」

「少し寝不足なだけですの。

御心配いただきありがとうございます。

おかげさまで、だいぶ楽になりましたわ」

わたくしが言うのと、ユリア様は少し、不得要領な顔をなされます。

ですが、それを追求する前に、やたらと聞き覚えのある重い足音に、わたくし達はそちらを振り返りました。

「……ラオウ」

一瞬で色を失ったユリア様が、そのひとの名を呟きます。

影になっていたそのひとの顔が稲妻に照らされ、険をはらんだその表情に、強い決意と僅かな躊躇いが同時に浮かんでいます。

あ……これ、まさか。

「哀しみを知らねば、ケンシロウに勝てぬ。

愛を知らねば、悲しみが見えぬ。

……知る術はひとつ！

ユリア！おまえの命をくれい！！」

…瞬間、再び雷鳴が轟くと同時に、強い雨が降り始めました。

いや天！

こんな時にそんな演出しなくてもよろしくてよ！！

てゆーか言いやがったこのオッサン！！

…そして、わたくしの心を知ってもなお、この方はユリア様を選ぶのだと、そんなどうしようもないことで、わたくしの心は咽び泣きました。

………けど、そんなこと言ってる場合じゃありませんのよ!!

「……おやめください、拳王様!!」

「退け、リア！」

退かねばうぬも……殺す!!」

突き出された拳王様の拳に必死で縋りつくと、拳王様はどこか辛そうなお顔で、強い言葉を放ちます。

けど、わたくしもここで引くわけにはいきませんわ。

ですが、そこにユリア様の、悲痛な声がかかりました。

「いけません、その方を手にかけては！」

…リアさん、わたし、覚悟を決めました。

わたしのこの命で、この世に光がもたらされるのであれば……」

ちよつと！なんかユリア様までこの雰囲気呑まれて変なこと言い出しましたけど

！

「ダメですわ！」

ユリア様は仰っていたではありませんの！

大切なひとが悲しむから、決して生きること、幸せになることを諦めない！」
感情が昂り、また涙が出てきたわたくしが必死にそう叫ぶと、ユリア様はハツとしたように立ちすくみました。

その間に、ユリア様を隠すように彼女の前に立ちはだかつて、わたくしは両腕を広げ、拳王様と向き合います。

「拳王様も、げんこつ引つ込めてくださいませ!!」

推しは見守り続けて愛でるものなのです！

殺してしまつてはそれができなくなります!!」

「また何か、おかしな事を言い出したなうぬは…」

「ひとのこと言えますか！

そもそも、想うひとを失う哀しみは、サザンクロスまで出向いておいて目当てのユリア様が亡くなったと聞かされた時に、いだけ味わつたではありませんの！

哀しみを知らねばつて事であれば、あれを思い出してなんとか出来ませんの？

あれほどの絶望的な哀しみすら、本人を前にした途端、忘れてしまうほどの鳥頭ですの、拳王様は!!」

泣きたいのを必死に堪えて、わたくしの膝に縋り付いて、そのまま眠つてしまわれたあの日のことは、足の痺れの恨みとともに、わたくしはまだ忘れておりませんことよ!!」

「いやそれは忘れろ！」

「どうかあの夜の事を、うぬは恨みに思っておったのか!?」
「ほんの少しですけど！」

「というかあんな衝撃的な出来事、忘れられるとお思いですか!?」
「わたくしは拳王様と違って、鳥頭ではございませんのよ!!」

「ぐぬぬ……!!」

……拳王様の顔が恐ろしげに歪み、歯を食いしばるギリギリという音が聞こえてきますが、知ったことではございません。

「ぐぬぬではございません。」

……わたくしがどれほど、あなた様をお慕いしているとお思いですか？

昼間の問いの答えが望みなら、今はつきりと申し上げますわ。

愛しております、拳王様。

あなた様の強さの裏にある悲しみ、弱さ、そして優しさ。

他の誰でもないわたくしの前でだけ、隠さず見せてくださったそれら全てが、わたくしの心に刻み込まれた、大切な宝物。

……忘れることなど、できはしませんわ。

それが消えるのは、わたくしの命が消える時だけです！」

拳王様の目を見据えて、はつきりと言います。

こんな言葉だけで伝え切れる想いではありませんが、このかたは口にして伝えなければわからないのです。

フドウ様の仰る通りでした。

わたくしは己の『分』というものにばかり囚われて、我慢して心を殺しておりました。ほんとうは、わたくしを愛してほしい。

ユリア様ではなく、わたくしを選んでほしい。

ユリア様が仰るように、互いが共にある、それだけの幸せが、わたくしだって欲しいのです。

…愛の告白って、こんな睨みつけながら、挑むみたいな気持ちで行なうものではないと思うのですけれども。

「リア……!!」

「ラオウ。」

…本当はあなた自身、判っているのでしょうか？

あなたが本当に愛しているのは、わたしではなく、このリアさんなのだ」と

…と。

わたくし肩に後ろから手を置いて、ユリア様が優しげにそう仰います。

その言葉の意味が瞬時に理解できず、わたくしは数秒固まりましたが、拳王様は驚愕の表情を浮かべて、ユリア様を見つめました。

「な……………」

「この乱世を導くのは、力と愛。

ラオウ、今のあなたは、既にどちらも持っている筈。

どうか、その猛き心に愛を受け入れてください、ラオウ。

リアさんの、そして、リアさんへの愛を」

そう訴えながらユリア様は、そっとわたくしの肩を押して、拳王様の方に突き出します。

拳王様は一瞬、わたくしに向けて手を伸ばしましたが、次の瞬間その手を、拳の形に握りしめました。

「……………出来ぬ！これは宿命!!」

天を望み、北斗を砕くのはおれの宿命なのだ！

全てを望むことはできぬ!!」

…わかつております。

それが、拳王様のプライドです。

今の拳王様の心には、ケンシロウとの決着しか見えておりません。

女の……わたくしの愛など、邪魔なだけなのです。

ですから……わたくしは拳王様の足元に、ゆっくりと膝をつきました。

「……………ならば、殺してください。」

ユリア様ではなく、このわたくしを」

先ほど、このシーンが原作にもあったものだと思いついた時、わたくしは、拳王様が手にかかる決意をしたのが、やはりユリア様であったことが、とても悲しかったのです。

それは、彼が愛しているのが、やはりユリア様であるという証左でありましたから。でも、もしも。

そのお心が一片でも、わたくしに向いているというのであれば。

「自ら手にかかる事こそ愛だと仰るのであれば。

わたくしが愛した拳王様の、その激しく熱いお心のままに、どうぞ、この命をお召しください。」

既にこの身も心も、あなた様に捧げておりますもの。

最後に残ったわたくしのこの命が、あなた様の糧となれるのでしたら、わたくしは本望ですわ」

そう言つて笑いかけると、拳王様は一瞬息を呑み……やがて意を決したように、大きな拳をこちらに向かって振り上げました。

「……………リア、恨んでもかまわぬ！」

我が心に哀しみとなつて生きよ!!」

「やめて——つ!!」

そして。

みたびの雷鳴が、一際強く輝きました。

「うっ……………!!」

「リアさん!?!」

…同時に、唐突に込み上げてきた吐き気に、わたくしは必死に口を押さえました。

これ多分ですが、推しの過剰供給で胃が圧迫されたのでしょね。

これこそまさに、仰げば尊死とよおとし…うえつぶ。

……………はあはあ。失礼いたしました。

…ふと気がつけば、ユリア様がわたくしの背中をさすっており、拳王様は固まったま

ま、何が起きたかわからんという表情を浮かべて、わたくしを見つめております。

これはいけません。

なんとか、場の雰囲気に戻さなければ。

「も、申し訳ございません。空気を読まず。

どうぞどうぞ、ここはわたくしに構わず続きを…」

「…ラオウ。リアさんの中に、新たな命が」

「なに……!?!」

「……………ほへっ?!」

唐突に告げられた、あんまりにも突拍子もない冗談に、つい変な声が出てしまいました。が。

思わず目を合わせたユリア様は、一向に『なんちやって』とは仰ってくれず、むしろ真剣な目で、わたくしに向かって頷きました。

「ほ……本当か?」

「リアさん。お腹の子は、ラオウの子ですね?」

え、待って。理解が追いつきませんわ。

とりあえず2人同時に質問すんのやめて。

「お、お腹の子!」

いえその、いきなりそう言われましても」

「…念の為聞くが、おれ以外に他に心当たりでも？」

「い、いえ！わたくしが身籠っている可能性があるとするれば、子の父親は、確かに拳王様しかいらつしやいませんけども!!

で、ですが…：そんな事、ある、筈が」

言われて、わたくしは反射的に、膨らみどころかなんの兆候も顕れていない、自分のお腹に手を当てます。

その手の上に、ユリア様の柔らかな手が重なって、その唇が美しい弧を描きました。

「間違いありません。わたしには見えるのです。

ふたりが互いに愛し愛された証の、ちいさな生命いのちの脈動が。

そして、この世に待ち望まれて生まれてくる、その輝かしい未来が」

…ああ、けどそういえば確かにこここのところ、なぐんか胃の具合が悪かったのですわ。てつきり夜も満足に寝られなかった時の疲れが、今になって出ているのかと思っておりますましたのに！

というか以前ザク様の仰っていた事、一周まわって当たっていたんじゃありませんこと？

「まさか、子ができるなんて…：わたくしと拳王様の間にだけは、絶対にそれはあり得ない

と思っておりましたのに」

「…確かに驚いたが、健康な男と女が、やる事はやっていたのだから当然の結果であろうが。」

むしろそのできないという自信はどこからきた」

「ぐぬぬ」

「ぐぬぬじゃない」

なんかさつきとは逆のやり取りになっており、理不尽ですがちよつと悔しくなつて、わたくしは拳王様の顔を見上げ…ん？

なんだか距離が近くありませんこと？

そう思った次の瞬間、視界が大きな壁に塞がれて、わたくしの身体は拳王様の腕の中に、すつぽりと包まれておりました。

「……負けたわ。」

おれには捨てられぬ。捨てる事はできぬ。

うぬの存在全てが、今や我が血肉と同様。

誰もうぬの代わりにはなれぬ。

このラオウ、もはや拳王の名は要らぬ！

リアよ、いつぞやの約束、果たしてもらおうぞ。

どんなことがあつても、おれから離れることは許さん。

そのかわり、このラオウの全てをうぬにやろう」

抱きしめる腕はいつもよりも優しく……その温もりに精一杯の『愛』を感じ取つたわたくしは、涙に濡れた頬を、その熱い胸に預けたのです。

☆☆☆

「……本当に、良かったのですか？」

大海原を往く船の上。

わたくしは広く逞しい胸に寄り添つて、その顔を見上げながら、そつと呼びかけます。

海風は少し冷たいけれど、寒さを感じる事はありません。

わたくしの肩をずっと抱いたままの大きな手が、とても温かいから。

「この天地はケンシロウとユリアにくれてやるわ。

もとよりおれが最後に目指すのは、この海のむこう、我が故郷よ。

こうなれば故郷にこのラオウとうぬの血を、この名と共に永遠とわに根付かせてくれようぞ。

これが生まれても、うぬの腹があく暇などないかもしれぬゆえ、覚悟しておくのだな」
 なんかとんでもなく恐ろしい事を言つて、悪そうな笑みを浮かべながら、そのひとはもう片方の掌で、わたくしのお腹にそつと触れます。

まだなんの膨らみも感じられません、心なしか内側から温かくなつた気がして、この子も父の愛を感じているのだと、何故かそんな事を思いました。

同時に、あの地を発つ前に、一度だけ遠くから様子をみた、よちよち歩きの幼子の姿を思い出して、ほんの少しだけ胸が痛みました。

「…せめてリュウ様と、この子を会わせたかつたですわ」

「養父母から引き離すのは哀れと言つたのはうぬではないか。

…案じずとも、やつもおれの子。

いずれはこの血に導かれて渡つて来よう」

あなたのお父様を奪つてしまつたわたくしを、あなたは許してくださいさるかしら。

けれど、もしいつかお会いできた時、それでも胸を張れるよう、せめてあなたのお父様は、わたくしが幸せにいたしますわ。

「ラオウ様…」

「なんだ？」

まだ馴染まない呼び名に、それでもそのひとは、自然に問いを返してきました。

ただ名前を呼び、応えが返される。

そんな当たり前のことが、どんなにこの胸を満たすものであるか、本来迎るべきだつた物語を知らないこのひとは、きつとわからないでしょう。

だから、伝えるのです。

この胸に溢れる想いを、真っ直ぐに。

「わたくし……幸せですわ」

「ユリアちゃん！」

「迎えに来てくれたのですね。」

……けど、駄目でしょうか？

南斗の将が2人とも、街を離れてしまつては……

「だつて心配だつたんですよう。」

ユリアちゃんは、いざとなつたら自分のことは二の次になつてしまうから。

本当に……本当に無事でよかつた。

……ああ、影武者はマミヤさんとアイリさんにお願ひしてきました。

旦那さん方に『貸してください』とお願ひしたら、どつちにもすぐく嫌な顔されましたけど、本人たちはノリノリで引き受けてくれましたし！」

「済まない。おれも止めたのだが。」

ユリア……………ラオウはどこに？」

「彼は旅立ちました。」

……………胸に、ただひとつの愛を携えて」

「あの女性か……………そういえば、彼女は」

「…ケンシロウくん？」

「……………いや、なんでもない。帰ろう、ユリア」

「ええ……………」

修羅の国にて。

「フハハハハ、嬉しくて肌が粟立つわ！

この世に命のやりとりほど面白いゲームはない！！

さあ、シヨーを続けよう！続けねばならん！！」

「去ね変態」(瞬殺)

「最後に生き残るのは愛ではなく悪！リア充滅べ！！」

「誰がうまいことを言えと」(瞬殺)

……………この世界線では本当にラオウが戻った事と、原作より修羅編の開始が早まった事でカイオウが仕上がっておらず、割とあっさり修羅の国平定されました。

かくして伝説成就（爆

ヒヨウとサヤカも無事結婚式を挙げ、のちに北斗宗家の血を再びひとつとする子が、この2人の間に誕生します。

尚、この時のリアのお腹の子は女の子で、リオと名付けられました。

父親の最初の意気込みの割には、彼女の後に子は生まれず、彼女は長じてのち修羅の国の女性たちの地位の低さを憂い、女性解放運動を起こす事となります。

スローガンは『北斗を生んだのは女性』。

幕間～15+ (プラス)

ユリア様にお付けする女官の人選は、実は少し難航しております。

元からいる女官の方には、悉く断られてしまったからです。

なので、わたくしより後に、下働きから女官にスカウトされた数人に声をかけて、まずは専任になったら任せられる仕事を前もって指導してから、見込みがありそうな数人を付ける事にしたのですが。

『リアさんがそこまで頼むのでしたら』と引き受けてくれた皆さんも、何故かやる気が足りないといいますが、本腰を入れてくださらないのです。

ある程度のところまでは真面目に仕事してくださるのですが、貴人女性に対してはどうしても必要になる着替えや入浴のお世話などは『あの女性にそ^ひこまで必要ですか？』みたいな流れになってしまい、せっかく指導し始めた人材が候補から外れてしまうので、ちよつと困っているのですわ。

何故でしょう。ユリア様はあんなにお優しく素敵な方なのに。

その中で、なんとか最後まで教授し終えた数人がユリア様と顔合わせを終えて、3日ほどわたくしがついて指示した後、なんとか合格と安心したので、次の日から2人ずつ

交代で、ユリア様の専任につけることにしました。

拳王様がこのところ、出陣することもなく居城にとどまっていたらつしやる上、夜には大概わたくしをお召しになるので、指導に長く時間が割けず、ある程度からは信用して任せるしかないので。

それでも時々不定期に顔を出して、監督するようにはしておりますけど、2日ほどそれもできずにおりまして。

ようやく顔を出せるようになって、不在のお詫びの挨拶にお伺いしようと、ユリア様のお部屋に向かっていたところ、今日の担当につけていた筈の2人の女官と、何故か休憩室の前ですれ違いました。

「あらっ？」

「え？……あ、リアさん!？」

「え？どうしてここに……」

「……少しの間、顔を出せなかったので、ユリア様に御挨拶をと思つて伺つたのですけど……あの、間違っていたらごめんなさい。

「わたくしの思い違いでなければ、今日のユリア様の担当は、あなた方ではなかったか
しゅっ。」

指摘すると2人とも、何やらしどろもどろになり、やがて1人がおずおずと、

「…あの、リアさん。」

今は、ユリア様のもとには、いらつしやらない方が…」

とか言つてきました、これは何かあるなどピンとききました。

「今、ユリア様のもとにはどなたが？」

「そ、それは…」

再びしどろもどろになる2人の答えを聞いてはおられず、わたくしはユリア様のお部屋に向けて駆け出したのです。

・
・
・

「いくら美人でも、他の男と2人きりで部屋に閉じこもっているような女、拳王様だつて呆れて、すぐお捨てになるわよね〜」

「もしかしたら今頃自分から誘つてたりしてね。」

何せ、リアさんの目の前で拳王様に色目使うような女でしょ？

カラダ使つて男を手玉に取るなんてお手のものじゃないの？」

「ありそ〜」

その部屋の前の廊下で、何やら不穏な話に興じているのは、わたくしより前からこの居城に務めている、確かりユウガ様推しだった女官たちでした。

専任ならば話は別ですが、本来なら交代制である筈の幹部のお世話係の任で、他の女

官を押し退けてまで推しのお世話を率先して行なっていた為、リュウガ様が去った後の今はやや干され気味で、それでもお仕事はできるので、忙しい時にはわたくしが声をかけて手の足りない部分を手伝っていたのですが、ユリア様のお世話係として声をかけた時は、確か被せ気味に断られていた筈です。

「それは、どういうことですか?」

「リアさん!? 拳王様のお世話に戻った筈じゃ…」

「そちらのお仕事を立て込んで少しの間来られなかっただけですわ。」

ユリア様に御挨拶しなければならぬので、そこを退いてください!」

「あ、待つて…」

引き留めようとする2人に構わず、部屋の扉の前に進みます。

扉の把手を通すように太い鉄の棒が、門のように差し込まれており、わたくしは力任せにそれを引き抜くと、この際ノックもせずに扉を開けました。

「ご無事ですかユリア様!」

殊更に声を張り上げて足を踏み入れますと、足元に多分鏡台の前にあつた猫足の椅子だつたであろう木片と残骸が散らばっており、驚いたように目を瞠るユリア様と、若い兵士の姿がありました。

「やはり、あなたが助けに来てくださったのですね、リアさん。」

大丈夫、わたしは何ともありません」

入ってきたのがわたくしだとわかると、ユリア様は安心したように微笑みました。

それでもやはり閉じ込められて不安だったものか、そばまで駆け寄ってきて、ぎゅつとわたくしに抱きついてこられます。

ちよつと汗ばんだ匂いがあるのは、精神の動揺からでしょうか。

とりあえずユリア様の肩越しに、立ち尽くしている兵士を睨みつけますと、彼はハツとしたように、床に両手と膝をつきました。

「申し訳ありません！

女官の方にユリア様の着替えを、代わりに届けて欲しいと頼まれ…引き受けて手渡し、帰ろうとしたら外から鍵をかけられていて…！

で、ですが僕は指一本、ユリア様には触れておりません！

そもそも僕が好きなのはリアス」

「それを頼まれたこと自体、おかしな話だと思わなかったのですか!？」

本来ならばそれは女官の仕事であり、近くに行く用事があったからとて、兵士に頼むような事ではない筈です。

百歩譲つてそうなった場合でも、みたところ下位の兵士である彼の立場ならば直接手渡すなんて真似はせず、部屋のあるじと共に本来ならいる筈の女官に事情を説明して、

そちらに渡すのが正しい手順の筈。

何故ならこの部屋は、拳王様の伴侶となる方のために整えられたもの。

末端の兵士ごとき、その尊顔を拝むことすら、許されるはずがないのですから。

「手渡すという理由で、女人ひとりの部屋に、ずかずか足を踏み入れたことは確かなのでしよう!？」

ここにまんまと閉じ込められたこと自体が、あなたがこのかたの存在を軽く見ていた証拠ではありませんの！

それがどういふことかわからないと仰るのであれば、今からバルガ將軍に願い出て、新兵の訓練からやり直すべきですわ！」

それでも閉じ込められたとわかった時、それなりに脱出をはかろうとはしたのでしよう。

この壊れた椅子の残骸がそれを物語っています。

：けどこの部屋のもの全部、多分結構な物資と引き換えに手に入れたものだと思うのですがね。

この兵士の一生分の勤務ではたして贖えるのかというくらい。

とはいえ、今ここでちびりそうなくらい萎縮している彼を、これ以上追いつめるのも何ですし、彼の立場としては、たまたまそこにおいてまき込まれたというか、ある意味陥

れられた被害者でもあるわけで。

「いつまでそこにへたり込んでいるつもりですの!？」

わかったらとつとと、拳王様の伴侶の部屋から出て行きなさい!!」

「!?は、はい~~~~!!」

若い兵士はぴよんと立ち上がると、逃げるように……というよりは間違ひなく逃げ出しました。

まあ、多分新兵の訓練なんて受け直さないうでしょう。

バルガ將軍は厳しく、悪くいえば融通の効かない方です。

この事を報告すれば新兵レベルの降格以前に、彼を拳王軍から放り出すでしょうから。

あの様子じゃあの兵士が自分から報告するなんてできそうにないですから、ユリア様の名誉の為にも、わたくしも口をつぐんだ方が良いでしょうね。

……と、彼が走り去った廊下に、さつき扉の前にいた女官2人が、逃げ出そうとしてるところを、別の女官数人に逃走経路を阻まれております。

グツジョブですわ。

「……説明してくださいな。」

これがどういう事なのか」

「わ、私たちはリアさんの為を思つて……」
「そうですか。」

わたくしは拳王様に最も信賴のおける者であるとして、拳王様が己が伴侶にと望んだユリア様を、くれぐれもと申しつけられた女官です。

そのわたくしが差配した者が、かの御方に危害を与えたとなれば、拳王様のお怒りに触れるは必定で、その責任を問われるのはこのわたくしなのですが。

その事を踏まえた上で、わたくしが納得できる説明をお願いします」

「……っーも、申し訳ありませんでした!!」

恐らく彼女たちは、同じ女官仲間から拳王様の手がついたわたくしが、その伴侶に収まることで、なんらかの益があると期待したのでしよう。

突然現れてその席に収まった（としか彼女たちからは見えない）ユリア様を追い落とせば、再びわたくしにその席が戻ると考えたに違いありません。

この事で、わたくしが逆に拳王様の怒りに触れる事など、心の片隅にもなかつたよう
です。

…少し考えたらわかりそうなものですけどね！

そもそもわたくし、拳王様の御寵愛を失つたわけではありませんし！

他の方々がどう思おうと、拳王様はユリア様を得てもわたくしを手放すおつもりはな

いと仰り、変わらず信頼を寄せてくださっております。

そんな状況で、わたくしがユリア様を疎ましく思う理由は全くといってありませんのよ！

「リアさん…どうか、叱らないでさしあげて。」

この方々なりに、リアさんを思ってしまった事に違いありません。そうですね？」

怒りの感情もさることながら、自身の責任問題も加えて、わたくしがこの件をどう落とそうかと考えておりましたら、ユリア様が意外にもしつかりとした声で言葉をかけます。

そして最後には自分たちのした事によつて青くなっている主犯の女官たちに、まるで女神のような微笑みを向けました。

…え、なんか後光が見える気がいたしますが、わたくしの気のせいなのでしょうか。

「ユリア様…！」

「…本当に、本当に申し訳ございません」

「私どもが浅はかでした。」

あなたが、リアさんの立場を奪ったのだと思うと、憎らしく思う気持ち止められなくって…」

「ごめんなさい！」

「ごめんなさいっ……!!」

ですが、その微笑みにあてられた2人は、涙を流しながらユリア様の前に跪くと、何故か拜むように両手を組み合わせております。

なんでかその周囲だけ、スポットライトのような光に照らされて…なにこの光景。
「…もうよろしくてよ。」

ユリア様がお許しになられるならば、わたくしに否やはありません」

なんだか見ているのが辛くなって、わたくしがそう声をかけますと、幻視の光は何事もなく消えました。

いやなんだったのアレ。

「ですが皆さん、今日はもうこちらにはいらっしやらないで結構です。」

この後のユリア様のお世話は、わたくしがいたします」

「リアさん…」

「元々、ユリア様の女官選定の件は、わたくしに一任されておりますので。」

ユリアさまが問題にせずとも良いとおっしゃるのを幸いに、わたくしの権限にて片付けることにいたしますわ。

ですが、これまでに築き上げたと思っていた信用が裏切られましたので、わたくしが指示するまで、しばらくはこちらに近づかぬようお願いします」

あの兵士が部屋に踏み込んだのも、お側に控えている筈の女官が、1人も仕事をしないなかったからという事。

わたくしの目が離れた途端、あの2人が指示をして、ユリア様のお世話を放棄させたのでしよう。

そもそも、わたくしが人選を間違えたことが原因なのですもの。

責任をとつてもうしばらくは、忙しい思いをするしかありません。

・
・
・

下働きの方々にお願ひして、隣のお部屋のバスタブにお湯を用意していただき、ユリア様の少し脂ぎつてしまつていた御髪おぐしとお身体を丁寧おんじんに洗つてマツサージも施し、新しい下着と動きやすさと優美さを備えたドレスを選んでお召し替えいただく、多少汚れていても美しかったユリア様はピツカピカになつて、直視できないほど眩しくなられました。

わたくしでできる女官！ナイス!!

：ですがユリア様に、この2日間の状況を説明していただいて、わたくし憤慨いたしましたわ。

結局、あの門もあの時だけのものではなく、わたくしが顔を出さずにいた間、あの部屋にユリア様を閉じ込めて、水や食事を定期的に運び込むだけの世話しかしていません

たようなのです。

ドアの外から聞こえてくる話を聞く限り、あの2人が他の女官を、この部屋に来させないよう脅していたようで、思ったよりずっと悪質だったことに頭を抱えます。

ユリア様が許してくださったからと、安易にお咎めなしにしてしまつてはいけなかったのかもしれない。

「申し訳ございません、ユリア様。

わたくしの監督不行届で、お辛いめにあわせてしまいました。

…それなのに彼女たちを庇つて下さったこと、本当に感謝いたしますわ」
「いいえ。彼女たちの気持ちもわかりますもの。

皆さん、あなたを慕っているのですね。

だから、わたしの存在が許せなかったのでしょう。

…ここに案内された日に、そういった感情をぶつけられる可能性がある事を、あのザクという方からうかがつておりましたし。

わたしが彼女たちの立場なら、きつと同じように意地悪をしてしまったと思います」

「まあ、ユリア様が意地悪をなさいますの？」

「あら、おかしいですか？」

「わたしだって女なのですよ？」

そんなふう言って、悪戯が成功したような微笑みを浮かべた彼女は、前世で読んだ物語の『ユリア』とは、やはり微妙に性格が違うようです。

もつとも、わたくしが読んだのは究極に男性視点の少年漫画であり、そこに登場する女性たちの内面全てを、描写しきれていたわけではないのでしようけれど。

…女心って、ひとつではありませんものね。

女として生きてみなければ、決してわからなかった事のひとつですわ。

「…けれど、ただの意地悪とみるには悪質すぎますので。」

女官の選定については、今一度人材を厳選させていただきますわ。

わたくし一人ではご不自由をかける事と存じますが、もうしばらくご辛抱を…」

「それなのですけど、いまの方々、明日もう一度、顔を合わさせていただくわけにはいきませんか？」

「え？それは…」

「お願いします。」

…もしかしたらですが、仲良くなれそうな気がするのです。

わたしの目が曇っていないければ、ですが」

…曇ってるだなんてとんでもない。

眩しいほどキラッキラの瞳で見つめられてそう言われれば、わたくしは頷かないわけ

にはいきませんでした。

あざとい！あざといですわユリア様！！

判っているのに逆らえない！何故！！

☆☆☆

次の日。

渋々ながらもユリア様のごいっけ通り、主犯の女官の2人をユリア様の前にお連れして、しばらく様子を見ておりました。

ですが、わたくしが拳王様の御用で呼び出され、仕方なく護衛を監視につけて席を外し、大急ぎで用事を済ませて戻った時。

なんだかすっかり打ち解けた様子の女官達とユリア様が『特殊な掛け算のお話』とやらで盛り上がっております……ってだからなんなんですかのそれ!!? 教えて！

その時、彼女たちは

真・そして私の覇業への道～1

私の涙ながらの嘘八百を信じたラオウにより、拳王軍が退却していき、もう戻つてはこないであろう場所まで小さくなつた背を見送つた時、急に膝の力が抜けた。

地面に頽れる寸前で、もはや感触に慣れた腕が私を支える。

そのまま私を抱きかかえたシンと顔を見合わせると、途端に渴いた笑いがこみ上げた。

それがそのまま、なにかしゃっくりのような嗚咽のような、よくわからない声になる。臓腑を押し潰すような気迫と、今の今まで真正面に対峙していたところから解き放たれ、私は少し感情の動きがおかしくなっていたらしい。

笑いたいのかわき出したいのか、それとも叫びたいのか暴れ出したいのか、自分でもまったくわからないまま、私はシンの首筋にしがみついた。

…瞬間、自分が震えているのがわかった。

ああそうか。私は恐怖していたのだ。

シンはそんな私を一度抱え直すと、自ずと近くなつた耳元に、息を吐くように囁いた。

「よくやったな。【マツリ】」

…それは久しぶりにシンの口から聞いた己の名前だった。

...

「……シン、ちゃん」

「…いい、立ち上がるな。」

「こんな時くらい、おれに甘えろ」

『K I N G』の居城内の、私とシンの寝室で、私の世話をしようとする女官を追い出したシンは、ベッドに座らせた私の靴を脱がせながら、こちらを見上げて微笑んだ。

「…マツリ。なにか、欲しいものはないか？」

「んっ？」

唐突に問われた言葉の意味を、一瞬理解できなかった私は、反射的に問い返す。

普段は目にしない、見下ろす角度のシンが、何故だか新鮮に私の目に映って、もう慣れた筈なのに一瞬ドキリとした。

「今、おれはおまえを、滅茶苦茶に甘やかしたい。」

おまえは怒るかもしれないが…何とというか、惚れ直した。

あのラオウを前に一步も退かず、嘘八百並べて追い返しておきながら、直後に腰抜かしてる今のおまえが、おれは愛おしくてたまらんだ。

なんでもいい、強請れ。

どんなものも、おれの力の及ぶ限り手に入れてやる。

愛している、マツリ。

おれの最愛、おれの女王。

…言つたらう？

おれは、惚れた女には尽くすタイプだと」

…欲しいものと言われても。

私たちが『K I N G』を立ち上げて周囲の街や村を取り込み、またエネルギーの有り余っている野生のヒヤツハーを取り込んで有能な労働力としたことで、巨大な街となった『サザンクロス』は、シンが私を女王と仰ぐ、私のための街だった。

シンは最初は物語の通り、武力だけで組織を大きくしようとしており、街を作ると決めた時も、近隣から攫ってきた住民を、取り込んだヒヤツハーに管理させて労働力にするつもりだったらしい。

『おまえの為だ』という言葉であくまでも押し通そうとするシンに対して、この時はさすがに私も怒り、『ユリア』として彼と共に出奔して以来、初めての大喧嘩に発展した…いやその話は今はいいが、結局は前述した通りの運営をすることで、『サザンクロス』は人やモノが安全に行き来する街となつて、今や大抵のものはここで手に入るのだ。

だから、私の身の周りには必要なものは全て揃っているし、シンは私が欲しいと言わないうちからドレスも靴もアクセサリーも最高級品を揃えてくれて、つまりはこれ以上欲しいものと言われても、すぐには思いつかないということだ。

ああ……でも。

「…強いて言うなら、シンちゃんが欲しいわ」

「……………っ!？」

その言葉は割と考えることなく、するりと口から出てきた。

驚いたように私を見つめるシンに、その瞳を見つめ返しながら、更に言葉を紡ぐ。

「私も愛してる、シンちゃん。」

あなたがそばにいてくれれば、私にそれ以上欲しいものなんてないの。

だから、あなたが一番欲しい。

これまではどこに居ても私は『ユリア』でいなければならなかったから、これからは『マツリ』に、『シン』をちょうだい」

『KING』の伴侶であり『サザンクロス』の女王である私は、『誰が聞いているか判らないから』とこれまでずっとボロが出ないように、シンには私のことを『ユリア』と呼ばせてきた。

そしてそれに従ってくれたシンの、私に童貞臭い愛の言葉を囁きながらの『ユリア』呼

びに、そう言ったのは私であるにもかかわらず、少しづつ傷ついていたのも事実で。

…心の底でずっと不安だったのだ。

シンは私を通して、やはりユリアちゃんを想っているのではないかと。

私は彼にとっても、ユリアちゃんの身代わりでしかないのではないかと。

だからさつき、シンの口から『マツリ』の名を呼ばれた時、もつと聞きたいと思った。

本当の名前を呼んで、愛していると何度も囁かれたと思うってしまった。

「……………それは反則だ、マツリ。」

可愛すぎて、我慢できそうにない」

…だから、そんなささやかな望みを口にした後の、シンの行動は予想外だった。

腰かけていたベッドに私を唐突に押し倒し、覆い被さってきたシンは、突然のことに戸惑う私に、熱い吐息と共に告げる。

「おれが欲しいと言ったのはおまえだぞ、マツリ。」

この後最低まる1日は、寝室から出られると思うなよ」

「へっ?」

いや待って、そういう意味じゃ…!」

いや言っただけ!確かにそう言っただけ!!」

この後めちやくちY【以下自主規制】。

しばらく おまちください

…恐らくシンは、私が秘めていた心の揺れに、ずっと気がついていたのだろう。

寝台に引き倒されてのあんな事やこんな事の間、シンはこれまで呼べなかつた分の埋め合わせとばかりに、何度も私の名を呼んでくれた。

最後に私をきつく抱きしめて、名を呼びながら私の裡に達した時には、私の中から、これまで抱いていた不安は、全て溶けて消えていた。

……ただ、御丁寧に私の名前付きで、その瞬間瞬間の私の状況や身体の反応を、いちいち実況されるという拷問のようなオプシオンは別に要らなかつた。

人形を作らなくても、シンはやっぱり変態だと思う。

☆☆☆

あの恐怖の邂逅から半刻ほどまえ。

今は無理でもいつかはこの街に、核戦争前には当たり前にあつた、花と街路樹をたくさん植えたいと、2人で話しながら歩いていたら、彼らは不意に現れた。

「おまえたちは…!?!」

警戒を顔に私を後ろに庇おうとするシンの、服の袖を軽く引つ張って、先制攻撃を封

じてから、私は彼らに向かって頭を下げる。

「大丈夫よ、シン。」

…お久しぶりにございます、リハク様、トウ姐さん、フドウ様」

「うむ、マツリ。そなたも息災のようですね」

彼らを代表して、最年長であるリハク様が私に言葉を返してください、私はもう一度頭を下げた。

何せ、厳密な階級自体は存在しないものの、ユリアちゃんの影として育てられた私にとっては、彼らは一応上司に当たる方々なのだ。

私の態度と言葉に、彼らの正体を悟ったシンが目を瞠く。

「…では、この者達が、本物のユリアを守る五車の…」

「山のフドウ」

「海のリハク」

「その娘トウ」

…正確にはトウ姐さんだけは、南斗の巫女としての私の先輩というだけで五車の1人ではないけど、どちらにしろ南斗六聖拳伝承者の1人であるシンから見れば、同輩の部下くらいの位置付けになるだろう。

「…その五車星が何の用だ。」

見ての通り、ここに『貴様らの』ユリアはおらぬ」
「わかつております。」

ユリア様とケンシロウ様は、我らのもとで既に保護しておりますゆえ」

「あちらの城門の方に、炎のシュレン様と風のヒューイ様もいらっしゃいますね。
多分門の外の見張りをしてくださっているのでしょう。」

つまり……どうとう、その時が来たと?」

「さすがに察しが早いな、マツリ。」

そうだ。恐怖の暴凶星が近づいている」

割と子供の頃から知っているフドウ様が、普段あまりしない顔でそう告げる。

……まあこの方、初めて会った時はもつと恐い顔してたから、今の顔はキリツとしてるだけで、全然恐いとは思わないけども。

「なに……まさかラオウが?」

「いつかはこの日が来る事を見越して、『シン』が『ユリア』を奪って逃げたと、噂をわざと流したのはあなた方でしょう?」

お陰で、本物のユリア様は全くのノーマークで、着々と表舞台に立つ準備を進めているけれど、それでもサザンクロス『ユリア』が本物でないことは、実際にラオウと顔を合わせてしまえばすぐにわかってしまう」

心配そうに、主に私に向かって言うトウ姐さんは、以前と比べてちよつと痩せた気がする。

確か私たちが出奔する頃、体調を崩して巫女の仕事もお休みしていた筈だから、もしかしてまだ本調子ではないのかもしれない。

「ここまできて、この『ユリア』が偽物であると、奴に知られるわけにはいきません。シン様。どうかマツリを、我らにお引き渡してください」

そしてリハク様が、私ではなくシンにそれを告げると、シンはハツとして、反射的に私を腕に抱きしめた。

「…そうですね。頃合いかもしれません。」

そろそろ逃げ回るにも限界を感じていたところですよ」

「なんだと……!?!」

リハク様を睨みつけるシンの腕の中から私がそう言うと、シンは一瞬、信じられないものを見るような目で私を見下ろした。

ので、慌ててフオローを入れることにする。

まったくもう。可愛いやつだよ。

「勿論、その提案には頷きませんが、シンと共にこのサザンクロスを築き上げた時から、ずっと考えていたのです。」

サザンクロスを、一旦『ユリア』の墓標にしてしまおうと」

「それは……まさか」

「シンに連れ去られてすぐに『ユリア』は病を得、更に愛する人と引き離された絶望も加わったことで、旅の途中にて儂くなつたのです。

ここに居る私は、その亡霊。

シンが『ユリア』を亡くした事を受け入れられずに『ユリア』だと思ひ込んだ、そんな彼をずっと恋い慕つてここまでついてきた、幼馴染の女なのです」

それは、本来の物語に做つた壮大な嘘。

詳しくは描かれなかつた話だが、サザンクロスを急襲したラオウが、シンの口からユリアが死んだと聞かされた時に、シンが腹いせに殺されなかつたことは、その後のケンシロウとの再会と戦いがあつたことでわかつて居る。

つまりは、私たちがラオウと対峙して生き残る為の、一番確かな道筋である筈。

ただ、今それを知っているのは、多分私しかないけれど。

「……リハク様。私は、シンから離れません。

たとえ暴凶星の怒りにこの身を引き裂かれたとしても、最後まで身も心も、シンと共に在りたいのです」

言いながら、私を背中から抱きしめるシンの腕に、そつと手を添える。

見上げて合わせた視線に微笑むと、仕方ないな、と唇だけがそう動いたのがわかった。

「…………『ユリア』」

おれも覚悟を決めたぞ。

死ぬ時は共に。おまえ一人を死なせはせん」

「シン……………」

この期に及んで呼ばれた名前がそれだったことに、少し心が傷んだけれども、それを悟られまいと私はシンに向き直り、その胸に顔を埋める。

シンは改めて私を抱きしめ返し、私の耳に口づけを落としました。

くすぐりたいけど嬉しい。シン、大好き。

「…………盛り上がっているとこ悪いんだが。」

ラオウの軍勢が、本当にもうすぐそこまで来ている」

…と、ちよつと言いづらそうな感じでシユレン様が話に入ってきて、私たちは慌てて身体を離し、居ずまいを正す。

なんか先にいた3人から、ほつとした空気が流れたのは気のせいだろうか。

「…2人とも、本当にそれでいいのだな？」

一旦咳払いした後、リハク様が確認をするのに、私とシンは頷いた。

「ああ。我ら2人、ユリア殺しの汚名、敢えて被ろう！」

「ユリア様とケンシロウくんにお伝えください。

私たちはたとえ星となつても、きつと心はあなた方と共にあると」

…そして、話は冒頭に戻る。

いや戻らんでいいんだが、一応。

☆☆☆

こうして、拳王軍の来襲という禍をやり過ぎし、生き延びた私たちは、この顛末を見届ける為に残っていた風の旅団と繋ぎをつけて、ユリアちゃんに言伝ことづてを頼むことにした。

（本当は手紙を書きたいところだったけど、この時代文字を書けるような紙が結構貴重であることと、文書として残した場合、万が一拳王軍やその他敵対勢力の手に渡れば、ユリアちゃんが危険になると考え、敢えて言葉で伝えてもらうことにした）

私たちが生きていることと、今後『KING』は南斗の将に恭順するということ。

ついては『サザンクロス』を南斗の将に譲渡する意志があること。

ユリアちゃんが今後、将としての活動をするにあたり、既に拳王軍の襲撃を受けたあとのサザンクロスを拠点とすれば（元々サザンクロスの女王は私が名乗る『ユリア』であると同知されているから）私を影武者として立てることができ、今まで通り本物のユリアちゃんの存在を隠せるという提案を。

そして、再会の日はやってきた。

「ユリアちゃん！」

「マツリさん…よく、無事で」

運命が…激しく動き始めた事を、この時の私はまだ知らない。

真・そして私の覇業への道く2

サザンクロス。

新興勢力である『KING』が作り上げた、まだ歴史の浅い街だが、近隣の街や村との間に街道を整備した事もあり、今では物流の要としてだけではなく、実は密かにこの世界で、一番安全とまで言われる街である。

…うん、まあ私たちがそう作ったんだけど。

だってせっかく街なんだからガワだけじゃない、人々が行き交う場所にしないと意味ないじゃない？

なので今日もそこに様々な旅人が行き来しているが、そんな日常的な光景が、今日の私たちにとっては特別になった。

「ユリアちゃん！」

「マツリさん…よく、無事で」

五車の旅団が旅の商人とその護衛一行様にカムフラージュして連れてきたユリアちゃんが、私のハグに応じて涙ぐむ。

私とシンが拳王軍と相対した顛末は、当然五車から聞いている筈で、私は守らねばな

らない人に随分と心配をかけてしまったのだと、改めて感じた。

それは申し訳ないと思うと同時に、嬉しいと言う気持ちも呼び起こした。

やはりユリアちゃんは変わらないなあと。

自惚れて良ければ、私はユリアちゃんの中でまだ、ケンシロウくんと同じくらい特別なんだと思つてていいんじゃないかなと。

ちなみに私の隣にいる（筈の）シンに対しての扱いはガッツリ空気である。

核戦争前の学舎で色々と意地悪をされた恨みは消えていないらしい。

「ユリアちゃんが五車を派遣して拳王軍の動きを警告してくれたから、こちらの被害が最小限で済んだのですよ。」

本当にありがとうございました。

「おかげで生きた街の姿を保ったまま、こうしてあなた達をお迎えできます。ね、シン？」

「そうだな。少なくとも一般市民の被害がゼロで済んだのは、事前情報のお陰で避難誘導の時間が取れたことが大きい。」

…そんな目をするな。

本当に感謝しているのだから」

さりげなく空気を変えようとしてシンに話を振った私の作戦は、どうやら失敗に終

わったようだ。

シンが口を開いた瞬間、ユリアちゃんがなんなら養豚場のブタを見るような目でシンを見たのを、私は見てない。絶対に見てない。

それはさておきあの日、拳王軍の来襲を聞かされた私たち『K I N G』は、かねてより用意していた避難所（元々この地区にあつた核シェルターを改装したもの）に彼らを隔離してから、この日の為に訓練してきた『一見』迎撃の体制を整えることができた為、若干建物等に被害が出た以外、一般市民の死傷者は皆無という結果を出すことができた。

とりあえず一旦戦闘となつて敢えて拳王軍に負けた上で、ここにはあなたの求めるものはないとわからせて軍を退かせる作戦だったから、本気で事を構えるわけにはいかなかったのだ。

だからといって全くの無抵抗で迎え入れてもそれはそれでラオウの怒りスイッチを連打することになるので、そのさじ加減が難しかったけど、一見血の気が多そううちの四天王が、意外にも私たちの意を汲んでくれて、うまい具合に流れに導いてくれたので助かった。

もつとも約1名、北斗剛学波本人の抱えた地雷により途中から目的を忘れて冷静さを失った拳句、ラオウの闘気ひとつで道端のゴミを焼却するような勢いで始末されたが、アイツの

おかげでこちらが攻撃に手を抜いていることがバレなかったともいえるので、ある意味
尊い犠牲と言えよう。

なので、一応は街を守って死んだ英雄として扱い、近いうちに中央広場に銅像を建て
る予定ではある。

え？ 誰か今やめろって言った？ 空耳かな？

『英雄』の存在は、隠したい裏事情を誤魔化す為にも必要なんだよ？

……話が逸れた。

とりあえずシンには五車の旅団の皆さんを、落ち着ける場所に案内する側に回っても
らう事にし、私はユリアちゃんをこれから過ごしてもらおうお部屋に案内しながら話を続
ける事にした。

一応ここからはトップ会談となるのでちようどいいだろう。

この先、『KING』は南斗の将に恭順する形をとるので、南斗の将であるユリアちゃ
んが、このザザンクロス（街の名前も後日改めるつもりだ）の主となる。

「ところでケンシロウくんは？」

一緒には来ていないのですか？」

「伝令は出してあるので、いつになるかは未定ですが、この街で落ち合う予定になつてい
ます」

しばらく会えていないので楽しみなのです、と少しだけ寂しそうに笑ったユリアちゃんにどういふことかと問うと、思ってもみなかった話を聞くこととなった。

☆☆☆

あの日。

シンがジャギの策略に踊らされずに私との未来を選び、ユリアちゃんとケンシロウくんが、無事に旅立った日の翌朝。

ケンシロウくんは不思議な夢を見たそうだ。

それは触れるほど確かな、そして壮大な夢で。

ケンシロウくんはその中で、もうひとつの人生を体験したのだと。

シンにユリアちゃんを奪われて傷を負い、彼らを追って旅に出たこと。

その旅路で出会った、小さくとも大切な存在に、僅かに、けど確かに心癒され。

やっと見つけたかつての友との戦いと、告げられた最愛のひとの死。

そこからの旅路と戦い、友情、そして再び巡り合った愛と、今度こそ本当の別れ。

そこから新たに始まる戦い、その中で紡がれる友情、絆、そして宿命。

それはまさしく私の知る、彼が本来進むべき未来の物語だった。

その激しく哀しい人生を巡って目覚めた朝。

ケンシロウくんの胸には、夢でシンにつけられたのと同じ、北斗七星の七つの傷が浮

かび上がっていたのだという。

まるで聖痕のように。

否、それはまさしく聖痕であったのだろう。

ユリアちゃんの治癒能力をもってしても、その傷を消すことはできなかったのだから。

そんな驚きもありつつ、道中まるで何かに守られているかの如く何事もなく、ふたりが目的地であったユリアちゃんの故郷に着くと、待っていた五車の男たち（といっても、当然のようにジユウザ様は居なかつたらしいが）によりその身を保護されると共に、ケンシロウくんには夢で巡った場を現実でも巡り、苦しむ弱き人びとを救う旅をすべきと、『海』のリハク様に送り出された。

こうして彼は一度ユリアちゃんとは離れ、原作通りこの世の救世主として立ち、様々な出会いと別れを経験することとなる。

・
・
・

「救世主などと呼ばれても救えぬ者の方が多い、哀しみも多い旅だったが、それでも立ち止まる事は思いもよらなかつた。

別れの時のあなたの言葉がおれを……俺たちを支えてくれた。

立ち止まれば、それは死に繋がる。

おれは決して死ぬわけにはいかぬ。

おれの為す全てのことだが、未来のユリアの幸せをつくるのだと。

おれが生きて在ることが、今のユリアの幸せであるのだと。

そう信じて前を向けるほど強く、あの言葉が今も、おれとユリアを支えてくれているのだ」

後日、サザンクロスに拠点を置いたユリアちゃんのもとにようやく戻ってきたケンシロウくんは、涙ながらに胸に飛び込んできたユリアちゃんを腕に抱き、微笑みながら私にそう言った。

そんなケンシロウくんの姿は、かつてのどこか頼りなげな友人の面影はなく、この世の哀しみと涙を一身に背負った、まさに聖人のように、私の目に映った………が。

別れの時の………って私、なに言ったっけ？

少なくとも、彼らの人生の指標になるほどたいそうな事言った覚え、マジでないんだけど？

あと、私にそれらのことを語ったあと、『夫婦揃ってひとの女を口説くな』とシンに冗談混じりに小突かれたケンシロウくんが、ちよつと複雑な表情をしていたのは見なかったことにしておく。

その上で私もあくまで心の中だけでつつこんだけど、『オマエが言うな』と。

真・そして私の覇業への道～3

…さて。

時間はユリアちゃんとの会談の席に戻る。

なんとというか、ちよつとすごい話聞いちゃった後、何となく圧倒されていたら、うちの女官さんのひとり冷たいお水を持ってきてくれたので、一旦2人とも喉を潤す事にした。

「ではユリアちゃん、今、身体の調子は…?」

ひと息ついてから、ずっと気になっていた事を訊ねてみる。

実のところ、ケンシロウくんの夢の話聞くまでは、この話題をどのように切り出すべきか迷っていたのだが、今ならば不自然な流れではない筈だ。

案の定、そう問われたユリアちゃんは怪訝な顔をすることもなく、微笑みながら頷くと、私が欲しかった答えを返してきてくれた。

「ええ。ケンがわたしの病を教えてくれたお陰で、症状もない段階ですぐに治癒を施しましたから、今はもう何ともありません」

「良かった。ユリアちゃんの不思議な力はわかつているつもりでしたが、それをちゃん

と自分に使ってくれるかだけが、本当に心配だったのですよ」

…今思えばこの時の私、ユリアちゃんが病を克服したと聞いた瞬間、安心して気を抜いたのだと思う。

流れるに不自然というわけではなかったものの、注意して聞いていれば明らかに、今聞いたことに対するコメントにしては、実感がこもりすぎていた。

…そしてユリアちゃんはその、『注意して聞いていた』人だった。

「…つまり、ケンの夢の話を聞く前から、マツリさんにはわかっていたということなのですね」

「えっ!?!」

伏せ気味の長いまつ毛に縁取られた瞳が真っ直ぐに私を見つめ、睨んでいるわけでもないその視線の圧に、瞬間たじろいだ。

ついでに飲んでいた水がちよつと変なトコ入って咳き込む。

ユリアちゃんはそんな私の反応に、困ったような笑みを浮かべた。

そうして次に紡がれた言葉は、南斗の巫女の一人でありながら、ユリアちゃんの影として育ってきた私には、衝撃的な話だった。

「……マツリさん。

わたしの未来視は、今は揺らいでいます。

幾つかの星の、確かに見えていた筈の未来が、今は遥かに遠く、朧げです」

…それは、『南斗の将』の証である筈の能力を、喪失しかけているという告白だった。ユリアちゃんにとってある種のアイデンティティだった筈のものだ。

単に物語を知っていただけの私がそうであると誤解されて、南斗に育てられるに至ったことから、それがどれほど『南斗』にとって重要な事であるか、推して知れるというもの。

もつとも、それはあくまで将の宿命のもとに生まれた者が、副次的に持つ能力であるというだけで、その能力の喪失がユリアちゃんの将たる資格に、即時影響するというわけではないのだけだ。

それでも下手すりゃ先ほどのケンシロウくんの夢の話よりよほどショッキングな事実に、覚えず身体が震えるのがわかった。

「そんな……！」

そんな私に、ユリアちゃんは身を寄せて、膝に置かれた私の手の甲に、その滑らかな手を重ねる。

優しく握られたその手から、何か温かいものが流れてきた感じがして、その温かさが何故か私の動揺を押し流し、身体の震えが止まるのがわかった。

「…逆に、治癒の力だけは以前よりも強くなりましたが、何故なのかはずっと判らずにい

ました」

先ほどよりも近い距離から、ユリアちゃんの穏やかな声が耳に届き、一拍遅れて、言葉の意味が頭に入ってくる。

……………過去形？

「今は…判っているということですか？

それは、私が聞いていい話ですか？」

私が顔を上げて目を合わせると、ユリアちゃんは微笑んで頷く。

「わたしの中では、ケンとマツリさんにしか聞かせられない話です。

ケンが旅に出た後、シンが『ユリア』を攫った事になっているという噂があると、五車がわたしに伝えてくれました」

そう言ってから一旦息をつき、『ただの噂でも不愉快でしたが』と小さく呟いたユリアちゃんの言葉は聞かなかったことにする。

今は私がいるとはいえ、初恋の人にここまで嫌われているシンがとても不憫に感じた。

うん、あとで頭でも撫でてやろう。

理由も言わずそんなことをしても、『なんだ？』って反応するだけだと思っけど、アイツ私にそうされても嫌がりはしない、筈。

「どういう事だところからも少々混乱しましたが、すぐにシンの隣にいる『ユリア』がマツリさんと気がついて、ああそういう事かと腑に落ちたのです。

マツリさんが、わたしの名を背負う決断をした事によって、本来なら起きていた悲しい運命を塗り替えたのだと。

それはつまり、わたしの宿命を、マツリさんが共に背負ってくれたという証」

……………はい？

私がちよつとシンのことを考えて意識を飛ばしている間に、ユリアちゃんの話がなんかとんでもないところに行っていた。

いや絶対違うと思いつつ、ユリアちゃんは私に、口を挟む隙すら与えず語り続ける。

「わたしは『南斗の将』としての己の宿命を、今はすべて受け入れています。

けど、わたしも、一人の女ですから。

遍く愛で世の人々に平和をもたらす。

皆が幸せになる世界をつくる。

けれど、そこにわたし自身の幸せは？

愛するひとと共にある、ただそれだけを望むことが、わたしにとって罪なのか。そう考えて、本心では何故わたしだけがと、その宿命を恨んだ事もあるのです。

…でも、『南斗の将』は一人ではなかった。

それがわかったから、こんな宿命も受け入れることができました」

「あ、あの……ユリアちゃん？」

「もはや『南斗の将』はわたしとマツリさん、ふたりでひとりなのだと思います。

ならば、あなたが生きている限り、わたしもまた死ぬわけにはいかない。

北斗と南斗を結び、この時代の涙を微笑みに変えて、それを更なる未来に繋げていく
為に。

わたし一人では不安でしたが、マツリさんと一緒なら、必ず成し遂げられます！」

「え、えええ……？」

「ふふ、逃がしませんよ？」

…マツリさん。南斗の将は何をすれば良いですか？

あなたの思う通りに、わたしを使ってください。

あなたに見えている、新しい未来のために」

…かつて少女だった日の学舎で、うっかりあの黒歴史ノートを知られて、先が知りた
いと頼んできたあの日と同じくらいキラキラした目で、私の手をしっかりと握ったユリア
ちゃんに、私は逆らえずに反射的に頷いていた。

☆☆☆

「なんとなく、そういう事になるんじゃないかと思っていた。

おまえはなんだかんだで昔から、何事にもユリアが一番だったからな」

ユリアちゃんとのトップ会談を終えた後、シンに状況を説明したら、どこか呆れたような口調で頭を撫でてくれた。

それは私がする予定だったのに：と残念に思いながら、今だけは猫になったような気持ちで、私は彼の膝に、頭だけでなく上半身を預けた。

「否定はしないけど。」

けど、ユリアちゃんが私の『一番』なら、シンちゃんは私の『唯一』ね。

私がかんなんふうに、疲れた身体を預けられるのはシンちゃんだけなもの」

猫ならゴロゴロ喉を鳴らしてくらい、シンの膝は硬くても何故か居心地がいい。

シンはそのまま、私の頭から背中を撫で続けてくれ、その手の温かさ心地よさに、いつしか私はそのまま眠りに落ちていた。

「…マツリ。おれの女王。」

おまえの望むままに。

おれはただ、この愛に殉じるだけだ」

夢うつつに、シンの声がそう言った気がした。

☆☆☆

…というわけで。

ただ好きなひととの幸せを求めただけの私が、なぜか南斗の将の一人として、最終的にはこの世界の覇権を目指すことになってしまった…いや待って無理ゲーでしょコレ！

愉舵・いつか迎える最高の晚餐～1

ある日の午後。

わたしの夫の血迷った発言から、全ては始まった。

「拳王軍と、同盟を結ぼうと思っっている」

「……………はっ!」

「か、勘違いするな!」

レイを裏切るつもりでは断じてない!!」

ユダの纏めたヒヤツハー集団は、現在UD軍という名（本来の綴りは“Judas”
なのだが、ユダ的にはヒヤツハーにもわかりやすいようにとの命名で、敢えて頭文字
じゃなく真ん中使ったらしい……余計判りにくいわ!）で、この地域の町や村を支配し
ている。

……などと言うと些か聞こえは良くないが、同じ小さな村でもある程度大きな組織の
庇護下にあるそれと、そうでない場合を比べたら、住民の生活の安全度は雲泥の差なわ
けで。

わたしやレイの実家のある村や、レイがマミヤさんと暮らす村などは特に嚴重に、U

D軍の兵士たちが常駐して守っていてくれるので、野盗たちの被害を受ける可能性は確実になくなったと言っている。

もつとも、二村とも最大の危機は既に回避された後ではあるのだが、だからこそその予期しない事態には、できるだけ備えなければならぬのだ。

：ところで、わたしも前世の記憶を取り戻して初めて気がついた事なのだが、一杯の水を巡って殺し合うくらい水が不足しているこの世界とはいえ、水は決してなくなったわけではない。

単に地下に潜ってしまったそれを、掘り出す技術も道具もないというだけなのだ。

何せ、かつては上水道がごく一般的に使われていた世界、いちいち汲み上げなければならぬ井戸などは、余程の田舎でもなければとうに廃れてしまっていたし、それに必要な重機など、数えるほどしか残っていない。

それを扱える人材も言わずもがな。

地下に水があると判っても、それを掘り出す作業を人力で行なうしかないのだから、最低でも数十人の男手が必要になる。

が、そんな井戸を掘るといふ大掛かりな工事も、力を持って余している屈強な男たちを派遣すれば、ものの数日で片がつく。

ヒヤッハーも人の子というか、感謝される事で悪い気はしないらしく、最初の頃こそ

怯えていた村人との関係も、今は良好らしい。

僅かながら、ロマンズが芽生えた事例もあるとかなないとか？

本人たちが幸せならばそれでいいけど。

今レイが暮らしているママヤさんの村は、核戦争後に奇跡的に、使える状態でまだ残っていた重機を見つけたママヤさんのお父さんが、やはり奇跡的にそれを使う技術の持ち主であった事で、そこから井戸を掘る事を思い立ち、それがひいては村づくりのきっかけとなったのだそう。

…そんなひとを、本来の話の流れなら、自分の夫が殺してしまっていたのだと思うと、背筋が寒くなるが。

原作と違い今もご夫婦共に健在であるその方は、レイとママヤさんに村長の仕事はすつかり任せて、やはり近隣の町や村に夫婦で出向いて、井戸を掘るお仕事の監督責任を任されていると聞いた。

勿論出張の際は、我がUD軍から腕利き数人を、護衛兼重機運搬係として随行させている。

ユダの妻であるわたしの縁者（わたしの兄の義両親）である以上、この待遇は当たり前なのだそう。

ありがたいことである。

閑話休題。

先だつて行われた南斗サミットに於いて、和平派が多数を占めたにもかかわらず、本来は南斗の最大戦力である筈の南斗鳳凰拳のサウザーが、聖帝を名乗つて進軍に乗り出し、その威信を示す為の聖帝十字陵の建設に、子供たちを集め始めたのは、それからすぐの話だった。

それより少し前から拳王軍が勢力を拡げており、今はそのふたつの勢力が睨み合う事で、均衡を保っている状況だ。

「時流というものがあるのだ。」

ある程度はそこに迎合していかねば生き残れん」

「同業大手大企業による吸収合併を苦渋の選択で受け入れる中小企業主みたいな言い方すんな」

一応つつこみはするものの。

わたし達のUD軍も、そこそこの武力で近隣地域を支配してはいるが、確かに奴らの勢力と比べたら、それはグレートデーに吠えかかるポメラニアンのようなもの。

潰されない為にも、少なくとも敵対しない方向に持つていくのは、決して間違つてはいないのだが。

「と、い、う、か、な、ん、で、拳、王、軍、？」

南斗的には、聖帝軍の方が都合が良くない？」

「…サウザーは、同盟など受け入れまい。」

アイツはひとの話を聞かない性格だ。

そもそも個人的に、俺がアイツを好かん」

「その理由!？」

確かに正史の物語において、南斗の乱れた原因が、ユダが拳王軍に与した事だった筈だが、それがそんなしようなもない理由だったなんて。

いや、でもこれはまずい。

ここでユダの言う通りに拳王軍と同盟なんか結んだ日には…まあ今更、ユダとレイが戦うような事態になりはしないだろうけど、何かの拍子に物語の強制力で、結局は南斗を崩壊に導く結果になりかねない。

「ほら、とりあえず同盟よりも、今は互いに不干渉って約束を取り付けた方が良くない？
下手に傘下に入って、要らない戦いを呼び込むのは避けたいし」

とりあえず、そう提案してみる。

わたしの兄レイにとって、ラオウは死神だ。

できることなら関わらせたくない。

というか、わたし同様この時代で幸せを見つけた兄を、そもそもケンシロウと知り合

わせたくない……というのは些か言い過ぎだろうか。

そつちはきつかけのひとは潰してあるし、大丈夫だとは思うけど……

「確かにそうか。

だが拳王の方にはそれでなくとも一度、挨拶には出向かねばならん。

……俺たちの結婚式の前に、村に襲撃をかけてきた賊どもを覚えているな？

あやつらの頭リッダーだったあの仮面の男が、調べたところどうも拳王の縁者……義弟だったよ
うでな。

このまま何も言わずにおけば、俺たちUD軍が、拳王軍と敵対する意志を示したと誤
解されかねん」

あ……と、ユダの言葉を聞きわたしは納得する。

物語の中のラオウは、ここで仮面の男と称されるジャギに対して、弟としての情は
抱いていなかった筈だから、それを知るわたしには及びもつかなかった考えだが、彼ら
兄弟の関係性を知らないユダからすれば、確かにその結論に至らざるを得ないだろう。

だから、ユダ的にその話を糸口とすることで、拳王軍に恭順するから、うっかり手に
かけてしまった弟のことは目こぼししてほしい、という方向に持つていくつもりだった
らしい。

だが、それだとしてもこちらが下手に出る事になり、結局は傘下に入らざるを得

ない。

今だけならそれで生き残れても、物語終盤で台頭してくるのは、『南斗の将』率いる勢力。

対して、UD軍の将は南斗紅鶴拳の継承者であるユダと、その妻たるわたしは南斗水鳥拳継承者であるレイの妹で。

バリバリに南斗のバックボーン背負ってるわたし達が、将来的に南斗の将と敵対する勢力に与するとか、控えめに言ってもかなり避けたい事態だ。

……よし。かくなる上は。

「…ユダ、わたしの事を愛してくれているわよね？」

「ん？突然なんだ？」

そんな事決まっているだろう。

俺はアイリを、心から愛しているぞ？」

「だったら何故、わたしを奪おうとした男を返り討ちにした事くらいで、その男の兄なんかに對して、下手に出ようとするの？」

あなたにとってのわたしの価値はその程度なの？」

「……っ、それは」

「…そうね。わかってるわ。」

UD軍全体とわたし一人の価値なんて、比べようがないものね。わかってはいるけれど……少し、残念だわ」

「そんなことはない！」

俺にとってアイリはこの世界の太陽！

アイリを失ったら俺は生きていけない！！

……そうだ。

拳王の弟が俺のアイリを奪おうとして、こちらにもそこそこの被害が出たのだ。

やつに対して、どう責任を取るつもりだと、詰め寄ったところでおかしな話ではない」

「むしろその件をきっかけとして交渉に持ち込み、こちら側への不干渉を勝ち取れば、傘下に入る事なく今後、少なくとも拳王側に対しての警戒を、当分はせずに済む事になるわ。」

勿論、そこはあなたの口八ちよ……交渉術次第という事になるけど」

「フツ、忘れたか？」

俺は妖星、智略の星の男。

その程度の交渉、難なく進めてみせよう！

アイリ、おまえへの愛の証明の為に！！」

「ユダ……！！」

わたしはうつすらと涙を浮かべながら、ユダの胸に飛び込んだ。
ちよろい。

…ユダは後日、拳王の遠征先に乗り込むと、『拳王軍とUD軍は互いに不干涉』という契約を、見事に勝ち取ってきた。

「確かにこの時代、他人の女を奪おうとするなら、殺される覚悟で挑むのが筋。

それで殺された弟のことに、おれが責任を負う義理もないが、同時にその件で、うぬに対する遺恨も別段、感じぬわ。

望みがその程度で良いのであれば、その口車、敢えて乗ってやろう。

だがこれより後、二度とおれの前に姿を見せるな」

交渉は成功したものの、ユダは拳王には嫌われたようだ。

騎乗のままそう言ってユダに背を向けた拳王の姿とそのオーラは、『…正直、メツチャ怖かった』らしい。

それでも立派にお仕事をしてきた夫を、とりあえず褒めちぎって撫でておいた。

…この後、何事もなければそれでいい。

けど、もしもこの後、物語の通りに拳王が動くのであれば、先にこの契約を破る事になるのは拳王の方だ。

そうであっても、兄とラオウが会うことにさえならなければ、兄の死の運命は回避でき

るはずだが…さて、この後わたし達はどうか動くべきか。

愉舵・いつか迎える最高の晚餐～2

居城をユダの副官のダカールさんに任せ、2人で向かったレイの暮らす村に、何故か懐かしい人の姿があった。

「やあ、久しぶりだねアイリ」

「え……シユウ様!？」

わたしは思わず駆け寄って、子供の頃によくそうしていたように、その人の胸に抱きついた。

年齢の離れたまだ若かった奥様が、数年前に核の病で亡くなられたあと、ひとり息子であるシバと共に旅に出てしまっ、それ以来の再会だ。

「ユダか。南斗サミット以来だな」

「そうだな。」

「というか、いつまで抱きしめておるのだ。」

アイリは今は俺の妻なのだから、旧交を温めるにしても、ほどほどのところで手を離せ」

「ちよつと！」

シユウ様は兄の友達で、わたしも子供の頃にはずいぶんお世話になった方なの！
失礼な言い方しないでちょうだい!!」

シユウ様はレイの親友：ではあるが、年齢は結構離れている。

何せ2人が知り合った頃にはシユウ様はもう結婚していて、一人息子のシバも生まれて
いた。

わたしとレイも7歳離れているので、わたしにとつてのシユウ様は、今思えば感覚的
に、親戚のおじさんくらいのイメージだったと思う。

レイがシユウ様と話がてら、こちらの地方の南斗の修業場で、手合わせなりなんなり
している間、わたしとよく遊んでいたシバは、別れた時はまだ10に満たない子供だっ
たが、彼もそろそろ思春期に差し掛かる頃だろうか。

……そうだ、そういえば。

「あの、シバは元気ですか?」

「ああ、勿論だ。

あいつも小さい頃、君に鍛えられたからね。

今日は連れてきてはいないが、帰って、アイリに会ったと言ったら、きつと羨ましが
るだろう」

「帰ったら、ダイナマイトは火をつけたら投げろと、アイリが言っていたと伝えてくださ

いー」

「…今際の際の妻と同じ事を言うのだな。

それは一体どういう意味なんだ？」

え？奥様も同じこと言ってたの？今際の際に？

…ひよつとしてシユウ様の亡くなった奥様って。

「いいからさつさと離れぬか！

俺は踏まれるのと罵られるのは好きだが、放置と寝取られは好まものだ！」

と、わたしの夫が割ととんでもない事言いだして、一瞬沈んだ思考の海から、強制的に引き上げられる。

「それ真面目な顔で言うなド変態!!」

「くろこつぷ!!!」

反射的に繰り出したわたしの左ハイキックをもろに受けて、何故か嬉しそうな表情で倒れるユダは、やっぱり変態だと思った。

☆☆☆

「フフッ。

どうやら夫婦仲はいいようで安心したぞ」

さつきのやりとりから何故そういう結論が出るのかが全くわからないが、村の長老の

家に運び込まれてすぐに意識を取り戻したユダにシユウ様が声をかけ、ユダが何故か自慢げにそれに答える。

「当然だ。俺とアイリは互いに深く愛し合っておるのだから」

「あーうん、その事には敢えて異は唱えないけどね」

最初は打算で結んだ関係ではあるが、今はわたしの事を誰よりも大切にしてくれるユダを、なんだかんだでわたしも好きになってしまっている。

夫への純粋な愛情に、懐いてくる大型犬に対する感情みたいなのが少なからず混じっているのも否定はしないが。

…唐突になんか背中からしっかりハグされたその頭の上から『見るな、減る』とか聞こえた気がするが気のせいだろう。

そもそもシユウ様は目がご不自由な上、わたしはただでさえスレンダー体型なのに、これ以上減つてたまるか。

…というか、原作で初登場した際の、デコルテ露わな薄いドレスに身を包んだアイリは、どことは言わないがそこそこ豊かだった気がするのだが、なぜ今のわたしはこんなにスレンダーなのだろう。

やっぱりあの場面に到達するまでの間に数多の男たちの手で m : 止そう、これ以上考えたら吐く。

「…そうか。」

「どうやら、あの噂は嘘だったらしいな」

「……………噂？」

「ユダが居城に何人もの女性を囲っていると。」

アイリは、わたしにとっても妹の、更には娘のようなもの。

その夫が不実な真似をしているのであれば、少し口を出させてもらおうかと思つてた。

今日、この村を訪れたのも、まずその事をレイに訊ねようと思つてのことだったが、先に君たちに会えて、結果的には良かったようだ」

レイとママさんは今、何やらの用事で村の外に出かけていて留守で、帰ってくるのは早くて明日の昼過ぎになるらしい。

わたし達の訪問には、ママさんの弟のコウ君が対応してくれて、とにかく今日は泊まっていくように強く勧められ、今はママさん達と暮らす家に、滞在する部屋を用意してくれているらしい。

初めて会つた時はまだ子供だったのに、彼も今では随分すっかりできて、男の子の成長は早いなあと、なにげにしみじみ思つてしまった。

…まあ、コウ君は最初に会つた時から、時折どことなく言動がおっさん臭いところが

あるのだが。

そんなコウ君が、わたし達が今話をしている部屋に入ってきて、水の入ったコップをそれぞれの前に置いてくれ、ついでにわたしの方に視線を向けて、心配げに言葉をかけてくる。

「あの、城の女の友達って…もしかして『自衛団教室』の?」

「あ、うん。多分そう」

「ちよ、ユダさんものすごい風評被害受けてるじゃないですか。

そろそろちゃんと訂正してあげないと」

「そうなのよねえ」

わたしとコウ君のやりとりに、シユウ様の彫りの深い眉間に皺が寄る。

「…アイリは、何か知っているのか?」

その問いに、夫への誤解を解くべく、わたしは弁明の答えを返した。

「知っているも何も、居城に女の人を集めているのは、ユダではなくわたしなので」

「えっ?」

「…俺は反対したのだがな」

直前まであらぬ疑いをかけられていたユダが、少し不機嫌そうにそう呟く。

「女性、特に美しい女性にとって、この暴力が支配する世界は地獄だ。」

強い者の庇護がなければ、その尊厳も命も簡単に蹂躪されてしまう。

本来の生であればわたし自身が辿ったであろうその運命から、少しでも多くの女性を救いたいというわたしの、ほんのささやかな我儘だが、彼女たちには庇護されるだけでなく、自らの手で生活を切り開いていく技術や、自分や家族の命や尊厳を自分たちで守る為の、集団自衛的な知識を学んでもらっている最中なのだ。

（最初の頃はダカールさんに教官をお願いしていたのだが、どうもわたし達の最初の説明を誤解したらしい彼が、『殺られる前に殺れ』という理念で女性たちに『護身術』ではなく『暗殺術』を仕込もうとし、また女性たちに対しての態度も高圧的だったらしく若干評判が悪かった為、彼にはユダの副官の任に集中してもらおう事にした。やはり適材適所というものがあるのだろう）

ちなみに今ここにいるコウくと、そしてわたしの義姉となったママヤさんも、何度か講義を聞きにきてくれており、村の自衛を『強い1人』だけに頼らない考えを、積極的に村全体に広めてくれていているそうだ。

危険に備え、取り乱さず、皆で力を合わせることに。

人命最優先で行動し、無茶をしないこと。

弱い者には、弱い者なりの戦い方があるのだ。

…もつとも現時点では、強い男に愛されて生き残る心得的なことが一番知りたいたい、

わたしに訊ねてくる人が大部分なんだけど。

：わたしの場合、生きるため幸せになるために、ただ必死だったとしか言いようがないんだけどね！

ほんの僅かな運命の綻びを破り、わたしを攫いに来てくれたユダには、マジで感謝してもしきれない。

避けてきた運命の事を考えると、身体のコが冷たくなるけど、そんな時、震えそうな身体を抱きしめてくれるのは、いつだってこの両腕。

わたしにとっては、世界で一番安全な場所だ。

だからこそ。

ユダに救われたわたしだからこそ、これからはその強さに頼るだけではなく、彼の強さを支え補えるようにならなければ、この先もユダに愛され守られる資格なんかない。

……そんな事を思いながら隣の夫を見やり、目が合って微笑みかけてくれたのを皮切りに、その装飾過多な胸に凭れる。

「どうしたのだ、アイリ？」

「…考えたら、わたしの我儘を最初は反対しても、最後には聞いてくれて、そのサポートまで抜かりなくしてくれて、わたしは最高の夫を持ったなと思って」

「そのような事は当然だ。」

アイリがしたいと思うことはなんでも叶えるのが、この俺の愛の証明なのだから」
そう言つてわたしを抱きしめたユダが、一瞬シユウ様に向けてものすごいドヤ顔をしたのをわたしは見てない。絶対に見なかった。

「…そうか。」

かつて、わたしの妻が生前行なつていたのと、同じ理念なのだな」

何故かくすすす笑いながら言うシユウ様の、亡くなつた奥様は核戦争前、2人が暮らした村の村長を務めており、野盗の被害を受けて婚姻の機会を奪われた女性たちの自立支援の為に、彼女たちが働く場としての村おこしの産業を立ち上げたのだそうだ。

また早い段階から核シエルターの設置を提言したのも彼女であり、そのお陰で『審判の日』に亡くなつた村人は居なかつたとも。

…今となつては確認する手段はないけど、きっと彼女、転生者だつたんだろう…『オレ』と同じように。

そしてシバのあの最期に関しては、彼女にしてみれば我が子のことだけに、思うところがあつたに違いない。

わたしにとつても、シバは弟同然。

彼女の最期の願いは、わたし自身の願いでもある。

だとすれば、彼や勿論その父親であるシユウ様のことも、彼らがなんとか死なずに済

むよう、先を読んで動いていかないよ。

などと決意を新たにしたところで、最初の頃と比べて、望むことがどんどん拡大して
いることに気づく。

最初に物語を思い出した時はひとまずはわたしの、そしてレイの幸せを願っていただけだったのに、今は『その手段』として選んだはずのユダヤ、レイの奥さんになってくれたママヤさんと、その弟のコウ君。

そして今はシユウ様もシバも、みんな幸せに、そして何よりも生きてほしいのだ。

コウ君の死亡フラグを折った時のように、未来を先回りして変えることができるならば……

☆☆☆☆

あの日。

レイの執拗な情熱的なプロポーズによく頷いてくれたというママヤさんの、二十歳の誕生日を祝う為に3人で向かった村への道中、わたしが運転する車の助手席で、後部座席に向けて声をかけた夫は、普段わたしに向けるのとは全く違う鋭い視線を周囲に向けた。

「…気付いたか、レイ？」

あの岩山の陰から、尋常じゃない数の気配がする」

「ああ……だが妙だな。

あちらの岩陰からも、あの岩の大きさからは、到底有り得ない人数の気配がする。

一体どういう事だ？」

答えた兄も首を捻りつつ、周囲に警戒の目を向けるのに、わたしは心の中だけで納得していた。

マミヤさんの村を臨むこの岩山付近は、恐らくは『牙一族』のテリトリー（あくまでヒヤツハー基準）。

あの集団は1人の男とその子らによつて結成された組織であり、確か雑兵的な存在として、やたらこまかいのが大勢いた筈だ。

…あんまり考えたくないし、勿論原作では語られてない部分だけど、恐らくあれは度重なる近親交配の果てに生まれた存在じゃないかと思う。

長である『牙大王』が、最初に子を産ませたのは攫ってきた女性達なんだろうが、産ませてはまた孕ませを繰り返して、母体女性たちが使い潰されて早々に亡くなつていった後で、単純計算で1/2の確率で生まれているであろう女兒たちが、ある程度成長した後は同じ運命を辿つたと思われるので。

つかそう思わないと、血族集団である『牙一族』が、男ばかりである説明がつかない。多分『岩の大きさを越える気配』は、その雑兵的存在の奴らだろうと思う。

「アイリ、席を代われ。俺が運転する。

おまえは、身を低くして隠れている」

車を走らせながら運転手交代とか、サラツと難易度高い事を要求してくる夫に、とりあえず逆らわずに頷く。

ここが文明が破壊される前の普通道路であるなら相当な危険行為だが、いま走っているのは荒野。

多少のハンドルの乱れで、周囲に迷惑をかける事にはならない。

「レイは周囲を警戒して、奴らが襲ってきたらすぐに対応できるようにしておいてくれ。できる限りそうならぬように、なんとしてでも振り切るつもりでいるが」

「わかった、ユダ。

おれ達2人だけなら車を停めて戦ってもいいが、アイリを危険に晒すわけにはいかな
いからな」

「そういうことだ」

もうすっかり意志の疎通ができている兄と夫が、視線すら合わせぬまま頷きあうのを見
て、わたしは安心して助手席の下の方に身を潜めた……筈だった。